目次

▼開始前 1
▼PC 紹介 2
▼月曜日　――― 1 日目 4
▼火曜日　――― 2 日目 31
▼水曜日　――― 3 日目 74
▼木曜日　――― 4 日目 133
▼幽世の目　―― 4 日目夜 168
▼金曜日　―――エピローグ 190
▼おまけ　―――双子の秘匿チャット　明香＆アリス編 199
▼おまけ　―――双子の秘匿チャット　亜聡＆ドロシー編 206
▼おまけ　―――キャラメイク＆キャラ茶番＆PL 会議編 213
▼おまけ　―――双子の茶番（全部ごちゃまぜ）編 230
▼シナリオ背景＆NPC 紹介 243

▼開始前

DL (ごまゆきみ)：では時間になりましたので、始めていきたいと思います！
DL　：エモクロア TRPG「オトギバラシ」、本日より開幕と相成ります。よろしくお願い致します！
熊埜御堂 明香 (PL:pokoya)：よろしくお願い致します！
熊埜御堂 亜聡 (PL:Lily)：よろしくお願いします！

DL　：……
DL　：……
DL　：…

シナリオ名	：オトギバラシ（作者：もすい。様）
セッション日	：2022/5/19　～　2022/8/26（全 13 回）
製本日	：2022/9/2
KP（敬称略）	：ごまゆきみ
PL（敬称略）	：pokoya
	Lily

▼PC 紹介

熊埜御堂(くまのみどう) 明香(めいか)

【年齢】：16 【性別】：女 【職業】：高校生

HP:12 MP:8
身体 2　器用 2　精神 3　五感 2
知力 5　魅力 6　社会 5　運勢 2

共鳴感情
表　甘え(関係)
裏　奉仕(関係)
ルーツ　不安(情念)

【外見的特徴】
よく手入れされたふわふわロングヘア、いつも笑顔

【性格】
明るく社交的、甘えん坊で寂しがり、身内には世話焼き、家族大好き若干依存気味

【経歴】
両親を失い、紆余曲折あって、双子揃って養子として幸せな家庭に引き取られた

【好きなもの・嫌いなもの】
好き：家族　嫌い：ブロッコリー、ひとりぼっち

【メモ】
明るく社交的な性格の女子高生、ちょっと甘えん坊。家族が好き…というよりやや依存気味。特に双子の兄に対しては遠慮がない分依存も強め。
好奇心が強く何にでも興味を持ち、広く浅く知識を持つ。最近は暗号ものの推理小説や、クロスワードやナンプレにハマっている。
反面、少し鈍感で自分に向く他人の好意や悪意には気づきにくい。
周囲からは好意を持たれやすく友人も多いが、一部の人間からは「八方美人」と見られ嫌われている。

熊埜御堂(くまのみどう) 亜聡(あさと)

【年齢】：16 【性別】：男 【職業】：高校生

HP:13　MP:11
身体 3　器用 3　精神 5　五感 4
知力 6　魅力 3　社会 1　運勢 3

共鳴感情
表　怠惰(欲望)
裏　劣等感(傷)
ルーツ　庇護(関係)

【外見的特徴】
クセっ毛、ぼさぼさ頭(他人が何かしない場合)、無気力そうな表情

【性格】
気だるげ、めんどくさがり、思慮深い、隠れ(?)シスコン

【経歴】
両親を失い、紆余曲折あって、双子揃って養子として幸せな家庭に引き取られた

【好きなもの・嫌いなもの】
好き：一人でぼんやりすること（、家族）　嫌い：カリフラワー、強要されること

【メモ】
めんどくさがりで無気力気味な高校生。現在は学校から徒歩圏内に一人暮らししている。
好奇心が薄くて周りにそれほど興味がなく、興味があるもの以外だとあまり会話が成り立たない。最近は推理小説を読んだり謎解きアプリで遊ぶのが好き。
その反面、直感に優れ、小説上の登場人物の気持ちにも聡く、周囲の変化に気付くこともできる。（が、だからと言って何かをするための人間性がない）
甘えん坊な妹を鬱陶しげに扱う時もあるが、心の底の底では非常に大切にしている。ただ、他人の好意に鈍感なのは早めに何とかしてほしい。

▼月曜日　―――１日目

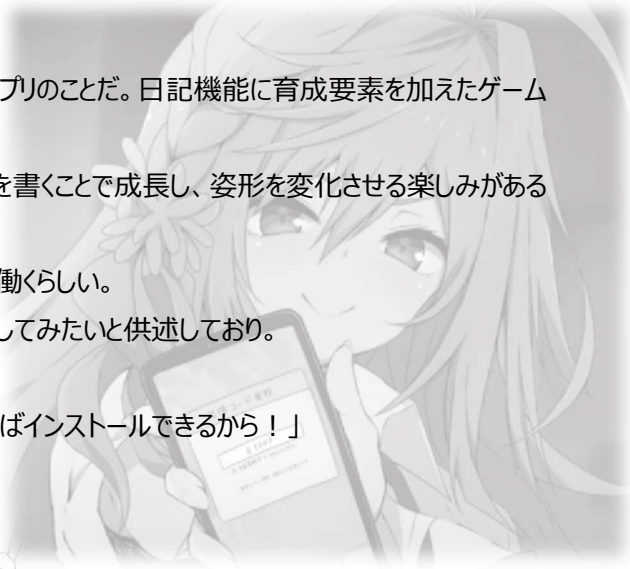
竹取 輝夜　：「いいじゃんいいじゃん！減るモンじゃないし～！」

DL　：馴れ馴れしい女性の声が響いている。
　６月のある月曜日、放課後のミステリー研究部部室。
DL　：４つ突き合せた学習机が部屋の中央を占拠しており、壁際にある大きな本棚はただでさえ狭い部室の息苦しさに 拍車をかけている。

DL　：さて、先ほどから賑やかなこの先輩は二年生の竹取輝夜（たけとり かぐや）。
DL　：なんとこのギャルはミステリー研究部の部員ではない。お隣さんであるオカルト研究部の部員だ。

DL　：なんでもオカルト研究部が非常に退屈らしく、ミス研の部長がいないときを見計らっては遊びにやってくる。
DL　：部長は彼女を邪険に扱い、可及的速やかに追い返してしまうからだ。
DL　：うちのボスは私用で今日は顔を出さない、それをどこかから嗅ぎ付けてきたのだろう。
DL　：パーソナルスペースという概念をどこかで振り落としてきたこの女は、携帯の画面を見せつけてこう続ける。

竹取 輝夜　：「ねえーしようよーー私と『CS』しよーー。」



DL　：『CS』というのは今学園で流行っている携帯ゲームアプリのことだ。日記機能に育成要素を加えたゲームらしい。
DL　：キャラクターに自分のことを語り聞かせる、つまり日記を書くことで成長し、姿形を変化させる楽しみがあるとのこと。
DL　：輝夜曰く、交換日記という機能が育成の際、有利に働くらしい。
DL　：あと純粋に可愛がっている後輩諸君と日記の交換がしてみたいと供述しており。

竹取 輝夜　：「これ！　送った URL からこのコードを入れればインストールできるから！」

DL　：そう言って「招待コード『a1007』」という表示を見せてくる。

竹取 輝夜　：「このアプリ招待制なんだ。試作段階？ベータ版？なんかよくわかんないけどそんな感じで。」

熊埜御堂 亜聡：「ここまで俺等に一切口挟ませず喋りきったッスね先輩。CS…ゲームかぁ」
熊埜御堂 明香：「招待制のアプリなんてあるんですね！　へぇ～、日記交換っていうのも楽しそう！」
竹取 輝夜　：「でしょ～！明香ならそう言ってくれると思ってた！」
熊埜御堂 亜聡：「流行ってるっつーのはさすがに知ってんな。…おいメイ、身ぃ乗り出すな」
熊埜御堂 明香：「え、でも楽しそうだよお兄ちゃん？」
熊埜御堂 亜聡：「そういうことじゃなくてだな」
熊埜御堂 明香：「ほら、昔お姉ちゃんともやったでしょお手紙交換とか！　あれっぽいし、きっとお兄ちゃんも楽しめると思うよ！」
熊埜御堂 亜聡：「やってたっつーかやらされてたっつーか。…あー、まぁでも昨日までやってた脱出ゲームも全クリしたとこだし、ちょうどいいかもな」
熊埜御堂 明香：「わぁい！」
竹取 輝夜　：「亜聡はそう言うだろうと思ってた。ものぐさなアンタが日記なんて書くとは思えなかったし。…ってあれ、やる気出たの？」
熊埜御堂 亜聡：「こいつが既にめちゃくちゃやる気だから」
熊埜御堂 亜聡：「日記か……」（めんどくさそう）
熊埜御堂 明香：「先輩、どうやってはじめるの？」 スマホ取り出し
竹取 輝夜　：「わーい！よかった～！……ああ、さっきニャインに URL 送ったから。そこからダウンロードできるよ」
熊埜御堂 明香：「にゃいん」
熊埜御堂 亜聡：「いつの間に。相変わらず早ぇッスね先輩」 スマホ取り出し

熊埜御堂 明香：ではいそいそとダウンロードしたいです！

竹取 輝夜　：「あ、あとこれ！招待コードね！」
熊埜御堂 亜聡：「へーい」 ぽちぽち
熊埜御堂 明香：「はーい！」 ぽちぽち

DL　：URL を開くと『CS』と書かれたタイトル画面に飛ばされる。淡い色使いで幻想的な印象を受ける。

熊埜御堂 明香：「わー、きれい！」
竹取 輝夜　：「招待コードは 1 回きりだから。まず書庫のボタンを押して、次に招待コードの発行を押して。で、表示されたやつを見せてあげて。」

DL　：そう言って「招待コード『a1007』」という表示を見せてくる。

熊埜御堂 亜聡：「試用版にしてはちゃんとしてんスね…。えーっと、書庫…招待コードの発行…」 ぽちぽち

DL　：ではここで質問しますが…、どちらが輝夜の見せてきた招待コードを入力しますか？
熊埜御堂 亜聡：あ、先輩が見せてきたコードは一人しか入れられないのか…
DL　：（ですです）
熊埜御堂 明香：流れ的にお兄ちゃん…かな？　明香がタイトル画面で「きれー！」してる間にさっさと入れてそう…？
熊埜御堂 亜聡：（タイトル画面にはわー！ってしてたならそうかも！）
熊埜御堂 亜聡：亜聡も後からのんびり進めてそうだけど…明香ちゃんどうします？
熊埜御堂 明香：のんびり進めてるお兄ちゃんもかわいいんだよな…
熊埜御堂 明香：アレならダイスバトルでも…
熊埜御堂 亜聡：ダイスバトルでもいいですよ！
DL　：（ダイスバトルももちろん OK です！）
熊埜御堂 亜聡：（ではどちらの世界線に行くか、ダイスバトルしましょうか…！）（d100 の低い方が先に進んでたとかで…！）
熊埜御堂 明香：(了解です！)(いざ！)

熊埜御堂 明香：1d100 (1D100) ＞ 58
熊埜御堂 亜聡：1d100 (1D100) ＞ 94

熊埜御堂 亜聡：おっせ
熊埜御堂 明香：お兄ちゃん…？
DL　：では明香さん、『a1007』を入力しますか？
熊埜御堂 明香：します！
DL　：はーい、了解です！

DL　：では明香さんが招待コードを入力し、完了を押すと表示が切り替わる。
DL　：メイン画面だろうか、中央には一冊の灰色の本がふわふわと浮いている。加えて、メニューボタンがいくつかある。

熊埜御堂 明香：「わ、」
熊埜御堂 明香：「すごーい、本だ！　見て見てお兄ちゃん、本が浮いてるよ！」
熊埜御堂 亜聡：「おー、そうだな」 横から覗き込んでる
竹取 輝夜　：「ん、できた？じゃ、亜聡にも明香の招待コード見せてあげて」
熊埜御堂 明香：「はーい！」 では招待コード発行！

DL　：では明香さんの『CS』の画面には、招待コード『1acenoel』が表示されますね

熊埜御堂 亜聡：「ん」　では表示されているコードをのんびりぽちぽち

DL　：では亜聡君の『CS』のゲーム画面も同じように切り替わります

熊埜御堂 亜聡：「ん。飛んだぞ、本」

DL　：君たちのインストールが完了すると、竹取輝夜は説明を始める。

竹取 輝夜　：「『物語』ボタンを押して魔女…魔女ってゆーのはこのキャラのことね、今は本の形してるけど育っていくと人型になるよ。んで、それに語り掛けることで育っていくんだ。物語とか洒落た言い方してるけどこれが日記機能だね。」

竹取 輝夜　：「声を認識して文字起こししてくれるモード、普通に文章を打ち込むモード、手書き入力で日記を書くモード、好きなの選んで使って。ようは物語ボタン押してなんやかんやで日記を作るとキャラが育つってこと！」

竹取 輝夜　：「物語は日記機能だから一日一回しか押せない。ちなみに育ってくるとメイン画面でしゃべったりするよ。」

熊埜御堂 亜聡：「本が？」

熊埜御堂 明香：「おしゃべりしてくれるの？」

竹取 輝夜　：「魔女に進化したらね！」

熊埜御堂 明香：「へ～、どれくらいかかるんだろ」

竹取 輝夜　：「さあ？その辺は人によって差があるみたいだよ。私も詳しくはないけど」

熊埜御堂 亜聡：「飽きる前に進化してくれたら万々歳だな」

熊埜御堂 明香：「もー、すぐそんな事言う」

熊埜御堂 亜聡：「あー…。ゲーム的には、長文の日記書いたらその分経験値が早く貯まる、とかありそうだよな」

熊埜御堂 亜聡：「知らねーけど」
熊埜御堂 明香：「…でも、お兄ちゃん一文というか一文字で済ませそう…」
熊埜御堂 亜聡：「飽きたら『あ』とかになるかもな」
熊埜御堂 明香：「魔女さんがかわいそう」
熊埜御堂 亜聡：「贅沢言うな。『あ』を食って強く育て」
熊埜御堂 明香：「もー！　じゃあ毎日わたしと交換日記しよ！　それなら続くでしょ！」
熊埜御堂 亜聡：「交換日記、……。……あー、ちゃんと書いてねーとお前から即電話かかってくる予感しかしねー」
竹取 輝夜　：「がんばれ～。期待はしてないけど。……ま、それは置いといて、説明続きいくよ～」
熊埜御堂 明香：「パパとママにもほとんど電話してこないんだし近況報告も兼ねて！」
熊埜御堂 亜聡：「はいはいわかったわかった…。…ん、おー」（先輩促し）
竹取 輝夜　：「……んで、次に『伝誦』ボタン…これでデンショウって読むんだって。 これが交換日記機能、このボタンを押すと一番近くにいる人と最新の記事を交換できるんだ。」
竹取 輝夜　：「でね！これをすると、 魔女が姿を変えたり、持ち物が増えたり変化したりする の！やばくない？」
竹取 輝夜　：「と言っても、何も起こらないことが多いけ どね。あと伝誦ボタンも一日一回しか押せないよ。」
熊埜御堂 亜聡：「○ケモンの通信交換か」
熊埜御堂 明香：「わー、楽しそう！　交換するたびにドキドキしちゃうね」
熊埜御堂 亜聡：「あー、なるほど。どっちかがボタン押しときゃ勝手に交換するのか。それなら楽でいいな」
熊埜御堂 明香：「いろいろ機能があるんだねぇ…」

DL　：では、早速。と、輝夜は明香さんの方を見て言った。

竹取 輝夜　：「日記作って！もーなんでもいいから！『今日のお昼は焼きそばパンでした。』とかでいいから！」
熊埜御堂 明香：「え、わ、早速！？　ええと、ええと、じゃあ……」

DL　：（ちなみに日記表も振れますよ）
熊埜御堂 明香：「今日は輝夜先輩に誘われて、新しいゲームをはじめました。お兄ちゃんも一緒に始めてくれたから、とっても嬉しかったです！　日記の習慣、続くといいなぁ」 とボイスで入力していく感じで
DL　：OK です！

熊埜御堂 明香：「えへへ、はいどーぞ！」 交換して交換～

DL　：では明香さんが日記を書き終えると…。

DL　：……扉の向こう、廊下側から何やら慌しい足音が響いてくる。そして、勢いよく扉が開いた。

女子生徒：「す、すみません…！」
熊埜御堂 亜聡：「ん…？」 むくっ

DL　：そこには一人の少女が立っていた。

肩で息をしている、ただ事ではないといった様子だ。

熊埜御堂 明香：「わ、え、……ど、どうかしました…？」
女子生徒：「こちらで…学内の事件を解決してくれると聞いてきたのですが！！」

DL　：……一瞬、場が凍り付く。
DL　：しかし、君たちはすぐに思い出す。
DL　：つい先日、部長が「ミステリー研究部だし、事件の依頼でも受けるか。」と世迷言を呟いていた気がする。
まさか本気で言っていたとは。

熊埜御堂 明香：「えっ、……あ、あぁ！　…あ、えっとですね、あれは…」
熊埜御堂 亜聡：「……めっっ……（…んどくせぇぇ……！）」深々ため息
女子生徒：「これ…これなんですけど！」

DL　：と、携帯を突き出してきた。
そこには『CS』のタイトル画面が表示されている。

女子生徒：「このゲームを始めてから記憶がどんどんなくなっていくんです！」
熊埜御堂 亜聡：「、…はぁ？」
熊埜御堂 明香：「……え、…えっと？」

女子生徒：「お願いします！私の記憶を取り戻す方法、一緒に探してください！」

熊埜御堂 亜聡：「……はぁぁ？？」
熊埜御堂 明香：「……え、っと」
熊埜御堂 明香：「……とりあえず、最初からお話、聞いてもいいですか？」
熊埜御堂 亜聡：「おい、メイ、」
女子生徒：「あ、はい…！よろしくお願いします…！」
熊埜御堂 明香：「だ、だって…すごい困ってるみたいだし…！」
熊埜御堂 亜聡：「いやだからって「記憶を取り戻す」とか明らかに怪し……、……はぁぁぁぁ」
熊埜御堂 亜聡：「もう入ってきちまったじゃねーか…。追い返しづれぇ…」

DL　：ではお二人は女子生徒を部室に招き入れ、事情を聴くという事でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 明香：はい！
熊埜御堂 亜聡：やれやれ感だしつつ、聞きます！

DL　：では明香さんが心配してくれているのが伝わったのでしょう、女子生徒はいくらか落ち着きを取り戻したようですね
熊埜御堂 明香：「ええと、じゃあまずは……お互いに自己紹介からしましょう！」
熊埜御堂 明香：「わたし、熊埜御堂 明香っていいます！　一年生です、よろしくね！」

熊埜御堂 亜聡：「…」
熊埜御堂 明香：「こっちはわたしの双子のお兄ちゃんです！」
熊埜御堂 亜聡：「おい」
熊埜御堂 明香：「普段はやる気ないけど、すごくて頼りになるお兄ちゃんなんだよ！」
熊埜御堂 亜聡：「余計なこと言うな馬鹿！名前だけでいいんだよ名前だけで！」

女子生徒：「私は織畑鶴乃（おりはた つるの）です、クラスは１Ｂです。」

熊埜御堂 明香：「あっ、同学年だったんだ！　じゃあ鶴乃ちゃんって呼んでもいいかな？」
織畑 鶴乃　：「わぁ、双子なんですね！私、双子って初めて見ました！…はい！もちろんいいですよ！あ、じゃあ私も明香ちゃんって呼んでもいいですか…？」
熊埜御堂 明香：「うん、もちろん！　改めてよろしくね！」
熊埜御堂 亜聡：「（相変わらず友達作んの爆速に早ぇ）」
織畑 鶴乃　：「わーい、よろしくお願いします！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、…あ、それで困ってることがあるんだよね？　話、聞かせてもらってもいいかな？」
織畑 鶴乃　：「あ、はい！えっとですね……」
織畑 鶴乃　：「３日前、金曜の夜からです。具体的に何を忘れた、とかはわからないんですけど、確実に何かを忘れていってる気がするんです。」
織畑 鶴乃　：「あと記憶が飛び飛びになることもあって…。怖いんです、少しずつ自分が自分でなくなっていく気がして…。」
熊埜御堂 明香：「なるほど…それで、その…CS が原因、っていうのは？」
織畑 鶴乃　：「はい…、その…3 日前、というのがちょうど、『CS』をやり始めた時期と一緒でして…」
熊埜御堂 明香：「だから原因なんじゃないかって？」
熊埜御堂 亜聡：「…たまたまなんじゃねーの？」
織畑 鶴乃　：「そうなんです…！特に登校時と下校後の記憶が曖昧で…下校してる途中で気づいたら次の日になって…知らないうちに登校してるんです。」
熊埜御堂 亜聡：「、うわ。思ったより飛んでんな、記憶」
熊埜御堂 明香：「じゃあ、学校にいる間の記憶だけある感じ…？」
織畑 鶴乃　：「それが……、授業を受けた記憶もないんですぅ…！！」

熊埜御堂 明香：「えぇ！？　じゃあ試験受ける時とか大変な事になっちゃう！！」
織畑 鶴乃　：「ですよね？やっぱりそうですよねっ！？ど、どうしよう～～～！！！！」
熊埜御堂 亜聡：「寝てたんじゃね？」
熊埜御堂 明香：「ううん、勉強はわたしが教えてあげられるからいいとして…でも、家のいる間の記憶がないのは大変だね…」
熊埜御堂 明香：「記憶がある間、CSで日記を書いたりとかしてる？　もしくはない時に書いた形跡とかはある？」
織畑 鶴乃　：「えっと…、日記は3日前…CSを始めた時に書いたきりですね…」
熊埜御堂 明香：「内容はどんなの？」
織畑 鶴乃　：「あ、はい！今お見せしますね！」

［情報］▼伝誦：織畑鶴乃
（金曜日の内容）
始めてみました！面白い話は書けないと思うけど…。
（キャラクターは灰色の本）

織畑 鶴乃　：「こんな感じです…。特に面白くもなんともないですけど…」
熊埜御堂 明香：「内容は普通…かな？　誰から誘われたの？」
織畑 鶴乃　：「クラスの知り合いです。雁鳥 咲（かりとり さき）さんっていう。」
熊埜御堂 明香：「その人には言ったの？　その、記憶がなくなってる事…」
織畑 鶴乃　：「いえ…、それが……」 ちょっと言いにくそうに言いよどみますね
織畑 鶴乃　：「……金曜日に一緒に下校した事は覚えているんです。けど……、それ以来 雁鳥さんとお話できていなくて……」
熊埜御堂 明香：「え、…さ、避けられてる…とか？」
織畑 鶴乃　：「…うぅ……、やっぱりそうなんですかね…！？私、何かやらかしちゃったんでしょうか…！？」
熊埜御堂 明香：「わ、わかんないけどね！」
熊埜御堂 亜聡：「同じクラスっつってただろ。顔も見てねーの？顔見ても避けられんの？」
織畑 鶴乃　：「授業中の記憶がないので、教室で雁鳥さんに会った事すら覚えてないんですぅ……」
熊埜御堂 明香：「なら、放課後は？　放課後も会えないの？」
熊埜御堂 亜聡：「授業の合間の休み時間とか、昼休みもあんだろ」
織畑 鶴乃　：「うぅ…、もしかしたら既に会いに行ってるかもしれない…。けど…、何も覚えてないんですぅ…。本当にと”う”し”よ”う”ぅぅぅぅぅ～～～～！！！！」
熊埜御堂 明香：「んんん…なんというか、どういう事？　って感じの事がたくさんだけど…」
熊埜御堂 明香：「……でも、なんとかしてあげたいな…」
熊埜御堂 亜聡：「そもそもゲームとの関連性はまるで見えてこねー。手がかりがほぼねーぞ、明香」
熊埜御堂 明香：「で、でも調べたら何かわかるかもしれないし！　それにほら！　ちょうどわたし達も始めたでしょこのゲーム！」
織畑 鶴乃　：「う”ぅ”……、依頼してきておいて何にも役に立ちそうな事 覚えてなくてこ”め”ん”な”さ”い”ぃぃぃぃぃ～～～！！！！」

熊埜御堂 明香：「きっと、ちょっとずつでも調べたら何かわかるかもだよ！　ね、お兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「手あたり次第に探せってことか、めんどくｓ…、…いや、さっきから泣きすぎだっつの、泣くな泣くな」（言葉を飲み込みつつ）
織畑 鶴乃　：「う"ぅ"……、明香ちゃんも亜聡君も優しすぎる…」
熊埜御堂 明香：「気にしなくていいよ、本当に困ってるみたいだし…それに友達の事は放っておけないから」
熊埜御堂 亜聡：「…。」
熊埜御堂 明香：「ね、お兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「圧。顔近ぇ、体乗り出すなわかった。わかった！」
織畑 鶴乃　：「……友達…？私の事、友達だと思ってくれるんですか…？」
熊埜御堂 亜聡：「どうせ明香の中だともう友達認定だろ」
熊埜御堂 明香：「だって、せっかくの縁だもの！　どうせならお願いが解決した後も付き合っていけたらなって……嫌、かな？」
織畑 鶴乃　：「い、嫌じゃないです！！私、友達が全然いないのでむしろ嬉しいです！！」
熊埜御堂 明香：「えっ！？」
熊埜御堂 亜聡：「（なんか言及するとめんどくさそーな一言聞こえた）」
熊埜御堂 明香：「うわ～～ならもっと早く出会えばよかった～～！」
熊埜御堂 亜聡：「そういうやつだよお前は」
熊埜御堂 明香：「何はともあれ、これからよろしくね鶴乃ちゃん！」
織畑 鶴乃　：「……！！は、はい…！！よろしくお願いします、明香ちゃん、亜聡君…！！」
熊埜御堂 亜聡：「…。おー」

熊埜御堂 亜聡：「…先輩。聞いたことあります？CS で記憶なくなってくっていう奴の話」 椅子からのけぞりながら先輩に
竹取 輝夜　：「ないよー。私ももう半年くらい続けてるけど、そんなの感じたことないなぁ。気のせいじゃん？　そんな話も聞いたことないし。」
熊埜御堂 亜聡：「ッスよね」
熊埜御堂 亜聡：「アップデート関係あるか知らねーけど…、それなら、俺等以外で最近 DL した奴とか知ってます？」
竹取 輝夜　：「ん～…。私の周りは、大体 半年前からやってる人ばっかりだからね～。最近 やり始めた人は知らないなぁ～…」
熊埜御堂 明香：「あ、先輩は誰から招待貰ったんですか？」
竹取 輝夜　：「オカ研の先輩だよ。今年卒業しちゃった。」
熊埜御堂 明香：「そっかぁ…」
熊埜御堂 亜聡：「ふーん…。……っつか先輩、今日俺らにあの勢いで進めてきたくせに、それまでは誰か誘わなかったんスか」
竹取 輝夜　：「だって交換日記したい程 気に入ってる子がいなかったんだもん」
熊埜御堂 亜聡：「明香はともかく俺まで入るんスかそれ」
熊埜御堂 明香：「あ、じゃあわたし達はお気に入りってことですか？」 きゃー
竹取 輝夜　：「そーいうこと！！」
熊埜御堂 明香：「えへへ～」

熊埜御堂 亜聡：「…」 妹がかわいい
熊埜御堂 亜聡 ：「あとは……あー、そうだな。先輩が知ってる範囲で、このゲームやってるのってどれくらいいんの？」
熊埜御堂 亜聡：「めんどくｓ…とりあえずCS周り調べるって話になってんなら、母数が知りたい」
竹取 輝夜 ：「う～んとね…、まずオカ研部員は全員やってるね。例の先輩から誘われて」
竹取 輝夜 ：「あと、ゲーム部の子もやってる人多いんじゃないかな？」
熊埜御堂 亜聡 ：「…ふーん。そんだけやってて、記憶なくなるって騒いでんの織畑だけって、激レアにも程があんな」
熊埜御堂 明香：「とりあえず、色々と聞き込みしてみようよ！　オカルト部と、ゲーム部ね！」
熊埜御堂 明香：「あと、かりとりさん？　にも！」
熊埜御堂 亜聡：「しゃーねーな…。とりあえず俺が聞きたかったことはこんだけッスかね」

DL ：（他に聞きたい事がなければシーン進めさせて頂きますが、大丈夫でしょうか？）
熊埜御堂 亜聡：（おにいは大丈夫です！）
熊埜御堂 明香：(いもうとも大丈夫です！)
DL ：（はーい、了解です！）

DL ：鶴乃、輝夜と話をしていると時間はまもなく１９時。最終下校時刻が迫っていた。
DL ：輝夜はそれに気づくと、

竹取 輝夜 ：「ん、じゃあ私は帰るね。ミス研探偵団の諸君は迷える織畑ちゃんのために誠心誠意捜査に励むこと！いじょ！」
熊埜御堂 明香：「はーい！」
熊埜御堂 亜聡：「いや先輩部活違ぇでしょ。急に先輩ヅラ」

DL ：何故か部長面をする部外者は部屋を出る際に、

竹取 輝夜 ：「あ、そだ。さっき伝誦…交換日記しといたから、あとで確認しといてね！んじゃねー！」
熊埜御堂 亜聡：「、お」 いつの間にって顔
熊埜御堂 明香：「はーい！　ばいばい、輝夜先輩！」

DL ：輝夜は明香さんにそう言い去っていく。
DL ：さて、明香さん。早速輝夜からの伝誦を確認してみますか？
熊埜御堂 明香：してみます！
DL ：はーい！では…

DL ：明香さんの画面には可愛らしい黄色い魔女が手紙を届けようとするアニメーションが流れ始める。が、
DL ：しかし、その途中で妙な画像が表示される。
DL ：真っ青な画面の中央に大きな黒い円。その円の内部から腕のようなものが飛び出してきた。

熊埜御堂 明香：「ひゃわっ！？」

DL　：その後、画面が一瞬乱れ、元のメイン画面に戻る。

熊埜御堂 明香：「び、びっくりした…」
熊埜御堂 亜聡：「どうした？」
熊埜御堂 明香：「なんか一瞬だけびっくり画像みたいなのが…輝夜先輩のイタズラかな？」
熊埜御堂 亜聡：「マジか。あの先輩そういうとこあるからな…」
熊埜御堂 明香：「えへへ、変な声出ちゃった」 日記は…なんか届いてる感じです？
DL　：では明香さんが画面を確認します。
　が、輝夜からの伝誦は届いていませんね。
熊埜御堂 明香：「…あれ？」
熊埜御堂 亜聡：「今度はどうした」
熊埜御堂 明香：「ううん…輝夜先輩からの日記届いてない」
熊埜御堂 亜聡：「…は？何だそりゃ」
熊埜御堂 明香：「うーん、バグ…とか？」
熊埜御堂 亜聡：「それか、びっくり画像だけ送る機能でもついてんじゃね。知らねーけど」
熊埜御堂 明香：「ええー！？　もう、本当にびっくりしたのに！」
熊埜御堂 亜聡：「（ぽちぽち）…俺のには…なさそうだけどな」
DL　：お、では亜聡君がCSを開くとですね
熊埜御堂 亜聡：（お）

DL　：亜聡君の画面には可愛らしい黄色い魔女が手紙を届けているアニメーションが流れる。

熊埜御堂 亜聡：「…あ？…なんだ、こっちにも届いたぞ」

DL　：そして、「物語が交換されました」というメッセージが表示される。

熊埜御堂 明香：「え、誰から誰から？」

DL　：その直後、亜聡君は不意に携帯を持つ手に痒みを覚える。

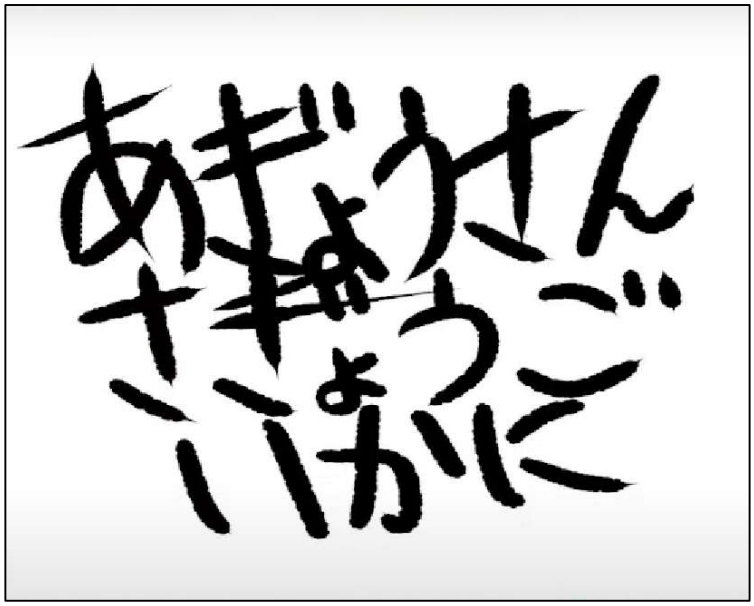
熊埜御堂 亜聡：「先輩じゃね？……ッい、」

DL　：見ると、親指の爪ぎわの皮あたりが僅かに出血している。ささくれでも触ってしまったのだろうか。

熊埜御堂 明香：「？　どうしたの？」
熊埜御堂 亜聡：「ッてぇ、……はー、最悪だ。ささくれ。」 出血してる手をぶらん
熊埜御堂 明香：「わ！？　え、だ、だいじょうぶ！？　ちょっと待ってね、ばんそうこうがえっと、えっと…」
熊埜御堂 明香：「あった！」(にゃんこ柄)

熊埜御堂 亜聡：「やめろ」
熊埜御堂 明香：「ワガママ言わないの！」
熊埜御堂 亜聡：「これくらい舐めとけば治、あっこいつ。そ、それより届いた方気になんだろお前！」
熊埜御堂 明香：「だめ！　先にこれ貼ってから！」
熊埜御堂 亜聡：「なんでこういう時いつも誤魔化されねーんだよお前！」
熊埜御堂 明香：「ささくれでも、バイキンとか入ったら大変なことになっちゃうんだよ！」
熊埜御堂 亜聡：「あーあーわかったわかった…。もう好きにしろ、ったく…」 大人しく貼られるお兄ちゃん
熊埜御堂 明香：「帰ったらちゃんと消毒してね！　…それで、何が届いたの？」
熊埜御堂 亜聡：「（にゃんこ絆創膏を何とも言えない顔で見つめつつ）……。おー、何だっけか」 げっそりしながら画面に目線を戻します
DL　：はーい、では亜聡君に届いた伝誦を情報タブに貼り付けますね

［情報］▼伝誦：竹取輝夜
「あぎょうさん　さぎょうご　いかに」という手書きの文字が書いてある。
（キャラクターは黄色を基調とした魔女。）



熊埜御堂 亜聡：「……はぁ？」
熊埜御堂 亜聡：「先輩からは先輩からだった。が……なんだこの手書き画像。これもいたずらか？」
熊埜御堂 明香：「ええと…あぎょう、さん？　さぎょう、ご？」
熊埜御堂 明香：「…どういう意味？」
熊埜御堂 亜聡：「……」 じーっと見つめて少し考えてみますが、気づくことあります？
DL　：そうですね…、では＜＊調査＞あるいは＜検索＞でどうぞ
熊埜御堂 亜聡：＜検索＞無い…。＜調査＞でいきます！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊調査〉(1DM<=3) ＞ [4] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：「……わからん」 げそっとしながら明香ちゃんにも良く見えるようにひらり
熊埜御堂 明香：では自分も検索で挑戦したいです！
DL　：はーい、どうぞ！

熊埜御堂 明香：1DM<=6〈検索〉(1DM<=6) ＞ [10] ＞ -1 ＞ 成功数-1 ファンブル!

熊埜御堂 亜聡：アッ
DL　：あ
熊埜御堂 明香：ぴゃー！
DL　：そ、そうですね…では…

DL　： 明香ちゃんはスマホで検索をかけていた最中 うっかりスマホを落としでしまい、運悪くスマホの角が足の甲に突き刺さります

熊埜御堂 明香：「っいったーい！！」

DL　：スマホは無事ですが、かなり痛かったです！！　HP-1 して下さいませ

system：[熊埜御堂 明香] HP：12 → 11

熊埜御堂 亜聡：「うわ、おい大丈夫か」
織畑 鶴乃　：「だ、大丈夫ですか…！？」
熊埜御堂 明香：「ふぇえ…お兄ちゃぁん……」
熊埜御堂 亜聡：「いや泣くな泣くな、大丈夫かとは言ったがスマホ落としただけだろ」
熊埜御堂 明香：「でも痛かったぁ…」
織畑 鶴乃　：「そりゃあ角が刺さったら痛いですよねぇ…」
熊埜御堂 亜聡：「スマホケース重いやつにしてるからだろ…。ああほら、帰りコンビニ寄ってやるから、泣くな」
熊埜御堂 明香：「うぅ～…」
熊埜御堂 明香：「……プリン……」
熊埜御堂 亜聡：「はいはい」

DL　：では以上のやり取りを見ていた鶴乃も、最終下校時刻が近い事に気が付きます

織畑 鶴乃　：「もうこんな時間！すいません、随分とお時間をとらせてしまいました。もしよければ明日の放課後もお邪魔してよろしいでしょうか…？」
熊埜御堂 明香：「あ、うん！　それはもちろん！」
熊埜御堂 亜聡：「明日もどうせ（明香が）来るから、好きにしていーぞ」
織畑 鶴乃　：「あ、ありがとうございます…！また明日も、よろしくお願いしますね…！」
熊埜御堂 明香：「うん、よろしくね！」

DL　：では鶴乃とは学校で別れて二人だけで下校する、という事でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：（おにいOKです！）（帰りにプリン買ってあげるし自分もシュークリーム買って帰ろうな…）
熊埜御堂 明香：(こちらも大丈夫です！)
DL　：（誘えば一緒にコンビニ行きますよ…）
熊埜御堂 明香：(あ、なら…)

熊埜御堂 明香：「あ、そうだ！　鶴乃ちゃん鶴乃ちゃん、一緒にコンビニ行きませんか！」
熊埜御堂 亜聡：「おいこら明香」
織畑 鶴乃　：「……！！い、行きたいですっ…！！」（ぱぁぁ…）
熊埜御堂 明香：「うんうん、一緒にプリン買お！」
織畑 鶴乃　：「はい…！」（こくこく！）　激しく頭を縦に振りながら返事しますね
熊埜御堂 亜聡：「……（っはぁぁぁぁ～～…）はいはい、プリンな。しゃーねぇな」

DL　：ではお二人は鶴乃と共にコンビニを目指し、一緒に学校を出ます…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：19 時を回ってしばらく経った。
　日は落ち、辺りはすっかり暗くなっていた。
DL　：では目的としていたコンビニに到着しますね。
　あの BGM と共に自動ドアが開き、店内へと入ります

熊埜御堂 亜聡：「お前ら、一人一つだけな」
熊埜御堂 明香：「はーい！」
織畑 鶴乃　：「え、あ、わ、私 自分の分は自分で買いますからっ…！」
熊埜御堂 亜聡：「あーあー。いいから。明香の落としたスマホの記念に、黙っておごられとけ」
熊埜御堂 明香：「もーっ、なにその記念！」
織畑 鶴乃　：「……！い、良いんですか…？」
熊埜御堂 亜聡：「あと一回同じこと聞いたら、「やっぱナシ」って言うからな」
織畑 鶴乃　：「……ふふっ、ありがとうございます！亜聡君、何だかんだ言ってやっぱり優しいです！」
熊埜御堂 亜聡：「そういうのじゃねーよ」
熊埜御堂 明香：「えー、お兄ちゃんは優しいよ！」
熊埜御堂 明香：「めんどくさがりやで、素っ気なくて、授業中も寝てばっかだけどね。でも、本当はすごく優しいの」
熊埜御堂 亜聡：「……聞いてもねーこと言うな馬鹿」

熊埜御堂 亜聡：さっさと選べ、と言い残し一人でスイーツコーナーへ

織畑 鶴乃　：「ふふっ、明香ちゃんは亜聡君の事が大好きなんですね！」
熊埜御堂 明香：「うん、だって家族だし」
織畑 鶴乃　：「……いいなぁ、そういうの…」 ぽつり、と
熊埜御堂 明香：「？　鶴乃ちゃん？」
織畑 鶴乃　：「あ、いえ！私 一人っ子なので！！大好きなきょうだいがいるっていいなぁ、って思いまして！！」（あわあわ）
熊埜御堂 明香：「鶴乃ちゃん一人っ子なんだ。お父さんとお母さんだけ？」
織畑 鶴乃　：「……そう、です……」
熊埜御堂 明香：「そっかぁ。……」
熊埜御堂 明香：「えっとね、わたしとお兄ちゃんね。…パパとママとお姉ちゃんはいるけど、お父さんとお母さんはもういないの」
織畑 鶴乃　：「……えっ…？」
熊埜御堂 明香：「いろいろあってね、二人共亡くなって…それで今の家に引き取られてるの」
織畑 鶴乃　：「……」
熊埜御堂 明香：「あっ、今のお家に不満があるってお話じゃないよ！　パパも、ママもお姉ちゃんも大好き。…でもね」
熊埜御堂 明香：「血がつながってるの、お兄ちゃんだけなんだなぁって」
織畑 鶴乃　：「……」
熊埜御堂 明香：「……って、多分こういうことじゃないよね。鶴乃ちゃんのは…！」
織畑 鶴乃　：「あっ…いえ…！」（あわあわ）
熊埜御堂 明香：「ええと、だからね。あの……つ、繋がりって、いろんなのがあるよね！　っていうか」
熊埜御堂 明香：「だから、なんかあったら、えっと……来てくれていいからね、っていうか」
織畑 鶴乃　：「……「繋がり」……。それって、家族だけじゃなくて、友達にもあるもの、ですよね…」
熊埜御堂 明香：「！　うん、そう！」
織畑 鶴乃　：「……じゃあ私、今はもう一人じゃないですね…！」（にこっ）
熊埜御堂 明香：「……うん！」
熊埜御堂 亜聡：「おいお前ら、いつまでそこで喋ってんだよ」 ぺったぺった
熊埜御堂 明香：「あっ、お兄ちゃん！」
織畑 鶴乃　：「あっ、亜聡君！待たせてごめんなさい…！」
熊埜御堂 亜聡：「あ？…まぁ、別にいいけどよ。いらねーのかプリン。」 明香ちゃんには、明香ちゃんの好きな種類のプリンを取ってきてて手渡しつつ
熊埜御堂 明香：「いる！」
織畑 鶴乃　：「ほ、欲しい…です…っ！」
熊埜御堂 亜聡：「おー。じゃあ織畑も選んで来い。あと家でゴミ捨てんのめんどくせーから、イートインで食ってくぞ」
熊埜御堂 亜聡：「時間大丈夫か」
織畑 鶴乃　：「は、はいっ…！みんなでプリン、食べて帰りたいですっ…！！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、じゃあ早く選ぼ！」
織畑 鶴乃　：「はいっ…！」

DL　：では 3 人で仲良くプリンを選び、イートインコーナーで食べて帰ります
熊埜御堂 亜聡：わいわい
熊埜御堂 明香：きゃっきゃ
織畑 鶴乃　：がやがや
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：……ではコンビニでプリンを食べて、お二人と鶴乃は帰路へと着きますね
DL　：君たちは楽しく談笑をしていたかもしれない、何気ない会話をしていたかもしれない、記憶の手掛かりを聞き込んでいたかもしれない。
DL　：…一瞬会話が途切れた。

織畑 鶴乃　：「……」

DL　：鶴乃が立ち止まる。何もない空間を、虚空を見つめている。

熊埜御堂 明香：「……鶴乃ちゃん？」
熊埜御堂 亜聡：「……？」

DL　：話しかけても反応はない。
生気のない目、微動だにしない身体。空っぽだ。
DL　：同じシルエットを持ちながら、まるで異なる存在に思えた。

熊埜御堂 亜聡：「……おい、織畑。どうかしたか」 様子がおかしいようなら、目の前に回って顔を覗き込みますね

DL　：周囲に人の気配はなく、自然が織りなす音すら聞こえない。
　ふと、彼女の視線の先を目で追うだろう。

DL　：…何もない、何もなかったはずなのに。
異形の存在：黒く大きな『何かが』いた。

DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：…次に明香さんと亜聡君が気が付くと、自室にいます。
DL　：先ほど見た筈の黒い存在については覚えておらず、鶴乃の異変も忘却している。
DL　：現在 時刻は 20 時。
記憶の連続性が失われていることに気づく。
DL　：ではここで共鳴判定です。

DL　：共鳴判定（強度5／上昇 1D3）
∞共鳴感情：[哀しみ（情念）]

熊埜御堂 亜聡：高ぇ！被っては無いです！
熊埜御堂 明香：こちらも被ってはない！
DL　：あ、でも明香さんルーツの感情属性は被ってますね…
熊埜御堂 明香：アッ本当だ
DL　：では明香さんはダイスの数を+1 でお願いします
熊埜御堂 亜聡：ふ、振ります…ね…！
DL　：はーい、判定お願いします！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=5〈∞共鳴〉(1DM<=5) ＞ [5] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡：そりゃそうだ！でも惜しかった！

熊埜御堂 明香：2DM<=5〈∞共鳴〉(2DM<=5) ＞ [1, 4] ＞ 3 ＞ 成功数 3 トリプル!

熊埜御堂 明香：おい！
DL　：あっトリプル出ちゃった…
熊埜御堂 亜聡：はわ…
熊埜御堂 明香：変調が…
DL　：では 2 人とも 1D3 上昇お願いします

熊埜御堂 明香：1d3 (1D3) ＞ 3
熊埜御堂 亜聡：1d3 (1D3) ＞ 1

熊埜御堂 明香：ぐわーっ
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃーーーーん！！！

system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：1 → 2
system：[熊埜御堂 明香] 共鳴：1 → 4

熊埜御堂 明香：で、1d6 でしたっけ…

DL　：ですね、今回は伝承タイプになります

熊埜御堂 明香：1d6 (1D6) ＞ 1

［情報］ 1.恐慌
《怪異》の異常な気配に身体がすくみ、動けなくなる。
1D6×10 分（あるいは 1D10 ラウンド）の間、判定値に【💪 身体】を使用する技能での判定は成功数-1 される。
※〈＊自我〉あるいは〈心理〉の成功で回復する。

DL　：それでは、個別パートから始めていきましょう。
　まずは明香さん、お願い致します！
熊埜御堂 明香：はーい！

DL　：さて…、いつの間にか自宅に戻ってきて早々変調を起こしてしまったワケですが…、いかがなさいますか？
熊埜御堂 明香：とりあえず直したい…ですね…
DL　：OK です。それでは〈＊自我〉あるいは〈心理〉の判定をお願い致します！
熊埜御堂 明香：では心理で！
DL　：どうぞ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈心理〉(2DM<=7) ＞ [3, 4] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 明香：ふぅ…
DL　：おお！！幸先良いですね！！
DL　：では明香さんには BD を 1 つ進呈致します～！
熊埜御堂 明香：ありがとうございます！

熊埜御堂 明香：「う、……うぅうぅう～、お兄ちゃぁん……」ぷるぷる

DL　：一瞬 恐怖のあまり体がすくんで動けない状態になりましたが、亜聡君の事を考えて何とか持ち直しましたね
熊埜御堂 明香：いつもこころにおにいちゃん
DL　：さて、通常通りに戻った所で次は何を致しましょうか？
熊埜御堂 明香：とりあえずお兄ちゃんに連絡しようかな…電話をかけたいです！
DL　：OK です！では普通に繋がりますね

熊埜御堂 明香：「あっ、もしもしお兄ちゃん！」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、今どこ？　家？　大丈夫？　お兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「あーうるせぇうるせぇ。出た途端まくしたてんな」

熊埜御堂 亜聡：「家だよ。お前は？」
熊埜御堂 明香：「う、…うぅ～…だって、だって、…お兄ちゃん……」
熊埜御堂 明香：「……わたしも家…」
熊埜御堂 亜聡：「そーかよ。…どうやって帰った？」
熊埜御堂 明香：「……わかんない……お兄ちゃん、も？」
熊埜御堂 亜聡：「おう。コンビニ出たとこまでは覚えてんだが」
熊埜御堂 明香：「そっか…鶴乃ちゃんは大丈夫…かな？」
熊埜御堂 亜聡：「番号知らねぇし、確かめようもねーな」
熊埜御堂 亜聡：「お前が無事なら、向こうもなんとかなってんだろ」
熊埜御堂 明香：「うぅ～、連絡先交換しておけばよかった…」
熊埜御堂 亜聡：「明日確かめればいいだろ。……お前と俺が普通に帰ってんだから、向こうも大丈夫だ」
熊埜御堂 亜聡：「たぶん」
熊埜御堂 明香：「そこは言い切ってよ！　不安になっちゃうよ！」
熊埜御堂 亜聡：「じゃあ『大丈夫』ってことで」
熊埜御堂 明香：「"じゃあ"って！　……もー」
熊埜御堂 亜聡：「この俺に発言のセキニン求めんな。……落ち着いたか？」
熊埜御堂 明香：「……うん。捲し立てちゃってごめんね、お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「ん」 ならいい
熊埜御堂 明香：「なんか、怖かったの。いろいろ、……ありがとう」
熊埜御堂 亜聡：「……。ん。」
熊埜御堂 明香：後特に共有できそうなことも…ない、かな？
熊埜御堂 亜聡：そうですね…同じように記憶を失っちゃってるわけですし…
熊埜御堂 明香：「……うぅ～、電話切りたくないよぉ…」
熊埜御堂 亜聡：「何言ってんだ。風呂まで電話持ってく気か？」
熊埜御堂 明香：「あぅ、……そうだよね、…急に電話してごめんね。えっと、じゃあ、…おやすみなさい、お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……そういや今日 DL した『CS』、俺まだほとんど触ってねーんだよな」
熊埜御堂 亜聡：「しばらくは起きてこれ触ってるから、何かあればまたかけてきていーぞ」
熊埜御堂 明香：「(ぱっ)　うん、ありがとうお兄ちゃん！　…そういえばわたしも家に帰って来てからは見てないかも。わたしも触ってみて、なんかあったら電話するね！」
熊埜御堂 亜聡：「おー」 できるだけ平常声で
熊埜御堂 明香：「えへへ、それじゃあ一旦おやすみなさい！　後でね！」

熊埜御堂 明香：という感じで電話を切って、CS 触ってみましょうか…
DL　：はーい！
DL　：では、亜聡君の通話を切り CS を起動させる、でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 明香：はーい！
DL　：OK です！
では明香さんが『CS』を起動させると…、

DL　：……先程まで灰色だったはずの本が、白く染まっていた。

熊埜御堂 明香：「…ふぇ？」

DL　：それを視認した直後、ページが独りでにパラパラとめくられていく。
DL　：あるページで止まり、そこから女の子が飛び出すように現れた。

熊埜御堂 明香：「ひゃっ！？」

DL　：美しい金色の長い髪、透き通るような白い肌、水色のワンピースに白のエプロンドレス、まるで御伽噺に出てくるようなキャラクターだ。
DL　：少女は優雅につま先から着地すると、本を抱えて挨拶をする。

熊埜御堂 明香：「……、……」(ぱちくり)
熊埜御堂 明香：「えっ、…えーーっと…？」
金髪の少女：「こんばんは、私はアリス。よろしくね。」

DL　：よくできた音声合成だ。かなり人間的で自然な声に聞こえるだろう。

熊埜御堂 明香：「……アリス、ちゃん？　あ、これってもしかして…ええと、魔女？」

熊埜御堂 明香：「……えっ、初日からもアリなんだ！　すごーい！」
アリス　：「自己紹介はこれくらいで。さて、賽は投げられた。」
アリス　：「でも安心して、私がきたからにはワンサイドゲームとはならないはずよ。私は優秀な助手だからね。まずは明日からの情報収集、頼りにしてるわ、探偵さん。」

DL　：人工知能にしては会話があまりに自然、故に不気味に感じるだろう。

熊埜御堂 明香：「……？？？」
熊埜御堂 明香：「探偵、ってわたしのこと？」
アリス　：「ええ、そうよ」
熊埜御堂 明香：「確かに、ミス研には所属してるしそういうのも好きだけど…探偵なんて呼ばれたの初めてだぁ」
熊埜御堂 明香：「あっ、もしかしてなんか調べてほしいのがあるのかな？　伝承とかでそういうのが出てきたり？」
アリス　：「そうね…。まずは『CS』に詳しい人間に話を聞きたいわ。ああ、この詳しい人間っていうのは制作者以外の、ね。」
熊埜御堂 明香：「ふむふむ、つまりやってる人にいろいろ聞き込みすればいいんだね！　任せて、どっちにしろ鶴乃ちゃんの事もあるし調査しなきゃだったから！」
アリス　：「ふふ、頼もしい返事が聞けて嬉しいわ。探偵さん」
アリス　：「その口ぶりだと、あなた自身も他に調べている事があるようだけど…。何を調べているの？」
熊埜御堂 明香：「あっ、えっとね…その、CS を始めてから記憶が消えちゃうって困ってる子がいるの」
熊埜御堂 明香：「それで、何とかその子を助けてあげたくて…」
アリス　：「なるほど…、そういう事なのね…」
熊埜御堂 明香：「アリスちゃんは、何か知ってる？」
アリス　：「知らないね、そんなことありえないと思うけど？あるとしたら、何者かが自身の悪事を『CS』のせいにしようとしてるんじゃないかな？」
アリス　：「少なくとも『CS』に記憶をどうこうする機能はないわ。」
熊埜御堂 明香：「そうなんだ…、…じゃあもし別の悪い人がいるとして、」
熊埜御堂 明香：「その人は「CS」の存在を知っていて、「CS」を隠れ蓑にして鶴乃ちゃんの記憶を消してるの…ってどんな目的の為だと思う？」
アリス　：「さあ？私には見当もつかないわね」
熊埜御堂 明香：「そっかー……うん、でもありがとう！」
熊埜御堂 明香：「CS が悪いんじゃなくて、それを利用して悪い事してる人がいるかも…って事に気づけちゃった！」
熊埜御堂 明香：「アリスちゃん、本当に優秀な助手さんだね！」
アリス　：「あら、お褒めに預かり光栄だわ。…ああ、そうそう。私からもつ質問良いかしら？」
熊埜御堂 明香：「うん！」
アリス　：「貴方の名前。まだ聞いてなかったでしょう？」
熊埜御堂 明香：「あっ、そういえばそうだったね…わたしは明香だよ、熊埜御堂 明香！」
熊埜御堂 明香：「よろしくね、アリスちゃん！」
アリス　：「名前はとても大事な物だもの。きちんと聞いておかないと。…ええ、よろしく明香」
アリス　：「……あと、さっき貴女は私を「魔女」と言っていたわね？」

熊埜御堂 明香：「うん、……違うの？」
アリス　：「”今はまだ”その認識で良いわ。でも、そうね…」
アリス　：「……一回だけチャンスをあげるわ。一度だけ私が何者か告げなさい。その時は正直にイエスかノーで答えてあげる。」
アリス　：「ちなみに答えるのはまた後でもいいわよ」
熊埜御堂 明香：「…？？　アリスちゃんが何者か、わたしに当てられる…のかな？」
熊埜御堂 明香：「ううーん、でもとりあえずはいろいろとアリスちゃんの事を知ってからの方が良さそうだね。だから、色々教えてね！」
アリス　：「ふふっ、頑張って答えに辿り着くのよ？探偵さん」
熊埜御堂 明香：「うん！　……あっ、そうだ」
熊埜御堂 明香：「アリスちゃんの事、お兄ちゃんに教えてもいい？」
アリス　：「ええ、構わないわよ」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんも今日からCS始めててね、お兄ちゃんの事だからCSの事も色々気付けるかもだし…本当？　ありがとう！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、じゃあ後で電話しなきゃ」

DL　：（他にアリスと話しておきたいことなどありますでしょうか？）（亜聡君に電話するなら、その前に亜聡君パートに切り替えさえて頂きます！）
熊埜御堂 明香：とりあえずは他には…大丈夫かな？
熊埜御堂 明香：大丈夫です！
DL　：（あ、あと他にやっておきたい事あったら今の内に宣言して頂いても大丈夫です…！）
熊埜御堂 明香：(あ、では一応CSの他の機能に変化はないか見ておきたいです…)
DL　：OKです！
DL　：ではアリスが出現した事以外にCSに変化がないか確認しましたが…、特にこれと言って変わった所はないようです
熊埜御堂 明香：了解です！
DL　：（他は大丈夫そうでしょうか？）
熊埜御堂 明香：(大丈夫です、ありがとうございました！)
DL　：了解です！
では明香さんパートはここまでという事で。
ありがとうございました！

DL　：ではこちら、場面が切り替わって亜聡君パートに入ります。亜聡君、お願い致します！
熊埜御堂 亜聡：はーい！

DL　：場面は明香さんとの通話が終わった直後からとしましょう。この後はどうなさいますか？
熊埜御堂 亜聡：電話を切って小さくため息した後、買いだめてあったポテチを手に取りつつベッドにゴロンしに行きますね…
熊埜御堂 亜聡：ベッドの上で、スマホぽちぽち。CS起動します

DL　：OK です！
では亜聡君が『CS』を起動させると…、

DL　：メイン画面で浮いていた灰色の本が黒く染まっていた。

DL　：すると、ページが独りでにパラパラとめくられていく。
DL　：あるページで止まり、そこから女の子が飛び出すように現れた。

DL　：二つに束ねた銀色の髪、人形のような白い肌、黒のブラウスに赤色のフリルジャンパースカート。

熊埜御堂 亜聡：「……あ？」

DL　：少女はよろめきながら危なげに着地すると、本を拾い上げ挨拶をする。

銀髪の少女：『…私は、ドロシー。』

DL　：吹き出しのようなメッセージウィンドウが出現し、そのように表示された。

熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「…あー、これが魔女か。進化早ぇな。まだ何もしてねーのに」
熊埜御堂 亜聡：「日記書くとか書かねーとか関係ねーのか。じゃあこれからは「あ」でいいな」

ドロシー　：『……あの、この『CS』ってゲーム。やってるとよくないことが起きると思うの。だから、その原因を調べてほしい…。調べて、どうにか…どうすべきか教えてほしい。』

DL　：人工知能にしては会話があまりに自然、故に不気味に感じるだろう。

熊埜御堂 亜聡：「ん？…謎解き要素か？単に日記付けて交換するだけのゲームじゃねーのか」
熊埜御堂 亜聡：「やってると良くないこと？」
ドロシー　：『……（こくり）』
熊埜御堂 亜聡：「、？…。……スマホの中でデータが消えるとかか？」
ドロシー　：『……それ、よくない事なの…？』
熊埜御堂 亜聡：「…。…なんで会話繋がってんだよ。音声認識あんのかこれ」
熊埜御堂 亜聡：「逆に、よくない事って、どんなことだ？」
ドロシー　：『……例えばだけど、「誰かが何かを失う」、とか……』
熊埜御堂 亜聡：「…？、……！」
熊埜御堂 亜聡：「記憶がなくなる、とかか。まさかとは思うけど」
ドロシー　：『…このアプリが怪しいと思う。原因はわからないけど、そんな気がする。何かわかったら…　教えてほしい、私も一緒に考えるから。』
熊埜御堂 亜聡：「……おいおい、マジなのかよ。」
熊埜御堂 亜聡：「原因はわからねーが、この CS が原因だって？……で、その原因は自分で考えろと」
ドロシー　：『うん…。これ以上、哀しい出来事が起きないようにしたい。『CS』の根源を止めれば、それが叶う気がする。』
熊埜御堂 亜聡：「根源？……」　…よいしょと起き上がって、ベッドの上に座ります
熊埜御堂 亜聡：「…ゲーム内のお前に聞いても分かるか知らねーが。CS ってそもそも何なんだ。どっかの誰かが適当に作った、日記付けるだけのゲームじゃねーのか？」
ドロシー　：『よくわからない。むしろ、私が知りたい。』
熊埜御堂 亜聡：「ゲームの中にいるのに？」
ドロシー　：『ゲームの中にいるから、逆に自分では何もできない』
熊埜御堂 亜聡：「…ふーん？」
熊埜御堂 亜聡：「とりあえず、この CS 回りのことを調べりゃいいんだな」
ドロシー　：『（こくり）』
熊埜御堂 亜聡：「やることはわかった。『CS』の根源を止めろってのは？」
ドロシー　：『まだ、私にもわからない事が多過ぎる…。何をどうするべきなのか…貴方が見聞きした事、感じた事をこれから教えていってほしい』
熊埜御堂 亜聡：「ウミガメのスープ並に謎がぼんやりしてんな。…まーいいか。めんどくせーけど」
ドロシー　：『……あの…』
熊埜御堂 亜聡：「……。CS で良くないことが起こる、原因を考えろ…。…とりあえずやってみたり開発者当たりを漁ればいいのか？　とりあえず、何かやるか……あ？」
ドロシー　：『貴方の名前を、まだ聞いてなかった』
熊埜御堂 亜聡：「プレイヤー名いるやつかこれ」
熊埜御堂 亜聡：「……亜聡。熊埜御堂 亜聡。妹と一緒に始めた」

ドロシー　：『……亜聡。これからよろしくね』
熊埜御堂 亜聡：「……おー」
熊埜御堂 亜聡：「あぁ、そうだ」
熊埜御堂 亜聡：「この謎解き、別のプレイヤー巻き込んでもいいんだろ？　妹にお前の事話していいよな」
ドロシー　：『うん。それが謎を解く上で必要なら構わない』
熊埜御堂 亜聡：「ん」
熊埜御堂 亜聡：「……あとで電話しとくか」

DL　：では一度 ドロシーとの会話を切り上げて、明香さんに電話しますか？
熊埜御堂 亜聡：（そうですね…！それでお願いします！）

熊埜御堂 亜聡：「……もしもし。明香」
熊埜御堂 明香：「あっ、お兄ちゃん！　今ね、ちょうど電話しようと思ってて…あっ、すごいんだよわたしの CS！もう魔女…じゃないんだっけ？　ええと、アリスちゃんが来てくれたの！」
熊埜御堂 亜聡：「すげー喋んな相変わらず。おー、そっちも生まれたか魔女」
熊埜御堂 明香：「そっちも…ってお兄ちゃんの方も？」
熊埜御堂 亜聡：「こっちも生まれたぞ。黒い本からツインテールの奴。」
熊埜御堂 明香：「そ…そうなんだ！　すごいね！　どんな子？　名前は？」
熊埜御堂 明香：「こっちのはね、金髪でエプロンドレスで…名前もね、ぴったりなんだよ！　アリスちゃんっていうの！」
熊埜御堂 亜聡：「金髪？……へー。確かそういう話あったよな」
熊埜御堂 亜聡：「こっちは…あー、銀髪で黒と赤っぽい服着てた。ドロシーだな」
熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「なんでお前が嬉しそうなんだよ」
熊埜御堂 亜聡：「でも変なこと言ってたぞこいつ」
熊埜御堂 明香：「変なことって？」
熊埜御堂 亜聡：「この『CS』ってゲームをやってるとよくないことが起きるから、その原因を調べろって」
熊埜御堂 亜聡：「織畑の記憶喪失？も何か心当たりありそうだったぞ」
熊埜御堂 明香：「えっ、でもアリスちゃんは「CS をやる事でそんな事が起きるなんてありえない」って言ってたよ？」
熊埜御堂 明香：「CS を悪者にしてる黒幕がいるかもって！」
熊埜御堂 亜聡：「はあ？でもこっちはさっき、はっきり「このアプリが怪しい」つってたぞ。……キャラによって言うこと違うとかあるのか」
熊埜御堂 明香：「あ、でもねでもね、CS やってる人達に色々聞いてほしいんだってアリスちゃん！　開発者じゃなくて、って言ってた」
熊埜御堂 亜聡：「そうなのか？……こっちは、『CS』の根源を止めればいいとまで言ってたから、てっきり開発者にたどり着けってことだと思ってたんだが」
熊埜御堂 亜聡：「そっちはそっちで、別の謎解きが出てんだな」
熊埜御堂 明香：「ううーん…？　…とりあえずよくわかんないけど、CS を調べればいいってこと自体は変わってない感じかな？」
熊埜御堂 亜聡：「たぶんな。……思ったより、めんどくせーゲームかもしれねーな」 ポテチの袋バリィッ

熊埜御堂 明香：「あっ、今お菓子の袋開けたでしょ！」
熊埜御堂 亜聡：「バレふぁか（ばりばりばりばり）」
熊埜御堂 明香：「もー、食べちゃうのはもう仕方ないけど、空の袋をそこら辺に捨てちゃダメだよ！　ちゃんとゴミ箱に捨ててね！」
熊埜御堂 亜聡：「んー」（ばりばりばりばり）
熊埜御堂 明香：「もー！」
熊埜御堂 亜聡：「（ごくん）……まーこっちの魔女は、また明日会えたら見せる」
熊埜御堂 明香：「うん、こっちも明日改めて紹介するね！」
熊埜御堂 亜聡：「ん」

熊埜御堂 明香：あと共有する情報はない…かな？
熊埜御堂 亜聡：こちらもこれくらいですかね…？
DL　：では通話を終えますか？
熊埜御堂 明香：こちらは終わりで OK です！
熊埜御堂 亜聡：OK です！

熊埜御堂 亜聡：「風呂入ってさっさと寝ろよ」
DL　：（ぴっ）

DL　：さて、お 2 人とも。
寝る前に何かやりたいことなどございますでしょうか？（無ければシーン進めます）
熊埜御堂 明香：こちらは大丈夫…です！
熊埜御堂 亜聡：一旦大丈夫……あ、そうだ
熊埜御堂 亜聡：明日の荷物をカバンに放り投げる…という体で、ついでに自分の学生証見てもいいですか？学校名！
DL　：OK です！
DL　：では亜聡君が自分の学生証を確認した所、「私立縫月(ほうづき)高等学校」と書かれていますね！
熊埜御堂 亜聡：了解です！ありがとうございました！
DL　：さて、他は大丈夫でしょうか？
熊埜御堂 亜聡：大丈夫です！

DL　：ではお 2 人は明日の準備をしたり、或いは魔女たちと他愛のない会話をした方もしれません。
そうして夜の時間を過ごし、就寝します。

DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：…明香さんはその晩、夢を見ます。

DL　：何の変哲もない道、綺麗な女性の後ろ姿が見える。
DL　：見えているのだが、輪郭が掴めない。その後ろ姿に少しずつ近づいている。
DL　：そして、次々と感情が流れ込んでくる。

？？？？？？　：見つけた！　みつけた！　ミツけた！　ミツケタ！　　美しく長い髪！　冷淡な目！　蔑む心！　もっとも綺麗で！　それでいて汚らわしいアナタ！
？？？？？？　：一目でわかったわ！　素敵なアナタ！　親愛なるアナタ！　大好きで、大嫌いなアナタ！　　私の存在を肯定してくれる！　私に居場所を与えてくれる！　私を私にしてくれる！
？？？？？？：ああ！　ああ！　もう我慢できない！　やっと見つけた！　やっと会える！　やっと触れれる！

？？？？？？：――だから、殺してしまいましょう。

DL　：……
DL　：……
DL　：…

▼火曜日　―――２日目

DL　：……さて、夜が明けて今日は火曜日。
いつものように、貴方達は学校へと向かうでしょう。
DL　：（登校前にやっておきたい事とかございますでしょうか？）

熊埜御堂 亜聡：ちゃんと起きられたかチャレンジしてもいいですか？（？）
DL　：ｗｗｗｗｗｗｗｗどうぞｗｗｗｗ
熊埜御堂 亜聡：わーい　じゃあ幸運で…

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊幸運〉(1DM<=3) ＞ [10] ＞ -1 ＞ 成功数-1 ファンブル!

DL　：ｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
熊埜御堂 亜聡：！？　すやぁ…
熊埜御堂 明香：お兄ちゃん！！

ドロシー　：『……亜聡。起きなくていいの…？』
熊埜御堂 亜聡：「（すやぁ…）」

熊埜御堂 明香：……お兄ちゃんの家近くに来た辺りで電話をかけたいです！
DL　：いいですよｗｗｗ

熊埜御堂 明香：「……」(ぷるるるる)(ぷるるるる)

熊埜御堂 亜聡：1d5 何コール目で起きた？ (1D5) ＞ 1

DL　：（えらい）
熊埜御堂 明香：(偉いけど最初から起きてくれよ…)
熊埜御堂 亜聡：（ほんそれ）

熊埜御堂 亜聡：「……うっせ。なに」ぴっ
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、起きてる？　もうすぐ門閉まっちゃうよ」
熊埜御堂 亜聡：「…ん？……うわ」時計見
熊埜御堂 明香：「……もー！！」
熊埜御堂 亜聡：「起きる、起きるって……ふぁわ……。…おー、魔女からも「起きろ」ってメッセージ出てた」
熊埜御堂 亜聡：「２分で部屋出るわ……ふぁわ」
熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃん偉いなぁ…もう、ちゃんと起きて来なよ。下駄箱で待ってるからね」
熊埜御堂 亜聡：「……ん」眠そう
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「うっせ。耳元で叫ぶな」

熊埜御堂 亜聡：（寝ぐせでもっさもさのまま、適当に着替えて家出ますね！）（よくできた妹ちゃんだ…）
DL　：では割といつも通りな光景を繰り広げ、明香さんと亜聡君は登校しますね。

DL　：いつもと違う点があるとすれば、お二人のスマホにはやけに人間的な「魔女」がそれぞれいる事でしょうか。

熊埜御堂 明香：「もー、どうせなら授業が始まる前にお兄ちゃんに紹介したかったのに！」とぷりぷりしている
熊埜御堂 亜聡：「別に放課後でもいいだろ……ふぁわ」
熊埜御堂 亜聡：「……あー、そういや日記も書いてねーなぁ」 ぼんやり
熊埜御堂 明香：「もう、いろいろとずぼらすぎるよお兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「別にいいだろ、今日からで」
熊埜御堂 明香：「じゃあ一緒に書こ！」
熊埜御堂 亜聡：「一緒にぃ？」
熊埜御堂 明香：「うん！　……だめ？」
熊埜御堂 亜聡：「……別に。どっちでも。」ぷい
熊埜御堂 明香：「、……えへへ」

熊埜御堂 明香：では日記表振ってみたいです…！
熊埜御堂 亜聡：ではこちらも！
DL　：はーい、では 1d10 どうぞ！

熊埜御堂 明香：1d10 (1D10) ＞ 3
熊埜御堂 亜聡：1d10 (1D10) ＞ 4

[情報]【明香さんの日記】
（火曜日）
3：通学中に私綺麗？と聞いてきたマスク女がいた。まあまあかな、と言ったらどっかいった。

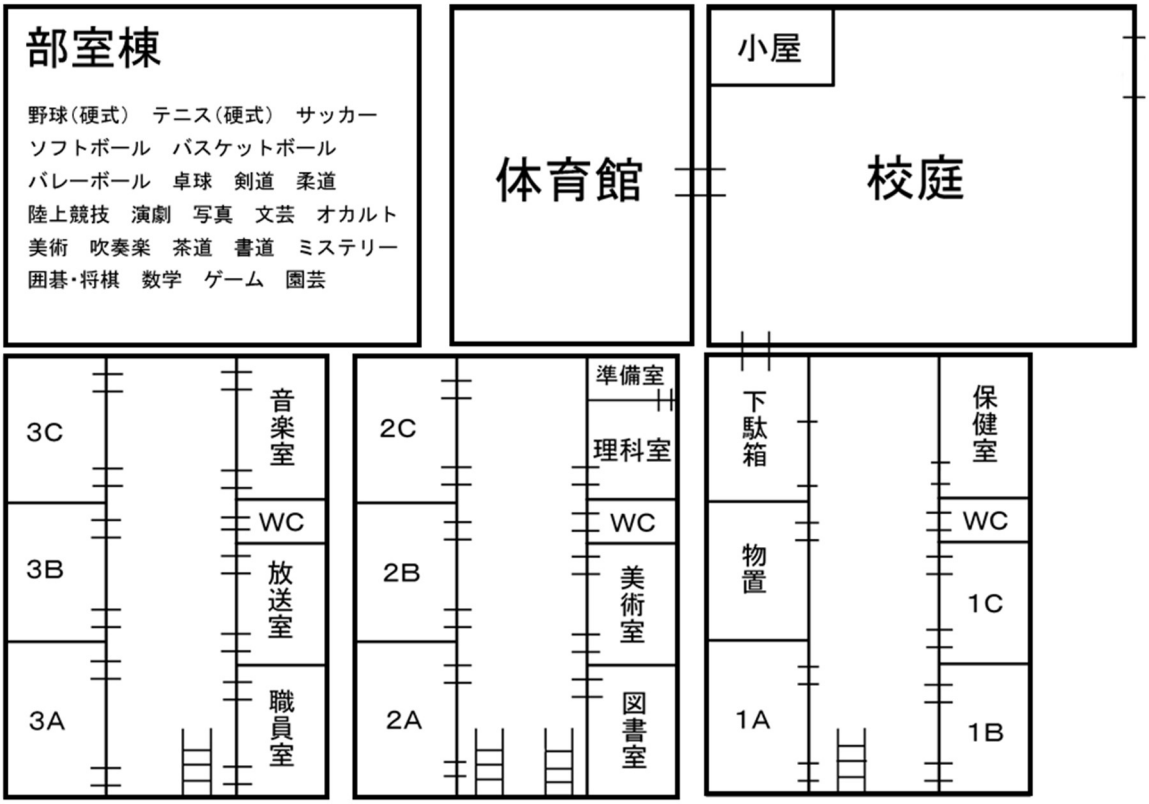
[情報]【亜聡君の日記】
（火曜日）
4：家の前で知らないおじさんがドラミングしてた！　今日はいいことありそう！

熊埜御堂 亜聡：「寝坊したら家の前にいたんだよな」 ぽちぽち
熊埜御堂 明香：「へー、珍しいおじさんがいるんだね」
熊埜御堂 明香：「わたしはね、今朝はマスクをした女の人に話しかけられちゃった。なんか悩みあるみたいだったから、おすすめのコスメ教えてあげたの！」
熊埜御堂 亜聡：「知らない奴なのに気さくに行くのやめろって言ったろ」
熊埜御堂 明香：「えぇー」

DL　：では日記を書き終えた所で、HR が始まりますね。今日もこれから授業です。

DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：では時間が流れ、昼休みです。
　ここから本格的な調査が可能となります。
DL　：調査中の動き方についての説明を情報タブに、校内のマップを画面上に貼り付けますので少々お待ちくださいませ！
熊埜御堂 亜聡：（はーい！）



［情報］【学校内の調査】
・昼休みに1回、放課後に2回の調査が可能。
（基本的に昼休みは校舎、放課後は部室棟を調査できる。）
・調査の目安としては、昼休みはNPC1人との会話を1回、放課後は部屋に入って出るまでを1回とする。（ただし放課後行動の頭にミステリー研究部に顔を出すことは1行動に含まれない。）
・基本的には 2 人一緒の行動をオススメするが、別行動も可能。

▼部活動一覧
［運動部］
野球（硬式）、テニス（硬式）、サッカー、ソフトボール、
バスケットボール、バレーボール 卓球、剣道、柔道、陸上競技
［文化部］
演劇、写真、文芸、オカルト、美術、吹奏楽、
茶道、書道、ミステリー、囲碁・将棋、数学、ゲーム、園芸

熊埜御堂 明香：では昼休みは 1B の教室にお邪魔したいです！
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃんについていきます！
DL　：はーい、では 1B へ！
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：ではお 2 人は隣のクラス、「1B」へと移動してきました。昼休みだけあり、教室内はにぎやかですね

熊埜御堂 明香：「こんにちは～、ちょっといいかな？　このクラスに雁鳥さんって子いるかな？」 と近くの人に話しかけて聞きますね
1B 生徒　：「ああ、雁鳥さんならあそこにいるよ」

DL　：指差した先に、1 人の女子生徒が席についていますね

熊埜御堂 亜聡：「普通にいるんじゃねーか」 ちなみにざっと見まわして、織畑ちゃんはいます？

DL　：では亜聡君が教室内を見回してみますが、鶴乃の姿は見当たりませんね

熊埜御堂 明香：「…鶴乃ちゃんは…いない？」
熊埜御堂 亜聡：「んだよ。記憶がねーから話しかけたかもわかんねーとか言う割には、いねーじゃねぇか」
熊埜御堂 亜聡：「それか、今日が休みなだけか？」
熊埜御堂 明香：「どうなんだろう…ね、ね、今日は鶴乃ちゃん…織畑さんっておやすみ？」
熊埜御堂 明香：と 1B 生徒に聞いてみます
1B 生徒　：「あ～、織畑さんね…。昨日から教室に来てないんだよ…。朝 登校してる所は見たんだけどなぁ…？」
熊埜御堂 明香：「？　それって、今朝のこと？」
1B 生徒　：「うん。途中まで方向一緒だし、登下校の時 たまに見かけるよ」
熊埜御堂 明香：「お話とかしたりする？」
1B 生徒　：「ううん。特に仲良くはないし」

熊埜御堂 明香：「…？　仲良くないからお話しないの？」
1B 生徒　：「いや…、その…、何話して良いのかわかんないし…」
熊埜御堂 明香：「…？？？？？」
熊埜御堂 亜聡：「明香。これが"普通"だ」 呆れ
熊埜御堂 明香：「えぇっ！？　私が駄目な感じなの！？」
熊埜御堂 亜聡：「普通、興味ねー奴とそんなに話もしねーよ」

DL　：（これ以上 鶴乃の事について聞きたいなら〈＊交渉〉ですね）
熊埜御堂 明香：…ちなみに相手が男子生徒とかなら魅了もいけたりしませんか？
DL　：そうですね…じゃあ＜幸運＞で成功したら相手は男子だったという事にしましょう！
熊埜御堂 明香：…うん！　まぁワンチャン
熊埜御堂 明香：幸運いきます！

熊埜御堂 明香：1DM<=2〈＊幸運〉(1DM<=2) ＞ [4] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 明香：普通に交渉します
DL　：ｗｗｗｗはーいｗ
熊埜御堂 明香：あ、社交術の方が高いな…？　社交術ではだめですか？
DL　：そうですね、女子同士ですからそれもアリかもですね！
熊埜御堂 明香：では社交術で！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈社交術〉(2DM<=7) ＞ [5, 1] ＞ 3 ＞ 成功数 3 トリプル!

熊埜御堂 明香：ｼｬｯｵﾗ
DL　：お見事！
DL　：では明香さん、BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 明香：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 明香] DB：1 → 2

1B 生徒　：「……あっ、あなたもしかして…。熊埜御堂さん…？」
熊埜御堂 明香：「えっ、うん。そうだけど…」
1B 生徒　：「わーっ！学校内の有名人じゃん！一回会ってみたかったの！嬉しい～！」
熊埜御堂 明香：「わわっ、ゆ、有名人なの？　そ、そっか～…えへへ」照れ照れ
1B 生徒　：「わーっ！聞きたい事あったら何でも聞いて！」
熊埜御堂 明香：「あっ、じゃあね…えっと、ここ最近の鶴乃ちゃんってどういう感じ…かな？」
熊埜御堂 明香：「なんかボーっとしてるだとか、授業中の様子がヘンだとか…」
1B 生徒　：「昨日から教室には来てないから、今の様子はわかんないけど…。でも、先週までは特に変わった感じはなかったかな…」
熊埜御堂 明香：「そっか…今朝は見かけたんだよね？　どんな感じだった？」

1B 生徒　：「ちらっと見ただけだけど、特にいつもと変わらなかったかなぁ」
熊埜御堂 明香：「そっかぁ……」(ちらっ)(お兄ちゃんなんか気づいたこととかある？)
熊埜御堂 亜聡：「……。昨日も今日も、朝は見かけたのに教室には来てねーのか」
1B 生徒　：「うん。特に具合悪そうではなかったけど…、なんでだろ…？」
熊埜御堂 亜聡：「休み時間とか、放課後も同じなんだな？…」
1B 生徒　：「休み時間も教室にはいないからわかんない。放課後は見かけるけど、いつも通りに見えるね」
熊埜御堂 亜聡：「ああ、見かけてんのか。…ん」
熊埜御堂 明香：「ううーん…？　朝と放課後はいつも通り、なんだよね…うーん…」
1B 生徒　：「そうそう。なぜか教室には顔出さないの」
熊埜御堂 亜聡：「あいつ何やってんだ」
熊埜御堂 明香：「なんか教室に入りたくない理由があるのかな…でも、その記憶もなくなっちゃってるんだよね…」
1B 生徒　：「でも…なんか意外…。熊埜御堂さんが織畑さんと知り合いだったなんて」
熊埜御堂 明香：「え、そう…かな？　まぁ、知り合ったといっても昨日なったばっかりなんだけどね」てへへ
1B 生徒　：「そうなんだ～！織畑さんって暗いしおどおどしてるし、クラスでは全然喋らないから、超意外だった！」
熊埜御堂 亜聡：「…」 うわぁって内心
熊埜御堂 明香：「そっかぁ。あ、でもねでもね、」
熊埜御堂 明香：「話して見たら、とっても面白くて一緒にいて楽しい子だったよ！」
熊埜御堂 明香：「だからね、何話していいかわかんないで終わるんじゃなくて、挨拶だけでもしたらね」
熊埜御堂 明香：「きっと楽しくお話しできるよ！　ね！」
1B 生徒　：「え…、あ…でもなぁ…」（もごもご）
1B 生徒　：「……織畑さん家って…、ちょっと家庭に問題があるって聞いた事が……」（ごにょごにょ）
熊埜御堂 亜聡：「…。おい明香。もういいだろ。休み終わるぞ」
熊埜御堂 明香：「わ、お兄ちゃん。あ、そっか…うっかり忘れちゃうところだった」
熊埜御堂 明香：「ごめんね、お昼休みの時間取っちゃって！　色々教えてくれてありがとう！」
1B 生徒　：「あ…、ううん！また聞きたい事あったらいつでも来て良いからね！」
熊埜御堂 明香：「うん、またね～！」

DL　：では女子生徒と別れて、改めて雁鳥に話しかけますか？
熊埜御堂 明香：話かけます！
熊埜御堂 亜聡：ついていきます！
DL　：はーい！

雁鳥 咲　：では件の雁鳥ですが、教室の隅の方の席で本を読んでいます。

熊埜御堂 明香：「こんにちは！」 では話しかけにいきます
雁鳥 咲　：「……？こんにちは」（ぺこり）

熊埜御堂 亜聡：「お前が雁鳥？」

雁鳥 咲　：「ええ、そうですけど…。あなた達は…？」

熊埜御堂 明香：「えっと、鶴乃ちゃん…織畑さんに色々頼まれて、調べものをしている…者です！」

雁鳥 咲　：「……っ」

熊埜御堂 亜聡：「ミス研で、織畑に声かけられてな。…？」

雁鳥 咲　：「い、いえ……、何でもないです…」

熊埜御堂 亜聡：「……」 気になる…

熊埜御堂 明香：「？　えっと、それでね鶴乃ちゃんからね、雁鳥さんから「CS」ってアプリを教えてもらったって言ってて…その事でちょっと聞きたいことがね」

雁鳥 咲　：「あ…、はい…」

熊埜御堂 明香：「…その、CS をはじめてから…なんか変な事とか起こったりしてない、ですか？」

雁鳥 咲　：「いえ…、特には無いですけど…」

熊埜御堂 明香：「本当？　なんか忘れもの増えたなーとか、そういうのない？」

雁鳥 咲　：「…？いえ、特にそんな事は…。部活でもそんな話は聞いた事ないですし…」

熊埜御堂 明香：「部活？」

雁鳥 咲　：「私 ゲーム部なんです。『CS』も、元々は部活の先輩から誘ってもらって始めたんです」

熊埜御堂 亜聡：「部活の先輩、ね」

雁鳥 咲　：「……織畑さんを招待したのは私です。…やましい話ではありますが、私も織畑さんも友人を作るのが苦手でした。だから、彼女となら仲良くできるかなと思って…話しかけるきっかけとして流行っている『CS』の話題を出しました。」

熊埜御堂 明香：「そうなんだ…その、その後は？」

雁鳥 咲　：「……誘ったのは先週の金曜日です。それ以降の事は、わかりません…」

熊埜御堂 明香：「…わからない？」

雁鳥 咲　：「っ…。はい……、わかりません…。」

DL　：そう言って、雁鳥は目を逸らします。

熊埜御堂 明香：「……あの、えっと、…その、」

熊埜御堂 亜聡：「……」

DL　：ではここで、〈＊交渉〉か〈心理〉をどうぞ
熊埜御堂 明香：出る情報は同じですか？
DL　：同じですね！
熊埜御堂 亜聡：では心理でいきます…！
熊埜御堂 明香：ではこちらも心理で！
DL　：どうぞ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈心理〉(2DM<=7) ＞ [7, 9] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
熊埜御堂 亜聡：2DM<=8〈心理〉(2DM<=8) ＞ [7, 4] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

DL　：お、亜聡君は BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 亜聡：わーいありがとうございます！
熊埜御堂 明香：さすおに！

DL　：では 2 人とも、雁鳥の話にはまだ続きがある事に気が付きますね

熊埜御堂 明香：「……え、っと……」
熊埜御堂 亜聡：「本当に「わからない」のか？」
雁鳥 咲　：「……っ」
熊埜御堂 亜聡：「嘘だろ。全部かどうかは知らねーが、何か心当たりはあるんだろ」
熊埜御堂 明香：「お、お兄ちゃん…！」
熊埜御堂 亜聡：「んだよ」
熊埜御堂 明香：「もうちょっと優しく聞いてあげて！」
熊埜御堂 亜聡：「そういうのはお前担当だろ」

DL　：では亜聡君の言葉を受けて、雁鳥はばつが悪そうに、続きを話し始める。

雁鳥 咲　：「信じてもらえないと思いますが…。初めてちゃんとお話ができたあの日、一緒に下校したんです。その途中で、 人通りがない道で、突然…ホント突然に、目の前に黒くて大きな怪物が現れて…私怖くて逃げだしたんです。」
雁鳥 咲　：「織畑さんも遅れて、後ろを走ってて…でも後ろから大きな音が聞こえて、でも振り向けなくて…家まで振り向かずに走ったんです。その後、織畑さんに連絡しても繋がらなくて…」
雁鳥 咲　：「…見捨てたんです…私、織畑さんを、友達を、見捨てて逃げたんです。だから織畑さんはもう…！」
DL　：そう言って、静かに泣き出してしまう。
熊埜御堂 亜聡：「怪物？……うわ」 泣かれた！
熊埜御堂 明香：「えっ、あっ、か、雁鳥さん…！」
熊埜御堂 明香：「……あの、鶴乃ちゃん、…生きてる、って…学校、来てる、よ？」
雁鳥 咲　：「……は？」
熊埜御堂 亜聡：「おう。昨日見たぞ」

雁鳥 咲　：「…たちの悪い冗談はやめてください。」
熊埜御堂 明香：「じ、冗談じゃないよ！　それに、さっきこのクラスの子も朝見たって言ってたよ！」
雁鳥 咲　：「私、今言いましたよね？織畑さんは怪物に…その、食べられて死んだって。怪物も、織畑さんが潰される音も本当にあったことです。食べられたから死体が出てこない…連絡もずっとつきません。」
熊埜御堂 亜聡：「いや、だから昨日会ったんだって。俺等が。」
雁鳥 咲　：「…さっきからあなた達は、何を言っているんですか？」
熊埜御堂 明香：「……あのね、昨日ね。鶴乃ちゃんが、ミス研に来たの」
熊埜御堂 明香：「助けてください、記憶が消えていってる…って」
熊埜御堂 明香：「それで、記憶が消える原因を探してほしいって言われて…わたし達調査することになったの」
熊埜御堂 明香：「その時に、雁鳥さんの話も聞いたよ。一緒に帰ろうって誘われて、でもその時の記憶もなくなってるって」
雁鳥 咲　：「……あり得ない。そんなの、あるワケ無いじゃないですか。織畑さんが死んだのは、先週の金曜日なんですよ！そんなの、あるワケ無いじゃないですか！！」
熊埜御堂 亜聡：「でもお前、死んだところを直接見たわけじゃねーんだろ。だったら、お前が知らない何かがあったかもしれねーだろうが」

DL　：雁鳥に自分たちの話を信じさせるには、〈＊交渉〉トリプル以上の成功が必要になります
熊埜御堂 亜聡：Oh
熊埜御堂 明香：はわわ
熊埜御堂 亜聡：…ふ、振るだけ振ってみても…？
熊埜御堂 明香：ボーナスダイス二個使っても…？
熊埜御堂 明香：(あ、一個だけでした)
DL　：いいですよ！BD は 1 つだけですね
熊埜御堂 亜聡：そっか、BD 使わないと成功する確率すらないな…。こちらも 1 つ使います！
DL　：では判定どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：2DM<=3〈＊交渉〉(2DM<=3) ＞ [7, 3] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
熊埜御堂 明香：2DM<=6〈＊交渉〉(2DM<=6) ＞ [5, 8] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：1 → 0
system：[熊埜御堂 明香] DB：2 → 1

DL　：残念ですが、トリプル以上は出てないので失敗ですね…
熊埜御堂 亜聡：残念…
熊埜御堂 明香：うぐぐ、社交術にすればよかった！

雁鳥 咲　：「……さっきから、何を言ってるんですか。気味が悪い…」
熊埜御堂 亜聡：「そこまで言うか」

DL　：雁鳥はそう言って、教室から去っていきますね

熊埜御堂 明香：「あっ、…えっと、えっと」
熊埜御堂 明香：「……うぅぅ～」
熊埜御堂 亜聡：「事情はよく知らねーが、こっちがビビるぐらい思い込んでたな。…織畑の死」
熊埜御堂 明香：「死んでないよ！」
熊埜御堂 亜聡：「わーってる。俺らは見ただろ」
熊埜御堂 亜聡：「あいつが思い込んでるってだけだ」
熊埜御堂 明香：「うん……でも、」
熊埜御堂 明香：「鶴乃ちゃんが思ってる感じの…「避けてる」って事では、なかったね」
熊埜御堂 亜聡：「そもそも教室に来てねーんだからな」
熊埜御堂 明香：「…鶴乃ちゃん、その「怪物に追いかけられた」って記憶もなくなってるのかな」
熊埜御堂 亜聡：「……少なくとも、昨日は言ってなかったな」
熊埜御堂 明香：「……ううーん、なんかもうよくわかんなくなってきたよう…！」
熊埜御堂 亜聡：「今日また来るっつってたし、その時に聞けばいいだろ。思いつめんな」
熊埜御堂 明香：「……うん」
熊埜御堂 明香：「…雁鳥さん、鶴乃ちゃんと友達になりたかったんだよね」
熊埜御堂 明香：「……なんか、……なんか～」
熊埜御堂 亜聡：「なんでお前が悩むんだよ。……ほら、休み時間終わるぞ」 頭ぽん
熊埜御堂 明香：「うぅ～、お兄ちゃん～」

DL ：（あと 1B でやっておきたい事とかはありますでしょうか…？）
熊埜御堂 明香：特にないです…
熊埜御堂 亜聡：（こちらは一旦大丈夫…です…！）
DL ：はーい、ではこのタイミングで午後の授業の予鈴がなります。昼休みも終わりです
DL ：他にやりたい事とかございませんでしょうか？
熊埜御堂 明香：特にはない…かな？
熊埜御堂 亜聡：特にはない…ですね。あ、じゃあ織畑ちゃんの机だけちらっと確認しときます…
DL ：OK です！＜亜聡君

DL ：鶴乃の机には鞄は無いですね。
置き勉していたであろう教科書や筆記用具などが多少ある程度です

熊埜御堂 亜聡：「やっぱりいねーな」
熊埜御堂 明香：「うん…、教室に来てないって言うのは本当みたいだね？」
熊埜御堂 亜聡：「…気になるなら、また放課後にでも保健室とか探すか？」
熊埜御堂 明香：「！　うん！」
熊埜御堂 亜聡：「ん」 頭ぽん
熊埜御堂 明香：「わ、…えへへ」

熊埜御堂 亜聡：（亜聡が気になるのはこれくらいですかね…！）

DL　：了解です！
では午後の授業を終え、放課後まで時間を飛ばしても大丈夫でしょうか？
熊埜御堂 明香：大丈夫です！
熊埜御堂 亜聡：OK です！
DL　：はーい、ありがとうございます！

DL　：それではお待ちかね、部活動の時間でございます！
DL　：最初に行動消費なしでミステリー研究部に顔を出す事が可能ですが、行きますか？
熊埜御堂 明香：行きたいです！
熊埜御堂 亜聡：行きたいです！
DL　：はーい、ではお 2 人とも真っ直ぐミス研の部室へと向かいます…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：ミステリー研究部の部室に入ると、眼鏡の男が机に座っていた。

八雲 芳一　：「やあ、元気だった？諸君、昨日は私がいなくて寂しかっただろう？わかるわかるよ。寂しかったと、そう顔に書いてあるからな。」
熊埜御堂 亜聡：「帰っていいか」
熊埜御堂 明香：「せっかく来たのに！」
八雲 芳一　：「待て待て、まだ部活は始まったばかりだぞ？」

DL　：あなた達の顔を見るなり、ご機嫌に話しかけてきたこの男は「八雲　芳一（やくも　ほういち）」。あなた達の所属するミステリー研究部・部長の 3 年生である。

熊埜御堂 明香：「部長、こんにちは！　昨日はどうしてたんですか？」

八雲 芳一　：「ああ！その事か！」 待ってましたとばかりに話出します
熊埜御堂 亜聡：「おいメイ、点火するな」
熊埜御堂 明香：「え、でも昨日なんでいなかったのか気になるし…」
八雲 芳一　：「実はな！校内にこの貼り紙を貼りに行って回ってたんだ！」

DL　：八雲が手にしている貼り紙には、『どんな事件も三日で解決！ミス研探偵事務所！』と書いてありますね

熊埜御堂 明香：「わぁ」
熊埜御堂 亜聡：「やっぱりやらかしてんじゃねーか」
八雲 芳一　：「いや～、我ながら素晴らしい出来だろう！？どんな依頼が来るか楽しみだ！！」（わくわく）
熊埜御堂 亜聡：「……」 ……げっそり
熊埜御堂 明香：「え、もう来てますよ？」
八雲 芳一　：「おお、もうきたか！いやいや、掲示板に張り紙をしたかいがあったよ。」
熊埜御堂 明香：「はい、昨日織畑 鶴乃ちゃんって子がやってきて…」 と、昨日の流れをかくしかします
熊埜御堂 亜聡：「部長のせいでこっちが全部聞くハメになったんすよ」
八雲 芳一　：「そうかそうか！それはご苦労様だったな！！」
熊埜御堂 亜聡：「……。で。当然部長もやるんすよね。調査。」
八雲 芳一　：「ん？いや、悪いがこちらも別件で依頼を受けている。そちらは君たちに任せるぞ」
熊埜御堂 明香：「別件？」
熊埜御堂 亜聡：「は？？？」
熊埜御堂 明香：「思ったより困ってる人いるんですね、この学校…大変だぁ」
八雲 芳一　：「ああ。最近、花壇から花がよくなくなるそうだ。どうやらいたずらに摘む輩がいるらしい。もし犯人を見つけたら注意してくれよ。こらっ！ってな。」
熊埜御堂 明香：「はーい！」
八雲 芳一　：「まぁ、これは私が引き受けた案件だから別に君たちが熱を入れて探る必要はまるでないんだがな」
熊埜御堂 亜聡：「いや別に探る気ねーし」
八雲 芳一　：「まぁまぁ亜聡。そう言うなよ！お互い調査してる内に有力情報とか見つかるかもしれないだろ？情報交換くらいはやってもいいんじゃないか？」
熊埜御堂 亜聡：「交換、ね…。」
熊埜御堂 亜聡：「じゃあ部長も、今の明香の話聞いて分かることあれば教えてくれるんすよね」
八雲 芳一　：「ああ、勿論良いぞ」
熊埜御堂 明香：「(ぱぁっ)じゃあ、部長はどんな情報を持ってるんですか？」
八雲 芳一　：「うーむ…、そうだな……」
八雲 芳一　：「……まず、その『CS』というゲームだが私もやっている」
熊埜御堂 亜聡：「初耳」
八雲 芳一　：「と言っても、読んだ本を記録したり、面白いネタをメモしたりと、おおよそ日記といえる使い方はしてないがな。詳しいことはゲーム部の御伽（おとぎ）にでも聞くといい。」
熊埜御堂 明香：「おとぎ？」
八雲 芳一　：「ああ、このゲームにのめり込んでいる奴だ。かなり詳しいことを知っていると思う」
熊埜御堂 明香：「わぁ、じゃあその人だったら本も魔女になってたりするのかな？」

熊埜御堂 亜聡：「かもな」
八雲 芳一　：「かなりやり込んでいるみたいだからな。多分そうだろうな」
熊埜御堂 明香：「あ、でも部長！　わたし昨日はじめたばっかりなのに魔女が出てきました！」
熊埜御堂 明香：「これに心当たりがあったりとかは…」
八雲 芳一　：「いや、先程も言ったが私はおおよそゲームらしい使い方はしていない。このゲームについては素人も同然だから何もわからない」
熊埜御堂 明香：「そっかぁ…」
熊埜御堂 亜聡：「なら、部長の CS ではまだ魔女になってねーんすか？」
八雲 芳一　：「いや？一応はなっているぞ。ほら」

DL　：八雲の『CS』ゲーム画面には、緑を基調とした魔女が表示されていますね

熊埜御堂 明香：「かわいい！」
熊埜御堂 亜聡：「……こいつ喋ります？」
八雲 芳一　：「ああ、タップすると喋るな」
熊埜御堂 明香：「…触らないと喋らないの？」
八雲 芳一　：「私のはそうだが…。君達のは違うのか？」
熊埜御堂 明香：「いっぱいお話してくれます！」
熊埜御堂 亜聡：「朝登校時間まで寝てるとアラームみてーにメッセージ出る」
八雲 芳一　：「ほう、なかなかに便利な機能だな！」
熊埜御堂 亜聡：「音声はないっすけどね」
熊埜御堂 亜聡：「朝起こしてくる音声はこっち」（明香ちゃん指さしつつ）
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんが起きないんだからやってあげてるんだもん！　…あ、えっとね。部長、この子なんだけど…」と CS を起動してアリスちゃんを部長に見せてみたいです

DL　：はーい、ではアリスを八雲に見せますと…

アリス　：「……」（じっ…）　八雲の方を見つめていますね
八雲 芳一　：「ほう、私の魔女よりもかなり豪華な装いだな…？これって、レアキャラなのか…？」　興味深げにアリスを見つめます
熊埜御堂 明香：「昨日始めたばっかりで、よくわかんなくて…」
熊埜御堂 明香：「でも、かわいいでしょう！」
熊埜御堂 亜聡：「（横から覗き込み）……おー、本当だな。ちゃんと魔女だ」
八雲 芳一　：「そうだな、なかなか美人だな！」
熊埜御堂 明香：「えへへ～」
熊埜御堂 明香：「その、…おとぎ？って人に聞いたら、アリスちゃんについても何かわかるかなぁ？」
熊埜御堂 亜聡：「かもな。少なくとも部長よりは知ってそうだっつー話だし」
熊埜御堂 亜聡：「この後会いに行くか？」
熊埜御堂 明香：「行きたい！」
熊埜御堂 亜聡：「ん」

熊埜御堂 亜聡：「……そういや、ほら。昨日言ってた、こっちに出てきた魔女」

熊埜御堂 亜聡：このタイミングで、ドロシーちゃんを明香ちゃんにも共有しますね～

ドロシー　：『……（ぺこり）』
熊埜御堂 明香：「わぁ、かわいい～！　はじめまして、明香です！」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんが昨日からお世話になってます！」
熊埜御堂 亜聡：「おい」
ドロシー　：『……はじめまして。私はドロシー』
熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「…。こうしてみると、魔女の雰囲気は全然違ぇな」
熊埜御堂 明香：「そうだね、ドロシーちゃんはなんかキリっとしてる」
熊埜御堂 亜聡：「そっちは……なんつーか…勝気そうだな」
熊埜御堂 明香：「でも服はふわふわしててかわいいよ？　…二人は知り合い、なのかな？」
アリス　：「はじめまして、私はアリスよ。これからよろしくね」＜亜聡君
熊埜御堂 亜聡：「うお、本当に喋った。すげーな。…おー」（よろしく）
熊埜御堂 亜聡：「どうなんだ、ドロシー。知り合いか？」（アリスちゃんを見せてみます）
ドロシー　：『……（ふるふる）……はじめまして…（ぺこり）』
アリス　：「ええ、はじめまして」
熊埜御堂 明香：「あ、初対面なんだ」
熊埜御堂 亜聡：「両方そうっぽいな」
熊埜御堂 明香：「初対面ならこれからまだ仲良くなれるってことだよね？」
アリス　：「ふふっ、そうとも考えられるわね」
熊埜御堂 亜聡：「出たクソポジティブ。だとよ、ドロシー」
ドロシー　：『……うん。これからよろしく…』
熊埜御堂 亜聡：「仲良くする気があるならいいじゃねーか。CS の記憶喪失の話は意見食い違ってっけど。」
熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃんは、CS のせいって言ってるんだっけ？」
ドロシー　：『……（こくり）』
熊埜御堂 亜聡：「んでそっち…アリスは、関係ねー第三者っつってんだっけか」
アリス　：「ええ、そうね」
熊埜御堂 亜聡：「……。お前ら、2 人とも。根拠は？」
ドロシー　：『……残念だけど、今の私にははっきりと示せる根拠は何もない。ただの憶測に過ぎない…』
アリス　：「……そうね。私もドロシーと同じ状態、と言って差し支えないわね」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「明香、あとは頼んだ」（めんどくさくなった顔）
熊埜御堂 明香：「えっ！？　えーと…つまり、お互いに「そう思うけど根拠は示せない」って事だよね。…うーん」
熊埜御堂 明香：「……でも、やっぱり CS について調査を続けるしかなくなっちゃうんじゃないかなぁ？」
アリス　：「そう。だから、これから調べるの。私達の考えを裏付ける証拠を見つける為に」
熊埜御堂 亜聡：「…めんどくせぇ…やるか……」
熊埜御堂 明香：「言ってることは真逆だけど、アリスちゃんもドロシーちゃんも CS を調査すべきとは思ってるんだ

よね？　なら、方向性は一緒だよ！」
熊埜御堂 亜聡：「まぁメイがいるなら何とかなんだろ…」
熊埜御堂 明香：「もー、お兄ちゃんもがんばってよ！」
熊埜御堂 亜聡：「はいはい…」
熊埜御堂 明香：「はいは一回！」
熊埜御堂 亜聡：「アニキかお前」
熊埜御堂 明香：「(ぷぅ)」

DL　：…さて、魔女達の顔合わせが終わった所で。

織畑 鶴乃　：「こ、こんにちは！明香ちゃん、亜聡君」
熊埜御堂 亜聡：「…あ？」
熊埜御堂 明香：「あっ、鶴乃ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「普通にいるじゃねーか」
八雲 芳一　：「お、もしかして…その子が依頼者か？ようこそミス研へ！！」
熊埜御堂 明香：「部長は初対面の子圧で怖がらせちゃうから急に出て来ちゃ駄目！」
織畑 鶴乃　：「そちらの方が部長さんですか！織畑鶴乃と申します、よろしくお願いします。」（ぺこり）
熊埜御堂 亜聡：「意外と平気そうだな…」
織畑 鶴乃　：「？」
熊埜御堂 明香：「あっ、そうだ鶴乃ちゃん。今日はお昼、自分がどこにいたか覚えてる？」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんと一緒にお昼に教室行ったけど、鶴乃ちゃんに会えなかったから…」
織畑 鶴乃　：「そ、それが……、朝登校したら、気が付いたら放課後になってて…」
熊埜御堂 亜聡：「飛びすぎだろ」
織畑 鶴乃　：「うぅ…、いつの間にお昼ご飯食べたんだろ…？それどころか、何食べたんだろ私…」
熊埜御堂 明香：「おひる何食べたか覚えてないの辛いね…また一緒にコンビニで買い食いしよ…」
熊埜御堂 明香：「あっ、そうだ！　後ね後ね、連絡先交換しよう！！」
織畑 鶴乃　：「わあーい、行きます！…えっ、連絡先？もちろんいいですよ！！」
熊埜御堂 明香：「うん、これで一緒にお昼食べよ！ってお誘いもできるね」
織畑 鶴乃　：「わぁい、友達とお昼！楽しみです！！」
熊埜御堂 亜聡：「無邪気か」
熊埜御堂 明香：「えへへ」
熊埜御堂 亜聡：「……で？織畑は昨日の夜は、ちゃんと帰れたのか。それとも、そっちも覚えてねーか？」
織畑 鶴乃　：「…？…明香ちゃんと亜聡君と家の近くで別れて……、ええと…、その後は……、どうしたんだっけ…？」
熊埜御堂 亜聡：「おー。もう大丈夫だ。」
織畑 鶴乃　：「？」
熊埜御堂 明香：「……不思議体験…」
織畑 鶴乃　：「あっ、でもコンビニで一緒にプリン食べた事はばっちり覚えてますよ！よかったぁ～～～～！！」
熊埜御堂 明香：「セーフ！」
熊埜御堂 亜聡：「セーフか？」

熊埜御堂 亜聡：「人の金で食ったプリンの味忘れてたらデコピンだったぞ。……で、」
熊埜御堂 亜聡：「行くのか？ゲーム部」
熊埜御堂 明香：「うん、わたしは行く！　…鶴乃ちゃんはどうする？」
織畑 鶴乃　：「……あ、えっと……」
織畑 鶴乃　：「……ゲーム部って確か…、雁鳥さん…いますよね？」
熊埜御堂 明香：「……そうなの？」
熊埜御堂 亜聡：「言ってたぞ」
熊埜御堂 明香：「どわすれ…」
織畑 鶴乃　：「……私、行って大丈夫、なんでしょうか…？」
熊埜御堂 明香：「う、……うーーーーーーん……」
熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃぁん……」
熊埜御堂 亜聡：「なんで振るんだよ。…行きたいなら行けばいいし、行きづらいならやめればいいだろ」
熊埜御堂 明香：「でも、だって、…あの」(化け物に殺されたうんぬん…)
熊埜御堂 亜聡：「あっちも、本人の顔見りゃさすがに納得すんだろ」
熊埜御堂 明香：「うん……鶴乃ちゃん、一緒に、行く？」
織畑 鶴乃　：「……い、行きます…！勇気出して、雁鳥さんとお話してみます…！」
熊埜御堂 明香：「わ、…わかった！　じゃあ一緒に行こ！」

DL　：では鶴乃と一緒に 3 人でゲーム部に向かう、でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 明香：大丈夫です！
熊埜御堂 亜聡：（はーい！）（あ、その前にちょっとだけ部長に声かけていいですか？）
DL　：はーい、どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：「なぁ部長。CS、あんまやってねーんすよね」
熊埜御堂 亜聡：「別にこだわりとかもないんすよね」
八雲 芳一　：「？ああ、そうだが…。どうした？」
熊埜御堂 亜聡：「いや。それなら、一日一回のボタン押すのも平気っすよね？」
熊埜御堂 亜聡：「伝誦ボタン押してもらおうかなって」
八雲 芳一　：「……ああ、そう言えばそんな機能があったな。良いぞ」
熊埜御堂 亜聡：「おー。じゃあどうぞ」

DL　：では八雲と伝誦の交換を行う、でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：OK ですー。ちなみにこの場合、自分の伝誦ボタンはまだ押せる状態になります？
DL　：そうですね、八雲に押させるならまだ亜聡君は伝誦ボタン押せますね
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます。もらっておこう！
DL　：了解です！
では情報タブに八雲の伝誦を貼り付けます

［情報］▼伝誦：八雲芳一

（月曜日の内容）
今日は先日 隣町の高校に通う友人が貸してくれた「天築市おでん缶ボランティアの歴史」という本を読んだ。
天築市のおでん缶ボランティア活動は意外にも歴史が長く、明治時代頃から地域の大人達が有志を募り、貧しい子ども達にカステラなどの栄養価の高い卵菓子を配り歩いていた事が元になっているそうだ。
天築に住む土地神が腹を空かせた子ども達の為に、カステラを配り歩いていたという民話がルーツだという。

一時は風習が衰退していたが、第二次世界大戦後 天築に住むとある富豪が街の住人達に私財で購入した食糧を配り歩いた事がきっかけで本格的にボランティア活動として地域に根付いたらしい。
おでん缶を配るようになったのは平成中期。栄養価の高さに加えてその保存性・利便性の高さが注目され、他の食糧からおでん缶へと置き換わっていったのだという。

しかし近年では余剰に配置しすぎている事が問題となり、逆に回収するボランティアまで出てきたそうだ。
歴史を紐解けば子どもの為の素晴らしいボランティアではあるが、現代においては「至る所に設置する」のではなく「子ども食堂などのように希望者が自ら取りに来る」等 改良する必要があるのではないかと思う。
（キャラクターは緑を基調とした魔女）

熊埜御堂 亜聡：「いや何読んでんすか」（明香ちゃんにも見えるようにしつつ、引）
熊埜御堂 明香：「あっ、おでん缶だって懐かしいねお兄ちゃん！」
熊埜御堂 明香：「天築の学校、校内のいたる所に点在してたよね！」
熊埜御堂 亜聡：「おー、してたしてた」
熊埜御堂 亜聡：「たまに踏んでずっこけてる奴とか、握りつぶしてる奴とかいたな」
熊埜御堂 明香：「あの人すごかったねー！」
八雲 芳一　：「握りつぶす…？？？」
熊埜御堂 亜聡：「まぁ天築なんで」（魔法の言葉）
熊埜御堂 明香：「まだ戦車も走ってるよ！」
八雲 芳一　：「そ、そうなのか…？？？」（困惑）
熊埜御堂 亜聡：「懐かしいもん見せてもらったっすね。…じゃ、行くか明香。織畑。」
熊埜御堂 明香：「はーい！　じゃあ部長、いってきまーす！」

DL　：では 3 人で部室を出ようとすると、八雲が思い出したかのように話しかけてきますね

八雲 芳一　：「ああ、そうだ…。最近 …でもないか、これはちょっと前からだな。」
八雲 芳一　：「よくお化けを見たーみたいな話をよく聞くが、それはうちの領分か怪しい。オカ研の絵本（えほん）に今度確認を取っておくから、お前たちはまだまともに取り合わなくていいぞ。」

熊埜御堂 明香：「…お化け？」
熊埜御堂 亜聡：「絵本って人名っすか？」
八雲 芳一　：「ああ、『小波 絵本』（さざなみ えほん）。オカルト研究部の部長だ」
熊埜御堂 亜聡：「部長」
熊埜御堂 明香：「かわいい名前～」
八雲 芳一　：「……それ、本人の前で言うなよ明香。多分機嫌損ねるから」
熊埜御堂 明香：「わわ、はーい」

DL　：では他に八雲に話したい事がなければ、彼も自分の依頼に取り掛かりますね
熊埜御堂 亜聡：（こちらは大丈夫です～）
熊埜御堂 明香：（こちらも大丈夫です～）
DL　：はーい、では３人でゲーム部へ向かいます…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：ここはゲーム部。
ミス研の倍は広い部室だ。壁際には様々な機材が置かれており、床には配線が入り乱れている。
DL　：そこには６人の男女がパソコンに向かい作業をしていたり、議論を繰り広げたりしている。
出入口付近の男が声をかけてくる。

ゲーム部部員：「どしたの？　なんか用？」
熊埜御堂 明香：「あっ、えっとこんにちは。御伽さん、って人いらっしゃいますか？」
ゲーム部部員：「ああ、いるよ。あそこでイヤホンをしたままパソコンと睨めっこをしている奴がそうだよ」
熊埜御堂 亜聡：「イヤホン…」 示されている方を見ます！
熊埜御堂 明香：「ありがとうございます！　えっと、今話しかけても大丈夫そう…かな？」
ゲーム部部員：「アイツが熱中してるのなんていつもの事だし、声かけたくらいじゃ怒らないから大丈夫でしょ」
熊埜御堂 明香：「よかった！　教えてくれてありがとうございます！」

DL　：亜聡君が部員に教えてもらった方を見ると、パソコンとにらめっこしてるイヤホンの男子生徒がいますね

熊埜御堂 亜聡：「……」 男か…(セコム顔)

熊埜御堂 明香：あ、ちなみに雁鳥さんはいますか…？
雁鳥 咲　：雁鳥も部室にいますが、彼女もまたイヤホンをしてパソコンの画面を見ているため、声を掛けない限りはこちらに気が付かないでしょう
熊埜御堂 明香：了解ですー、とりあえずまずは御伽さんからだ…という事で御伽さんに話しかけたいです！
熊埜御堂 亜聡：ちょっと後ろをついて行きます！

DL　：了解です！

御伽 住吉　：「うーん……、もうちょい……バランス調整がいるかな…。デバフが強すぎる…」（ぶつぶつ）　独り言をつぶやきながらキーボードを叩いていますね

熊埜御堂 明香：「…あのー？」
御伽 住吉　：「……ん？君達は…？何か用…？」
熊埜御堂 明香：「はじめまして、ミス研の熊埜御堂 明香っていいます。実はちょっと聞きたいことがあって…」
熊埜御堂 明香：「えっと、CS ってゲームご存じ…ですよね？」
御伽 住吉　：「……！！ああ、『CS』のことならちょっとばかし詳しいぜ！」（えっへん）

DL　：明香さんが『CS』の事を話題に出すと、嬉しそうに食いついてきます

熊埜御堂 明香：「よかった～！　実は CS に関して不思議な噂と、…あとレア？な魔女が出現したらしくて、詳しい人にお話を聞きたいなって」
御伽 住吉　：「……何？「レアな魔女」、だって…！」（がたっ）
熊埜御堂 明香：「ひゃっ」
御伽 住吉　：「それどこ？どこにいるの！？！？」
熊埜御堂 亜聡：「まくしたてねーでください」（すっ）
熊埜御堂 亜聡：「あと顔」
御伽 住吉　：「（はっ）」
御伽 住吉　：「いや～、ごめんごめん！つい、「レアな魔女」って聞いて興奮しちゃってさ～！」
熊埜御堂 亜聡：「興奮は興奮でも変態の方の顔してた気がするっすけど」
御伽 住吉　：「え？何の事…？」
熊埜御堂 明香：「あ、ええと…レア？な魔女は、ここにいるんですけど…でも、見せる前に！」
熊埜御堂 明香：「もう一個の方の不思議な噂についてなんですけどっ、CS をやると記憶が消える…って話ご存じですか？」
御伽 住吉　：「え？そんな話は聞いたことねえなぁ。」
熊埜御堂 明香：「ばっさり」

熊埜御堂 亜聡：「本当すか？これっぽっちも？」
御伽 住吉　：「ああ。半年以上前からやってっけど、聞いた事もねぇよ」
熊埜御堂 明香：「そっかぁ…」
熊埜御堂 亜聡：「なおさら織畑がレアだったんだな。……」 自分たちも記憶飛んだけど
熊埜御堂 明香：「そうだねぇ…あ、えっとそれじゃあ「レアな魔女」の事ですけど」
御伽 住吉　：「（ぴくっ）」
熊埜御堂 明香：「(ひゃわ)」(何かを察知)
熊埜御堂 亜聡：「（すっ）」いつでも割り入れる位置に
御伽 住吉　：「ちょ、そんな警戒しなくても！俺、二次元の女の子にしか興味ないし！！」
熊埜御堂 亜聡：「は？？」
熊埜御堂 明香：「なんでお兄ちゃんがちょっと怒ってるの！？　あー、えーと、こ、この子です！　アリスちゃん！」
ばっとアリスちゃんを見せてみますね…
熊埜御堂 亜聡：「お前が目の前にいてそれ言えるか？」

DL　：お、では住吉にアリスを見せるとですね…

アリス　：「………こんにちは」（若干 こわばった笑顔で）
御伽 住吉　：「………お、」
御伽 住吉　：「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！かわいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！」
熊埜御堂 亜聡：「うわ」
熊埜御堂 明香：「や、やっぱダメー！」 ばっ
御伽 住吉　：「こんな魔女はじめて見た！かわいい！！かわいい！！！！！…あ、」
熊埜御堂 明香：「そんな大きな声出したらアリスちゃんがびっくりしちゃいます！」
熊埜御堂 明香：「相手は女の子なんですから、もっと紳士的にしないと嫌われちゃいますよ！」
御伽 住吉　：「はじめまして、俺、御伽 住吉！！よろしくねアリスちゃん！！」（キリッ）
熊埜御堂 明香：「……」(アリスちゃんちら)
アリス　：「…背に腹は代えられない、背に腹は代えられない……」（ぶつぶつ）
熊埜御堂 明香：「あ、アリスちゃん…！」
熊埜御堂 亜聡：「（ドン引き）」
御伽 住吉　：「なぁ、その子の進化条件は！？もっとよく見せてくれ！！ な、なんでもしますから！！ん？しまっ…！いや、じゃあこうしよう。」
熊埜御堂 明香：「ふぇえ…」
御伽 住吉　：「君たちがその魔女を帰り際まで貸してくれるなら、君たちが気になってる『ＣＳ』のことを調べて教えてあげよう。」
熊埜御堂 亜聡：「えぇ……」
熊埜御堂 明香：「ふぇええええ…」

DL　：ではここでイベント【御伽住吉の解析】について記載致します

［情報］【御伽住吉の解析】
御伽住吉にアリスかドロシー、またはその両方を預けると、このイベントが発生する。
アリス、ドロシーの意見を取り入れることで、御伽住吉 はCSの謎に迫ることができる。

・これは1日1回依頼できるが、共鳴者は彼を手助けすることを選んでもよい。
・解析には数時間かかる。放課後1行動目で依頼した場合は帰り際、魔女の入った携帯を回収するときに情報を得ることができる。
・2行動目だと情報開示は翌日になる。御伽住吉と連絡先を交換していれば、その日の遅い時間に情報を得ることができる。
（※ただし、共鳴者が住吉の解析に協力する形で〈暗号〉判定あるいは〈電脳〉判定に成功すると、1行動分の時間で情報が開示される。）

熊埜御堂 亜聡 ：（例えば、今（1 行動目）に手渡して、そのまま＜暗号＞等で手助けした場合、それは全て 1 行動目に集約されるんでしょうか…？）
DL ：そうですね、「1 行動目」として処理され、2 行動目も行う事が出来ます
熊埜御堂 亜聡 ：（了解です！）（預ける場合、手伝った方が断然お得というわけですね…）
DL ：（手伝えばその場で情報を受け取れる、というメリットがありますね！）
熊埜御堂 亜聡 ：（あとは…一人を預けた場合と 2 人両方を預けた場合で、何か違いはありますか？）
DL ：（そうですね…、受け取れる情報には違いがありません）
熊埜御堂 明香 ：(どちらを預けても同じ情報が手に入る、という事でしょうか？)
DL ：（そういう事ですね）
熊埜御堂 亜聡 ：（なるほど…了解です！）

熊埜御堂 明香 ：「…あ、預けるのはいいですけど…め、目を離すことはできませんっ」
熊埜御堂 亜聡 ：「っつーか既に距離がキモ……やばいんすよね。…あー」
熊埜御堂 亜聡 ：「…こっちにも、レアなのいますよ」 ちらっ
御伽 住吉 ：「（ばっ）」
熊埜御堂 亜聡 ：「これでキモさ…じゃなくて、魔女の負担分散されてくれねーかな…（小声）」 ドロシーちゃん見せます
御伽 住吉 ：「はぁぁぁぁぁ～～～～～～！！この子もかんわいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！」
ドロシー ：『……うわぁ…』
熊埜御堂 亜聡 ：「見たことねー顔してる」
熊埜御堂 明香 ：「(はわわわ)」
熊埜御堂 亜聡 ：「アリスにもドロシーにも嫌われたくなかったら、近づくの禁止っす。あと明香が見てるなら、俺も見てる」
御伽 住吉 ：「う…。わ、わかった…。それでいいから、その子達をもっとよく見せて下さい…！！」（土下座）
熊埜御堂 明香 ：「…お兄ちゃぁん…」
熊埜御堂 亜聡 ：「おいやめろ明香の近くで土下座すんな」

熊埜御堂 亜聡：「明香の近くで土下座せずにスマホに近づき過ぎず息荒いのも整えたら手伝う」
御伽 住吉　：「わ、わかったよ！あ、ちなみに俺はアリスちゃんの方がタイプだ！」
熊埜御堂 亜聡：「は？？？」
熊埜御堂 明香：(さっ)(スマホ庇い)
御伽 住吉　：「ちょ、何もしないって！！つーかできないって！！」

DL　：……では、アリスとドロシーを住吉に預けますか？
熊埜御堂 亜聡：預け……ます！
熊埜御堂 明香：預け……ます…
熊埜御堂 明香：でも手伝いもします！
熊埜御堂 亜聡：お兄ちゃんも同様！
DL　：了解です！

御伽 住吉　：「はーーーー、気を取り直して…。さて、何を調べてほしい？」
熊埜御堂 亜聡：「例えば？」
御伽 住吉　：「そうだな…、例えば……」

DL　：住吉は次のような事を提案してきます。
　①『CS』の深部
　②いずれかの伝誦
このどちらかをこの 1 行動目で調べる事が可能です

熊埜御堂 亜聡：①は普通に知りたいですね…。あと②は…調べないといけないような伝誦が…あ、輝夜先輩のやつ…？？
熊埜御堂 明香：ふむふむ…どうせ 2 行動目でもう一個調べる感じになりそう? だから順番に調べてみます？
熊埜御堂 亜聡：2 行動目で別の場所に行かずに、そのまま調べてもらうのもありですね…
熊埜御堂 亜聡：いいと思います…！
熊埜御堂 明香：ではまずは①からで！
DL　：（あ、ちなみに②についてですが、現在調べられるのは輝夜と八雲の伝誦のみですね）（鶴乃は見ただけで交換はしてないので）
熊埜御堂 亜聡：部長のも行けるんだ…！
熊埜御堂 明香：(おでん缶なのに…)
DL　：（手持ちの伝誦全てが対象になりますね）（調べられるのはどれか 1 つだけですが）
熊埜御堂 明香：あ、じゃあ後で鶴乃ちゃんと交換しよっかな
熊埜御堂 明香：(一応持っておけば気になった時に調査できるから…)
熊埜御堂 亜聡：（ですね…！）

DL　：では「①CS の深部」でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：OK です！
熊埜御堂 明香：お願いします！

DL　：はーい、ではお手伝いするのであれば〈暗号〉判定あるいは〈電脳〉判定をお願いします！
熊埜御堂 明香：では電脳で
熊埜御堂 亜聡：暗号で行きます！
DL　：どうぞ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈電脳〉(2DM<=7) ＞ [9, 5] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
熊埜御堂 亜聡：1DM<=7〈暗号〉(1DM<=7) ＞ [5] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

DL　：お、ではお手伝い成功ですね！
DL　：では手伝いをしている最中、住吉は色々と『CS』について知っている事を話してくれますね

御伽 住吉　：「『CS』の意味は童話、children's story の略… と言われているね。本当のところはわかっていないが。」
熊埜御堂 亜聡：「あー。なるほど。」
熊埜御堂 明香：「ちるどれんず、すとーりー？」
御伽 住吉　：「あとな、魔女の色は喜怒哀楽を表している。 黄色のアデルは喜び、赤のカレンは怒り、青のエリサは哀しみ、緑のソーンは楽しみだ。日記の傾向が偏っているとこれらの姿になりやすい。他にもマッチ、スノー、ミチル、グレーテなど条件を満たした伝誦で進化するタイプもいる。また日記の書き方、ボイス、打ち込み、手書きの傾向によってはメイン画面での反応に変化がある。実際にしゃべったり、メッセージウィンドウで話したりと違いが表れる。ちなみにこいつは豆知識だが、伝誦の通信限界距離は約１０メートルだぜ。」（早口）
熊埜御堂 明香：「なるほど…？」
熊埜御堂 亜聡：「魔女も引いてんぞ」
ドロシー　：『…だ、大丈夫…、ちょっとは慣れた…、慣れた…？』
熊埜御堂 明香：「な、慣れなくてもいいと思うよ」
熊埜御堂 亜聡：「そこは無理しなくてもいいやつだ」

DL　：ではお２人がドロシーとそんなやり取りをしてる時に、こんな声が聞こえてきますね

アリス　：「……ねぇ、あなた。お願いしたいことがあるんだけど、ここをオートからマニュアルに切り替えて、制限を解除してくれないかしら？」

DL　：アリスが御伽住吉にそう話しかけていた。

御伽 住吉　：「ああ、これかな？ちょっと時間かかるけどやってみるよ。」
熊埜御堂 明香：「？　アリスちゃん、なにしてるの？」
熊埜御堂 亜聡：「それやると何かあんのか？」
アリス　：「ふふっ、それはまだ秘密！」（にこっ）
熊埜御堂 明香：「えー、そんなぁ」
アリス　：「サプライズは最後まで秘密にしておくから意味があるのでしょう？楽しみはあとに取っておきなさい」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「むぅ、…じゃあ後で絶対に教えてね！」
アリス　：「ふふっ、じゃあまた後でね」

DL　：……そんなやり取りをしながらお手伝いしているうちに、解析が終わったようだ

御伽 住吉　：「ハァハァ…、よ～しアリスちゃん、ドロシーちゃん！！もうすぐ終わるからいい子にしててね！！」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……」
御伽 住吉　：「んほぉぉぉぉおおお！！！！しゅごいぃぃぃぃ！！！！」
御伽 住吉　：「ふおおおお！！ここの部分、こんな風になってたんだ…！！ぐへへへ…！！」
熊埜御堂 明香：「…ふぇえ」
熊埜御堂 亜聡：「……メイ。泣きそうだったら目つむっとけ。
熊埜御堂 亜聡：「あいつ婦女子が泣く顔してる」
熊埜御堂 明香：「声も怖いよぉ…」
ドロシー　：『……亜聡…』（助けを求める目）
熊埜御堂 亜聡：「あー……悪い。」（さすがに自分の選択を後悔し始めた男）
熊埜御堂 明香：「うぅ…」

アリス　：「……もう用事は済んだのでしょう？いい加減、明香達の所へ帰してもらっても？」
御伽 住吉　：「…あ、そうだ。解析結果だったね。」
DL　：と言って、携帯を君たちに返す。
熊埜御堂 亜聡：「終わってたのかよ。今の時間なんだったんだ」
熊埜御堂 亜聡：「おかえり」
ドロシー　：『……ただいま…』（げっそり）
熊埜御堂 明香：「…しゅみの時間…？」
御伽 住吉　：「そういう事！」（キリッ）
熊埜御堂 明香：「アリスちゃん、おかえりなさい！」
アリス　：「ただいま！はぁ…、殺意湧きそうになったわ…」（ボソッと）
熊埜御堂 明香：「お、おつかれさま…！」
熊埜御堂 亜聡：「……」（無言で画面の上から頭撫でてやってる）

DL　：ではそんなお２人と魔女を尻目に、住吉は結果を報告してきますね

御伽 住吉　：「深く探ってみたんだが、『ＣＳ』は children's story の略ではないようだ。」
御伽 住吉　：「プログラムの中に「Cleanest Slum's」という文字があった。意味はよくわからないが、無理やり訳すなら…最も綺麗な貧困窟……いや「最も清らかな穢れた場所」か？ いずれにせよ、よくわからないな。」
熊埜御堂 亜聡：「最も清らかな穢れた場所？」
御伽 住吉　：「あともう１つわかったことがある。このゲームは０から作ったものじゃない。何かを改変して形にしたものだ。それとよくわからない画像データが出てきた。」
御伽 住吉　：「何かの記事のようだが、なんでこんなものが隠されていたのだろう。いや、これは本当に画像デー

タなのか…？よくわからないな…。」
熊埜御堂 明香：「どんな画像なんですか？」
御伽 住吉　：「ん。これだよ」

［情報］【画像データの記事】
《怪異：オトギビト》
人の目にも映る珍しい怪異。人間を模した姿をしており、人間界に溶け込んでいる。
見た者に偽りの記憶を植え付け、矛盾や違和に対する感度も下げる。
まるで初めからそこにいたかのように振舞い、人々はその不自然に気づくことはない。言わば一種の催眠だ。
性格は悪逆無道。人々が不安や恐怖に怯える様を観察し悦ぶ。
人の霊感をある程度拡張することができ、幽世の存在を見せることで人々を狂気へと誘う。
幽世の存在への感度を下げることもできるはずだが、恐怖が薄まるのでそれをすることはない。

熊埜御堂 明香：「…オトギ、ビト？」
熊埜御堂 亜聡：「…なんだこれ」
熊埜御堂 明香：「なんか…悪い、妖怪？　みたいなもの、なのかな」
熊埜御堂 亜聡：「…ますますよくわかんなくなったな」

DL　：……さて、場面は１行動目。
　住吉から解析結果を受け取った直後です
DL　：このまま住吉に引き続き解析を依頼する場合は、２行動目に突入する扱いになりますが……、その前に何かやりたいことなどございますでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：その前に、か…。しいて言えば雁鳥ちゃんに話しかけに行くことですが、２回目の後でもできそうなのでどうしようかな…
熊埜御堂 明香：いまここで雁鳥ちゃんの方行っちゃうと、変な空気の中色々しそうな事になりそうな気がしないでもない…
熊埜御堂 亜聡：確かにｗｗｗｗ　元ア○顔先輩を置いていくのもなんかアレだし…
熊埜御堂 亜聡：このまま２回目突入しちゃいますか
熊埜御堂 明香：ですね！
DL　：了解です！

御伽 住吉　：「…で、次は何を調べてほしいんだ？」
熊埜御堂 亜聡：「あー。俺としては伝誦すかね。昨日竹取先輩から来たやつ。」
熊埜御堂 亜聡：「結局あの後もよく分かんなかったんだよな。メイ、何か分かったか？」
熊埜御堂 明香：「ううん、こっちも何にも…」
御伽 住吉　：「オーケー。この伝誦について調べればいいんだな？んじゃ……」
御伽 住吉　：「早いとこアリスちゃんかドロシーちゃんを貸してくれ！！」（はぁはぁ）

熊埜御堂 明香：「ふぇえ…」
熊埜御堂 亜聡：「なんかうまいこと超技術で 2m ぐらい離れた位置から解析できないっすか？」
御伽 住吉　：「無茶言うな！！できるか！！！！」
熊埜御堂 亜聡：「…さっき貸したスマホ、なんか手汗でべたべたしてんだよな…」 冤罪かけながら、ドロシーちゃん渡します……
御伽 住吉　：「風評被害！！『CS』を愛する俺がスマホを壊すような真似なんかするわけねーだろ！！」
熊埜御堂 明香：「じゃあもっと紳士的に接してあげてください…」
ドロシー　：『……』（すっ…）（住吉から出来るだけ離れようとしている）
御伽 住吉　：「いやごめんて！！紳士的になるから逃げようとしないで！！」
熊埜御堂 亜聡：「今日一信用できねー言葉」
御伽 住吉　：「あ～もう！キリねーからさっさと解析するぞ！！」（やけくそ）

DL　：では今回も住吉を手伝いますか？
熊埜御堂 明香：手伝います！
熊埜御堂 亜聡：手伝います…！
DL　：はーい、では〈暗号〉判定あるいは〈電脳〉判定をお願い致します！
熊埜御堂 明香：では暗号で！
熊埜御堂 亜聡：暗号でいきます！
DL　：どうぞ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈暗号〉(2DM<=7) ＞ [10, 1] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
熊埜御堂 亜聡：1DM<=7〈暗号〉(1DM<=7) ＞ [1] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

DL　：お、亜聡君 BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 亜聡：わーいありがとうございます！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：0 → 1

DL　：ではお 2 人の手伝いの甲斐あり、住吉はスムーズに解析を行っていきます

御伽 住吉　：「すごい！ドロシーちゃんしゅごいよお！まるで人と話しているみたいだ！しかも頭がいい！このゲームのことをよくわかっている！いやゲームの住人だから当たり前か？いいなぁ！ほしいなぁ！！ふんふんふん！！」
熊埜御堂 明香：「(ひゃわ…)」
熊埜御堂 亜聡：「やらねぇ」
御伽 住吉　：「ハァハァ…、もっと…。もっと君達の秘密の部分を見せてぇぇぇ！！！！」
御伽 住吉　：「うへへへへ…！！興奮し過ぎて頭がフットーしそうだよぉぉぉぉ！！！！」
熊埜御堂 亜聡：「先輩マジで明日から公共の場に出ない方がいいす」
御伽 住吉　：「お願い！！先っちょだけ！！先っちょだけでいいから！！！！もっと君たちの事を教えてぇぇぇぇぇ！！！！！」（ハァハァ…）
熊埜御堂 明香：「だ、誰か大人の男の人呼んで…！」

御伽 住吉　：「え、いや…それは困る…」
御伽 住吉　：「え～っと…、はいコレ、解析結果ね」
熊埜御堂 亜聡：「そのスッと顔が戻るやつ、一周回って腹立ってくるな…。…ん、あざっす」 受け取ります！

DL　：では住吉は輝夜の伝誦の解析結果について話し始めます

御伽 住吉　：「『あぎょうさん　さぎょうご　いかに』は有名な話だな。学校の天井に潜んでる老婆の怪異だったか。背中にしがみついて、問いかけを間違えると噛まれるとかいう。ちなみに答えは嘘だ。」
熊埜御堂 亜聡：「へぇ。「嘘」って言えば噛まれねーって？」
御伽 住吉　：「そうそう。そういう事」
熊埜御堂 明香：「怪談、なの…かな？」
熊埜御堂 亜聡：「聞いたことなかった話すね。…っつーか、なんでそんなもんあの先輩が送り付けてくるんだか」
御伽 住吉　：「あとこの文章は妙な順番で書かれたようだ。まず中央に謎の記号のようなものを書いて、そこに肉付けするように文章を作成している。」
御伽 住吉　：「そして、この伝誦を介して何かが侵入した形跡がある。ウィルス…いや、違う、なんだこれ。」（うーん…）
熊埜御堂 亜聡：「は？？？」　俺のスマホ！

DL　：そう言いながら住吉は近くにあった紙とペンで、何やら書き始めますね

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんのスマホがウイルスに…！？」
熊埜御堂 亜聡：「あの先輩出会いがしらに何送り付けてきてくれてんだ」
御伽 住吉　：「書いて説明した方がわかりやすいか…。この伝誦、こんな感じで書いてあるっぽい」

DL　：書きあがった物をお 2 人に見せてきます

熊埜御堂 亜聡：「…？？？」 謎…
熊埜御堂 明香：「…？？？　なんだろう、これ」

御伽 住吉　：「さあ？俺にも分かんねぇ…」
熊埜御堂 亜聡：「あの先輩何送り付けてきてくれてんだ…。やっぱ直接聞くか…」

熊埜御堂 亜聡：（ちなみに、変態先輩が描いてくれた図をよく見てみますが、マークに心当たりはない…ですよね？）
DL　：そうですね、ないですね
熊埜御堂 亜聡：了解です！謎…

熊埜御堂 亜聡：「……でもやっぱ、…何ていうか。普通の日記とかじゃないのは確かなんだろうな」
熊埜御堂 明香：「ね、……明日、先輩のところ行ってみよっか？」
熊埜御堂 亜聡：「あの先輩うるせーんだよな…」
熊埜御堂 明香：「でもでも、ちゃんとお話聞かないと何にもわかんないよ」
熊埜御堂 亜聡：「はー…。絶対お前もついてこいよ」
熊埜御堂 明香：「うん！」
熊埜御堂 亜聡：「よし。……んじゃ先輩。俺のスマホ。」 返して
御伽 住吉　：「ああっ、名残惜しい～……ドロシーちゃ～ん…」

DL　：そう言いつつちゃんと亜聡君にスマホを返します

熊埜御堂 亜聡：「また用事できたら明香のアリスを貸すから」
熊埜御堂 明香：「えっ！？」(スマホぎゅっ)
熊埜御堂 亜聡：「嘘だっつの」
御伽 住吉　：「え、ホント！？…ってウソかよ！！」
熊埜御堂 明香：「(ひゃわ…)」(ぷるぷる)
熊埜御堂 亜聡：「嘘じゃなかったら近づいてたのかよ。もう帰るぞメイ」
熊埜御堂 明香：「はーい！　それじゃ、えっと、……ありがとう、ございました？」
御伽 住吉　：「おう。じゃあ、またなんかあったら聞きに来いよ！アリスちゃんとドロシーちゃんが一緒ならいつでも歓迎するからな！」
熊埜御堂 明香：「やだぁ…」
熊埜御堂 亜聡：「は？明香だけだと不満なのかよ殺すぞ」（過激）
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」
御伽 住吉　：「？？？」

熊埜御堂 亜聡：あ、じゃあ離れますね…
DL　：では不思議そうな顔をしながら住吉はあなた達を見送ってくれますね

DL　：……ではまだゲーム部にいる訳ですが…、この後はどうなさいますか？
熊埜御堂 明香：じゃあ…鶴乃ちゃんと雁鳥さんのとこ、行ってみようかな…
熊埜御堂 亜聡：行ってみましょう…！
DL　：はーい、では住吉にドン引きして部室の隅っこの方に退避していた鶴乃と合流します

織畑 鶴乃　：「……用事は、もう終わったんですか…？」（おそるおそる…）
熊埜御堂 明香：「う、うん。終わったよ！」
熊埜御堂 亜聡：「いつの間にそんな隅に行ってたんだよ」
織畑 鶴乃　：「そうですか…！（ほっ…）…あ、いえ…！お邪魔になってもいけないし、ちょっとあの先輩怖かったので…、ごめんなさい…」
熊埜御堂 明香：「ううん、大丈夫だよ。…わたしも怖かったし…」
熊埜御堂 亜聡：「やっぱあの先輩やばいな」
織畑 鶴乃　：「あ、えっと！つ、次はどうします…！？」（あわあわ）
熊埜御堂 明香：「あ、うん。…あ、あのねっ」
熊埜御堂 明香：「……雁鳥さん、話しかけて…みる？」
織畑 鶴乃　：「……！」
織畑 鶴乃　：「……は、はい…！お話、してみます…！！」
熊埜御堂 亜聡：「ん」
熊埜御堂 明香：「よ、よし！　じゃあ、行ってみよ！」

熊埜御堂 明香：という事で雁鳥さんのもとへ…
DL　：了解です！

雁鳥 咲　：雁鳥は最初に見た時と変わらず、ヘッドホンを付けてパソコン画面を見ているのでこちらから声を掛けなければ気が付きません

熊埜御堂 明香：「……あ、あのっ」
雁鳥 咲　：「……？（くるっ）……っ！」
雁鳥 咲　：「……何の用ですか？」

DL　：あなた達の姿を見るなり、明らかに不機嫌になりますね

熊埜御堂 明香：「ひうう…あ、あの、昼間は…ごめんなさい、って…ええと、それで…ね」
熊埜御堂 明香：「…つ、鶴乃ちゃん」と、鶴乃ちゃんを促す感じで…

DL　：雁鳥と鶴乃を会わせる、という事でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：（じ、自分は OK です）（怖い）
熊埜御堂 明香：(お、お願いします…！)
DL　：了解です！では……

織畑 鶴乃　：「か、雁鳥さん…、そ、その…。こ、こんにちは…」（おどおど）
熊埜御堂 亜聡：「…」じーっと見てます
熊埜御堂 明香：「……」(どきどき)

DL　：鶴乃がオドオドとしながら雁鳥に話しかけます。すると……

雁鳥 咲　：「……」

DL　：一瞬の沈黙の後、雁鳥が口を開く。

雁鳥 咲　：「……ふざけるのもいい加減にして下さい！」
熊埜御堂 亜聡：「…は？」
熊埜御堂 明香：「！？」
織畑 鶴乃　：「……え？」
雁鳥 咲　：「織畑さんなんてどこにもいないじゃないですか！！悪趣味にも程があります！！」
熊埜御堂 亜聡：「……」
織畑 鶴乃　：「……！？」
熊埜御堂 亜聡：「……お前、本気で言ってるのか？」
熊埜御堂 明香：「え、…えっと？」
雁鳥 咲　：「何度も言いますが、織畑さんは怪物に喰われて死んだんですよ！！死んだ人を連れて来るなんて、不可能に決まってるじゃないですか！！」
織畑 鶴乃　：「……！」
熊埜御堂 明香：「で、でも、鶴乃ちゃんはここに、」
織畑 鶴乃　：「……死んだ…？…私が…？私が…、死んだ…？」
熊埜御堂 亜聡：「お前が話聞かないから連れてきてやったんだろ。その言い草は……、…？」
熊埜御堂 明香：「っ、鶴乃ちゃん？」

DL　：雁鳥の言葉を反芻する鶴乃の顔が、みるみるうちに青ざめていく。

織畑 鶴乃　：「……う、うぅ…」
熊埜御堂 亜聡：「……おい、大丈夫か。」

DL　：鶴乃が頭を抱え苦しげに呻き声を上げた直後、異変が起きる。
DL　：――鶴乃の体が、段々と透明に近付いていっているのだ。

熊埜御堂 明香：「――！？」
熊埜御堂 亜聡：「――――な、」
熊埜御堂 亜聡：「…おい！」 腕とか掴もうとしてみますが！？

DL　：亜聡君が腕を掴もうとしますが、すり抜けます。手応えがまるでありません

織畑 鶴乃　：「…うぅ…、う…、うわぁぁぁぁ…！！」

DL　：呻きと悲鳴が混じった叫び声を上げながら、鶴乃は部室から飛び出した。

熊埜御堂 亜聡：「っおい、織畑！！」
熊埜御堂 明香：「っ、待って！」 追いかけます…！
熊埜御堂 亜聡：「っ明香！？ああクソ、」 明香ちゃんを追いかけます！

DL　：では鶴乃を追いかけあなた達は部室から飛び出します
DL　：……しかし、どんなに探しても鶴乃は見つかりません

熊埜御堂 亜聡：「急に走るな！……あいつ、見失ったか」
熊埜御堂 明香：「うぅ～、鶴乃ちゃん……」
熊埜御堂 明香：「……なんで、あんな風に」
熊埜御堂 亜聡：「……。さっきまで普通に見えてたのに、雁鳥が叫んだ後、急に存在が薄くなったように見えた」
熊埜御堂 亜聡：「全然分からん。…あいつどうしたんだ」
熊埜御堂 明香：「……それに、雁鳥さんには見えてないみたいだった」
熊埜御堂 亜聡：「……明香。連絡先の交換してただろ。とりあえず、連絡だけしとけ。」
熊埜御堂 明香：「…う、うん」 電話かけてみたいです…！

DL　：では明香さんが電話を掛けてみますが…、一向に出る気配がありません

熊埜御堂 明香：「……うぅ～～～～」
熊埜御堂 亜聡：「いい。それで何かあったら折り返してくんだろ。十分だ。」 ぽん
熊埜御堂 明香：「でも……でもぉ」
熊埜御堂 亜聡：「お前がそんな顔すんな。……ドロシーが、」
熊埜御堂 亜聡：「これも、CS のせいだと」
熊埜御堂 明香：「…アリスちゃんは、少なくとも記憶喪失のやつは別件が起きてるみたい…って」
熊埜御堂 亜聡：「…やっぱりかみ合わねーんだな。この話は、魔女たちに聞いても分かんねーのか」
熊埜御堂 明香：「えっと、…CS のせい、っていうより…「誰か」「このゲームを作った人」のせいが正しいかも、って」
熊埜御堂 亜聡：「このゲームを作った奴？……」
熊埜御堂 明香：「…その人は、一体なにがしたいんだろう」
熊埜御堂 亜聡：「……なら次は、そいつを調べるかだな」
熊埜御堂 明香：「…うぅ、頭がぷしゅーってなっちゃいそう」
熊埜御堂 亜聡：「へばるには早ぇぞ。まだ調べ始めたばっかりだ」
熊埜御堂 亜聡：「……織畑のことも気になるんだろ？」
熊埜御堂 明香：「…うん」
熊埜御堂 明香：「助けて、あげたい」
熊埜御堂 亜聡：「ん。お前ならそーいうと思ったよ」
熊埜御堂 亜聡：「とりあえず、今日は帰るぞ。ちゃんと調べるのはまた明日からだ」
熊埜御堂 明香：「うん、…ありがとう、お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「ん」

DL　：……鶴乃を探して校内を走り回っていたので、だいぶ日が暮れて来ています。
　気付けば最終下校時刻が近づいて来ているでしょう
DL　：本日はこのまま下校しますか？
熊埜御堂 明香：下校…します！
熊埜御堂 亜聡：帰りましょう…

DL　：ではすっかり日も暮れて、薄暗くなってきた廊下を２人で並んで歩きます

熊埜御堂 亜聡：「……ちゃんと帰れるか？」
熊埜御堂 明香：「…うん、だいじょぶ」
熊埜御堂 明香：「ごめんね、心配かけちゃって。大丈夫だよ、わたしならだいじょうぶ」
熊埜御堂 亜聡：「……。お前の大丈夫は、たまに大丈夫じゃねーからな」
熊埜御堂 亜聡：「駅まで送る」
熊埜御堂 明香：「え、だ、大丈夫だよ。お兄ちゃんが帰るのがおそくなっちゃうよ」
熊埜御堂 明香：「いつもの帰り道なんだし、そんなに心配しなくたって、……」
アリス　：「……ちょっと、亜聡。私がいる事を忘れてない？」
熊埜御堂 亜聡：「その顔してる時のお前は、放っておくとあとで死ぬほど落ち込むって知ってんだよ。……あー、そういやいたな。助手。」
熊埜御堂 亜聡：「じゃあお前には、電車に乗った後の明香を頼む」
アリス　：「ええ、任せて頂戴」
熊埜御堂 明香：「も、も～～そこまで過保護にならなくたって大丈夫だってば！　ね、ドロシーちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「うるせ。俺がそうするっつってんだからお前が断んな馬鹿」
ドロシー　：『亜聡、実は結構 面倒見がいいから…』
熊埜御堂 明香：「知ってるけど！」
ドロシー　：『私も時々、頭撫でてもらってる』
熊埜御堂 亜聡：「余計なこと言うな馬鹿」
熊埜御堂 明香：「それはずるい！」
ドロシー　：『（どやぁ）』
熊埜御堂 亜聡：「うるせーなお前ら。さっさと歩けメイ。俺の帰りがもっと遅くなるだろ」
熊埜御堂 明香：「うー…！」
熊埜御堂 亜聡：「……俺がそーしたいっつってんだからやらせろ」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 明香：「…手、繋いでくれるなら、いいよ」(ぷぅ)
熊埜御堂 亜聡：「子供かよ」
熊埜御堂 明香：「みんなが甘やかすから子供になっちゃったんですー！」
ドロシー　：『あ、確かにそれは私はやってもらえない。いいなぁ…』＜手を繋ぐ
熊埜御堂 亜聡：「馬鹿か全員。……あーーーーー」
熊埜御堂 亜聡：「ほら」 手。
熊埜御堂 明香：「……ん！」ぎゅ！

アリス　：「あらあら、お兄ちゃんは大変ね」（くすくす）
熊埜御堂 亜聡：「お前も茶化すな。また今度変態先輩に売るぞ」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんそれは最低」
アリス　：「ふふっ、明香に怒られたわね～。残念でしたお兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「…うるせーうるせー」 けっ
熊埜御堂 明香：「……ふふっ」

DL　：ではそんなやり取りをしながら歩いているとですね…

DL　：――廊下を歩いていると、視界が一瞬、テレビノイズのように歪む。

熊埜御堂 亜聡：「―っ？」

DL　：砂嵐はすぐに収まった。
DL　：暗い暗い、赤い黒い。
DL　：廊下も壁も天井も血液をぶちまけたように赤い、窓の外はペンキで塗りつぶしたように黒い。
DL　：学校の廊下であって学校の廊下ではない、直感的にそう確信できる異界だった。
DL　：歩く生徒はまるで死人に見えた。常世の国を闊歩する住人のように、揺れ動く。

熊埜御堂 明香：「……お、お兄ちゃん…」
熊埜御堂 亜聡：「……なんだ？…これ…」

DL　：……ではここで、共鳴判定です

［情報］ 共鳴判定（強度3／上昇1）
∞共鳴感情：［恐怖（情念）］

熊埜御堂 亜聡：肉盾ならず…はーい…
　恐怖も情念もない…ので、通常ダイスですね…
熊埜御堂 明香：ふぇえ…情念あります…
DL　：そうですね、明香さんはダイスの数＋1 になります…
熊埜御堂 亜聡：では振ります…！
DL　：どうぞ…！

熊埜御堂 亜聡：2DM<=3〈∞共鳴〉(2DM<=3) ＞ [2, 4] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
熊埜御堂 明香：(4+1)DM<=3 共鳴判定（ルーツ属性一致） (5DM<=3) ＞ [4, 5, 9, 7, 9] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：2 → 3

DL　：ではその後すぐに視界は切り替わり、正常な世界へと帰還する。

熊埜御堂 明香：「あ、っ……」(ほっ)
熊埜御堂 亜聡：「……っ……」 繋いでた手に思わずぎゅっと力が入っちゃった感じ…
熊埜御堂 亜聡：「……戻った、のか」
熊埜御堂 明香：「み、みたい…だね？　……お兄ちゃん？」
熊埜御堂 亜聡：「……なんでもない。平気か？メイ。」
ドロシー　：『……2 人とも、大丈夫？』
熊埜御堂 明香：「…うん、大丈夫。手、繋いでたから」
熊埜御堂 明香：「ありがとう、ドロシーちゃん。だいじょうぶだよ！」
熊埜御堂 亜聡：「ん。明香が大丈夫ならいい」
ドロシー　：『よかった……』
熊埜御堂 明香：「でも、今のは一体…ドロシーちゃん、アリスちゃん、わかる？」
アリス　：「……怪異は怪異を呼び寄せる…」
熊埜御堂 明香：「え？」
アリス　：「貴方達が思っている以上に、この学校内には怪異と言える存在が集まってきている、という事よ」
熊埜御堂 明香：「はわ…」
熊埜御堂 亜聡：「……またあんなのに出くわす可能性があるってことか？」
アリス　：「そうなるわね」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「そんな…」
熊埜御堂 亜聡：「…帰るぞ、明香。…明日も、ちゃんと起こせよ」
熊埜御堂 明香：「……うん。…ちゃんと起きてね」
熊埜御堂 亜聡：「起きるまで鳴らせ」
熊埜御堂 明香：「もー」

DL　：ではこの後 帰り道でやりたい事とかございますでしょうか？（無ければ自宅での個別パートに進みます）
熊埜御堂 明香：お兄ちゃん、コンビニ寄ろ…
熊埜御堂 亜聡：コンビニで甘いもの買おう…！
DL　：OK です！（ちゃらららら～ん、ちゃらららら～）

熊埜御堂 亜聡：「俺もアイス買うか」
熊埜御堂 明香：「あ、パピコ半分こする？」
熊埜御堂 亜聡：「小学生か」
熊埜御堂 亜聡：「あとこの年でそれやったら完全にバカップルだぞ」
熊埜御堂 明香：「えー、いや？」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……ホワイトサワー味な」
熊埜御堂 明香：「うん！」
熊埜御堂 亜聡：「まぁそれはそれとして自分のピノは買うけどな」

熊埜御堂 明香：「アイス食べ過ぎるとお腹壊しちゃうよー？」
ドロシー　：『食べ過ぎるとおなか壊すよ…』
熊埜御堂 亜聡：「俺ぐらいになるとそんなことで腹壊さねーもんなんだよ」
熊埜御堂 明香：「でも 2 票入ったから今日は控えてね」
アリス　：「こらこら、妹たちにお腹の心配させちゃダメでしょお兄ちゃん～？」
熊埜御堂 亜聡：「3 票になってんじゃねーよ」
熊埜御堂 亜聡：（めっちゃ渋い顔しながらピノは戻すおにいちゃん）
熊埜御堂 明香：「ふふふ」
アリス　：「ふふふ」
ドロシー　：『……（くすっ）』
熊埜御堂 亜聡：「こいつら……」

DL　：ではその後は特に何事もなく、無事に家に帰れます
熊埜御堂 亜聡：２人並んでパピコをちゅーっとしながら帰ります！
熊埜御堂 明香：ちゅー
DL　：では無事に帰宅！……という事で
DL　：ここから個別パートに入ってもよろしいでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：大丈夫です！
熊埜御堂 明香：OK です！

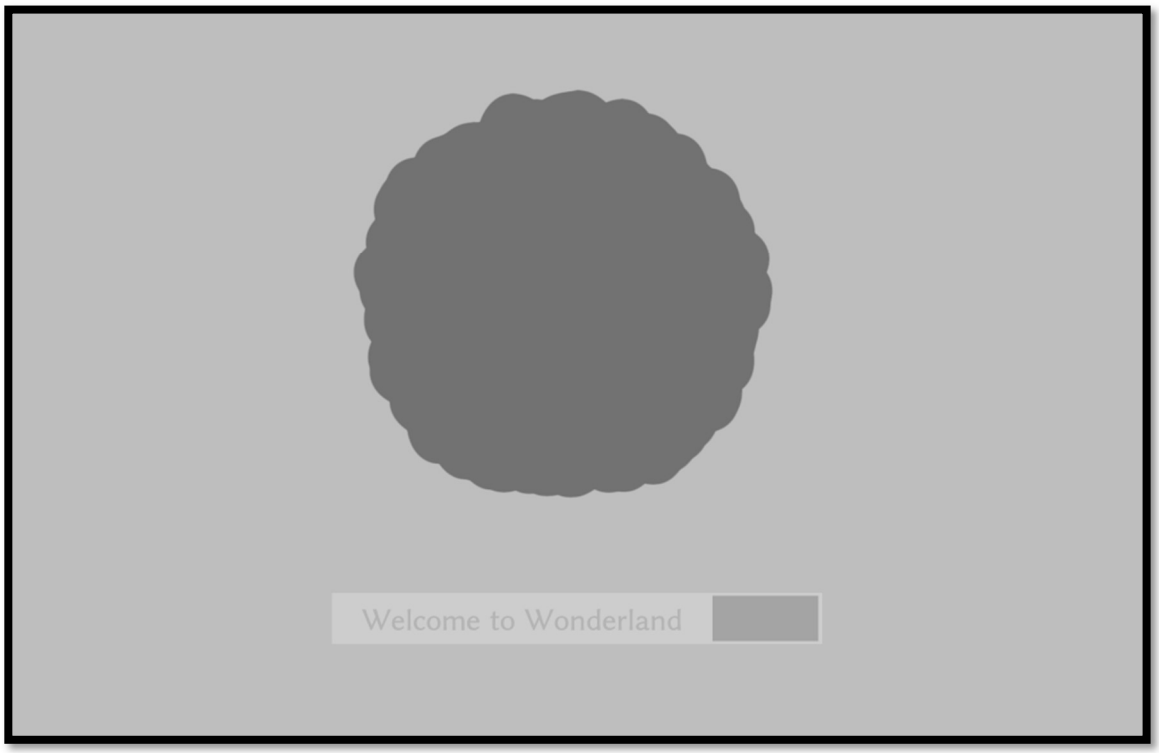
DL　：はーい、ではまず明香さんお願い致します！
亜聡君は少々お待ち下さいませ～！
熊埜御堂 亜聡：（はーい！）
熊埜御堂 明香：(はーい)

DL　：…では亜聡君と別れ、無事に帰宅した明香さん。いつもの見慣れた自室があなたを迎えます
熊埜御堂 明香：ご飯食べてお風呂入って、そしたらベッドにぼすん、ですかね…色々あったから…
DL　：ではベッドにぽすん、として少し間を開けてから、アリスが声を掛けてきます

アリス　：「…ねぇ明香。貴女はこの事件、根本の原因は何だと思ってる？」
熊埜御堂 明香：「根本の原因……うーん」
熊埜御堂 明香：「…まだよくわかんない、けど…でも、やっぱり CS が何かを繋げてるのかなぁ…って思う、かな」
アリス　：「そう……」
アリス　：「……私はそれが怪異だと思ってるわ。」
熊埜御堂 明香：「…怪異、が悪さをしてるってこと？」
アリス　：「そういう事ね。……ねぇ、明香」
熊埜御堂 明香：「なぁに？」
アリス　：「事件を解決するには怪異を退治しなければならない。もしそうなった時、怪異をどうにかする術があったとしたら…ほしい？」

熊埜御堂 明香：「……え！？」
熊埜御堂 明香：「あ、あるの！？」
アリス　：「……ええ、あるわ。」

DL　：アリスがそう言った途端、画面が突然切り替わる。



DL　：真っ青な背景の中央に大きな黒い円が描かれ、そこに入力ボックスだけが存在している。
DL　：入力ボックスには『Welcome to Wonderland』というプレースホルダー、薄いグレーの案内文字が表示されている。

熊埜御堂 明香：「わ、わ、…え、なに、これ？」
アリス　：「『ラビットホール』…これが私に与えられた力。怪異をＣＳに封印することができる兎穴。」
アリス　：「入力ボックスに対象の、怪異としての名前を入れて、次に表示されるＯＫボタンを押すだけ。でもこれは封印したい怪異が目の前にいないと使えない。携帯をしっかりと対象に向ける必要があるわ。」
アリス　：「名前と対象がともに正しい場合、背景が赤くなるはずよ。あとは出てきた OK ボタンを押すと起動できる。ただし、起動は一度が限界だから慎重にね。」
熊埜御堂 明香：「へー、そうなんだ…って、なんでアリスちゃんがこんなものを？」
アリス　：「『CS』に搭載されてたプラグイン機能なのだけど、あのままでは使えなかったからね…。ちょっと、"彼"の力を貸してもらったのよ」
熊埜御堂 明香：「彼？」
アリス　：「……あの変た…、いえ…、ゲーム部の彼にね！」（にっこり）
熊埜御堂 明香：「あ、……い、今はわたししかいないから、思いっきり文句言ってもらっても、全然…うん」
アリス　：「あら、そう？じゃあ遠慮なく……」

アリス　：「……昼間 あの変態に話しかけてのはこの件で相談してたのよ。明香が自分で『ラビットホール』を使えるように、設定を変えてもらったの」
熊埜御堂 明香：「わたしが、自分で…」
アリス　：「…まぁ、あの変態は何をやらされてるのかわかってないみたいだったけど」
熊埜御堂 明香：「そ、そうなんだ……つまり、その」
熊埜御堂 明香：「いつか、これを使わないいけない時が来る…ってこと？」
アリス　：「……そうね。きっとそうなると思うわ」
熊埜御堂 明香：「そっか、……」
熊埜御堂 明香：「その、…これがあれば、鶴乃ちゃんのこと、助けてあげられるのかなぁ」
アリス　：「そこまではわからないわね。その時、貴女がどう判断するかにもよると思うわ」
アリス　：「…人は正体不明のモノを怖がるわ。しかし、未知を恐れるとともに、興味も惹かれる。だから人は不可思議の現象を科学の力で暴き続けている。」
アリス　：「それでも知りえないコトには名前をつけるの。わからないものを、わかったように錯覚するために。わからないものを魅力的な存在にするために。そうすることでそれは真の正体不明ではなくなる。だから名前っていうのはとっても大事ってわけ。」
熊埜御堂 明香：「なるほど…パパが言ってた気がする。妖怪って存在は、不思議な現象に名前と姿を与えることで恐怖を和らげるために生み出されたんだって。つまりはそういうこと…なのかな？」
アリス　：「あら、お父様 よくご存知なのね。その通りよ！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、物知りで、でもそれ以上に楽しくて愉快なパパなんだよ！」
熊埜御堂 明香：「うん、でも……わかったよアリスちゃん」
熊埜御堂 明香：「ありがとう、大変だった筈なのに頑張ってくれて。……いつか使う時が来るかもしれない、っていうなら…わたしは、これを大事な人達を守る為に使いたいな。いい？」
アリス　：「ええ、勿論。最終的にこのボックスに誰の、何の名前を入力するかは貴女自身が決めて、明香」
熊埜御堂 明香：「……あ、この事ってお兄ちゃんにも教えておいても、いい？」
アリス　：「ええ。亜聡も巻き込んで、しっかり悩むと良いわ」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、わたしが危なさそうなことしようとするとものすごく気にするから…うん、ありがとうアリスちゃん！」

DL　：ではこれ以降、明香さんの『CS』メイン画面には『兎穴』と書かれたアイコンが増えます

熊埜御堂 明香：「……誤タップしないように気を付けよう…」
アリス　：「ふふっ、入力ボックスに名前を入れなきゃ発動しないから心配しなくても大丈夫よ」
熊埜御堂 明香：「そ、そっか」
アリス　：「それに、怪異の名前を知っていないと使えないからね。名前をちゃんと調べておく必要があるわ」
熊埜御堂 明香：「しらべ……お、お兄ちゃんに手伝ってもらっても？」
アリス　：「そうしなさい。「亜聡も巻き込んでいい」と言ったでしょう？」
熊埜御堂 明香：「うん！　あ、じゃあお兄ちゃんに連絡しとかないと…」

DL　：さて、他にアリスに聞きたい事などございますでしょうか？（無ければ亜聡君パートへ移ります）
熊埜御堂 明香：とりあえずは大丈夫…です！

DL　：了解です！では明香さんパートは一旦ここまでとさせて頂きます
熊埜御堂 明香：はーい！
DL　：明香さんお疲れ様でした！

DL　：……さて、今回は亜聡君パートからスタートです。……と、その前に……
DL　：亜聡君、例の汚部屋判定の時間です
熊埜御堂 亜聡：はーいｗｗ
DL　：＜＊生存＞で判定お願い致します！
熊埜御堂 亜聡：いきます…！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊生存〉(1DM<=3) ＞ [1] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 亜聡：…！？
DL　：？？？？？
DL　：で、では亜聡君 BD1 つどうぞ…！
熊埜御堂 亜聡：ぴっかぴか…！ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：1 → 2

DL　：では亜聡君のお部屋は明香さんが片づけてくれた時よりも何故か更に綺麗になってます

熊埜御堂 亜聡：「絶対今日は乗り込んでくると思ったんだがな」
熊埜御堂 亜聡：「勘が外れたか……掃除損。」
ドロシー　：『お部屋、自分で綺麗に出来てえらいよ亜聡…』（ぱちぱち）
熊埜御堂 亜聡：「…小学生の褒められ方かよ」 ひねくれつつ。パピコの殻をゴミ箱へシュート
熊埜御堂 亜聡：「あいつが来たとき、大体大騒ぎされるからな…。」
ドロシー　：『……そんなにひどいの…？』（まだ汚部屋を見ていない）
熊埜御堂 亜聡：「そうでもねーぞ」（亜聡基準では）
ドロシー　：『そうなんだ…』（ほっ）

ドロシー　：『……ねえ、亜聡…』
熊埜御堂 亜聡：「んあ？」（バリッ）　（ぽてち）
ドロシー　：『あなたはこの事件、何が悪いと思う…？』
熊埜御堂 亜聡：「は？…何が、って。」
熊埜御堂 亜聡：「お前は、CS が悪いと思ってんだろ」
ドロシー　：『うん。私は『CS』だと考えてる。『CS』に何か魔術的な力があったとすると、力の供給源を絶てば機能を失うと思う。それが何なのかはわからないけど。』
熊埜御堂 亜聡：「……今日一日調べて、なんか証拠は見つかったか？ドロシー。」 ベッドにごろん
ドロシー　：『……それはまだ。でも……』

ドロシー　：『…亜聡はもし、原因が怪異でなかったとしたら、怪異を許す？彼らが何を考えているのか…会って、話をしたいと思う？』

熊埜御堂 亜聡：「、……は？」

熊埜御堂 亜聡 ：「……。お前、急に語調が変わったな。CS が悪いっていうのは推測の域だが、怪異が原因じゃないってことは、確信か？」

ドロシー　：『……それもまだだけど…。でも、怪異だって理由なく人を害したりはしない』

ドロシー　：『…私は怪異と接触する方法を知ってる。怪異を目の前にすれば、私が彼らの意思を代弁できる。』

熊埜御堂 亜聡：「…怪異の意思を代弁？」

ドロシー　：『（こくり）』

熊埜御堂 亜聡：「…どういうことだ？詳しく聞かせろよ」

ドロシー　：『……特定の怪異をＣＳの中に呼び出そうとすれば、あなたはその怪異と接続することで、幽世の世界を見ることができる。この力の発現を『幽世（かくりよ）の目』と呼ぶことにする。』

ドロシー　：『これを起動すれば、本来なら見ることのできない…いや、見えるべきではない者を視野に収めることができる ようになる。』

熊埜御堂 亜聡：「…へぇ…。俺たち人の世界とは、別の世界が見える…ってことか」

ドロシー　：『うん。…でも、少し嫌な予感がする。アップデートされた機能として、この感覚も伝播してしまうかもしれない。』

ドロシー　：『『ＣＳ』をしている学校の生徒全員にその風景を見せる可能性がある。そんなことがもし起こったら、この現世はパニックになる。だから、人が寝静まる夜に起動したほうがいいと思う。』

熊埜御堂 亜聡：「うわ。確かにそれは…やべーだろうな」（さっきの真っ赤な光景を思い出しながら）

ドロシー　：『あと感覚はなるべく早く閉じる。多分３０分もすれば、あなたは正気を保てなくなる。』

ドロシー　：『…これは最後の手段。２回目の起動はできない。だから、その間に見極めてほしい　…何が正しくて、何が間違っているのかを。』

熊埜御堂 亜聡：「…最後の手段、ね。起動は１度きり、１度きりだけ、お前が言う怪異とやらの世界が見える」

熊埜御堂 亜聡：「それは、お前に頼めば、起動してくれるってことか？」

ドロシー　：『特定の怪異を呼び出すおまじないを行うで実行できる。だから、呼び出したい時はおまじないを実行する必要がある』

熊埜御堂 亜聡：「おまじないって？」

ドロシー　：『それは調べないとまだわからない…』（ふるふる）

熊埜御堂 亜聡：「わかんねーのかよ。…お前自身の力じゃないのか、これは」

ドロシー　：『とにかく、呼び出したい怪異のおまじないを知っている必要があるって事』

熊埜御堂 亜聡：「へーへー。特定の怪異を呼び出すおまじない、…ね。オカルトっぽい話になってきたな」

熊埜御堂 亜聡：「……。さっきの質問。怪異が何を考えてて、会話したいと思うか、ってやつ」

熊埜御堂 亜聡：「この方法で、怪異と会話できる…いや、そこまではいかなくても。怪異とやらが何を考えているのかが分かる糸口として、お前はこれを俺に教えたんだな？」

ドロシー　：『うん』（こくり）

熊埜御堂 亜聡：「じゃあ逆に聞くが。お前は分かり合ってほしいのか？」

ドロシー　：『…人間同士だって、話し合わないと相手が何を考えているのかなんてわからない。相手が怪異でも、それは変わらないんじゃないかと、思ったから…』

熊埜御堂 亜聡 ：「話が通じる相手かもわからねーのに。……変態先輩の掘り出した情報には、少なくとも話が

通じそうには書いてなかった」
熊埜御堂 亜聡：「……ただ、まぁ。覚えておく。お前が意味もなく話すとも思えねーしな」
ドロシー　：『うん。それでいいよ』（こくり）
熊埜御堂 亜聡：「おう。…ま、これも何かしらの信頼かなにかだろ。たぶん」
ドロシー　：『……亜聡』
熊埜御堂 亜聡：「ああ、でもこいつも明香に話してーな……あ？」
ドロシー　：『……最後まで、話を聞いてくれてありがとう』
熊埜御堂 亜聡：「……。お前は話が通じるからな。聞けるなら聞くさ。」
ドロシー　：『ん…』（ふふっ）
熊埜御堂 亜聡：「ああ、それとだ。この機能は、使うと近くの奴にも伝播するんだろ？なら、もう片割れにも話していいだろ、これ。」
ドロシー　：『うん。明香にも、ちゃんと伝えておいた方がいいと思う』
熊埜御堂 亜聡：「ん。わかった」

熊埜御堂 亜聡：（聞きたいのはこれくらい？ですかね…）（明香ちゃんに共有するために電話もしたいです）
DL　：了解です！ではここで、ラビットホール』と、ドロシーの『幽世の目』についての説明を情報タブに纏めて貼り付けます

［情報］【アリスの『ラビットホール』】
＜概要＞
怪異をCSに封印することができる兎穴。
＜使い方＞
①入力ボックスに対象の「怪異としての名前」を入れて、次に表示される「OKボタン」を押す。
②「名前」と「対象」がともに正しい場合、背景が赤くなる。
③出てきた「OK ボタン」を押すと起動できる。
＜注意点＞
・封印したい怪異が目の前にいないと使えない。
・携帯をしっかりと対象に向ける必要がある。
・起動は一度が限界。

［情報］【ドロシーの『幽世の目』】
＜概要＞
特定の怪異と接続することで、幽世の世界を見ることができる。
＜使い方＞
特定の怪異を呼び出すおまじないを行うで実行できる。
＜注意点＞
・感覚が周囲に伝播する為、人が寝静まる夜に起動したほうが良い。
・正気を保ったまま使えるのは「30 分」。
・2回目の起動はできない。

DL　：では亜聡君、明香さんに電話を掛けますか？
熊埜御堂 亜聡：かけ…ます！
DL　：はーい、では明香さんもメインタブへどうぞ！（大変お待たせ致しました！）
熊埜御堂 明香：はーい！

熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「おー。出るの早かったな」
熊埜御堂 明香：「うん、あのねちょっと話したいことがあって…」
熊埜御堂 亜聡：「、…？…おう。」聞く姿勢
熊埜御堂 明香：「えっと、じつはねさっきアリスちゃんが…」 とかくしかでラビットホールの事を説明します！
熊埜御堂 亜聡：「…アリスが？怪異を封印？」
熊埜御堂 明香：「うん、でも一回しか使えないから慎重にねって」
熊埜御堂 亜聡：「そういうことか。……」
熊埜御堂 亜聡：「一つの防衛手段としてメイに教えたのか、何か封印してほしい奴がいるのか、どっちなんだろうな…。…ところで」
熊埜御堂 亜聡：「こっちはこっちで、怪異と和解せよとのことだぞ」（ということで、こちらも共有）
熊埜御堂 明香：「へ？」
熊埜御堂 亜聡：「人間話せばわかる、…のノリで、怪異も話せば分かる……かも」
熊埜御堂 亜聡：「だと」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 明香：「…お話ができるの！？」
熊埜御堂 亜聡：「らしいぞ」
熊埜御堂 明香：「できるんだ…」
熊埜御堂 明香：「えっ、えっ、じゃあいい怪異もいるかもしれないってこと？」
熊埜御堂 亜聡：「……ってことが、言いたかったんだと思う。」
熊埜御堂 明香：「なるほど…じゃあ、お話できるんなら間違えてラビットホールで封印する心配はない、ってことだよね！」
熊埜御堂 亜聡：「間違えて？」
熊埜御堂 亜聡：「あー。だが、アリスははっきり「事件を解決するには怪異を退治しなければならない」って言ったんだろ。」
熊埜御堂 明香：「うん、でも…やっぱり、何も聞かずに封印で終わりじゃ、……後味、よくないよ。きっと」
熊埜御堂 亜聡：「……はぁ。お前らしいな」
熊埜御堂 明香：「えへへ、…でもね」
熊埜御堂 明香 ：「わたし、信じたいって思うあまりに深く考えなかったり、思いこんだりしちゃうかもしれないから、…そういう時はお兄ちゃんに言ってほしいな」
熊埜御堂 亜聡：「……。……んなの」
熊埜御堂 亜聡：「いつものことだろ」 ちょっと優しい声
熊埜御堂 明香：「…えへへ」
熊埜御堂 亜聡：「……逆に、俺に見えてねーもんがあるときは、いつもお前が気づいて俺の袖を引っ張るだろ」
熊埜御堂 亜聡：「それでいいんじゃねーか。今回も。…なんとかなるだろ」

熊埜御堂 明香：「……うん！」
熊埜御堂 亜聡：「とりあえず。そういう話があったってことはお前にも言っとかねーってなって電話しただけだ。なんつーか、これ使うと正気が削れるらしいし」
熊埜御堂 明香：「……えっ！！？」
熊埜御堂 明香：「だ、だめだめ！　そんな危ないの使っちゃだめだよ！！」
熊埜御堂 亜聡：「じゃあ怪異との対話チャンスは無しでいいか？」
熊埜御堂 明香：「う、……うう～～～～～～」
熊埜御堂 明香：「……絶対、無茶しないでね」
熊埜御堂 亜聡：「は、誰に言ってんだか」
熊埜御堂 亜聡：「お前の方こそ、パニクってぶっ倒れるなよ」
熊埜御堂 明香：「だ、大丈夫だもん！」
熊埜御堂 亜聡：「本当かよ。お前びっくり系クソ弱いだろうが。忘れもしねーぞ小学校の時」
熊埜御堂 明香：「わー！　なんで今その話するの！　アリスちゃんとドロシーちゃんが聞いてたらどうするの！」
熊埜御堂 亜聡：「うるっせ。耳元で騒ぐな」
アリス　：「あら残念、聞こえてるわよ？」（くすくす）
熊埜御堂 明香：「うわーん！」
熊埜御堂 亜聡：「あーあ」しれっ
熊埜御堂 明香：「うぅ…そ、それにあれはクラスのみんなが話題にしてたから…だからわたしも見なきゃって、なっただけだし…」
ドロシー　：『大丈夫…。苦手な物があるのは当たり前のことだから…』
熊埜御堂 亜聡：「慰められてるぞ、メイ」
熊埜御堂 明香：「プライドの問題なの！」

DL　：（他に何か話しておきたい事などございますでしょうか？）（なければシーンを進めさせて頂きます）
熊埜御堂 亜聡：（おそらく大丈夫…です…！）
熊埜御堂 明香：(こちらは大丈夫…です！)

熊埜御堂 明香：「も、もうきるからね！　もう変な事言わないでね！　…おやすみ！」
熊埜御堂 亜聡：「はいはい。おやすみ」

DL　：では通話は切れました。
寝るまでの間にやっておきたい事とかはございますか？
熊埜御堂 明香：あ、鶴乃ちゃんに連絡…できますかね？
DL　：OK です！通話にしますか？ニャインでいきます？
熊埜御堂 明香：ニャインした後に通話…は可能でしょうか？
DL　：OK です！ではメッセージを送った後 結果を描写いたします
熊埜御堂 明香：とりあえず「こんばんは、あれから大丈夫？」みたいな感じに…さぐりさぐりで
DL　：はーい、了解です！
DL　：ではいつまで待っても既読が付く気配はありませんね
熊埜御堂 明香：「にゃーん…」 悲しい。では電話かけます…！

DL ：電話もずっと呼び出し中のまま出る気配がありませんね

熊埜御堂 明香：「…うぅ」 悲しい…

熊埜御堂 明香 ： 悲しいのでお兄ちゃんに「鶴乃ちゃん、電話でない…既読もつかない…」って送っておきます…(とりあえずは以上で)
DL ：OK です！亜聡君にはちゃんと送れるし既読も付きます
熊埜御堂 亜聡 :めちゃブサイクな「どんまい」スタンプ返しておきます

熊埜御堂 明香：「……」(某ゲームのいらすとや風「りょうかい」スタンプで圧をかけておきます)
熊埜御堂 亜聡：「…うわ」 ってつぶやいてから、おやすみスタンプでごまかしつつスマホをベッド脇にぽーい
熊埜御堂 明香：「…むー！！」 足をばたばたさせてからふて寝します。お兄ちゃんのばーか！

DL ：（なかよしｗ）
DL ：ではお 2 人とも、他にやりたいことがなければ就寝となりますがいかがでしょうか？
熊埜御堂 明香：寝ます！
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃんに怒られないように
熊埜御堂 亜聡：あ…、そうだ。すみません一つだけ
DL ：おっと、はーい？
熊埜御堂 亜聡：寝る前に試しに、伝誦ボタンを押してみてもいいでしょうか？
何も起きないかもしれないけど、押さずに 1 日を終えるのももったいない…
DL ：OK です！じゃあそうですね…
DL ：半径 10m以内に CS ユーザーがいるか、＜幸運＞で判定してみましょう
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！やってみます！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊幸運〉(1DM<=3) ＞ [7] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：ｽﾝ…
DL ：残念…誰とも繋がりませんでしたね…
熊埜御堂 明香：あ、自分も伝誦試してみてもよろしいでしょうか…？
DL ：いいですよ！では明香さんも＜幸運＞どうぞ！

熊埜御堂 明香：1DM<=2〈＊幸運〉(1DM<=2) ＞ [9] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 明香：かなしみ
DL ：ロンリネスでしたね…
熊埜御堂 亜聡：…おやすみ！
熊埜御堂 明香：おやすみなさい！
DL ：はーいｗｗ

▼水曜日　―――３日目

DL　：……では夜が明けて３日目。今日は水曜日です
DL　：では早速ですが…、今日もいつも通り学校へ向かいますか？
熊埜御堂 明香：お兄ちゃんに電話してから向かいます！
熊埜御堂 亜聡：（…寝坊判定…あっ）（さすメイ）
DL　：はーい！ｗｗ

熊埜御堂 明香：「……」 prrrr

DL　：（寝坊判定もします…？）
熊埜御堂 亜聡：（いいですか…ｗｗ）（すみませんｗｗｗ）
DL　：どうぞ！ｗ

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊幸運〉(1DM<=3) ＞ [7] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：「（すやぁ）」
DL　：ｽﾔｧ…

熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 明香：ニャインでドロシーちゃん宛てに「おこして」って送りたいのですが、可能でしょうか
DL　：（いいですよ！）＜明香さん

ドロシー　：『……亜聡。電話。多分明香からだよ…』
ドロシー　：『……？明香から…。…『おこして』…』（う～ん…）
熊埜御堂 亜聡：「zzz」
熊埜御堂 明香：『なにしてもいいよ！』
ドロシー　：『……わかった』

DL　：ではその直後、亜聡君のスマホから災害速報のアラート音が大音量で流れます

熊埜御堂 亜聡：「！！！？！？！？！？」
熊埜御堂 亜聡：「な、な！！？　は！？！？」
熊埜御堂 亜聡：「……。……ドロシー」
ドロシー　：『おはよう』
熊埜御堂 亜聡：「……。」
熊埜御堂 亜聡：「……おはよう」 めちゃくちゃ渋い顔しながら、準備して家出ます…

DL　：はーい、では無事に登校できましたね！

熊埜御堂 明香：教室に入ったらお兄ちゃんが不機嫌そうな顔してるんだ…

熊埜御堂 亜聡：「……はよ」（明香ちゃんに）
熊埜御堂 明香：「あれっ、お兄ちゃん！？　珍しいね、起きれたの？」
熊埜御堂 亜聡：「俺の部屋だけ大地震予報起こったからな」
熊埜御堂 明香：「？」
熊埜御堂 亜聡：（むすー）
ドロシー　：『（どやぁ）』
熊埜御堂 明香：「よくわかんないけど、ドロシーちゃんが凄い事やったんだね！」
熊埜御堂 亜聡：「とりあえず明日は明香が 100 回電話してからにしてくれ」
熊埜御堂 明香：「甘えちゃダメだよお兄ちゃん」
アリス　：「そんな事してたら明香まで遅刻するわ」
熊埜御堂 亜聡：「けっ…」
熊埜御堂 明香：「えへへ」

熊埜御堂 明香：このタイミングでちょっと日記書こうかな…
熊埜御堂 亜聡：お、では亜聡も…
DL　：OK です！日記表振りますか？
熊埜御堂 明香：振ります！
熊埜御堂 亜聡：振ります！
DL　：はーい、では 1ｄ10 どうぞ！

熊埜御堂 明香：1d10 (1D10) ＞ 4
熊埜御堂 亜聡：1d10 (1D10) ＞ 5

［情報］【明香さんの日記】
（水曜日）
4：家の前で知らないおじさんがドラミングしてた！　今日はいいことありそう！

［情報］【亜聡君の日記】
（水曜日）
5：下駄箱にラブレターが入ってた！　よく見たら木村宛だった～！木村は真下の段～！！

熊埜御堂 明香：「そういえばね、今朝お寺の敷地内で知らないおじさんがドラミングしてたの」
熊埜御堂 亜聡：「そいつ昨日のおっさんじゃね」
熊埜御堂 明香：「そうなのかなー、「あっ」って思った瞬間に戦車のおばあちゃんが来て連行していったから…」
熊埜御堂 亜聡：「天築に行ったのが運の尽きだよな……」
熊埜御堂 亜聡：「…そういえば明香。この手紙、木村に渡しておいてくれ」 すっ

熊埜御堂 明香：「木村くん？　いいけど、なにこれ？」
熊埜御堂 亜聡：「俺からだっつっとけ」
熊埜御堂 亜聡：「いいから。中は見るなよ」
熊埜御堂 明香：「？　わかった、じゃあ渡してくるねっ。　…おーい、木村くーん！」
木村　：「？何～、明香ちゃんどしたの～？」
熊埜御堂 明香：「あのね、これ…」

熊埜御堂 明香：つ💗

木村　：「ん？手紙…？……はっ、ま、まさか…！？」
熊埜御堂 明香：「うん、これ…お兄ちゃんから！」
木村　：「……は？？？？？」
熊埜御堂 亜聡：「（よぅ）（って顔）」
熊埜御堂 明香：「じゃあ、渡したからね～」(ばいばーい)
木村　：「え…、えええええええ！？」
熊埜御堂 亜聡：「最高」
熊埜御堂 明香：「なにが？」
熊埜御堂 亜聡：「いいや？何でも」
熊埜御堂 明香：「？」

DL　：では呆然としている木村をよそに、始業のチャイムが鳴ります…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：では時間は流れて昼休み、自由行動の時間です
DL　：本日はどのように昼休みの探索を行いますか？（宣言前に相談も OK です）

熊埜御堂 亜聡：どうしようか…行きたいところあります…？
熊埜御堂 明香：そうですねぇ…
DL　：（悩んでいるなら、魔女達に相談するのもアリですよ）
熊埜御堂 亜聡：（なるほど…）（声かけてみようかな…）

［秘匿（明香＆アリス）］
熊埜御堂 明香：「…アリスちゃん、気になる場所ある？」
アリス　：「そうね…。……そもそもなんだけど、織畑 鶴乃はきちんと自宅に帰ってきているのかしら？」
熊埜御堂 明香：「え？」

アリス　：「担任の教師なら、彼女の自宅も知っているでしょうし聞いてみるのはどうかしら？」
熊埜御堂　明香　：「B 組の先生に、ってこと？　なるほど…なら職員室、かな？　…B 組の教室はちょっと行きにくい…し」
アリス　：「ああ…、昨日の…そうね…。また刺激しかねないものね…」
熊埜御堂　明香　：「……うん」

［秘匿（亜聡＆ドロシー）］
熊埜御堂　亜聡　：「っつーわけで（？）、どっか調べたい場所あるか？」
ドロシー　：『…亜聡、昨日　「行方不明者出てないか」って気にしてたよね？』
熊埜御堂　亜聡　：「あぁ、してたな」
熊埜御堂　亜聡　：「…職員室にでも行くか？」
ドロシー　：『（こくり…）…教師なら、何か知ってるかもしれない』
熊埜御堂　亜聡　：「教師か…。…」（だいたい大人に嫌われるタイプ）
熊埜御堂　亜聡　：「…しゃーねぇ。行くか」

熊埜御堂　亜聡：「……織畑みてーのが、他にもいるかもしれない。その辺を聞きこむのなら、職員室がいいんじゃねーか。」
熊埜御堂　亜聡：「って、話が出てる。今。」
熊埜御堂　明香：「あ、こっちもね、鶴乃ちゃんのお家の住所聞きたいねって。…鶴乃ちゃん、本当に家に帰れてるのかなって」
熊埜御堂　亜聡：「住所な。どっちにしても聞くとしたら教師か友達……いや、友達いねーんだったわあいつ」
熊埜御堂　明香：「いるよ！　わたし達が！」
熊埜御堂　亜聡：「おーおー、そーだったな。」
熊埜御堂　亜聡：「で、職員室だが。俺ぁ教師にそれなりに嫌われてるから明香頼んだ」
熊埜御堂　明香：「もー、自覚があるんだったらもうちょっと真面目に授業受けなきゃダメだよ？」
熊埜御堂　明香：「ほら、職員室行こ！」
熊埜御堂　亜聡：「めんどくせー。…はいはい」

DL　：では行き先は職員室、でよろしいでしょうか？
熊埜御堂　亜聡：OK です！
熊埜御堂　明香：はーい！
DL　：はーい！
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：ではお 2 人が職員室に向かうと、1A の担任が出迎えてくれます

1A 担任　：「ん～？熊埜御堂ブラザーズじゃん。揃って来るなんて珍し～」

DL　：彼女はオカルト研究部の顧問で共鳴者の教室、1 A の担任。やる気のないことで有名な適当教師。しかし、生徒たちからの人気は高い。
DL　：（あと暇さえあれば婚活ばっかりやってます）

熊埜御堂 明香：「先生、こんにちは！　あの、ちょっと聞きたいことがあって…1B の担任の先生って今いますか？」
1A 担任　：「ああ、あそこにいるよ。…1B のせんせー！ウチのクラスの子達が用事ありますって～！」

DL　：では呼ばれてきた 1B の担任は首にギプスを付けてます。またテニスでむち打ちになったそうです

1B 担任　：「ああ、君達か？どうしたんだ？」
熊埜御堂 明香：「せ、先生、首大丈夫ですか…？　あ、えっと…1B に織畑 鶴乃さんって子がいると思うんですけど」
熊埜御堂 明香：「その子の住所って、教えてもらませんか？」
1B 担任　：「ああ、全治 2 週間だが大丈夫だ……。……織畑さんか……」 鶴乃の名前が出た途端、渋い顔になりますね
熊埜御堂 亜聡：「（それ大丈夫じゃなくね）」

DL　：ではここで、＜＊交渉＞判定をお願いします
熊埜御堂 明香：はーい
熊埜御堂 明香：あ、DB 使っていいですか…？
DL　：いいですよ！
熊埜御堂 明香：ありがとうございます！
熊埜御堂 亜聡：（振るだけ振ります…！）
DL　：はーい亜聡君もどうぞ！

system：[熊埜御堂 明香] DB：1 → 0

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊交渉〉(1DM<=3) ＞ [1] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!
熊埜御堂 明香：2DM<=6〈＊交渉〉(2DM<=6) ＞ [5, 10] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：？？？？
熊埜御堂 明香：…？？？
DL　：お兄ちゃん今日出目良いな…
DL　：では亜聡君、BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！クリファン双子…

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：2 → 3

熊埜御堂 亜聡：「…あー。こいつ、織畑の友達なんすよ」
熊埜御堂 亜聡：「んで、昨日から連絡つかねーって心配してて」
1B 担任　：「…あ～、そうか…。それは確かに気になるよなぁ…」（うんうん）
熊埜御堂 明香：「…だ、だめ…ですか？」(うるうる)
1B 担任　：「いや、こちらとしても行ってもらえると助かる。なんせ私が行ってもまともに取り合ってもらえなくてね…」

DL　：と言って、鶴乃の自宅の住所をメモに書いて渡してくれますね

熊埜御堂 亜聡：「取り合ってくれない？」
熊埜御堂 明香：「あ、ありがとうございます先生…！　でも、助かる…って？」

DL　：では 1B 担任は言い辛そうに口を開きます

1B 担任　：「……織畑さんのご家族がな…、『娘の事は放っておけ』と言ってまともに話も聞いてくれないんだ…」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「……」
1B 担任　：「本人とも連絡が付かんし、家族はまるで彼女の事を心配してないし…、正直 途方に暮れてた…」
熊埜御堂 亜聡：「……それ、いつからッスか」
1B 担任　：「一応 家族からは「金曜日の夜から帰ってきていない」という事だけは聞き出せたんだが…、それ以上の事は何も…」
熊埜御堂 明香：「…あの、じゃあ学校では…見かけて、ますか？」
1B 担任　：「いや、私は見ていないが…」
熊埜御堂 亜聡：「……。雁鳥の方と一致する、か」
1B 担任　：「表向きには風邪で休んでるって事にしてるけど、家出したんじゃないかって教師の間では噂になってるな…。…あ、この事はくれぐれも内密にしてくれ…」
熊埜御堂 明香：「あ、…はい」
熊埜御堂 亜聡：「…」
熊埜御堂 亜聡：「……織畑みてーな生徒って、他にもいるんスか。家出っつーか、連絡つかねーっつーか」
1B 担任　：「ん？いや…？織畑さん以外には特にいないが…」
熊埜御堂 亜聡：「そうなんスか。……ふーん」
1B 担任　：「…え、もしかして…。何かトラブルでもあったのか…？」心配そうに聞いてくる
熊埜御堂 明香：「あ、ええと、そういうわけじゃなくて…あっ、そういえば先生は「CS」って知ってますか？　なんか、この学校で流行ってるらしいんですけど」
1B 担任　：「ん？ああ…、半年くらい前から流行ってるらしいな。私はやっていないが」
熊埜御堂 明香：「日記を書くアプリで、交換日記もできるんですよ！　お兄ちゃんもハマってて…なんか、そう言う感じの日記拾っちゃったのかな、お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「別にハマってはねーけど」
1B 担任　：「ほう…。日記を書く事が自然に習慣になるのか…。良いゲームだな」

熊埜御堂 明香：「日記だから、たまにネガティブな事が書かれてるのもあるんですけどね…」
1B 担任　：「まあ、それはあるな…。日記は他人に見られるリスクが少ない分、他人には言いにくい悩みや不安も書きやすいモノだからな」
熊埜御堂 明香：「だから、交換した日記に「家出したーい」とか「学校いきたくなーい」とか、書いてあるんですって。…わたしは学校も家も好きだけど…」
1B 担任　：「そうか…。確かに日記を書く事でストレス解消が出来る事は科学的にも証明されている。それで悩みや不安が少しでも小さくなると良いんだが…、交換である以上 他人の目に触れてしまうのは問題だな…」
熊埜御堂 亜聡：「（すげー真剣に考察してるよこの先生）」
熊埜御堂 明香：「うん、あの、だから…えっと、もし「CS」で何かあったら、気にかけてほしいんです！」
熊埜御堂 明香：「ゲーム自体は普通に楽しいし、何も問題はないと思うんですけど…でも、悩んでる子もいるかもだから…」
1B 担任　：「わかった。生徒達のプライバシーを侵害しないように気を付けるとして…、そのゲームの事は念頭に置いておこう」
熊埜御堂 明香：「あ、ありがとうございます…！」
1B 担任　：「ああ、また何かあったら教えてくれ。ありがとう」

DL　：では他に何か聞きたい事などございますでしょうか？
熊埜御堂 明香：とりあえずは大丈夫…です！
熊埜御堂 亜聡：（今のところは大丈夫です…！）
DL　：はーい、了解です！では職員室から退室しますか？

熊埜御堂 亜聡：「先生、写真でばっかいい男探しても出てこねーぞ」（ついでに声掛けつつ、机のバナナ１本拝借しつつ、退室の方向で）
1A 担任　：「ちょ、それ数年前にもおんなじこと言われた……あ！こら熊埜御堂兄！！」
熊埜御堂 亜聡：「（しれー）」
熊埜御堂 明香：「あ、お兄ちゃん！　ご、ごめんなさい先生、失礼します！」と退室します～

熊埜御堂 明香：(あ、このタイミングで伝誦って出来ますか…？)
DL　：はーい、おっと
DL　：そうですね…、今多分一番近くにいるのは亜聡君なんで、交換するなら亜聡君とになるでしょうね
熊埜御堂 明香：ああ、そうなっちゃうのか…
熊埜御堂 亜聡：ラブレターの話
熊埜御堂 明香：渡したのが何かバレてしまう…うーん、見送りましょうか
DL　：了解です！何もなければ昼休み終了のチャイムが鳴りますが、いかがでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：こちらは大丈夫です！
熊埜御堂 明香：こちらも大丈夫です～
DL　：はーい、ではチャイムが鳴ります。キーンコーンカーンコーン…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：……では午後の授業が終わり、放課後。部活の時間です
DL　：調査前にミス研の部室に顔を出しに行きますか？
熊埜御堂 明香：いきます！
熊埜御堂 亜聡：いきます！
DL　：はーい、了解です！
DL　：……
DL　：……
DL　：…

八雲 芳一　：「やぁ諸君。そちらの事件の進捗状況はどうなんだ？」

DL　：今日も元気に八雲が挨拶してきます。

熊埜御堂 明香：「あ、こんにちは部長。進捗は…えっと、…その」
熊埜御堂 亜聡：「人に進捗聞くときは自分からって言うだろ、部長」
熊埜御堂 明香：「そうなの？」
八雲 芳一　：「ん？どうした？……もしかして、何か困ったことでもあったのか…？……おい、亜聡。まぁ、良いけどな…」
熊埜御堂 亜聡：「そうなんだよ」（適当）
熊埜御堂 明香：「そうなんだ…じゃあ部長からお願いします！」
八雲 芳一　：「ああ。こちらは昨日 校内で聞き込み調査をしていたが…、残念ながら「お化けが摘んでるんじゃないか？」みたいな意見ばっかりで、有力な手掛かりが何も得られなくてな…」
熊埜御堂 明香：「お化け…」
熊埜御堂 亜聡：「クソ適当だな。回答者誰だよそれ」
八雲 芳一　：「3 人に 1 人くらいはそんな事言ってた」
熊埜御堂 亜聡：「結構な頻度」
熊埜御堂 明香：「みんなお化け信じてるんだね…」
八雲 芳一　：「だからもう、張り込んで捕まえるしかないと思う」
熊埜御堂 明香：「張り込み…って、でもずっとできるわけじゃないんじゃ」
八雲 芳一　：「まぁ、下校時刻の事もあるしな…。可能な範囲でやれるだけやってみるさ」
熊埜御堂 亜聡：「部長の方も気長な調査になりそうだな…」
熊埜御堂 亜聡：「まぁこっちもっすけど」
八雲 芳一　：「そうか…。お互い苦戦してるな…」
熊埜御堂 明香：「…あ、…そ、そういえば部長は鶴乃ちゃん、見てませんか？」
八雲 芳一　：「ん？いや、今日は見ていないが…。何かあったのか？」
熊埜御堂 明香：「えっと、…ちょっと昨日色々あって、なんか、変な別れ方しちゃったというか…」
熊埜御堂 亜聡：「だな。……調査中に見かけたら顔出せっつっといてください」

八雲 芳一　：「そ、そうか…。大変だったんだな…」

八雲 芳一　：「わかった。見かけたら声を掛けておく。……しかし昨日からずっと考えていたんだが…、やはり妙だと思わないか？」

熊埜御堂 明香：「妙って…何がですか？」

八雲 芳一　：「織畑君の記憶障害についてだ。…仮にそれが起こっていたとしても、私はそれを認識できるのかな？誰かに指摘されないと気づけないと思うが。」

熊埜御堂 明香：「ん、んん…？　えっと、指摘されないと…って？」

八雲 芳一　：「記憶が抜け落ちてしまっているなら、よっぽどの事がなければ忘れてしまっている事にすら自分では気が付かないと思わないか？」

熊埜御堂 亜聡：「……。そうすか？」

熊埜御堂 明香：「でも、さすがに一晩だとか…長い時間の記憶が抜けてることに気づかないなんて、有り得る…のかな…」

八雲 芳一　：「諸君らのように常に行動を共にしている相手がいるなら、すぐに気が付けるだろうが…。逆に常に一人で行動してる人間ならすぐには気が付かないと思うぞ？」

熊埜御堂 亜聡：「そういうもんすかね。…例えば、俺は「今日の１～２限目の記憶が抜け落ちてる」ことを自覚してるっすよ」

熊埜御堂 明香：「それは寝てただけでしょ！」

八雲 芳一　：「それは単なる居眠りだな！ちゃんと授業は聞けよ！」

熊埜御堂 亜聡：「うるせーうるせー、寝てたとしても。あとから思い起こしたときに、「あれ、あの時先生何言ってたか覚えてねぇ」って気持ちは残るだろ」

熊埜御堂 明香：「それは真面目に聞いてないからだよ……」

熊埜御堂 明香：「…でも、よく「昨日の晩御飯何食べたか思い出せない」っていうのはよくあっても、夕食を取ったってことは中々忘れないと思うんです」

熊埜御堂 明香：「ご飯食べて、お風呂入って、歯磨きして…それから布団入った、とか。大体ルーチンみたいな感じになってるから、身に沁みついて「ああ、昨日も大体いつもと同じ事したな」って…誰に指摘されなくても、覚えてるでしょ？」

熊埜御堂 明香：「でも、鶴乃ちゃんが言ってたことはそれらとは外れてる気がするんです」

八雲 芳一　：「そうだな。私もそう考えている」

八雲 芳一　：「何と言うか……、忘れている部分があやふやなのに、はっきりと「忘れている」と自覚できるのが妙だと思う」

熊埜御堂 亜聡：「……ああ……なんとなくだが、部長の言いたいことは分かってきた…気がする」

熊埜御堂 亜聡：「違和感を覚えたり他の理由を考える前に、「私はこの間のことを忘れている」と断定しきって感じられるのが妙だ、ってことか？」

熊埜御堂 明香：「……「その間の記憶がない」は「その間の事を忘れてる」とイコールじゃないかも、って事…？」

八雲 芳一　：「まぁ、あくまでも憶測の域を出てはいないがな…」

熊埜御堂 亜聡：「…だとしたら、ますますわかんねーな。織畑どーなってんだ」

熊埜御堂 明香：「……心配、だな」

DL　：ではそんな話をしているとですね

織畑 鶴乃　：「こんにちは～！明香ちゃん、亜聡君、いますか～！？」
熊埜御堂 明香：「っ、鶴乃ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「、……！？」 さすがにがばっと振り向くかな…
織畑 鶴乃　：「！？あ、亜聡君どうしたんですか！？明香ちゃんもそんなに驚いて…」
熊埜御堂 明香：「え、だって、昨日…あ、あの後大丈夫だった！？」
織畑 鶴乃　：「…？あの後…？」（きょとん）
熊埜御堂 亜聡：「、……。……あー」 もしかして
熊埜御堂 亜聡：「お前、昨日の放課後のこと、どこまで覚えてる？」
織畑 鶴乃　：「えっと……。あのゲーム部の怖い人に明香ちゃん達が『CS』の事を調べてもらってたのは覚えてます…」
熊埜御堂 明香：「…そ、その後、他の部員さんに話しかけたことは…？」
織畑 鶴乃　：「…覚えてないですぅ…。私、また忘れちゃったんですね…」
熊埜御堂 亜聡：「あー……、…そういうことか…」
熊埜御堂 明香：「……」(おろおろ)
熊埜御堂 亜聡：「いや、思い出さなくてもいいとは思う。……まぁ。」
織畑 鶴乃　：「はっ……。私、もしかして部員さん達にご迷惑を……？ど、どうしましょ～～～～！？！？」
熊埜御堂 明香：「だ、大丈夫だよ！　鶴乃ちゃんは何もしてないから！」
熊埜御堂 亜聡：「そうだぞ。昨日は、俺が買ってやったクソ高いコンビニのショートケーキを地面にぶちまけてただけだ」（？）
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！！」
織畑 鶴乃　：「え、えええええ！？なんて事を…！ショ、ショートケーキが犠牲に…！！」
熊埜御堂 明香：「な、なってないよ！　なってないからね！？」
熊埜御堂 亜聡：「おー、これはマジに忘れてるな」 くっくっ
熊埜御堂 明香：「もー、変な嘘吐いちゃだめだよお兄ちゃん！」 ぽこぽこ(痛くない)
織畑 鶴乃　：「え…？え…？……もしかして亜聡君…。私で遊んでます…？」
熊埜御堂 亜聡：「おう。……へーへー、悪かった」 ぽこぽこされながら
織畑 鶴乃　：「ひどいですぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！！！」
熊埜御堂 亜聡：「悪かったっつってんだろ、しょうがねーからキャシーのバナナやるよ」 つバナナ
織畑 鶴乃　：「バナナ！！大好きです！！」

DL　：大喜びで受け取ります

熊埜御堂 亜聡：「機嫌なおった」
熊埜御堂 明香：「こっちはなおってない！」 ぽこぽこ
熊埜御堂 亜聡：「キャシーんとこでバナナもう１本仕入れときゃよかったな」 ぽこぽこされてる
織畑 鶴乃　：「わーい！！亜聡君ありがとうございます！」（もぐもぐ）
熊埜御堂 亜聡：「ったく…。……明香」 あとは何か聞くこといいか？のアイコンタクト
熊埜御堂 明香：「うー……」 いっぱいあるっちゃあるけど、とりあえずは…の顔
熊埜御堂 亜聡：「…。…っし。それじゃ、そろそろ行くか？　お前も機嫌なおせよ、明香。」 両ほっぺむにっ
熊埜御堂 明香：「んむっ！」

織畑 鶴乃　：「あ、はい！今日はどこに行きますか？」（もぐもぐ）
熊埜御堂 亜聡：「どっか行きてぇとこでもあるか？」 むにむに
熊埜御堂 明香：「ひゃめへ～！　ひゃべれにゃい～！」
織畑 鶴乃　：「いえ、自分では何も浮かばないので…。亜聡君達に決めてもらえると助かります…！」（もぐもぐ）
熊埜御堂 亜聡：「おー、そうか？　……ぶはっ」くっくっ笑いながら手を放す
熊埜御堂 明香：「…ぷは、…～～～～お兄ちゃん！！」
織畑 鶴乃　：「ふふっ、今日もなかよしですね！！」（もぐもぐ）
熊埜御堂 亜聡：「おー、悪かったって」くっくっ
熊埜御堂 明香：「思ってなさそう！！」
熊埜御堂 亜聡：「うるせーな、思ってる思ってる。ほら、行きたいところだと。メイは何かあるか？」
熊埜御堂 明香：「う～…とりあえず、輝夜先輩に会いに行きたい…かな？　CS 勧めてくれた人だし…」
熊埜御堂 亜聡：「ま、インストールさせてきたからには、何か知っててくれねーとな」
織畑 鶴乃　：「輝夜先輩……？……あ、月曜日に部室にいた女子の人ですね！」
熊埜御堂 明香：「うん、そういえばあれから会えてないなぁって」
熊埜御堂 亜聡：「オカ研にいんじゃね？知らねーけど。」
八雲 芳一　：「……おい待て。今、竹取がウチの部室に居ただと…？」（ぴく、）
熊埜御堂 亜聡：「おー、月曜な」
八雲 芳一　：「…あんの女狐め、何様のつもりだ…。おい、お前らもまともに相手するなよ…！」
熊埜御堂 明香：「…輝夜先輩の事、嫌いなんですか？」(こてん)
八雲 芳一　：「具体的に何かされたわけじゃない。が、何となくあいつは信用できないし虫が好かん」
熊埜御堂 亜聡：「ふーん…？」
熊埜御堂 明香：「うーん、でも今回の件に関して色々知ってるかもしれないし、聞き込みの範囲でかかわらないといけないので今回はごめんなさい」(？)
熊埜御堂 亜聡：「フラれたな、部長」（？？）
八雲 芳一　：「依頼の為なら仕方あるまい…。百歩譲って、諸君らがオカ研に赴くのは大目に見よう。だが、あいつをミス研の部室には入れるなよ！」
熊埜御堂 亜聡：「勝手に入ってんだよなぁ」
熊埜御堂 明香：「ならちゃんと鍵とか管理してほしいなぁ…」
熊埜御堂 亜聡：「じゃあ行先はオカ研だな。とりあえず」
熊埜御堂 明香：「うん、行こっか鶴乃ちゃん」
織畑 鶴乃　：「あ、はい！」（もぐもぐ…、ごっくん）
熊埜御堂 亜聡：「ずっと食ってたなお前」
織畑 鶴乃　：「おいしかったです！ごちそうさまでした！」
熊埜御堂 明香：「……(どれだけ長いバナナだったんだろう…)」
熊埜御堂 亜聡：「（キャシー産だからな）」

DL　：では、鶴乃と一緒の「オカルト研究部」に行きますか？
熊埜御堂 明香：行きます…！
熊埜御堂 亜聡：いきます！

DL　：はーい、では 3 人でオカルト研究部へれっつごー！
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：オカルト研究部の扉には「ノックして あいことば」と書かれた張り紙がしてあり、部室を訪れると鍵がかかっている。

熊埜御堂 亜聡：「…あいことば？」
熊埜御堂 明香：「あいことば…」
熊埜御堂 亜聡：「…いや知らねー」
熊埜御堂 明香：「…「山」ときたら「川」みたいなやつ？」
熊埜御堂 亜聡：「そんなら先に向こうから問いかけてこねーと」
熊埜御堂 明香：「……ノックしてみる？」
熊埜御堂 亜聡：「いいぞ」

熊埜御堂 明香：では、コンコン！
DL　：はーい、では明香さんが扉をノックしてみますが…特に反応はないですね

熊埜御堂 明香：「…そういうのじゃないみたい？」
熊埜御堂 亜聡：「部長に聞いてこりゃよかったな。オカ研の合言葉」
熊埜御堂 明香：「知ってるのかな？」
熊埜御堂 亜聡：「知らねー」

熊埜御堂 亜聡：部長か、もしくは輝夜先輩の連絡先って知ってますかね…？
DL　：そうですね、知っているものとしましょう＜連絡先
熊埜御堂 明香：それと、扉の周囲を観察してみますが…特に何もないでしょうか…？
DL　：扉の周囲には特に何もないですね
熊埜御堂 亜聡：お、2 人とも知っているのですね！であれば、輝夜先輩にメッセしてみようかな…

熊埜御堂 亜聡：『オカ研部室　合言葉』

DL　：では 2 人から返信が返ってきますね

八雲 芳一　：『知るか』
竹取 輝夜　：『え～、わかんなかった？この間 送ったでしょ～？』

熊埜御堂 亜聡：「……あ？」 メッセージ見て、怪訝な顔
熊埜御堂 明香：「どうしたの？」

熊埜御堂 亜聡：「あー、竹取先輩から来た返事。この前送った、だと」
熊埜御堂 明香：「前…なんかあったっけ…CS？」
熊埜御堂 亜聡：「CS……あ。」

熊埜御堂 亜聡：明香ちゃんの言葉で目を丸くしつつ、CS に送られてきた例の画像を表示して見せます

熊埜御堂 亜聡：「これか？」
熊埜御堂 明香：「うん、それ…その文もなんかなぞかけじゃなかったっけ？」
熊埜御堂 亜聡：「答えは昨日、変態先輩から聞いたな。……それで試してみるか」

熊埜御堂 明香：ではもう一回コンコンしてから…

熊埜御堂 明香：「ええと…「うそ」？」

DL　：では明香さんが扉をノックしてそう答えるとですね…

竹取 輝夜　：（ガラッ）「やっぱり！　どうぞ、入って入って～！」
熊埜御堂 亜聡：「いやいたなら開けろよ最初から」
竹取 輝夜　：「いや～、ごめんごめん！こっちの都合でさ～！」
熊埜御堂 明香：「都合？」
竹取 輝夜　：「まぁそれはいいから！入った入った！」
熊埜御堂 亜聡：「はぁ…。それじゃ」 おじゃましまーす
熊埜御堂 明香：「お、おじゃましま～す」

DL　：ではオカルト研究部の部室の中の描写を。
DL　：オカルト研究部の中はミス研の部室よりやや広い。
DL　：突き合せた４つの机に、本やファイルが詰まった本棚、あとどこから持ってきたのか古いソファが置いてあった。そこに竹取輝夜の他に２人の生徒がいた。
オカルト部女子：背の低い女子生徒はソファに寝転がっており、
オカルト部男子：もう一人の男子生徒はこちらを訝しむように見てこう言った。

オカルト部男子：「竹取、どういうつもりだ？」
竹取 輝夜　：「この子たちは大丈夫だよ」

DL　：男子生徒に対し、竹取はそう答える。

竹取 輝夜　：「あ、そうそう！ね～明香！『CS』どう？　今日も伝誦しよ～！」
熊埜御堂 明香：「わわ、いいです、けど…あの、このお二人は…？」
竹取 輝夜　：「あ、それもそっか。じゃ～2 人とも！自己紹介してあげて～！」
オカルト部女子：「ん、い～よ！」

オカルト部女子：「私は２年の御伽雀（おとぎ すずめ）だよ、よろしくねー。」

熊埜御堂 亜聡：「御伽？」
熊埜御堂 明香：「雀先輩！　…ん、御伽…ってゲーム部の？」
御伽 雀　：「あ、兄貴の事知ってんの？そーだよ、ゲーム部の御伽 住吉ってのがウチの兄貴！」
熊埜御堂 明香：「わぁ、そうなん……そ、そうなんですね……」(思い出される◯へ顔)
熊埜御堂 亜聡：「……アレが兄貴か…」 ちょっと渋い顔
御伽 雀　：「あ～……、うん。言いたい事は何となくわかる…」
御伽 雀　：「ウチの兄気がやらかしたみたいで…、ごめんね…？」
熊埜御堂 明香：「あ、い、いいえいいえ！　大丈夫です！　そりゃ、あの、割と困ったけど…でも、雀先輩が悪いワケじゃないですから！」
熊埜御堂 明香：「あ、わたし一年の熊埜御堂 明香って言います。よろしくお願いします！」
御伽 雀　：「やっぱ何かやらかしてんじゃん！！…あ、うん！よろしくね明香ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「…熊埜御堂 亜聡」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、ちゃんと挨拶しなきゃダメだよ！」
御伽 雀　：「そうだぞお兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「名前言ったんだからいいだろ。…先輩。」
御伽 雀　：「ん。まぁ良しとするか！よろしく亜聡君！」
熊埜御堂 亜聡：「……」 妹属性の先輩という矛盾でちょっと困っているらしい

御伽 雀　：「んじゃラスト。……こっち来なよ絵本！」（ぐい～っ）

DL　：そう言って雀は男子生徒の腕を引っ張って連れて来ますね

オカルト部男子：「何で僕が…おい、引っ張るな雀…」
DL　：観念したのか、ため息を一つ吐いて話し始めます

オカルト部男子 ：「……（はぁ…）…三年の小波絵本（さざなみ えほん）だ。４月からここの部長をやってる。」

熊埜御堂 亜聡：「あぁ、うちの部長が言ってた先輩すね」
熊埜御堂 明香：「よろしくお願いします、小波先輩！」
小波 絵本　：「……そういうお前らこそ、熊埜御堂先輩が言ってた弟と妹だな…」（はぁ…）
熊埜御堂 亜聡：「…アニキと知り合いすか？」
熊埜御堂 明香：「え、熊埜御堂先輩…って、お姉ちゃん？」
小波 絵本　：「……僕の２学年上の先輩だ。先輩が在籍中には世話になってた」
熊埜御堂 明香：「そ、そうだったんだ…」
熊埜御堂 亜聡：「初耳」
熊埜御堂 明香：「モヒカン先輩とかの話はよくしてくれたけどね…」
熊埜御堂 亜聡：「な」
小波 絵本　：「……あの人は「自分がしてもらった事」は話すけど、「自分がしてやった事」を自慢するような人じゃないだろう」
熊埜御堂 明香：「…えへへ、そうです…ね」
熊埜御堂 亜聡：「…ま、面倒見いいっすからね。うちのアニキ」
竹取 輝夜　：「んじゃ、自己紹介も終わったことだし！『CS』しよ～よ明香～！」
熊埜御堂 明香：「わわっ、は、はーい！　いいですけど、つまんなくっても怒んないでくださいね？」
竹取 輝夜　：「い～よい～よ！私も適当だし！」

DL　：では輝夜と伝誦を交換しますか？（ボタンは何も言わなければ輝夜が押します）
熊埜御堂 明香：交換…します！
DL　：はーい、では

DL　：1d10　(1D10) ＞ 9

DL　：（あ、伝誦は今この場で確認します？）

熊埜御堂 明香：あ、確認したいです！
DL　：了解です！では情報タブに貼り付けます

［情報］【竹取 輝夜の伝誦】
（水曜日）
9：自販で冷たい缶コーヒーのボタン押したら温かいナタデココが出てきた。

ワスレモノ　ワスレモノ　かなしいを　あげます　ワスレモノ　ワスレモノ　つらいを　あげます ワスレモノ　ワスレモノ　いたいを　あげます　ワスレ モノ　ワスレモノ　わたしを　あげます。

熊埜御堂 明香：「ひゃえっ」
熊埜御堂 亜聡：「あ？」
竹取 輝夜　：「えっ？明香どーしたの？」
熊埜御堂 明香：「え、いや、えっと…なんか、輝夜先輩の日記に変なのがくっついてて…」
熊埜御堂 明香：「び、びっくりした…」
竹取 輝夜　：「え、うそ？なんかバグでも起こった？」
熊埜御堂 亜聡：「変なの？……」
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃんの隣から頭を近づけるような形で覗き込みます
熊埜御堂 明香：「ほ、ほらこれ…日記の下の方に…ワスレモノ？」
熊埜御堂 亜聡：「……なんかの歌詞か？なんすかこれ先輩。」
竹取 輝夜　：「ん～？……あ～、これオカ研の活動で使おうと思ってたコピペ間違って貼り付けちゃったのかも。ごめんごめん！」
熊埜御堂 明香：「な、なんだぁ…よかったぁ」
熊埜御堂 明香：「もう輝夜先輩、驚かせないでくださいよぅ…」
熊埜御堂 亜聡：「間違い、……」
熊埜御堂 明香：「……、うん、間違いだってお兄ちゃん！」
熊埜御堂 明香：「だから、わたしがびっくりしてたこと忘れてね！　…恥ずかしいから！」
竹取 輝夜　：「ごめんごめん！お詫びにバナナあげるから許して！」（てへぺろ☆）
熊埜御堂 明香：「もー、輝夜先輩キャシー先生みたいなこと言ってる！」
竹取 輝夜　：「さっきキャシー先生から強奪してきた新鮮なバナナで～す！」（てへぺろ☆）
熊埜御堂 亜聡：「先輩もかよ」
熊埜御堂 明香：「先生…」
竹取 輝夜　：「一応アレでもウチの顧問だもん」（てへぺろ☆）
熊埜御堂 亜聡：「あー……そういやそうだった」
熊埜御堂 明香：「…顧問、ちゃんとやってるのかな…」
熊埜御堂 亜聡：「どうせ婚活しかしてねーだろ」（暴言）

熊埜御堂 明香：「……うん」(だろうなぁという顔)
竹取 輝夜　：「だいせーかい！」
熊埜御堂 亜聡：「やっぱダメだなあのキャシー」
熊埜御堂 明香：「なんで先生なれたんだろう」
竹取 輝夜　：「世の中には知らなくて良い事もあるんだよきっと…」
熊埜御堂 明香：「…そっかぁ…」

熊埜御堂 亜聡：「……そういえば。ここの先輩たちは、CS やってるんすか？　この前、俺等が竹取先輩にめちゃくちゃ勧められたみたいに。」
御伽 雀　：「あー前はめっちゃハマってたけど最近ほとんどやってないなー。兄貴が詳しいから兄貴に聞いてよ。」
熊埜御堂 亜聡：「それは知ってる」＞ 兄貴が詳しい
熊埜御堂 明香：「あ、御伽先輩にはもう聞きに行った後なんです…」
御伽 雀　：「あ、そうだったんだ……。ウチの兄貴がごめんね…」
小波 絵本　：「……こっちは雀に無理やりインストールさせられた。もうほとんど触っていない。」
熊埜御堂 明香：「なるほど…あ、だからこっちに布教したんですか輝夜先輩？」
熊埜御堂 亜聡：「月曜日にミス研にいたっつったら部長キレてたっすよ」
熊埜御堂 明香：「あんなに怒ることないのにねー」
熊埜御堂 亜聡：「うちの部長が変わってんのはいつものことだろ」
熊埜御堂 明香：「それもそうだけど…」
竹取 輝夜　：「布教したくても 3 人しかいないんじゃーねー…。顧問は全くもって興味ないワケだし」
熊埜御堂 明香：「さみしい…」
熊埜御堂 亜聡：「ふぅん…。じゃあ先輩たちは、CS やってたら記憶がなくなってくって話、聞いたことあります？」
織畑 鶴乃　：「そ、そうなんです！今日はその話を聞きたくて…！…あ、すみません！私は 1 年の織畑鶴乃です！」
熊埜御堂 明香：「今、ちょっとミス研で依頼受けてて…この子、鶴乃ちゃんが…その件で困ってるみたいで」
竹取 輝夜　：「お、頑張ってんじゃん。えらいよ～」

DL　：では小波、雀の反応を順番に

小波 絵本　：「……知らんな。」

DL　：〈心理〉判定を振る事も可能ですが、振りますか？
熊埜御堂 明香：振り…たいです！
熊埜御堂 亜聡：あ、振れるんだ…！振りたいです！
DL　：はーい、どうぞ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈心理〉(2DM<=7) ＞ [9, 8] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!
熊埜御堂 亜聡：2DM<=8〈心理〉(2DM<=8) ＞ [7, 6] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 明香：かなしみ

熊埜御堂 亜聡：そういうことも ある
DL　：お兄ちゃんガンガンダブル出すなぁ…
DL　：では亜聡君、BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：3 → 4

DL　：では亜聡君は、小波が何かを隠している事がはっきりと確信できますね

熊埜御堂 亜聡：「、…。……」 では、双子ならではのアイコンタクトを明香ちゃんに
熊埜御堂 明香：「…？　……」(はわ)

DL　：そして雀の反応ですが、

御伽 雀　：「何それ？おもしろっ！オカ研案件っしょそれ！でも何かそれ聞いたことある気が… 」
御伽 雀　：「えーと、多分そこにある本のどれかに載ってたと思う！本棚勝手に使っていいよ！」
熊埜御堂 明香：「え、あるんですか！？」
御伽 雀　：「うん！どの本だったかは忘れたけど！」
熊埜御堂 亜聡：「すげーざっくりした情報」
熊埜御堂 明香：「あ、えっと…じゃあ本棚、…い、いいですか？」
御伽 雀　：「うんいーよ！いーよね、絵本！」
小波 絵本　：「（はぁ……）……好きにしろ」
熊埜御堂 明香：「じ、じゃあちょっと本棚お借りします…！」

熊埜御堂 亜聡：亜聡ものそのそ明香ちゃんについていきます！
DL　：はーい！では 2 人で本棚を調べる、と…
DL　： 本棚には伝説、伝承、怪談、妖怪辞典、フォークロア、ネットロア等様々の本に加え、いくつかのファイルが敷き詰められている。
DL　：ここでは〈検索〉判定あるいは〈＊調査〉判定を振れます
熊埜御堂 亜聡：検索はないので…調査でいきます
熊埜御堂 明香：では検索で…

熊埜御堂 明香：1DM<=6〈検索〉(1DM<=6) ＞ [1] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!
熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊調査〉(1DM<=3) ＞ [5] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

DL　：お、ここでダブルが出るとは…
DL　：では明香さん、BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 明香：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 明香] BD：0 → 1

DL　：ではまず通常成功の情報から
DL　：明香さんは「A・S ファイル」という個人がまとめたスクラップブックを見つけます
熊埜御堂 明香：「…？　なんだろ、このファイル…」 本棚から取り出してみてみます

DL　：中を確認してみますか？
熊埜御堂 明香：してみます！
DL　：はーい、では情報タブに内容を貼り付けます。長いのでゆっくり読んでくださいませ！

［情報］【A・S ファイル】①
《怪異：ワスレモノ》
黒くて巨大な、歪な人型の怪異。万物の哀しみや辛い記憶を喰らう。
魂の記録や死の概念の一部をも喰らうとされる。
死人の死の記憶を喰らい、幽世に向かうことなく現世に留まる存在、彷徨う魂を意図的に作り出すことができる。

この彷徨う魂が《怪異：無垢なる死者》、死を自覚しないようプログラムされた行動をとる。
またワスレモノは別の存在と接続し、幽世を見せる力も持っている。

《怪異：ワスレモノ》を呼び出すおまじないがある。
まず、ワスレモノとのパイプとなる印を描く。描く方法は問わない。
その後、印に呼び出す者の血液を与え、しばらく待つ。
これだけでもワスレモノとコンタクトを取れるときがある。

そして、人が寝静まる頃に印の前で悲しい記憶、辛い記憶を心の中で強く思い浮かべながらこのように唱える。

ワスレモノ　ワスレモノ　かなしいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　つらいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　いたいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　わたしを　あげます。

すると、目の前の印からワスレモノが現れ、嫌な記憶を喰らってくれる。
この際に頭を齧り、脳を喰らい、呼び出した者を殺してしまうという説もある。⇔《怪異：オトギビト》
（文字に加えて、端に妙なマークが書いてある。）

［情報］【A・S ファイル】②
《怪異：無垢なる死者》
自身の死を自覚していない、幽世と現世の境界を彷徨う魂。
幽世の者の性質でありながら、現世に留まる存在。
故に常人の目には映らないが、霊感の強い者は見ることができるかもしれない。

現世の残滓である彼らは違和に対して鈍感だ。
これは“自分が死んだことを認識してしまう”と、今まで霧散していた“ 死 ”が収束し、現世から拒絶され消滅してしまう。
その現象に対する無意識の防衛機制が働いており行動範囲が限定的なことが多い。

もう一つ、《怪異：無垢なる死者》には特徴がある。
無垢なる死者がすでに死んでいることを知らずに接触すると、存在しているという認識が固定され不可逆となる。後にその者がすでに死んでいるという事実を知ったとしても、その姿は見えたままとなる。

姿を消すには無垢なる死者にすでに死んでいることを伝えるか、自身の霊感をなくす必要がある。
また《怪異：無垢なる死者》を目撃する前に、対象がすでに死んでいるという確信がある場合、霊感があったとしても無垢なる死者の姿は見えない。

［情報］ さらにスクラップブックの最後のページにこう書いてある。
『怪異は怪異を呼び寄せる』

DL ：「A・S ファイル」の内容は以上です

熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 亜聡：「（妖怪辞典読んでる）」

DL ：そしてここからがダブル以上の特典情報です
DL ：明香さんは本棚の隣に置いてあるゴミ箱の中にくしゃくしゃに丸められた紙が入っているのを発見しますね
DL ：僅かに覗いている文章により生徒会からの書類だとわかる。

熊埜御堂 明香：「…？ ……」 え、どうしよう。いきなり漁りだしたら変な人だと思われる…

御伽 雀 ：「どーお？見つかった～？」（とことこ）
熊埜御堂 亜聡：「あ、先輩。」
熊埜御堂 明香：「あ、なんかこんなファイルがあって…これですかね？」
御伽 雀 ：「あ！そうそれ！」

熊埜御堂 亜聡：「んあ？　何が書いてあるんだ？」
熊埜御堂 明香：「あ、えっとね…」

熊埜御堂 明香：と、では共有する感じで…
DL　：共有 OK です！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！

熊埜御堂 亜聡：「……」　そしてその内容聞いたら亜聡も黙るよ…
御伽 雀　：「その本面白いよね～！私もその本好き！」
御伽 雀　：「一番好きなのは怪異を狩ってその力を奪った生き物は、怪異の最初の三文字にバラシってくっつけて〇〇〇バラシっていう怪異に変質しちゃうって記事！めっちゃ漫画っぽくてよくない？そーゆーの好きなんだよねー！」
熊埜御堂 亜聡：「…バラシ？」
御伽 雀　：「あれ？でもその記事なくなってる…？なくしちゃった…？」
熊埜御堂 明香：「バラシ…？　ええと、それもこのファイルにあったん…ですか？」
御伽 雀　：「うん。そのハズなんだけど…、どこ行っちゃったのかな…？」
熊埜御堂 明香：「ううん、本の間に挟まってるとか……もしかしたら、何かの間違いでゴミ箱に入ってるとか？」

熊埜御堂 明香：という自然な流れ()でゴミ箱の方へ…！
DL　：OK です！
DL　：では先ほど見つけた紙を拾って広げてみますか？
熊埜御堂 明香：広げて…みます！
DL　：はーい、では明香さんがくしゃくしゃに丸められた紙を広げてみますと…

DL　：内容は、生徒会からの部室明け渡し通告のようだ。
「部と認定するには部員が 3 人必要だが、オカルト研究部は現状 2 人以下なので認められない」、といった内容だ。

熊埜御堂 明香：「…うーん、ないなぁ……あれ？」
熊埜御堂 明香：「……」
御伽 雀　：「そっち見つかった～？」（がさごそ）
熊埜御堂 明香：「あ、いいえ！　ないみたいです、あはは…」 見つけた紙をすぐぐしゃっとしてゴミ箱に in！
熊埜御堂 亜聡：「…？」
御伽 雀　：「ごめんね～。ヨソの部のゴミ箱まで漁らせたりなんかして…」
熊埜御堂 明香：「いえいえ、わたしも気になっちゃったから…寧ろ漁っちゃってごめんなさい」
熊埜御堂 亜聡：「大丈夫すよ、こいつ俺が学生証失くしたっつったら俺の部屋のごみ箱まで漁るんで」
御伽 雀　：「うわ、そんな事させんなよ兄貴…」
熊埜御堂 明香：「なくす方が悪いんだよ、お兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「まぁ実際出てきましたし」（ゴミ箱から）（学生証）
熊埜御堂 明香：「あの時は本当に呆れたんだから！」

御伽 雀　：「いや捨てんなし。ほんそれ」

御伽 雀　：「……つーかこのファイル、よく見たら『オトギビト』のページもなくなってんじゃん！！なくなり過ぎっしょ！！」
熊埜御堂 亜聡：「オトギビト？」
御伽 雀　：「確かワスレモノと逆の性質だった気が…記憶を植え付けるとかそういう系だったと思う。」
熊埜御堂 明香：「オトギビト…あ、ワスレモノのページに名前だけあったやつ」
御伽 雀　：「そうそれ！もー…、どうなってんの！？」
熊埜御堂 明香：「あはは…そういえば、このファイルって、いつ頃からあったものなんですか？」
御伽 雀　：「ん～？私が入部した時にはもうあったけど…、いつからあるのかは知らなーい、気にしたことなーい」
熊埜御堂 明香：「ふむふむ…輝夜先輩は知ってます？」(くるっ)
竹取 輝夜　：「あ～、それね。伝説的なオカ研ＯＢが作ったんだって。自分の名前を付けたんだってさ」
熊埜御堂 明香：「自分の名前？」
竹取 輝夜　：「その OB の名前はー…知ってるけど教えてあげない！」
熊埜御堂 亜聡：「なんすかそれ」
熊埜御堂 明香：「えぇっ！？」
熊埜御堂 明香：「ど、どうしてそんなイジワルするんですかぁ」
竹取 輝夜　：「だって知らない人の名前聞いたって「はぇー…」くらいにしか思わないじゃん？謎のままの方が面白いじゃん」
熊埜御堂 亜聡：「っつーか、伝説的ってなんすか。なんで伝説？」
竹取 輝夜　：「あ～、その人が居た時代が一番オカ研が賑わってたからでしょ。今じゃ部員 3 人の弱小部活だし」
熊埜御堂 亜聡：「人徳みてーな話？」
熊埜御堂 明香：「3 人…まぁミス研も 3 人ですけど……」
竹取 輝夜　：「ギリ部活存続できる人数だしね～。お互い大変だよね～」
熊埜御堂 亜聡：「うちの部長は変なビラ校内に貼りまくるしな…」
竹取 輝夜　：「あれはめっちゃウケたわ～！！」
熊埜御堂 亜聡：「ウケられてんじゃねーか部長」
熊埜御堂 明香：「あはは…ま、まぁお陰で鶴乃ちゃんと会えたので、OK です！」

DL　：さて、次はいかがなさいますか？

熊埜御堂 明香：「そう言えば…他に、何か気になる本とかおすすめとかってありますか？」

熊埜御堂 明香：と雀先輩に聞く感じで、本棚辺りでおしゃべりしようとします。その隙に伝誦ボタンぽち…みたいな
DL　：OK です！

御伽 雀　：「ん～？そ～だね～……、この『天築 土地神図鑑』とか結構おもしろいよ！」
熊埜御堂 明香：「あ、実はわたし天築からここ通ってるんです！　知ってる神様いるかな？」

熊埜御堂 亜聡：「一角獣のページは読むなよ」
熊埜御堂 明香：「何でか昔からお兄ちゃんとお姉ちゃんにはその神様の話止められてるんだよね…」

DL　：では雀の意識は完全に本を探す事に向いています。今ならスマホを触っても気付かれないでしょう

御伽 雀　：「え～っと…、確かこの辺に…」（ごそごそ）
熊埜御堂 明香：「どの辺ですか～？」ではポチー

DL　：はーい、では情報タブに伝誦の内容を貼りますので少々お待ちください

［情報］▼伝誦：御伽雀
（約半年前の内容）
A・S ファイルにあったワスレモノのおまじないが気になって気になって試すことに決めた！
というかオカ研部員としては当然やるべき…って思って絵本を誘ったけど断られたし、やめとけって言われた。
ホント意気地なし、しらけた。私一人でもやっちゃるし！
オカ研の部室でやろうかと思ったけど、やっぱ雰囲気あるし理科室でやろっかな。
ファイル持ってくの大変だしメモメモ。

ワスレモノ　ワスレモノ　かなしいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　つらいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　いたいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　わたしを　あげます。
（文字に加えて、端に妙なマークが書いてある。）
（キャラクターは青を基調とした魔女）

DL　：（情報は以上です）
熊埜御堂 明香：了解です…！　ではこそっとスマホを確認してはわわってなってますね…(すぐ戻すけど)

御伽 雀　：「（ごそごそ）……ん～……あ～！あったあった！はいコレ！」
熊埜御堂 明香：「わ、わわっ。ありがとうございます…！」
御伽 雀　：「ん！貸したげるから家とかでゆっくり読んでいーからね！」
熊埜御堂 明香：「い、いいんですか？　じゃあお借りしますね、読んだら返しに来ますから！」
御伽 雀　：「ん！返しに来んのはまたいつでもいーよ！」

熊埜御堂 亜聡：その間に、亜聡は A.S ファイルを持って部長の方へ行きたいです…
DL　：OK です！小波は本読んでるので亜聡君の方を見ていないですね

小波 絵本　：「……」（ぱら…ぱら…）

熊埜御堂 亜聡 ： おお、ソファに座ってる感じかな…？じゃあその隣にバサッとファイルを広げて置いて、「小波部長は、このA.S.ファイルって読んだことあるんスか？」って声掛けてみたいです
熊埜御堂 亜聡：そうしたら視線はそのまま下に向くかなって…。そこで伝聞ボタンぽちってしたいなと
DL　：OKです！

小波 絵本　：「……3年間 部員やってるんだから当然だろう。それがどうした」
熊埜御堂 亜聡 ：「じゃあ、ここに書いてある内容についてなんか詳しく知ってたりします？　なんかページが抜け落ちてるって雀先輩が騒いでたんで」
小波 絵本　：「……知らん」 ページを確認しつつ答えます

DL　：ページを確認してる今なら、視線は完全に『A・Sファイル』の方へ行ってるでしょうね
熊埜御堂 亜聡：では伝聞ぽちっ。
DL　：はーい、では情報タブに貼りますので少々お待ち下さいませ～

[情報] ▼伝聞：小波絵本
（約半年前の内容）
雀がワスレモノのおまじないと試すとうるさかった。
雰囲気を出すため深夜0時にオカ研の部室でとか、いくらなんでも付き合えない。
先輩たちは受験で籍は置いてるけどすでに引退してるから、声をかけるなら僕くらいなのはわかるが…。
少し心配だから明日 朝一に部室を見に行こう。
あいつのことだ、家に帰らず 部室に泊るとか平気でしそうだし。
（キャラクターは赤を基調とした魔女）

DL　：（情報は以上です！）
熊埜御堂 亜聡：（了解です！）（ではちらっと見て届いたのを確認したらスマホをポケットに戻す感じで）

熊埜御堂 亜聡 ：「○○バラシって話も、雀先輩教えてくれたんスけど、その辺についても詳しかったりしないんスか？オカ研部長。」
小波 絵本　：「……ああ、雀が特に好きだってよく話していたな…。生憎だが、僕も雀が知っているのと同じ程度の事くらいしか知らん」
熊埜御堂 亜聡：「ふーん…ならそれぐらいマイナーな妖怪なんスかね。」
小波 絵本　：「……そもそも、他の怪異の力を奪わないと生まれない怪異だ。なら珍しくてもおかしくはないだろう」
熊埜御堂 亜聡：「あぁ、確かにそんな話だったな。他の怪異の力を奪う、か……」
熊埜御堂 亜聡：「……。…すねこすりの力を奪ったら、どうなるんだろうな……すねバラシ…？」

小波 絵本　：「……最初の三文字を取る、という法則に則れば『すねこバラシ』になるだろうな……」
熊埜御堂 亜聡：「あーなるほど。すねこバラシ。」
熊埜御堂 亜聡：「なんかうまそうッスね」
小波 絵本　：「……いや、どの辺が……？」
熊埜御堂 亜聡：「『すねこ』が『すじこ』っぽいなと思ったら、急にちらし寿司感感じて。……腹減ったな、あとでキャシーのとこでバナナぱくるか…」

熊埜御堂 亜聡：「おい明香、バナナ食い行かねーか」（謎の合流）
熊埜御堂 明香：「急にどうしたのお兄ちゃん！　もー、じゃあ帰る時にキャシー先生のとこ寄ってく？」
熊埜御堂 亜聡：「おー。」
熊埜御堂 明香：「じゃあちょっと急いでいかないと、先生婚活で街に繰り出しに行っちゃうよ」
熊埜御堂 亜聡：「めちゃくちゃやりそうだな。なら急ぐか。……あー先輩たち」
熊埜御堂 亜聡：「またなんかCSについて話聞いたりとか、記憶云々について情報があったら、俺より明香に伝えといてください」
熊埜御堂 明香：「そこは「自分に情報ください」じゃないの？　もー…こんなお兄ちゃんですけど、今日は割と満喫したみたいだから校内とかで見かけたら気にせず声かけたりとかしてくださいね！」
御伽 雀　：「ん、わかったー！」
小波 絵本　：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……」 わかられてしまった
熊埜御堂 明香：「それじゃあ、今日はありがとうございました！　失礼します！」
熊埜御堂 亜聡：「失礼しまーす」

竹取 輝夜　：「ん？もう帰んの？」
熊埜御堂 明香：「はい、今日は急に押しかけちゃって…でも楽しかったです！」
竹取 輝夜　：「んーん、こっちも楽しかったからいーよ！……あ、そうだ。明香」
熊埜御堂 明香：「？　はーい」
竹取 輝夜　：「明香の『CS』、なんか変わった事とか起きなかった？魔女が成長したとかさー」
熊埜御堂 明香：「え、今のところは特に…お兄ちゃんと同じくらいの進みですよー」
熊埜御堂 亜聡：「……ん」 頷く
竹取 輝夜　：「えー、そうなのー？ざんねーん…」
竹取 輝夜　：「……ねぇ、具体的にはどんな感じになってる？」
熊埜御堂 明香：「具体的…と言っても、わたしまだ初めて二日三日くらいだし…多分、初日とそんな変わってないかなって…？」
竹取 輝夜　：「ふーん…、まぁ始めたばっかりだしそんなもんか…？」
熊埜御堂 亜聡：「……、おいメイ、何やってんだ。早くしねーとバナナが婚活行っちまうぞ。」 ぐい、
熊埜御堂 明香：「あ、うん。じゃあ輝夜先輩、また今度。何か変わったことあったら教えますね！」
熊埜御堂 亜聡：「次来るときには甘いもん用意しといてください」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」
竹取 輝夜　：「……ん！じゃ、またね！報告楽しみにしてるから！……甘い物はバナナが据え置きだと思ってて」
熊埜御堂 亜聡：「それは職員室にあるからいいッス」

熊埜御堂 明香：「もー、お兄ちゃんは…」

熊埜御堂 亜聡：そんな感じで明香ちゃんをぐいーっと引っ張って部室の外へ…！
DL　：はーい、では部室から出る、でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：（OK です！）
熊埜御堂 明香：(OK です！)

DL　：はーい、ではお 2 人が部室から出る時にふと輝夜の方を見るとですね…

竹取 輝夜　：「……」（う～ん…）

DL　：何やら考え込んでいるような様子に見えます

熊埜御堂 亜聡：「……」 気になる…。けど亜聡は、あの明香ちゃんが嘘をついて誤魔化すレベルというのが気になっているので早々に退散しそう
熊埜御堂 明香：「……」(くい)
熊埜御堂 亜聡：「(ぎゅ、)」
織畑 鶴乃　：「お邪魔しました～！」（ぺこり）
熊埜御堂 亜聡：「……ぁ。」 忘れてた
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」 ぺち
熊埜御堂 亜聡：「いて」
熊埜御堂 明香：「ほらほら、先生にバナナ貰いにいくんでしょ！　鶴乃ちゃんも、行こ！」
織畑 鶴乃　：「！？ど、どうしたんですか！？け、ケンカ！？」（おろおろ）
熊埜御堂 明香：「ち、違うよ！」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、食いしん坊だからバナナ貰えないと拗ねちゃうの！」
熊埜御堂 亜聡：「おい」
織畑 鶴乃　：「わかります！バナナおいしいですもんね！」
熊埜御堂 亜聡：「わかるな」

DL　：では 2 行動目…次はどこへ向かいますか？
熊埜御堂 亜聡：どうしようかな…。とりあえずオカ研から離れることしか考えてなかった
熊埜御堂 明香：ですね…
熊埜御堂 亜聡：…情報共有したい…
熊埜御堂 明香：したい……あ、図書室辺りとかどうですか
DL　：（いいですよ！）
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます…！図書室 OK です！
DL　：（図書館行ってもいいですが…、図書館は昼休みに行く事も出来るとだけ）（部室棟は放課後のみ）
熊埜御堂 明香：(…うーん)(他に行くべき部室、ありますかね…)
熊埜御堂 亜聡：（あ、そっか）（部室棟か…。今のところ他に情報出てる部活はないからな…ミス研かまたゲーム部か）

熊埜御堂 亜聡：（今のところ特筆する情報がない部活の部室でも、実は何かあるのかもしれない…？）

熊埜御堂 亜聡：「…織畑、部活は？」
織畑 鶴乃　：「私ですか？帰宅部、ですけど…」
熊埜御堂 亜聡：「知ってた」
熊埜御堂 明香：「…この事件終わったら、ミス研入る？」
織畑 鶴乃　：「……えっ？」
熊埜御堂 明香：「あっ、い、嫌だったら全然いいんだよ？　でも、こうやって放課後いつも一緒に行動してたら…鶴乃ちゃんもミス研みたいだよねって」
織畑 鶴乃　：「あ、えっと…！い、嫌じゃないです…！！」（ぶんぶん）
織畑 鶴乃　：「……入っても、いいんですか…？」
熊埜御堂 亜聡：「別に活動してるようなしてねーような部活だし、難しく考える必要もねーだろ」
熊埜御堂 明香：「うん！　わたしは歓迎するし、お兄ちゃんも「いいんじゃねぇの？」って言うと思うし、部長もきっと喜んでくれると思う！」
熊埜御堂 亜聡：「おい」
熊埜御堂 亜聡：「……まぁ、いいんじゃねぇの？」
織畑 鶴乃　：「……！！だ、だったら……、は、入りたいっ、ですっ……！！」
熊埜御堂 明香：「わぁ、よかった！　嬉しいな！」(ぱっと手を取る)
織畑 鶴乃　：「わぁ、わぁぁ…！！ミス研に入れてもらえたら、私、何でもやります…！」
熊埜御堂 亜聡：「何でもとか簡単に言わねー方がいいぞ。部長にコキ使われる」
熊埜御堂 明香：「ふ、普通に活動しよ！　ね！」
織畑 鶴乃　：「はい！！」

［秘匿（明香＆アリス）］
熊埜御堂 明香：「…アリスちゃんは、行きたいところある？」
アリス　：「そうね…。御伽 雀は半年前、ワスレモノを呼び出そうとしていたのよね？その後 彼女に何か影響がなかったのかしら…？」
熊埜御堂 明香：「……？　……あっ」
熊埜御堂 明香：「そっか。ゲーム部の人、お兄ちゃんなんだよね。…ゲーム部の人……」
アリス　：「ご明察よ。彼女をよく知る人に、彼女の話を聞きに行くのもいいと思うわ」
熊埜御堂 明香：「…わ、わたしはいいけど…アリスちゃんは、いいの？」
アリス　：「……今日は調べてもらう事も特にないしね。スマホをあの変態に預ける必要もないから、その辺は心配してないわ」
熊埜御堂 明香：「わ、わかった。絶対に渡さないようにする！」
アリス　：「……ええ、ありがとう明香…」

［秘匿（亜聡＆ドロシー）］
熊埜御堂 亜聡：「…あとドロシー、どっか行きたい場所あるか？」
ドロシー　：『……御伽 雀の事、誰かに聞くのはどうかと…』

熊埜御堂 亜聡 ： 「御伽 雀のことを……。……」
熊埜御堂 亜聡 ： 「……聞くなら職員室か、それかゲーム部だが？」

熊埜御堂 亜聡：「で、だ。この後なんだが、…ちっと話したいこともあるし。どっか溜まりてぇんだよな。」
熊埜御堂 明香：「あ、わたしも…」
熊埜御堂 亜聡：「ついでに CS にも絡む話があるからな。CS に詳しそうな奴…、……」
熊埜御堂 明香：「……となると、なんだよね」
織畑 鶴乃 ：「？」
熊埜御堂 明香：「…あ、あのね鶴乃ちゃん。一旦、ミス研に戻ってもらっておいてもいいかな」
熊埜御堂 明香：「部長に言ったら、きっと入部届とか出してもらえると思うし…」
織畑 鶴乃 ：「あっ、そうですね！ 入部するなら部長さんともお話しておかないとですよね！」
熊埜御堂 亜聡：「おー。そうしといてくれ」
熊埜御堂 亜聡：「…あ。っつーか部長、今日から花壇見張るつってたな。ってことは部室じゃねーな」
熊埜御堂 明香：「あっ、そういえばそうだったかも…」
熊埜御堂 亜聡：「織畑、校庭の花壇の方に向かってやってくれ」
織畑 鶴乃 ：「はい！じゃあ、行ってきます！また後で！」（ぶんぶん）

DL ： 手を振ってご機嫌で花壇へと向かいます

熊埜御堂 明香：「いってらっしゃーい！」
熊埜御堂 亜聡：「おー。……。…クソ素直だよな、あいつ」
熊埜御堂 明香：「うん、友達になれてよかった」
熊埜御堂 亜聡：「、……はっ、そうだな。よかったな。」 頭ぽん
熊埜御堂 明香：「わ、…もー」
熊埜御堂 明香：「…あのね、お兄ちゃん。…さっきオカルト部でね、わたし伝誦したの」
熊埜御堂 明香：ととりあえず一旦雀先輩の伝誦の情報だけ…
熊埜御堂 亜聡： （ありがとうございます！）…ん？？って感じで眉をしかめてます
熊埜御堂 亜聡：「……奇遇だな。俺もさっき、伝誦した。」
熊埜御堂 亜聡：という感じで、こちらも絵本部長の内容をお伝え。
熊埜御堂 明香：「どっちも半年前、…ワスレモノのおまじないに関する内容だね」
熊埜御堂 亜聡：「内容というか日記に書かれてる状況が似通ってる。っつーことは、ごく近い日…もしくは同じ日に書かれた日記だろうな」
熊埜御堂 亜聡：「…雀先輩は、ワスレモノを呼び出そうとしてたんだな」
熊埜御堂 明香：「…哀しい記憶を食べちゃう怪異を、かぁ」
熊埜御堂 亜聡：「…どういう理由があったのかは読み取れねーが、ここから分かるのは」
熊埜御堂 亜聡 ：「半年前。深夜 0 時、理科室に、雀先輩が行ってた…もしくは行こうとしてたはずだ。そんな遅い時間のことだ、身内なら詳しく覚えてるかもしれねー」
熊埜御堂 明香：「…うん。だから、話を聞きに行くべきなのは…ゲーム部の御伽先輩、だよね」
熊埜御堂 亜聡：「だな」

熊埜御堂 亜聡：「行くか。……お前ら３人の覚悟が決まったら」
熊埜御堂 明香：「だ、大丈夫、大丈夫だから！」
アリス　：「……行きましょう。そもそも、「行け」と言ったのは私だもの」
ドロシー　：『……私も、大丈夫…。……スマホをあの人に渡しさえしなければ』
熊埜御堂 亜聡：「今のところは予定ねーから安心しろ」 たぶん
熊埜御堂 明香：「今日は絶対に渡しません！」

DL　：……では、ゲーム部に向かいますか？
熊埜御堂 亜聡：行きます！
熊埜御堂 明香：行きます！
DL　：はーい！
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：ゲーム部では昨日と同じように、６人の男女がパソコンに向かい作業をしていたり、議論を繰り広げたりしている。

熊埜御堂 明香：「……」 昨日よりはコソッとした感じでお邪魔します…
熊埜御堂 亜聡：「…」 めっちゃ気にせず入っていきます

DL　：部員たちは夢中になっているのか、誰も気に留めませんね

熊埜御堂 亜聡：「…すんません、へんた……先輩。」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん」

DL　：では昨日と同じようにイヤホンを付けてパソコンに向かっている住吉を発見できますね

熊埜御堂 亜聡：「……。」 では、先輩の視界の端にドロシーちゃんをちらっと…
御伽 住吉　：「ん～……、もうちょいこうして……、……ん？……はっ」
ドロシー　：『（びくっ）』
熊埜御堂 亜聡：「（さっとスマホはしまう）」
熊埜御堂 亜聡：「お疲れッス。」
御伽 住吉　：「ドロシーちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんんんんんんんん！！！！！！……あっ」
熊埜御堂 亜聡：「開幕うるせぇ」
熊埜御堂 明香：「ひええ」
熊埜御堂 亜聡：「先輩、今ちょっと話いいスか？」
御伽 住吉　：「も～～～～、用事あんならフツーに呼べって……。何だよ？」
熊埜御堂 亜聡：「嬉しそうにしてたくせに」

熊埜御堂 明香：「集中してるみたいだった、ので…」
御伽 住吉　：「ああ、いつもの事だし気にせずに呼べって」
熊埜御堂 亜聡：「そんじゃ遠慮なく。さっき俺等、オカ研行ってきたんスけど」
熊埜御堂 亜聡：「御伽 雀先輩って、先輩の兄弟ッスか？」
御伽 住吉　：「……！」
御伽 住吉　：「…新入生なのによく知ってるな。そう、俺の妹だ。」
熊埜御堂 明香：「オカ研で、そう聞いて…」
熊埜御堂 亜聡：「まぁ、今行ってきたとこなんで」
御伽 住吉　：「……まぁ、そうか…。絵本も当事者だもんな……」
熊埜御堂 亜聡：「……ん？」
熊埜御堂 明香：「…当事者、って？」
御伽 住吉　：「……？妹の事故の事、オカ研で聞いてきたんじゃないのか？」
熊埜御堂 明香：「…じ、事故？」
熊埜御堂 亜聡：「……？？？」
熊埜御堂 明香：「あ、えっと、わ、…わたし達が聞いたのは、先輩と、雀先輩が兄妹だってことくらい…」
御伽 住吉　：「……あ、そうなのか…。すまねぇ、早とちりしてたわ俺…」 ばつが悪そうに
熊埜御堂 明香：「…何か、あったんですか？」
熊埜御堂 亜聡：「……事故って、何スか？」
御伽 住吉　：「……ウチの妹は、半年前に理科室で死んだ。くだらないおまじないを試してる途中で、足を滑らせて頭を机の角にぶつけてな。なんでもワスレモノっていう嫌なことを忘れさせてくれるお化けを呼び出そうとしたんだと。」
熊埜御堂 亜聡：「っ、半年前、……、」
御伽 住吉　：「…妹が死ぬ前日な、俺とめっちゃ喧嘩したんだ。もし雀がその喧嘩のこと忘れようと思って、おまじないをしようとしたんなら、あいつが死んだのは俺のせいかもしんねえな…。」

DL　：困ったような顔で、住吉はそう答えます

熊埜御堂 明香：「、……そ、そうだったんです、ね」
熊埜御堂 明香：「ごめんなさい、言いにくいこと…」
御伽 住吉　：「いや、知らなかったんだろ？じゃあ仕方ないさ。気にすんな」
熊埜御堂 明香：「……じゃあ、オカ研って今…二人だけ、なんですね」
御伽 住吉　：「そうみたいだな。まぁ、俺は雀の事故の件以来 オカ研に行ってないから詳しく知らないけど…」
熊埜御堂 亜聡：「でも部として成立すんのって、3人からじゃなかったか」
熊埜御堂 明香：「……あ、」
熊埜御堂 明香：「じゃあ、あの生徒会からの通告って勘違いじゃなかったんだ…」
熊埜御堂 亜聡：「通告？」
御伽 住吉　：「？」
熊埜御堂 明香：「あ、えっと……オカ研の部室でね、生徒会から「オカルト研究部は現状2人以下なので部として認められない、部室明け渡してください」って通告書があって…」
熊埜御堂 明香：「最初は見間違いかなって思ったけど、二人だけなら見間違いじゃないよねって…今」

熊埜御堂 亜聡：「……」

御伽 住吉　：「あ～……。そうか……オカ研、無くなっちまうのか……」

御伽 住吉　：「……あの、さ…」

熊埜御堂 亜聡：「…ん？」

御伽 住吉　：「……絵本の様子、どうだった…？落ち込んでたりしてなかったか…？」

熊埜御堂 明香：「…ええと、わたし達は小波先輩とは初対面だから、普段がどうなのかは分かんないけど…」

熊埜御堂 明香：「……素っ気ない人、だなとは思いました」

御伽 住吉　：「……うん、俺も…最初はそう思ってた…」

御伽 住吉　：「でも絵本はな…、雀の事 何だかんだ大事にして、面倒見てくれてて…。雀も、きっとアイツの事が好きだったんだと思う」

熊埜御堂 明香：「！」(はわわ)

熊埜御堂 亜聡：「……。それ。オカ研にいた時から、正直ずっと気にはなってた。」

熊埜御堂 亜聡：「小波部長と雀先輩ってもともと親しい関係だったんスか？……小波部長と話してると、妙に雀先輩の名前を出すことが多くて」

熊埜御堂 亜聡：「『雀が勧めたからCSを始めた』とか、『雀が好きな本だ』とか。」

御伽 住吉　：「交流が始まったのは雀がオカ研に入ってからみたいだけどさ、いっつも雀が絵本を振り回してたよ」

御伽 住吉　：「……さっきさ、「妹が死ぬ前日に俺とめっちゃ喧嘩した」って言っただろ？」

熊埜御堂 亜聡：「ん」

御伽 住吉　：「あれな……、俺がちょっと、絵本の事を悪く言っちまったのが原因なんだ……」

熊埜御堂 亜聡：「……あぁ。……なんとなく、理解できた気がする」

熊埜御堂 明香：「…それで、ケンカになっちゃったんだ」

御伽 住吉　：「ああ……。……雀が死んだ後、絵本にも強く当たっちまって……、ホント俺、ひでぇ兄貴だよなぁ…」 アハハ…と、力なく苦笑いしながら

熊埜御堂 明香：「……でも、あの」

熊埜御堂 明香：「仲直りには、まだ遅くないんじゃ、ないかな」

熊埜御堂 亜聡：「…明香？」

御伽 住吉　：「？仲直り……？」

熊埜御堂 明香：「だって、きっと、…御伽先輩と小波先輩は悲しい気持ちを共有できる筈なのに」

熊埜御堂 明香：「寧ろ、分かってあげられるのお互いだけなんじゃ…って。だって、二人共雀先輩を大事に思ってたからこそ、だと思うし」

熊埜御堂 明香：「…時間を置いて、冷静になれた今なら、…ひどい事なんて言わないと思うし……」

熊埜御堂 亜聡：「……」

御伽 住吉　：「……今更「あの時はゴメン！」では済まねぇよ……。ひでぇ事ばっか言っちまってんだし…」

熊埜御堂 明香：「…じゃあ、このままでいいんですか？」

熊埜御堂 明香：「小波先輩しか知らない雀先輩の事、知らないままでいいの？　…御伽先輩しか知らない雀先輩の事、小波先輩が知らないままでもいいの？」

熊埜御堂 明香：「…そんなんじゃ、誰も整理なんてつかないままなの、…雀先輩、かわいそうだよ」

御伽 住吉　：「……ゴメンな。どちらにせよ、オカ研にはいけねえよ。絵本にあわす顔がないからな。」

熊埜御堂 亜聡：「……立ってるだけで、十分すよ。」……ぼそり

熊埜御堂 亜聡：「……立ってられるだけで……」

熊埜御堂 明香：「……」
御伽 住吉　：「……え？」
熊埜御堂 亜聡：「……何でもねー。」
熊埜御堂 亜聡：「抱えていられるだけ、偉いなと思っただけ。」
御伽 住吉　：「と、とにかく…。俺はもう、ある程度は立ち直ってるから…」
熊埜御堂 亜聡：「ふぅん。…」
熊埜御堂 明香：「……急に、こんな話しちゃってごめんなさい」
御伽 住吉　：「い、いや……。こっちこそ、なんか気を遣わせてゴメン…」
熊埜御堂 明香：「お、押しかけて話したのはこっちなので…！」
熊埜御堂 亜聡：「……。ま、聞きたかったのはそれだけなんで。俺はもういいッス。」 ぷい
御伽 住吉　：「そ、そうか…？……えーっと…、あ、『CS』！伝誦交換でもする…？」（あたふた）
熊埜御堂 明香：「あ、…じゃあ」
熊埜御堂 明香：「わたし、今日はもう押しちゃったから。先輩がまだなら」
熊埜御堂 亜聡：「おもしろい爆笑ネタ日記でも書いたんスか」
御伽 住吉　：「他人の日記にそんなモン期待すんなよ！」

DL　： 場の空気を変えようと住吉が伝誦の交換を提案してきますが、明香さんが交換しますか？（ボタンは住吉が押します）
熊埜御堂 明香：お兄ちゃんが良ければ明香が…
熊埜御堂 亜聡：（兄は OK です！）

熊埜御堂 明香：「でもわたしとお兄ちゃんの日記にはドラミングおじさんが出てきますよ？」
御伽 住吉　：「なにそれ」
熊埜御堂 明香：「一晩で縫月市から天築市に移動するドラミングするおじさん…」
御伽 住吉　：「すごい。話聞いても何一つ理解できない」
熊埜御堂 亜聡：「まぁ試しに交換してみたらどうすか」
御伽 住吉　：「お、おう…。じゃ、そうすっか…」（ぴっ）

DL　： では情報タブに貼り付けますので少々お待ちを

［情報］ ▼伝誦：御伽住吉
（昨日の内容）
このアプリは謎が多い。個人が趣味で作ったなら納得できる。
しかし、具体的に何とははっきり言えないが、このゲームには明確な目的があるように思える。
（キャラクターは緑色を基調とした魔女）

熊埜御堂 明香：「わ、届いた。……明確な、目的？」
御伽 住吉　：「……家の前でおっさんがドラミング…？？？？」

熊埜御堂 亜聡：「交換した両方が「？」って顔してやがる」
熊埜御堂 明香：「あの、明確な目的ってなんですか？」
御伽 住吉　：「ん～…、なんっつったら良いのかな…。このゲームを通して何かをしようとしてる、って気がした、って言えばいいのかな…」
熊埜御堂 明香：「何か…」
御伽 住吉　：「俺らゲーム部はさ、「プレイヤーに楽しんでもらう事」を目的にゲーム作ったりもしてるワケだけど…。それとはなんか違う気がしたんだよな…。何となくだけどさ」
熊埜御堂 明香：「……つまり「ゲームを遊んでもらう」だけじゃないゲーム？」
熊埜御堂 亜聡：「……。正直、まだ点は点なんだが」
熊埜御堂 亜聡：「しいて憶測だけで言うなら……、俺等がゲームを「楽しむ」ことの範疇を超えて何かを期待してそうな態度を取ってた人なら、一人だけだが、覚えがあるぐらいか」
熊埜御堂 明香：「……ううん」
熊埜御堂 明香：「なんか…なんかもう」
熊埜御堂 明香：「……どうしよう、お兄ちゃん～……」
熊埜御堂 亜聡：「どうしようって、お前な…」
熊埜御堂 亜聡：「……あ゛ー…。なるようになる。無理に思いつめんな」
熊埜御堂 明香：「……うん」
御伽 住吉　：「あ～……、よく分かんねぇけど…大丈夫か？」
熊埜御堂 亜聡：「あー、まぁ…はい。とりあえずは。」
熊埜御堂 亜聡：「また何か教えてほしいことがあったら聞きにきます」
御伽 住吉　：「お、おう……。無理はすんなよ……」
熊埜御堂 明香：「はい、……ありがとうございました…」
熊埜御堂 亜聡：「……そうだ。俺から最後に、一つだけ。」
熊埜御堂 亜聡：「魔女の色。確か先輩、喜怒哀楽を表してるっつってましたよね。……青は？」
御伽 住吉　：「ん？ああ、そうだな。青はな…」
御伽 住吉　：「……”哀しみ”だな」
熊埜御堂 明香：「、……」
熊埜御堂 亜聡：「ん。…じゃあ」
熊埜御堂 亜聡：「赤は？」
御伽 住吉　：「赤は”怒り”だ。そして黄色は”喜び”、緑は”楽しみ”だ」
熊埜御堂 亜聡：「ん。…どーも。」
熊埜御堂 亜聡：「俺からはそれだけ。」
御伽 住吉　：「おう、じゃあまたなんか聞きたい事あったらいつでも来いよ」
熊埜御堂 明香：「はい、…ありがとうございました」
熊埜御堂 亜聡：「おー」

DL　：ではゲーム部から出ますか？
熊埜御堂 明香：出ます…！
熊埜御堂 亜聡：出ます！
DL　：了解です！では住吉に見送られながらゲーム部を後にします。

DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：ではお 2 人がゲーム部から出た直後、お 2 人のスマホから「ﾆｬｲﾝ」と通知音が聞こえます。

熊埜御堂 亜聡：「（ﾆｬｲﾝ!）……ん？」 スマホ見ますね！

DL　：確認してみると、ミス研のグループニャインに八雲からメッセージが届いています。

熊埜御堂 亜聡：「……明香。部長から何かきてるぞ」 言いつつ、メッセージ開いてみますね
熊埜御堂 明香：「あ、うん。なんだろ」

DL　：はーい、では確認するとですね

八雲 芳一　：『そろそろ暗くなってきたから織畑君を帰らせる。部室に荷物を取りに来るだろうから、その後に部室の戸締りをしてから帰ってくれ。私は最終下校時刻ギリギリまで花壇の見張りを続ける』

DL　：との事です

熊埜御堂 亜聡：「マジで真面目にやってんのかよ、花壇の見張り」
熊埜御堂 明香：「熱心だなぁ、…それじゃあ鶴乃ちゃんのお迎え行こっか」
熊埜御堂 亜聡：「しゃーねぇな…」

DL　：では鶴乃を迎えに、花壇へ移動しますか？（部室の方で待ってても OK です）
熊埜御堂 明香：移動します！
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃんと一緒に！
DL　：はーい、では 2 人で花壇に向かってとっとこ歩き始めます

DL　：もう少しで 19 時、辺りは大分薄暗くなってきています。2 人で並んで廊下を歩きます

熊埜御堂 亜聡：「……なんか、いろいろあったな…。」 はぁ
熊埜御堂 明香：「…そうだね。疲れちゃった」
熊埜御堂 亜聡：「ここ数日は動き回ってるからな。……大丈夫か？」
熊埜御堂 明香：「うん、平気。……あ、でも今日は」
熊埜御堂 明香：「…そっち泊まっちゃだめ？」
熊埜御堂 亜聡：「あ？ 俺の部屋か」
熊埜御堂 明香：「うん。だめなら、いいんだけど」

熊埜御堂 亜聡：「…。…むしろ、昨日にでも来るかと思ってたんだけどな。俺は。」ぷい
熊埜御堂 明香：「えへへ、…でもそうだなぁ」
熊埜御堂 明香：「昨日よりは、今日の方がちょっと、つらいかな」
熊埜御堂 亜聡：「……。昨日で音を上げなかっただけ、感心してたってことだ」 頭ぽん
熊埜御堂 明香：「わ、」
熊埜御堂 亜聡：「さっさと行くぞ。晩飯は何にする」
熊埜御堂 明香：「…うん！　じゃあ、わたしが何か作ろっか？　お兄ちゃんは何がいい？」
熊埜御堂 亜聡：「あー…じゃあなんか、卵。」
熊埜御堂 明香：「もう、もっと具体的に言ってよ！　…じゃあカニ玉ね」
熊埜御堂 亜聡：「お、いいな。中華って言う手間が省けた」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、もっとちゃんと料理名で言って！」
熊埜御堂 亜聡：「うっせうっせ。通じたんだからいいだろ」
熊埜御堂 亜聡：（さっきまでぺったぺった歩いてたのが、帰ったら明香ちゃんのかに玉だと思った途端ちょっと歩く速度が上がります）
熊埜御堂 明香：「もー！」

DL　：ではそんな会話をしつつ、鶴乃を迎えに廊下を進んで行く。……が、

DL　：――廊下を歩いていると、視界が一瞬、テレビノイズのように歪む。
DL　：砂嵐はすぐに収まった。
DL　：暗い、赤い、黒い、あの異界だ。
DL　：歩く生徒はまるで死人に見えた。常世の国を闊歩する住人のように、揺れ動く。

熊埜御堂 明香：「、お兄ちゃん……」 腕をぎゅっ
熊埜御堂 亜聡：「、……」 少し前に出ます

DL　：なむあみだ、かくあれかし、祈るように立ちすくむ。震える足は微動だにしない。

？？？？？？：「うしろのしょうめん」

DL　：突然、背後から声が響く。少女の声、いや少女の声だったか？人間の声だったか？
DL　：そもそも「うしろのしょうめん」と言ったか？

熊埜御堂 明香：「っ！」ぎゅう
熊埜御堂 亜聡：「……。明香、目ぇ閉じてろ」
熊埜御堂 明香：「で、でも、」

？？？？？？：「うしろのしょうめん」

DL　：もう一度、音がする。聞こえた音と、脳が認識する内容が異なる。

これは空気の振動がなす聴覚の内容ではない。

？？？？？？：「うしろのしょうめん」

DL　：意思とは関係なく、ゆっくりと首が回転する。

熊埜御堂 亜聡：「っ、……！…しつけぇな！……っ！」
熊埜御堂 明香：「っひ、…」

DL　：振り返った先にいたのは、

？？？？？？：「だーれだ？」

DL　：黒い怪異だった。
DL　：異常に大きな頭の重みだろうか、首があらぬ方向に曲がっている。
左右非対称の眼窩は深く暗く、奈落を思わせるように落ち窪んでいる。
DL　：…逃げよう。反射的に向き直り、一歩踏み出した瞬間。足が完全に止まった。

熊埜御堂 亜聡：「っ明香、逃げるぞ！、……！？」
熊埜御堂 明香：「っ、お兄ちゃ、…っ！」

DL　：生徒たちが全員立ち止まり、君を見ていた。

？？？？？？：「「「「「だーれだ？」」」」」

DL　：無表情で、そう言った。
DL　：……ではここで、本日の共鳴判定となります

[情報] 共鳴判定（強度5／上昇1D3）
∞共鳴感情：[恐怖（情念）]

熊埜御堂 亜聡：つ、通常ダイスで行きます…
熊埜御堂 明香：ふぇえ、ルーツ被ってます…
DL　：では例の如く、明香さんはダイス+1 個ですね…
DL　：では判定お願い致します！

熊埜御堂 明香：(4+1)DM<=5 共鳴判定（ルーツ属性一致）（5DM<=5）＞ [1, 2, 2, 9, 6] ＞ 4 ＞ 成功数 4 ミラクル!
熊埜御堂 亜聡：3DM<=5〈∞共鳴〉(3DM<=5) ＞ [7, 1, 8] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 明香：ふぁっ
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃーーーん！！！
DL　：おっと、ではお二人とも 1d3 どうぞ…！

熊埜御堂 明香：1d3 (1D3) ＞ 1
熊埜御堂 亜聡：1d3 (1D3) ＞ 2

system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：3 → 5
system：[熊埜御堂 明香] 共鳴：4 → 5

熊埜御堂 明香：な、なかよし…
熊埜御堂 亜聡：なかよしですネ…
DL　：そして明香さんはトリプル以上なので変調ダイスをお願い致します…！（1ｄ6）

熊埜御堂 明香：1d6 (1D6) ＞ 2

［情報］2：幻覚
見えないはずのものが見え、聞こえないはずの音が聞こえる。しかし、それは本当に存在しない声だろうか？
PL が望むなら、〈＊知覚〉〈観察眼〉〈聞き耳〉〈★霊感〉などで判定することができる。成功すると、《怪異》に関する情報を一つ得ることができる。
具体的にどのような情報を渡すのかは DL が決定する。
ただしこの情報を受け取った場合、あなたの〈∞共鳴〉レベルは即座に 1 上昇する。

熊埜御堂 明香：「っ、ひ……！」
熊埜御堂 亜聡：「っ、…！！！」 ぎり、っと歯を噛みしめて

DL　：ではそういった所で、お二人の視界はいつも通りに戻ります

熊埜御堂 明香：「…っう、…ぐすっ、……」
熊埜御堂 亜聡：「…ッ、……クソ」
熊埜御堂 亜聡：「明香、すぐに帰るぞ。もう見るな。聞くな。これ以上、何にも気付くな。歩けるか？」 手をぐいっと引っ張ろうとします
熊埜御堂 明香：「…うん、…うん」
熊埜御堂 明香：「……」 手をぎゅう
熊埜御堂 亜聡：「大丈夫だ。もう何もない。何もいない。こんなところすぐに離れる。だからもう、大丈夫だ。」
熊埜御堂 亜聡：「……大丈夫だ。俺がついてる」
熊埜御堂 明香：「……うん」
熊埜御堂 明香：「…ずっといっしょ？」
熊埜御堂 亜聡：「あぁ。ずっと一緒だ。今日も、…明日も、ずっと」

熊埜御堂 明香：「……うん」

DL　：（ちなみにですが…、〈＊知覚〉〈観察眼〉〈聞き耳〉〈★霊感〉などで判定はしません…？）
熊埜御堂 明香：(怖いのでしたくないです…)
DL　：（了解です！）
熊埜御堂 亜聡：（お兄ちゃんはもうこれ以上見るな聞くなって引っ張っていきます）
DL　：はーい、ではお 2 人は足早に廊下を通り抜けて花壇へと向かうでしょう…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：花壇では鶴乃と八雲が雑談しながら並んで見張りをしていますね
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃんの手を強く握ったまま足早に近づいていきますね

織畑 鶴乃　：「あ、明香ちゃん！亜聡君！……ってあれ…？二人とも、何だか顔色が悪くないですか…？」
熊埜御堂 明香：「…あ、…な、なんだろ。…今日は、疲れたから、かな」
熊埜御堂 亜聡：「……」　めちゃくちゃ怖い顔してます
織畑 鶴乃　：「え、大丈夫ですか！？具合悪いとか…？無理はしないで下さい…！」
熊埜御堂 明香：「だ、だいじょうぶだよ！　もう下校時間だし…あとは、帰るだけだから」
熊埜御堂 明香：「…しんぱいしてくれて、ありがとう。ね？」
八雲 芳一　：「……具合が悪いのなら、部室の戸締りはやはり私がやっておく。早く帰って休め」
熊埜御堂 明香：「…はい、…ごめんなさい、部長」
熊埜御堂 亜聡：「そうさせてもらうッス」
八雲 芳一　：「織畑君も今日はもう暗くなってきたから帰りなさい。入部の事はまた後日、ゆっくり話そう」
織畑 鶴乃　：「は、はい…！お話、聞いて下さってありがとうございました！」（ぺこり）

DL　：では鶴乃と一緒に部室へ荷物を取りに行きますか？
熊埜御堂 明香：ちょっとふらふらになりつつ、着いて行こうとしますかね
熊埜御堂 亜聡：……部室棟に戻りたくないですね。明香ちゃんの腕を握って引き止めます

熊埜御堂 明香：「わ、……お兄ちゃん、？」
熊埜御堂 亜聡：「…織畑。荷物取ってきたら、正門で集合できるか？」
織畑 鶴乃　：「…は、はい……。あ、あの…。もしよかったらなんですけど…、私がお 2 人の荷物も一緒に持って来ましょうか…？」
熊埜御堂 亜聡：「あぁ、頼む」
織畑 鶴乃　：「は、はい…！なるべく早く戻ってきます…！」
熊埜御堂 明香：「で、でも、鶴乃ちゃんひとりじゃ、」
熊埜御堂 亜聡：「なら通話でも繋げとけ。」
八雲 芳一　：「なら私が一緒に行こう。今日はもう、見張りは中断だ」

熊埜御堂 亜聡：「頼みました。部長。」しれっ
八雲 芳一　：「全く…お前は本当に調子がいいな、亜聡…。まぁ、どのみち戸締りをしに戻るつもりだったから構わないが」
熊埜御堂 明香：「……ごめん、なさい」
八雲 芳一　：「ああ、気にするな明香。その辺に座って休んでろ」
熊埜御堂 亜聡：「…。お前はここにいればいい。謝んな」
熊埜御堂 明香：「……」
八雲 芳一　：「じゃあ、さっさと行って戻ってくるとするか。……じゃあ、行こうか織畑君」
織畑 鶴乃　：「あ、はい！……じゃあ 2 人とも、ちょっと待っててくださいね！行ってきまーす！」

DL　：そう言い残して、鶴乃と八雲は部室へ向かいますね

アリス　：「……明香、大丈夫…？」
熊埜御堂 明香：「…アリスちゃん…うん、とりあえずはだいじょうぶ」
熊埜御堂 亜聡：「……ドロシー。アリスでもいい。…"あいつ"は何だ？」
ドロシー　：『……あれは「カゴノトリ」…』
熊埜御堂 亜聡：「……カゴノトリ？」
アリス　：「この学校に元々棲み付いている怪異のようね。特に人間に危害を加えるつもりは無いようだから、そこは安心していいと思うわ」
熊埜御堂 明香：「…そっか」
熊埜御堂 亜聡：「害は無いんだな？」
ドロシー　：『カゴノトリは、霊感の強い者に「うしろのしょうめん」と問いかけてくる事しかしてこないから…』
熊埜御堂 亜聡：「……。……そうか」…はぁ
熊埜御堂 亜聡：「ならいい。……名前が分かり、害がないことが分かれば。」
熊埜御堂 亜聡：「もう、さっきほど怖くはねーな。明香。」
熊埜御堂 明香：「…うん」
熊埜御堂 明香：「…でも、もうちょっとだけ握っててほしいな。…だめ？」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「しゃーねぇな」 ぎゅう
熊埜御堂 明香：「…えへへ」
アリス　：「……少しは元気になったかしら？」
熊埜御堂 明香：「…うん。ごめんね、心配かけちゃった」
アリス　：「…大事に想っていなければ心配する事も無い…。皆、貴女を愛しているから心配するのよ。だから、本気で心配してくれている人には甘えてもいいの。ね？」
熊埜御堂 明香：「……アリスちゃんにも？」
アリス　：「ふふっ、勿論よ！」
熊埜御堂 明香：「…そっか、嬉しいな」

アリス　：「……ところで明香、いきなり話変えて申し訳ないけど…聞きたかった事、聞いてもいいかしら…？」
熊埜御堂 明香：「？　なぁに？」

アリス　：「最初に私が、『一度だけ私が何者か告げなさい』と言った事 覚えてる？」
アリス　：「私が何者か…その答えは、そろそろ分かったかしら？」
熊埜御堂 明香：「……えっ、今！？」
アリス　：「……その顔は、すっかり忘れていたわね…？」
熊埜御堂 明香：「だ、だって本当にいろいろ、ありすぎて…！」
熊埜御堂 亜聡：「（なんの話だって顔してる）」
アリス　：「確かにあの状況なら仕方ないわね…。亜聡もまったく事情を呑み込めてないし……」
アリス　：「……なら、もう少しだけ猶予をあげるわ。明日の調査が終わった時にもう一度 聞くから、答えを考えておいてね」
熊埜御堂 明香：「…う、うん。……お兄ちゃんと相談してもいい…？」
アリス　：「ええ、構わないわよ」
熊埜御堂 亜聡：「……。謎かけの答えを聞いてきてるってことでいいか？　なら、答えにたどり着くためのヒントはもう明香に渡ってるって理解でいいな？」
アリス　：「そうね。その認識で合っているわ」
熊埜御堂 亜聡：「そーか。わかった。…相談されるらしーし、あとで話聞いてやるよ」

DL　：ではそんなやり取りをしているところで、鶴乃と八雲が荷物を持って戻ってきますね

織畑 鶴乃　：「お待たせしました～！明香ちゃん、具合大丈夫ですか…？」
熊埜御堂 明香：「あ、鶴乃ちゃん！　うん、ちょっと休ませてもらったらだいぶ楽になったよ」
熊埜御堂 明香：「ごめんね、荷物取って来てもらっちゃって…心配してくれて、ありがとう」
織畑 鶴乃　：「いえいえ！ちょっとでも元気になってくれたなら良かったです！」
熊埜御堂 亜聡：「おー織畑。俺の荷物クソ軽かっただろ」（ほぼ空のカバン）
熊埜御堂 明香：「あ、また置き勉してるでしょ！」
織畑 鶴乃　：「はい！高校生のカバンでこんなに軽い人珍しいんじゃないかと思いました！」
熊埜御堂 亜聡：「学校でしか使わねーんだからいいだろ教科書なんざ。」
熊埜御堂 明香：「予習とかどうするの！」
熊埜御堂 亜聡：「なんだそれ」
八雲 芳一　：「全く……お前という奴は……。……ほら明香、お前のカバンはこっちだ」（すっ）
熊埜御堂 明香：「あ、ありがとうございます部長」
八雲 芳一　：「今日は夜更かしせずに早く休めよ。……では諸君、私はこれにて失礼する。明日も調査に励めよ」

DL　：そう言って八雲は帰って行きます

熊埜御堂 明香：「お疲れさまでした、部長！　…じゃあ、わたし達も帰ろっか」
熊埜御堂 亜聡：「おー。行くぞ織畑。」
織畑 鶴乃　：「はい！今日もお疲れ様でした！」

DL　：では鶴乃と一緒に下校しますか？（寄り道も OK です）

熊埜御堂 亜聡：下校します！　…今日はどこか寄っていきます？
熊埜御堂 明香：買い物しましょう、スーパー！
熊埜御堂 亜聡：行きましょう！かに玉かに玉！

織畑 鶴乃　：「あ、今日はコンビニじゃなくてスーパーなんですね？」
熊埜御堂 明香：「うん、わたし今日はお兄ちゃんのところにお泊りするから…夕ご飯作ってあげようかなって」
織畑 鶴乃　：「わぁ……。いいなぁ……」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「…ご飯、食べにくる？」
熊埜御堂 亜聡：「は？」
織畑 鶴乃　：「い、いいんですかっ…！？」
熊埜御堂 明香：「うん！　どうせいっぱい作っちゃうんだから、人数は多い方がいいかなって」
熊埜御堂 亜聡：「おいメイ、俺の家だぞ」
織畑 鶴乃　：「わぁ…！嬉しいです…！ぜひ行きたいです…！」
熊埜御堂 明香：「えー、…だめ？　お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「だ、……」
熊埜御堂 亜聡：「……文句言うなよ、織畑。いろいろ。」
織畑 鶴乃　：「い、言わないですよ！誘って頂いてるのに…！」
熊埜御堂 亜聡：「よし、言ったな。」
熊埜御堂 明香：「…お兄ちゃん、まさか…」
熊埜御堂 亜聡：「ほら、さっさと行くぞ。スーパーの入口で止まるな止まるな」 無視
熊埜御堂 明香：「あっ、こら！　もし散らかってたら怒るからね！」
熊埜御堂 亜聡：「あーあー。まだそうと決まったわけじゃねーだろ」
織畑 鶴乃　：「あ、じゃあ私 家族に「友達の家でごはん食べてくる」って報告するついでに荷物置きに行ってきます！」
熊埜御堂 亜聡：「あ？…、おー」
熊埜御堂 明香：「え、道暗いけど大丈夫？」
織畑 鶴乃　：「そんなに遠くないから大丈夫ですよ！」
熊埜御堂 明香：「そっか、じゃあ気を付けてね？　また後でね！」
織畑 鶴乃　：「はい！…また後で！」

DL　：そう言って鶴乃とはスーパーの前で一旦別れる形になりますね

熊埜御堂 亜聡：「……あいつの分もポテチ買っとくか。」 ぽーい
熊埜御堂 明香：「…鶴乃ちゃんが来るまでにちゃんとお部屋片づけようね？」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「わーったよ！……。」

DL　：……ではそんな感じで買い物を済ませ、スーパーの前で鶴乃を待ちます

DL　：……が、待てど暮らせど鶴乃は戻ってきません。いくら何でも遅すぎます

熊埜御堂 亜聡：「……遅ぇ」
熊埜御堂 明香：「…どうしたのかな」
熊埜御堂 明香：「あ、そうだ。電話…」 とかけてみたいです…！

DL　：では明香さんが電話を掛けてみますが……、例の如く出る気配がありません

熊埜御堂 明香：「…でない…」
熊埜御堂 亜聡：「……あいつ、まさか…またか？」
熊埜御堂 明香：「またって……また？」
熊埜御堂 亜聡：「また。……」
熊埜御堂 明香：「…鶴乃ちゃんのお家、行ってみる？」
熊埜御堂 亜聡：「あ？……あー、そういや住所聞いてたな。」
熊埜御堂 亜聡：「このまま待ってても埒が明かねーし。…行くか」
熊埜御堂 明香：「…うん！」

DL　：ではスーパーから鶴乃の自宅へ移動しますか？
熊埜御堂 明香：移動します…！
熊埜御堂 亜聡：します！
DL　：はーい！

DL　：…川崎先生から教えてもらった鶴乃の自宅は、スーパーから歩きで 10 分と言った所でしょう
DL　：何の変哲もない、普通の一軒家です
熊埜御堂 明香：では、ちょっと恐る恐るインターホンを…
熊埜御堂 亜聡：近くで見守ってます！
DL　：了解です！ぴんぽーん……

DL　：choice[父親,母親] (choice[父親,母親]) ＞ 父親

鶴乃の父　：「……はい、どちら様でしょうか？」　鶴乃の父親らしき人が出てきます
熊埜御堂 明香：「あ、あの…わたし、鶴乃ちゃ…織畑さんの学校の友達で、…織畑さん、帰ってきてますか…？」
鶴乃の父　：「……いや、金曜日の晩から帰ってきていないが…。……はぁ、また教師が何か言い触らしてるのか……」 ため息交じりにそう答えます
熊埜御堂 明香：「金曜日、から…一度も、ですか…？」
鶴乃の父　：「ああ、妻も会っていないらしい。全く、どこをほっつき歩いているんだか……。ご近所の目もあるんだから、不良みたいな真似しないで欲しいもんだよ…」（はぁ……）
熊埜御堂 明香：「…あの、帰ってこない前の…様子とかは…何か」
鶴乃の父　：「さぁ？いつもと変わらなかったんじゃないか？」

熊埜御堂 明香：「…さぁ？」
鶴乃の父　：「正直 仕事が忙しいし、娘に構ってる暇なんてないんだよ…。ああもう、さっさと帰ってくればいいものを…」
熊埜御堂 亜聡：「……。……そーッスか。そりゃ、失礼しました。」
熊埜御堂 亜聡：「ちなみに、覚えてたらでいいんすけど。…織畑の口から聞いた、もしくは書いたものでもいいや。「ワスレモノ」って言葉に心当たりないすか」
鶴乃の父　：「何だそれは…？全くもって覚えがないが…？」
熊埜御堂 亜聡：「…そ。ならいいっす」
鶴乃の父　：「よくわからんが……。娘が何を考えているかも知らんし、聞かれても困るというのが本音だ。だからもう、用が済んだなら帰ってくれないか？」
熊埜御堂 亜聡：「……。わかりました。」
熊埜御堂 亜聡：「帰るぞ、メイ。」
熊埜御堂 明香：「あ、お兄ちゃん…！　ええと、…し、失礼します！」
鶴乃の父　：「……」（ﾊﾞﾀﾝｯ）

鶴乃の父　： 振り返ることなく扉を閉めます

熊埜御堂 明香：「……帰って、なかったね」
熊埜御堂 亜聡：「……だな」
熊埜御堂 亜聡：「……たぶんだが。今日はもう、あいつには会えない」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 亜聡：「…"また明日"だ。帰るぞ。」
熊埜御堂 明香：「…うん」

DL　：ではこのまま亜聡君の家に向かいますか？
熊埜御堂 明香：向かいます…！
熊埜御堂 亜聡：帰ります！
DL　：はーい、では少し気持ちが重くなっているかもしれませんね。2 人で亜聡君の家に向かいます…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：……さて、家に入る前に…亜聡君
熊埜御堂 亜聡：ﾊｲ
DL　：生存判定の時間です。張り切ってどうぞ！
熊埜御堂 亜聡：了解です！さぁぴかぴか部屋来い！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊生存〉(1DM<=3) ＞ [8] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：はい
DL　：ハイ
熊埜御堂 明香：お兄ちゃん

ドロシー　：『……亜聡』
熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「……」 全力でそっぽ向いてる
ドロシー　：『……私はまだ、ヒトの事はよくわかっていない。けど…』
ドロシー　：『……この部屋が、ヒトの棲んでいていい環境じゃない、って事だけは、確信してる……』
熊埜御堂 亜聡：「そーか。……残念だったな。見ての通り、昨日も帰ってきた俺の部屋だ」
熊埜御堂 亜聡：「昨日は、お前も、帰ってきてた、俺の、部屋だ」
熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「あ？……あっ」 顔を見て
熊埜御堂 明香：「……わたし、ご飯作ってくるから」
熊埜御堂 明香：「それまでに、"全部"片づけておいてね？」
熊埜御堂 亜聡：「…い、……いや、普通に無理、」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん」
ドロシー　：『……亜聡…』（じと…）
熊埜御堂 亜聡：「……おう」

熊埜御堂 明香：では頷いて台所へ
熊埜御堂 亜聡：めちゃくちゃ神妙な顔をしながら、足元に転がる雑誌から手に取ります…
DL　：はーい、せっかくなのでお 2 人とも何かこじつけて判定します？ <料理とお片付け
熊埜御堂 亜聡：判定か、何にしようか…
熊埜御堂 亜聡：隠匿か危機察知……？
熊埜御堂 明香：あ、じゃあ検索とか電脳とかで美味しいカニ玉のレシピを探すとか可能ですか？
DL　：いいですよ！お二人ともお好きな方で判定どうぞ！
熊埜御堂 明香：では電脳で！
熊埜御堂 亜聡：では危機察知で！　…BD 使います！
DL　：ここで BD 使うお兄ちゃん草。いいですよ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈電脳〉(2DM<=7) ＞ [6, 9] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
熊埜御堂 亜聡：2DM<=5〈危機察知〉(2DM<=5) ＞ [6, 2] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：4 → 3

DL　：では綺麗に片付きましたね！

熊埜御堂 亜聡：「……（…ぜー…はー…）……くそ疲れた」
ドロシー　：『亜聡はやればできる子…。えらかったよ…』（ぱちぱち）

熊埜御堂 亜聡：「…おー……ありがとな…」

DL　：では片付けが済んだタイミングで、台所の方から美味しそうな匂いが漂ってきます

熊埜御堂 亜聡：「……なんとか間に合ったか」
熊埜御堂 明香：「…お兄ちゃーん、片付いたー？」
熊埜御堂 亜聡：「…おー」
アリス　：「あら、あの汚部屋が見違えるほど綺麗になってるじゃない！頑張ったわね～」
熊埜御堂 明香：「ほんとー？」(ひょこっ)
熊埜御堂 亜聡：「うるせーなアリス」
熊埜御堂 明香：「わぁ、本当だ！　すごいよお兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「……。」 まんざらでもない顔
ドロシー　：『うん。亜聡、真面目に片付けてたよ』
熊埜御堂 明香：「えへへ、それじゃあ頑張ったお兄ちゃんにはご褒美がなくちゃだね！　ご飯持ってくからテーブル拭いてー」
熊埜御堂 亜聡：「はいはい。……」　気だるげな返事をしつつ、ちゃんと机ふきふき
アリス　：「明香のかに玉も、とっても美味しそうにできたわよ！」
熊埜御堂 亜聡：「そーか。今日は焦がさずに済んだんだな」
熊埜御堂 明香：「そ、そこまで不器用じゃないもん！」
熊埜御堂 亜聡：「最初は炭みてーな卵焼き作ってた泣いてたくせに」
アリス　：「1 日であんなに部屋を汚すお兄ちゃんの方がよっぽど不器用じゃないの～？」（にまにま）
熊埜御堂 亜聡：「うるせーなああ言えばこう言うんじゃねーよ、明香の味方しかいねーのかここ」
ドロシー　：『……それは多分、日頃の行いってやつ…』
熊埜御堂 明香：「…お兄ちゃんも味方でしょ？　はい、お皿持ってって」
熊埜御堂 亜聡：「、……」 さすがに言い返せず、素直にお皿を持って行く
熊埜御堂 明香：「えへへ」
アリス　：「（によによ）」
熊埜御堂 亜聡：「……っだー！笑ってんじゃねーよ、食うぞ！」
ドロシー　：『……』（ふふっ…）

熊埜御堂 明香：「はーい。それじゃあ！」
熊埜御堂 明香：「…いただきまーす！」
熊埜御堂 亜聡：「いただきます」
熊埜御堂 亜聡：「（ぱく、）（……もぐもぐ）……ん。」 …もぐもぐもぐ
熊埜御堂 明香：「えへへ、上手くできたでしょ！」
アリス　：「しっかり食べて、明日も頑張るのよ！」
熊埜御堂 亜聡：「ん。」 もぐもぐもぐもぐ
熊埜御堂 明香：「ん。じゃなくてー」
ドロシー　：『……亜聡、味わって食べてる…。美味しいんだね…』（ふふっ…）
熊埜御堂 亜聡：「……。それこそ、いつも通りだろ」 ぱくっ

ドロシー　：『……ポテチとかだと、もっと食べるペース早いから…』
熊埜御堂 亜聡：「……変な推理すんな。ドロシー」
熊埜御堂 明香：「…えへへ」
ドロシー　：『……ふふっ…』（くすくす…）
熊埜御堂 明香：「…アリスちゃんとか、ドロシーちゃんはこういうの食べられないのかな」
アリス　：「あら、気にしなくて大丈夫よ。美味しそうに食べてる姿でお腹いっぱいだもの」
熊埜御堂 明香：「そう？　…せっかくだから、美味しいものは共有したいなって思ったの」
ドロシー　：『うん。私達の分まで、亜聡と明香が美味しそうにたくさん食べてくれたら、私も嬉しい』
熊埜御堂 亜聡：「あの変態先輩に頼んでカスタマイズ入れてもらえば、いつか食えるようになるかもな」 かちゃ、ぱくっ
ドロシー　：『……ごめん。気持ちは嬉しいけど、あの人の所に行くくらいなら、やっぱり食べられなくていい…』
熊埜御堂 亜聡：「お、おう」
熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃん……」
アリス　：「……あの変態と関わるストレスと天秤にかけたらそうなるわよね…」
熊埜御堂 明香：「…うん、じゃあ…諦めよっか…」
熊埜御堂 亜聡：「その分俺らが食うってことで、手打ちだな。……はー」　からん。完食。
熊埜御堂 明香：「ごちそうさまでした！　お皿あらうから、流しまで持っていっておいてね」
アリス　：「はーい、よく食べました～！」
熊埜御堂 亜聡：「おー。……ごちそーさん。うまかった。」　流しに持って行く途中で
熊埜御堂 明香：「あ、それとお兄ちゃん使える布団ある？　机も寄せておかないと…」
熊埜御堂 亜聡：「たまに泊まりに来るときのやつがあるだろ。」
熊埜御堂 明香：「じゃあ、出しておくね。……ふふ、またご飯だけ作りに行くのもいいかも」
ドロシー　：『明香が来てくれた方がお部屋が綺麗になるから、その方が私としてもありがたい、かもしれない…』
熊埜御堂 亜聡：「どういう意味だ」
アリス　：「そのままの意味でしょ」
熊埜御堂 明香：「ふふふ」

熊埜御堂 明香：じゃあお皿あらってお風呂入って布団しいて…からの、今日の情報共有しておきたいですね…
熊埜御堂 亜聡：ですね、全部共有しましょう…！
DL　：はーい、OK です！
熊埜御堂 明香：もちろん、アリスちゃんの正体うんぬんに関しても…

熊埜御堂 亜聡：「……アリスの正体、なァ」
熊埜御堂 明香：「ごめんね、すっかり頭から飛んでた…」
熊埜御堂 亜聡：「それ以外のことでいっぱいいっぱいだったってだけだろ。……ただの CS のキャラクター、って線は、もうねぇな」
熊埜御堂 明香：「…うん」
熊埜御堂 亜聡：「それ以外のもの。当然、人じゃない。でも、ヒントは一通りは出てる。少なくとも、明香にはそうだし、…おそらく俺に見えてる部分にもあるはずだ」
熊埜御堂 亜聡：「となると、名前がわかるものの選択肢はかなり狭いな」

熊埜御堂 明香：「…そもそも、既に答えそのものを目にしてる…って事は、あるのかな」
熊埜御堂 亜聡：「無くはないだろうな。……そのものを目にした、といえば…」
熊埜御堂 明香：「…オカ研」
熊埜御堂 明香：「オカ研で、怪異の名前とか…結構見たから」
熊埜御堂 亜聡：「そうだな…。オカ研で見たものといやァ、例のファイルとかか」
熊埜御堂 亜聡：「……例のファイルに書かれてたもので一番にあがるのは、ワスレモノだが、俺はこれではないと思う。」
熊埜御堂 明香：「うん、わたしも違うと思う」
熊埜御堂 明香：「だから、その、…可能性が高いのは」
熊埜御堂 明香：「…オトギビト、なのかなって」
熊埜御堂 亜聡：「ワスレモノと対称的なヤツとして名前があがってたやつだな」
熊埜御堂 亜聡：「オトギビトの詳細は、何故かCSの中に入ってた。あの変態先輩が掘り出してきた画像データが、今のところ一番詳しい」
熊埜御堂 明香：「うん、…なんかすっごく悪い事書かれてたから…それがアリスちゃん、っていうのはちょっと抵抗がるんだけど」
熊埜御堂 明香：「画像データ…って、あの変なマーク？」
熊埜御堂 亜聡：「いや、【画像データの記事】のことだ」
熊埜御堂 亜聡：「ただ、そこに書かれてたことが全部アリスに当てはまるかっつーと、それもNOなんだよな…。第一に「人間界にそれほど溶け込んでない」し、「矛盾や違和に対する感度も下げ」てない。…と思う」
熊埜御堂 亜聡：「むしろクソ胡散臭い」
熊埜御堂 明香：「あはは…、……あの、ドロシーちゃん」
ドロシー　：『…？何…？』
熊埜御堂 明香：「あの、今日見えた「カゴノトリ」？　って…誰にも、見えるものじゃないんだよね？」
ドロシー　：『本来は、そう…。でも…、部長が「最近お化けを見たって言う生徒が増えてる」って言ってたの…、覚えてる…？』
熊埜御堂 明香：「……」
ドロシー　：『……私はそれが、『CS』のせいなんじゃないか、って思ってる』
熊埜御堂 亜聡：「ずっと言ってる、ドロシーの主張だな」
熊埜御堂 明香：「…でも、アリスちゃんは……」
アリス　：「……確かに"織畑鶴乃の記憶障害は"『CS』のせいじゃない、と思うわ」
熊埜御堂 亜聡：「……"織畑鶴乃の記憶障害は"か」
熊埜御堂 亜聡：「そうだな。論点がちっとずれるが、それは「今の織畑がどういう状態なのか」っつー話になってくるか」
熊埜御堂 明香：「鶴乃ちゃんの状態…」
熊埜御堂 亜聡：「織畑のことを「死んでる」って主張してる奴がいる。そして、それがここ数日いろいろ聞きこんでくると、それなりに辻褄が合いそうな話もいくつか出てきた」
熊埜御堂 亜聡：「似たようなものを、例のファイルでは「無垢なる死者」って呼んでたな」
熊埜御堂 明香：「…自分の死を、自覚していないってやつだね」
熊埜御堂 亜聡：「あぁ。…正直、もし織畑が本当にそれだとして、「どうしてそうなったのか」はあんまり見当がついてない」

熊埜御堂 亜聡：「どうしたらいいのかも、見当がついてない」
熊埜御堂 亜聡：「そういうものを、アリスは『CS のせいじゃない』っつってんだな？」
アリス　：「そうね。それは『CS』とは関係ないんじゃないかって、私は考えているわね」
熊埜御堂 明香：「…CS を始めたばかりの時に、そうなってしまったから…鶴乃ちゃんは CS のせいだって結びつけてしまったってこと？」
アリス　：「彼女にとって変わった出来事がそのくらいしかなかったのなら、そうなったとしても不思議じゃないと思うわ」
熊埜御堂 亜聡：「筋は通るな。……ドロシー。今の話を聞いたうえで、もう一度お前の意見が聞きたい」
ドロシー　：『……『CS』が、全ての元凶だと思う』

DL　：じゃあそうですね…、亜聡君＜心理＞どうぞ
熊埜御堂 亜聡：お。はーい！

熊埜御堂 亜聡：2DM<=8〈心理〉(2DM<=8) ＞ [8, 2] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 亜聡：おかえり DB！
DL　：お、これは素晴らしい！
DL　：では亜聡君 1 つ BD どうぞ！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：3 → 4

DL　：ではこの 3 日間、ドロシーの事をよく視ていた亜聡君にはわかったのでしょう
DL　：ドロシーの言う「すべての元凶は『CS』だ」と言う言葉は本心からの物であるけれど、何か隠している事があるのではないか、と感じ取れます

熊埜御堂 亜聡：「……ドロシー。」
ドロシー　：『……？』
熊埜御堂 亜聡：「やっぱり、何か俺らに言ってないことがあるだろ」
ドロシー　：『……』
熊埜御堂 亜聡：「お前の言葉はたぶん嘘じゃない。ごまかしてるわけでもなさそうなのはわかる。……が、何かを隠してる」
熊埜御堂 亜聡：「……言えないのか。それは。」
ドロシー　：『……』
ドロシー　：『……亜聡』
熊埜御堂 亜聡：「おう」
ドロシー　：『……あなたは以前、「怪異が怖い？」と私に聞かれた時、「見てみないとわからない」と言ったのを、覚えてる…？』
熊埜御堂 亜聡：「…おう」
ドロシー　：『……カゴノトリという怪異を見た今も、その考えは変わってない…？』

熊埜御堂 亜聡：「……いいか、ドロシー。」

熊埜御堂 亜聡 ：「俺が言う「見る」っつーのは、イコール「知る」っつー意味だ。見て、知って、理解して。その上で、自分の中の物差しでできる限り公平に判断する」

熊埜御堂 亜聡：「カゴノトリは、最初は意味の分からない現象だった。が、それがどういうものかを知ったから、今は「それほど怖いものではない」と考えを改めている」

熊埜御堂 亜聡：「…あれも怪異なんだろ？じゃあ同じだ。全部同じ。…俺の怪異に対するスタンスは、あのカゴノトリの件で、お前も理解できただろ？」

ドロシー　：『……うん。』

熊埜御堂 亜聡：「だから。知ってることがあんなら、お前がいいなら教えてくれっていうのは、そういうことだよ」

ドロシー　：『……わかった…』

ドロシー　：『……アリスの正体を言い当てる事が出来たなら…、その時は、私も全部、正直に話す』

熊埜御堂 亜聡：「、……。…なるほどな。」

熊埜御堂 亜聡：「わかった。それがお前の答えなら。」

ドロシー　：『……約束は守るよ』

熊埜御堂 亜聡：「だろうな。お前は」

熊埜御堂 亜聡：「……それじゃ。アリスの正体探しに、話を戻すか…」　という感じで、ドロシーちゃん問い詰めは一区切り…

【以下、PL 同士の相談タイム】

[アリスの正体について]

熊埜御堂 明香：…霊感が強いものに見える…霊感を拡張できる……

熊埜御堂 亜聡：アリスちゃんが、ってことです…？

熊埜御堂 明香 ： ええと、ドロシーちゃんの『カゴノトリは、霊感の強い者に「うしろのしょうめん」と問いかけてくる事しかしてこないから…』と

熊埜御堂 明香 ： オトギビトのメモの「人の霊感をある程度拡張することができ、幽世の存在を見せる事で人々を狂気へと誘う」が重ならないか…？って…

熊埜御堂 亜聡：ふむふむ……なるほど、筋は通ってる気がしますね…

熊埜御堂 亜聡 ： てっきり、カゴノトリが見えたのは共鳴度が上がったからかなと勝手に思ってたけど、アリスちゃんがいるから説もなくはない…。ちなみにおそらくドロシーちゃんにはその性質はない

熊埜御堂 明香：ドロシーちゃんは、何と言うか色々と素直な感じするんですよね…外から見た感じ

熊埜御堂 亜聡：ということは、裏で見ててもアリスちゃんはいろいろ複雑な感じ…？

熊埜御堂 明香：うふふ…って感じでちょっと妖しげなところはありますね、めちゃくちゃ助けてはもらってるけど…

熊埜御堂 明香：(ただ明香の性格上全然怪しんでないので PL の主観である…)

熊埜御堂 亜聡：亜聡はあまりアリスちゃんとお喋りしてないけど、どこか愉悦ってる雰囲気がチラ見えするようであれば、よりオトギビトみが増すんですけどね…（でも前半があんまりしっくりこないんだよな…）

熊埜御堂 亜聡：でも目的ありきっぽいことは言ってたっけか…

熊埜御堂 明香：アリス　：「でも安心して、私がきたからにはワンサイドゲームとはならないはずよ」

熊埜御堂 明香：これが出現してた時に言ったセリフ…

熊埜御堂 亜聡：ワンサイドゲーム

[ドロシーとの会話後]
熊埜御堂 亜聡 ： 話はかなり脱線してるけど、つまり立ち戻ると、ドロシーちゃんは「お化けが見えるのは CS のせい」って言ってるんだよな…
熊埜御堂 明香：うん…
熊埜御堂 明香 ： …アリスちゃんが元々CS 側で、それを裏切ってこちらについた…みたいな事はあり得ますかね…
熊埜御堂 明香：CS=オトギビトで、アリスちゃんはその力の一端みたいな……？
熊埜御堂 亜聡：CS=オトギビトか…なるほど…
熊埜御堂 明香：CS そのものか、それとも運営かは判断つきかねますけど
熊埜御堂 明香：それだとワンサイドゲーム発言の意味も通らないかなって
熊埜御堂 亜聡 ： そうですね…。自分も CS が今、何かしら意図しない方法で「利用されてる」可能性を考えてて…
熊埜御堂 明香：(やっぱりこのタイミングでお泊り会してよかったな…)
熊埜御堂 亜聡： （ね…）

[ここで一度休憩を挟み、再会時の双子]
熊埜御堂 亜聡 ： （ちなみにアリスちゃんの件は、終わってからもいろいろ考えてたんですけど、中の人的にも明香ちゃんの言う通り「オトギビト」で OK だと思います…！）
熊埜御堂 明香：(やっぱそれくらいしか現在の選択肢にない感じですよね…)
熊埜御堂 亜聡： （そうなんですよね…） （今出てる中で、一番近いものというとそれ…って感じで）
熊埜御堂 亜聡：頑張れ明香ちゃん…！

DL ：…さて、場面はドロシーとの約束を取り付けた直後からとしましょう。
DL ：引き続き情報整理を続けても構いませんし、他の事をやっても OK です。いかがなさいますか？
熊埜御堂 亜聡：前回(今の話)は、アリスちゃんの正体当てから派生していろいろ喋ってた感じでしたね…
熊埜御堂 明香：ですね、そこからドロシーちゃんに繋がって…
熊埜御堂 明香：…結局正体当てないと…って事に
熊埜御堂 亜聡：戻ってきた、ってところでしたね！ この場でアリスちゃんに答えてみるところまでやってみます？
熊埜御堂 明香：…やってみましょうか！
DL ：ではアリスに話しかけますか？
熊埜御堂 明香：話しかけ…ます！

熊埜御堂 明香：「……アリスちゃん」
アリス ：「なぁに？」
熊埜御堂 明香：「…あの、今言ってもいい？」
熊埜御堂 明香：「アリスちゃんの、正体」
アリス ：「あら、答えがわかったの？構わないわよ」
熊埜御堂 明香：「わ、わかったっていうか…今考えられる範囲だと、これくらいしか…ないのかなって」

アリス　：「へぇ…。あ、チャンスは一度だけだからね？」
熊埜御堂 明香：「…う～～…い、いきます！」
アリス　：「どうぞ」
熊埜御堂 明香：「あ、アリスちゃんの正体は…たぶん、「オトギビト」……かな？」
熊埜御堂 亜聡：「…」 異議なし、の沈黙

DL　：では明香さんがそう答えるとですね…

アリス　：「……」
熊埜御堂 明香：「……」どきどき
アリス　：「……。正解よ！よく答えに辿り着いたわね、探偵さん」（にっこり）
熊埜御堂 明香：「…ほ、」
熊埜御堂 明香：「ほ、ほんと！？」
アリス　：「……と、言っても…今の私はあくまでも残滓に過ぎないのだけどね」
熊埜御堂 亜聡：「…残滓？」
熊埜御堂 明香：「えっと、どういうこと？」
アリス　：「……力を奪われ搾り尽くされた残りカス、と言った所かしら……。誠に不本意ではあるけれど」
熊埜御堂 明香：「う、奪われちゃったの？　誰に…？」
アリス　：「このゲームの制作者に、よ」
熊埜御堂 亜聡：「……ゲームの製作者？」
アリス　：「ええ。そして……、私の力の一部はこの『CS』の内部に組み込まれている」
熊埜御堂 明香：「…もしかして、それでわたし達怪異を…？」
アリス　：「そこまで分かっているのなら話が早くて助かるわ。……その通り」
アリス　：「具体的には『CS』のアプリをダウンロードした者に、霊感が付与される仕組みになっているの。「最近お化けを見たと言う生徒が増えている」というのは、それが原因でしょうね」
熊埜御堂 明香：「な、なるほど…」
熊埜御堂 亜聡：「…アリスは、さっき「不本意だ」つったよな。なんで CS に力を奪われたのかは分かるのか？」
アリス　：「そうね…。制作者の様子を見て感じた推測ではあるのだけど…」
アリス　：「最初からゲームを作るつもりではなかったみたいよ？少なくとも、私を倒した段階では、ね」
熊埜御堂 明香：「じゃあ、ゲームを作ろうと思ったのは何か理由があるのかな…？」
アリス　：「元々制作者が欲しがっていたのはもう一つの力…「記憶を植え付ける力」の方だったみたいね」
熊埜御堂 明香：「記憶を？」
熊埜御堂 亜聡：「見た者に偽りの記憶を植え付け、矛盾や違和に対する感度も下げる、…だったか」
アリス　：「あちらの詳しい事情は知らないけど…、人々の中に紛れ込みたかったようね」
熊埜御堂 亜聡：「じゃあ、なんだ。アリスを倒した奴で、CS の製作者は、今人々の中に紛れ込んでるってことか」
熊埜御堂 明香：「……そう言われちゃうと、ちょっと怖い…ね」
アリス　：「そういう事になるわね」
熊埜御堂 亜聡：「人々の中に、っつーか、……俺達の中に、だったりするか？」
熊埜御堂 明香：「ひゃえっ」
アリス　：「案外近い所にいるかもしれないわね？」（にこにこ）

熊埜御堂 亜聡：「…笑えねーんだが」

熊埜御堂 明香：「…その、アリスちゃんの力を奪った人は…誰か、分かってるの？」

アリス　：「勿論わかってるよ。……でも、教えない」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「え、ええっ！？」

熊埜御堂 亜聡：「なんでだよ」

アリス　：「だって教えちゃったら面白くないでしょ？と、いう訳で頑張って探してね～！」（にこにこ）

熊埜御堂 亜聡：「いや、……いやいや、なんで面白がってんだ？」

アリス　：「ヒント：オトギビトの性格」

熊埜御堂 明香：「…いじわる～～～！」

熊埜御堂 亜聡：「悪逆無道」

アリス　：「あはは、ラビットホール起動してもいい？」

熊埜御堂 亜聡：「なんでだよ！」

熊埜御堂 明香：「だ、だめー！！」

アリス　：「何となくムカついたから」

熊埜御堂 明香：「な、仲良くしよ！」

アリス　：「あら、私は仲良くしてるつもりよ？」（にこにこ）

熊埜御堂 亜聡：「どこがだよ。オトギビトだって明香にバラされてから一層性格悪くなってんぞ」

アリス　：「だってもう隠す必要ないじゃない？」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「……でも」

熊埜御堂 明香：「やっぱり、アリスちゃんはアリスちゃんだなって…今までと同じように過ごしたいなってわたしは思うよ。…いや、かな」

アリス　：「ふふ、私の正体を知っても仲良くしたい？…やっぱり貴女って、とっても面白くて良い子だわ！」

アリス　：「私、そんな貴女がとっても好きよ明香！」

熊埜御堂 明香：「ほ、ほんと？　…えへへ、嬉しいな。わたしも好きだよ、アリスちゃん」にこにこ

アリス　：「貴方達兄妹と一緒だと、退屈しなくて良いわ。これからもよろしくね！」

熊埜御堂 亜聡：「……はぁ。明香が絆されてんじゃあな。」

熊埜御堂 明香：「？」

熊埜御堂 亜聡：「あぁ、まぁ…いい。別に、俺等に害があるわけでもなさそうだしな…。いや、そもそもだ。なんでお前、明香のCSに出てきたんだ」

アリス　：「ああ、それは…。『a1007』の招待コードにラビットホールが内蔵されたから着いてきちゃった☆」（てへぺろ）

熊埜御堂 明香：「…？？？？？？」(宇宙猫)

熊埜御堂 亜聡：「着いてきちゃった☆じゃねぇよ」

熊埜御堂 明香：「えっと、招待コードにラピットホールが内蔵…ってどういうこと？」

アリス　：「ああ、ちょっと話せば長くなるのだけど…」

熊埜御堂 亜聡：「３行で頼む」

熊埜御堂 明香：「そ、そこはしっかり説明してもらおうよ！」

アリス　：「ええ～？無茶振りするわね…」

熊埜御堂 亜聡：「しゃあねぇな……」（やれやれ感）

熊埜御堂 明香：「長くなってもいいから、しっかり説明してほしいな。わたしも、ちゃんと知りたいから…」

アリス　：「・制作者の獲物はワスレモノ
・双子の内どちらかに呼び寄せてもらう気だった
・じゃあ邪魔したろ
の３本です」
熊埜御堂 明香：「じ、邪悪なサ○エさん…！　…って」
熊埜御堂 明香：「…ワスレモノ？」
熊埜御堂 亜聡：「しっかり説明しろっつった途端３行でまとめてきやがった」
アリス　：「だって３行で説明しろって言ったのはそっちじゃない」
熊埜御堂 亜聡：「なすりつけてくんじゃねーよ、あとからしっかり説明しろって明香が言ってただろ。……まぁいい、それで、ワスレモノが獲物ってどういうことだ？」
アリス　：「あーあ、折角の渾身のボケをスルーされてアリスちゃん悲しいなぁ…くすん」（にやにや）
熊埜御堂 明香：「お、おもしろかったよ！」(？)
アリス　：「ありがとう明香。…まぁ、それは置いといて」
熊埜御堂 亜聡：「正体バレてからすげーめんどくせぇなこいつ」
アリス　：「亜聡シャラップ」
熊埜御堂 明香：「仲良しって感じがしてわたしはいいと思う！」
熊埜御堂 亜聡：「どこがだよ」
熊埜御堂 亜聡：「いいからはよ」
アリス　：「はいはい…。…もう無茶振りするんじゃないわよ」
熊埜御堂 亜聡：「しゃあねぇな」
熊埜御堂 明香：「な、仲良くしてね！」
アリス　：「えーっと…、まず製作者はワスレモノの力が欲しいみたいなのよ」
アリス　：「でもA・Sファイルに、「ワスレモノは記憶を奪う際に呼び出した者を食い殺す事もある」という記述があった事を覚えてる？」
熊埜御堂 亜聡：「おう」
熊埜御堂 明香：「えっと、確か脳を食べちゃう…んだよね」
アリス　：「そうそう！で、製作者はそうなる事を恐れて、遠隔でワスレモノを封印して力を奪ってやろうと考えてたみたいよ」
熊埜御堂 明香：「遠隔で、……あ、あの。あのね」
熊埜御堂 明香：「・双子の内どちらかに呼び寄せてもらう気だった、って……」
熊埜御堂 亜聡：「……」
アリス　：「そのまんまの意味。貴方達の内どちらかをスケープゴートにする気だったんでしょうね」
熊埜御堂 明香：「……」（亜聡くんの袖をぎゅう）
熊埜御堂 亜聡：「……そう怖がるもんでもねーかもしんねーぞ、明香。」 袖を握る明香ちゃんの手をぽんぽん
アリス　：「…で、もっと詳しい話をすると…」
熊埜御堂 明香：「う、うん…」
アリス　：「貴方達の内どちらかのスマホにワスレモノを呼び出させたら、内蔵されてるラビットホールが自動で起動してワスレモノを封印する、という手筈だったの」
熊埜御堂 亜聡：「…あー…」
アリス　：「でもそうなったら面白くないから、ワスレモノを呼び出される前に先回りして亜聡に伝誦を押し付けた。

以上」
熊埜御堂 明香：「えっ」
熊埜御堂 亜聡：「おい」
熊埜御堂 亜聡：「もっと言い方あるだろお前」
熊埜御堂 明香：「…もしかして、ワンサイドゲームの意味って…」
アリス　：「…制作者の思惑通りに進んでたら、このゲームはとっくの昔に終わってたわ」
熊埜御堂 亜聡：「で、それで」
熊埜御堂 亜聡：「・じゃあ邪魔したろ　になるわけだな」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんに伝誦を押し付けたのは、あの、わたしがお兄ちゃんを誘った時…なのかな？」

DL　：じゃあそうですね…、明香さん＜調査＞ ＜直感＞ ＜洞察＞で振ってみてください
DL　：（代用判定でも OK です）
熊埜御堂 明香：ふむ、では洞察で…

熊埜御堂 明香：1DM<=6〈洞察〉(1DM<=6) ＞ [5] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡：ひゅう！
DL　：OK です！
熊埜御堂 明香：ふぅ…

DL　：では明香さんは次の事を思い出します
竹取 輝夜　：『あ、そだ。さっき伝誦…交換日記しといたから、あとで確認しといてね！んじゃねー！』
DL　：『CS』を始めた日、輝夜にそう言われ伝誦を確認しようとした途端
DL　：……画面が乱れる。真っ青な画面の中央に大きな黒い円。その円の内部から腕のようなものが飛び出してきた…
DL　：そして輝夜の伝誦は、なぜか亜聡君に届いていた…

熊埜御堂 明香：「……あの時？」
アリス　：「だいせーかい！」
熊埜御堂 亜聡：「…で。実際に押し付けられたわけだな。ワスレモノを呼び出すための伝誦が。」
熊埜御堂 亜聡：「それで、その後。俺は、爪ぎわを怪我して、…出血した」
熊埜御堂 明香：「…あ」
熊埜御堂 亜聡：「……あー、繋がってきた。お前のせいじゃねーかアリス」
アリス　：「亜聡の怪我は伝誦に内蔵されてた魔術のせいよ。それに、あのままだったら明香が怪我するどころか最悪死んでたかもしれないのよ？」
熊埜御堂 亜聡：「それは、……。」
熊埜御堂 亜聡：「……まぁ、それは感謝してやるよ」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん…」
アリス　：「素直でよろしい」（によによ）
熊埜御堂 明香：「…あれ、でもそれじゃあ……ワスレモノは？　どうなったの？」

アリス　：「ああ、それはね……」
熊埜御堂 亜聡：「…どうもなってねーんじゃねぇか？」
アリス　：「……私に聞くより、さっきからだんまりを決め込んでる誰かさんに聞いた方がいいんじゃないかしら？」
熊埜御堂 亜聡：「…」
熊埜御堂 亜聡：「ほら、お前の番だとよ。ドロシー。」
熊埜御堂 明香：「あ、そっか。アリスちゃんの正体を当てたら…って話、だったね」
ドロシー　：『……』
ドロシー　：『……わかった。約束は、約束だからね…』

ドロシー　：『……亜聡』
熊埜御堂 亜聡：「あ？」
ドロシー　：『……御伽 雀が「オトギビトとワスレモノは対になる怪異だ」って言ってたの、覚えてる…？』
熊埜御堂 亜聡：「…おう」
ドロシー　：『……対の存在ではあるけれど、ワスレモノはオトギビトと違って、ヒトの中に紛れ込む術を持たない。この学校で、良くない事が起こっていても、誰にも知らせる事が出来ない……。』
ドロシー　：『それでも、どうにかしたいと思って足掻いていたら……、ある時 パイプが繋がった』
ドロシー　：『……血と印のおまじない……。それによってこの、亜聡のスマホは……ワスレモノと会話が出来るようなった』
熊埜御堂 明香：「……え、…それじゃあ、まさか」
ドロシー　：『……ワスレモノは、私……』
熊埜御堂 亜聡：「……」
ドロシー　：『……今まで騙してしまって、ごめんなさい…』

DL　：亜聡君に向かって、深く頭を下げて謝ります。

熊埜御堂 明香：「、ドロシーちゃん…」
熊埜御堂 亜聡：「……何を騙したって？」
熊埜御堂 亜聡：「別に。黙ってただけだろ、お前」
ドロシー　：『……うん…。ごめんなさい…』
熊埜御堂 亜聡：「何に謝ってんだ。別に何もされてねーぞ、お前からは」
熊埜御堂 明香：「あ、…ち、違うよドロシーちゃん！　お兄ちゃんはね、怒ってるんじゃなくてね」
熊埜御堂 明香：「もっと、早くに話してくれればしっかり協力できたのになって…」
ドロシー　：『……明香…。うん…、そうだね…。私が間違ってた…』
熊埜御堂 亜聡：「…お前が俺のスマホに入ったのは、あの印と血のまじないのせい。そういうことでいいんだな？」
熊埜御堂 亜聡：「お前は、何かをしに出てきたとか、そういうのじゃねーのか」
ドロシー　：『うん…。ヒトと意思疎通が出来るチャンスだと思ったから…』
熊埜御堂 亜聡：「、…なんだ。何か言いたいことでもあったのか？」　ちょっとだけ声を柔らかく
ドロシー　：『『CS』をやってるとよくない事が起こるって…、そのせいで、死んでしまった人もいるって、知らせたかった…』
熊埜御堂 明香：「『CS』のせいで…！？」

ドロシー　：『……いや、少し、違う…』

熊埜御堂 亜聡：「…？」

ドロシー　：『……死人が出たのは…、私のせいでもあるんだ…』

熊埜御堂 亜聡：「……お前のせい、な」

熊埜御堂 亜聡：「…そうだな。お前がワスレモノだっていうなら、ちょうどはっきりさせときたいこともあったんだ。……聞いてもいいか？」

ドロシー　：『……？』

熊埜御堂 亜聡：「……織畑 鶴乃と、御伽 雀は、ワスレモノに殺されたのか？」

熊埜御堂 明香：「っ！！」

ドロシー　：『……直接的に殺した訳じゃない…。でも…、織畑鶴乃と御伽雀の死は、私にも責任があると思う…』

熊埜御堂 亜聡：「……？　どういうことだ？」

ドロシー　：『……それについてなんだけど…、亜聡…』

熊埜御堂 亜聡：「…なんだよ」

ドロシー　：『ワスレモノを……、私の本体を呼び出して、『幽世の目』を起動させてほしい』

ドロシー　：『……今の私は、『CS』を通して電話をしているようなものだから……、直接 亜聡と明香に会って話がしたい。……そして知ってほしい。私が、どんな罪を犯してしまったのかを。』

熊埜御堂 亜聡：「……なるほど」

熊埜御堂 亜聡：「……直接会って話を、な」

熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃん…」

熊埜御堂 亜聡：「…それは。今すぐか？」

ドロシー　：『……今じゃなくてもいい。亜聡と明香が、そうしたいと思った時で構わない』（ふるふる）

ドロシー　：『……ただ、起動するのは夜…人が寝静まってからの方がいいという事だけは、忘れないで…』

熊埜御堂 亜聡：「夜……つまり今の時間帯じゃねーか」

熊埜御堂 亜聡：「……メイ。…らしいんだが、お前はどう思う」

熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 明香：「…ドロシーちゃん。…鶴乃ちゃんと、雀ちゃんは…「無垢なる死者」って存在、って事でいいの？」

ドロシー　：『……うん』（こくり…）

熊埜御堂 明香：「そっか。……」

熊埜御堂 明香：「……どうし、よう。…今、少し……ううん、すごく、ぐるぐるして」

熊埜御堂 明香：「…考えが、まとまらない」

熊埜御堂 亜聡：「……そーか。…俺もだ」

熊埜御堂 亜聡：「ドロシー。織畑と雀先輩は、…どうにかする手立てはあるのか？」

ドロシー　：『……無垢なる死者が姿を消すには、相手にすでに死んでいることを伝えるか、自身の霊感をなくす必要がある……』

熊埜御堂 亜聡：「そ、…ういう。……ことだよな。……」

ドロシー　：『……逆に言えば、無垢なる死者になった者が死んでいる事を知らない人ばかりであれば、死者はそこに存在し続ける事が出来る、とも言える…』

熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 亜聡：「……死者との、"共存"。」

熊埜御堂 明香：「…知らないままなら」

熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 亜聡：「……悪い。ドロシー。…もう少し、時間がほしい」

熊埜御堂 亜聡：「今のそれは、俺にとって、…明香にとって。結構重い情報だから」

ドロシー　：『……亜聡…。…うん、わかった』

熊埜御堂 明香：「……ごめんね」

ドロシー　：『（ふるふる）……気にしないで。私も、亜聡と明香にちゃんと納得した上で話を聞いてもらいたいから…』

熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 亜聡：「あぁ。……ちゃんと聞くさ。そのための時間がほしい」

熊埜御堂 亜聡：「……さすがに、疲れたな。」

熊埜御堂 明香：「……うん」

ドロシー　：『……あの、亜聡…、明香…』

ドロシー　：『その……、ありがとう…。ちゃんと話を聞いてくれて』

熊埜御堂 明香：「……ううん」

熊埜御堂 明香：「話してくれて、ありがとう。…アリスちゃんも、ドロシーちゃんも」

熊埜御堂 亜聡：「お前らのおかげで、今まで見えてなかったもんが見えるようになったよ」

アリス　：「ふふ、こちらこそ謎解きに付き合ってくれてありがとうね！」

ドロシー　：『なんて言うか…、2 人が私達の事を、信じてくれたのが嬉しかったから…、お礼が言いたくなった。ありがとう』

熊埜御堂 亜聡：「…別に、話につじつまが合ってるから信じられる話だって俺が判断しただけだ。」

熊埜御堂 明香：「それに＋して、お兄ちゃんはドロシーちゃんのことを友達…ううん、家族みたいに思ってるからだと思うよ」

熊埜御堂 亜聡：「おい明香」

熊埜御堂 明香：「だってお兄ちゃん、そうとう気を許さないと全部「めんどくせー」で終わっちゃうもん！」

ドロシー　：『……だったら、嬉しい…、かな…』（ふふっ…）

熊埜御堂 亜聡：「おい明香」

熊埜御堂 明香：「…じゃあ違うの？」むぅ

アリス　：「ここで否定したらドロシーが泣いちゃうかもよ～？」（によによ）

熊埜御堂 亜聡：「……」

熊埜御堂 亜聡：「……まぁ、3 日も一緒にいれば、…それなりの情は…湧くだろ」 …ぼそぼそ

熊埜御堂 明香：「…えへへ」

アリス　：「ふふふ」

ドロシー　：『……ふふっ…』（くすっ…）

熊埜御堂 亜聡：「…あーあー。にやにやすんなお前ら。おら、0 時回るぞ」

熊埜御堂 明香：「え、あ、もうそんな時間！？」

熊埜御堂 亜聡：「話し込みすぎなんだよ。ほら、寝るぞ」

アリス　：「結構な時間話してたものね。ゆっくりおやすみなさい」

熊埜御堂 明香：「うん、じゃあお布団出して来なきゃ…」(あっ)

熊埜御堂 亜聡：「……」（あっ）

DL　：あっと
DL　：では亜聡君、＜危機察知＞どうぞ！ｗ　（※お布団が使える状態かどうか）
熊埜御堂 亜聡：…いきます！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=5〈危機察知〉(1DM<=5) ＞ [5] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡：ギリ！！！！！
熊埜御堂 明香：おおお
DL　：お布団は生きてた！！
熊埜御堂 亜聡：とりあえず寝られるぐらいの

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、ここに敷いちゃっていい？」
熊埜御堂 亜聡：「おー。邪魔なもんあったら全部よけていいぞ」
アリス　：「……明香、埃大丈夫？ちょっと叩いておいた方がいいんじゃない…？」（ひそひそ）
熊埜御堂 明香：「うーん、…まぁ普段よりマシだから…」
アリス　：「”普段より”マシ…？」
熊埜御堂 亜聡：「（知らん顔）」
ドロシー　：『……明日は布団も干しておこうね…』
熊埜御堂 亜聡：「はいはい。晴れたらな。」
熊埜御堂 明香：「……ね、…ねぇ」
熊埜御堂 亜聡：「…あ？」
熊埜御堂 明香：「…やっぱり、…そっち行っても、いい？」
熊埜御堂 亜聡：「……はぁ？」
熊埜御堂 明香：「だ、だめなら大丈夫！」
熊埜御堂 亜聡：「……。…布団が嫌だってわけじゃねーだろ」
熊埜御堂 明香：「…その、」
熊埜御堂 明香：「……今日、いろいろ…いっぱいあったから」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……狭いぞ。分かってると思うが」
熊埜御堂 明香：「えっ、あ、」
熊埜御堂 明香：「……いいの？」
熊埜御堂 亜聡：「早くしろよ。もうあと２秒で寝落ちる寸前だ俺は」
アリス　：「の〇太なの？」
熊埜御堂 亜聡：「ほら」（ばさっと掛け布団を上げつつ）
熊埜御堂 明香：「う、うん！　…おじゃまします」
熊埜御堂 明香：「……えへへ」
熊埜御堂 亜聡：「……。狭いのに、…妙に好きだよな、お前。」…ふ
熊埜御堂 亜聡：「電気消すぞ」

熊埜御堂 明香：「うん。…おやすみなさい」
ドロシー　：『おやすみ。亜聡、明香』
アリス　：「おやすみなさい。…亜聡、明日はちゃんと起きなさいよ」
熊埜御堂 亜聡：「うるせー。起こせ。（ぱちん、）……（ごろん）」　隣を向いて、掛け布団越しに明香ちゃんのお腹当たりに片手を乗せる
熊埜御堂 明香：「ん、…お兄ちゃん？」
熊埜御堂 亜聡：「……おやすみ。明香。」 ぽん、ぽん
熊埜御堂 明香：「……うん、……おやすみなさい、お兄ちゃん」

熊埜御堂 亜聡： 自分は片腕で腕枕しつつ、もう片手で不規則にぽんぽんしながら、そのままゆっくり眠りに落ちます…
DL　：寝落ちする寸前までイチャイチャ…
DL　：ではお 2 人とも就寝でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 明香：よろしいです…！
熊埜御堂 亜聡：OK です…！
DL　：はーい、では今夜は安心して眠りに付けるでしょう…ｽﾔｧ…
DL　：……

▼木曜日　―――４日目

DL　：…夜が明け、今日は４日目。
木曜日の朝です

熊埜御堂 明香：早起きして朝ごはん作ろっかな…
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃんが起き出した後もスヤァ…
DL　：お、ではまた何らかの技能で判定しますか？
熊埜御堂 明香：また電脳でネットのレシピをぱぱっと
DL　：はーい、では判定どうぞ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈電脳〉(2DM<=7) ＞ [2, 4] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 明香：いえーい
熊埜御堂 亜聡：ひゅー！
DL　：お、これは幸先良い！
DL　：では明香さん、BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 明香：わーい、クライマックス前に幸先いいぜ

system：[熊埜御堂 明香] BD：1 → 2

DL　：今日の朝ごはんの出来栄えは昨日のカニ玉よりも更にいいですね！完璧です！
熊埜御堂 明香：よーし、昨日のかに玉の残りとお味噌汁とおにぎりだ
熊埜御堂 明香：…ところでかに玉の残りをお弁当的な感じで用意したいのですが…(鶴乃ちゃんにたべてほしい…)
DL　：OK です！

熊埜御堂 明香：「～♪　…できた！　お兄ちゃーん、朝ごはん出来たよー！」
熊埜御堂 亜聡：「…zzz…」
熊埜御堂 明香：「……もー、お兄ちゃーん？」 ひょこ
ドロシー　：『……亜聡、起きて…』
熊埜御堂 亜聡：「zzz…」
アリス　：「今日も起きないわねぇ……」
熊埜御堂 明香：「…お兄ちゃん！」 ゆさゆさ
熊埜御堂 亜聡：「zz……ん……、……あ゛……？」 ゆさゆさ起床
熊埜御堂 明香：「あ、起きた？　…おはよう、お兄ちゃん！」
ドロシー　：『おはよう、亜聡』
アリス　：「おはようお兄ちゃん」（によによ）
熊埜御堂 亜聡：「……あー」
熊埜御堂 亜聡：「…はよ。明香。ドロシー。アリス。」　全員いる朝

熊埜御堂 明香：「えへへ、朝ごはん出来てるよ」
熊埜御堂 亜聡：「ふわぁ……、…あー、みそ汁か。…朝からよく作るな」
熊埜御堂 亜聡：「…ん。食う。」
熊埜御堂 明香：「うん、じゃあ顔洗ってきてしゃっきりしてからね！」 ぐいぐい
熊埜御堂 亜聡：「押すな押すな、…ふわぁ」

熊埜御堂 亜聡：のっそのっそと洗面台に行って、顔を洗って食卓へ

熊埜御堂 明香：「ほらほら、冷めちゃうから早く席ついて」
熊埜御堂 亜聡：「ん。……朝から立派なの作るな」（机に並んだ朝食ラインナップを見つつ）
アリス　：「おいしそうに出来てるわよね！」
熊埜御堂 明香：「と言ってもメインは昨日のカニ玉だけどね。それじゃあ、いただきまーす」
熊埜御堂 亜聡：「いただきます」 …ぱくっ
熊埜御堂 亜聡：「…（…もぐもぐもぐもぐ）」
熊埜御堂 明香：「(もぐもぐ)、…うん、美味しくできてる！」
熊埜御堂 亜聡：「…ん。（ぱく、）（もぐもぐもぐもぐ）」
ドロシー　：『……おいしいって。明香、よかったね…』
熊埜御堂 明香：「うん！」
熊埜御堂 亜聡：「……」 （…じとっ） （もぐもぐもぐもぐ）
ドロシー　：『……ふふっ…』（くすくす…）

熊埜御堂 亜聡：なんなら寝坊したら朝食すら食べない亜聡、朝からしっかり完食。

熊埜御堂 亜聡：「（ぱちん）……ごちそうさん。……うまかった。」 流しへ
熊埜御堂 明香：「…うん！」
熊埜御堂 明香：「ごちそうさまでした！　…って、もうこんな時間！　ゆっくりしすぎちゃったね、急がなくちゃ」
熊埜御堂 亜聡：「いつも俺が出る時間より 10 分以上早いから何とかなんだろ」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんいつもどれだけギリギリなの！？」
ドロシー　：『あれで学校に間に合うのが不思議…』
熊埜御堂 亜聡：「うるせーうるせー。行くなら行くぞ」
熊埜御堂 明香：「はーい」
アリス　：「気を付けて行くのよ～」
熊埜御堂 亜聡：「おー。…いってきます」 誰もいなくなる部屋に
熊埜御堂 明香：「いってきまーす！」
ドロシー　：『いってらっしゃい…』

DL　：ではこのまま学校に行きますか？
熊埜御堂 明香：行きます！
熊埜御堂 亜聡：行きます！　明香ちゃんのおかげで、いつもよりずっとゆとりのある朝

DL　：はーい、では HR まで結構余裕ある時間に亜聡君が登校してきてるのでクラスメイト達は驚いてるかもですね

熊埜御堂 明香：「おはよー！」
熊埜御堂 亜聡：「はよ。」（いつも眠そうだけど今日はしゃっきりした顔）
1A 生徒：「おはよー明香ちゃん！…あれ、亜聡もいるじゃん。珍し」
熊埜御堂 明香：「うん、昨日お兄ちゃんのところに泊まったから」
熊埜御堂 亜聡：「おー」
1A 生徒：「え…？お泊り……？？？」（審議中）
熊埜御堂 明香：「？　おかしいこと言った…？」
1A 生徒：「あ、ｲｴﾅﾝﾃﾞﾓﾅｲﾃﾞｽ……」
熊埜御堂 亜聡：「（何も気にしない顔で自席へ）（CS ぽちぽち）」
熊埜御堂 明香：「？」とりあえず日記書くか…

熊埜御堂 明香：1d10 (1D10) ＞ 7
熊埜御堂 亜聡：1d10 (1D10) ＞ 2

［情報］【明香さんの日記】
（木曜日の内容）
7：先生にロケットペンシルって何ですか？って聞いたらすごい顔された～！

［情報］【亜聡君の日記】
（木曜日の内容）
2：パイナップルを食べました。ヘタは埋めて栽培を始めました。元気に育つといいな。

熊埜御堂 明香：「……あの鉢植えパイナップルだったの？？？」
熊埜御堂 亜聡：「おー。順調にでかくなってるぞ」
熊埜御堂 亜聡：「たぶん」
熊埜御堂 明香：「…おっきくなるの？」
熊埜御堂 亜聡：「こころなしか」
熊埜御堂 明香：「そっかぁ」
ドロシー　：『（変わってないような気がする…）』
熊埜御堂 亜聡：「で、ロケットペンシルが何かは分かったのか？」
熊埜御堂 明香：「キャサリン先生全然教えてくれなかった…」
熊埜御堂 亜聡：「マジかよキャシー最悪だな」
熊埜御堂 明香：「何なんだろうなぁ、ロケットペンシル」
熊埜御堂 亜聡：「なんか強そうだよな」
熊埜御堂 明香：「飛ぶのかな」

熊埜御堂 亜聡：「飛ぶんじゃね？」
熊埜御堂 明香：「そっかぁ」 ゆるゆる
熊埜御堂 亜聡：「今寝たらロケットペンシルの夢見そうだな。…」 なんて言いつつ、きっと今日はちゃんと起きて授業を受けそう

DL　：はーい、では HR の時間になり心なしか元気のないキャシーが教室に入ってくるかもしれません
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：…さて、昼休みの調査からの再開となります。どこへ向かいますか？
熊埜御堂 明香：教室でお昼ご飯食べます
DL　：OK です！
熊埜御堂 亜聡：今日はちゃんと授業中起きてたので、誘われたらそのまま一緒に食べます
DL　：はーい、では久しぶりに 2 人でゆっくりお弁当をもぐもぐしますね

熊埜御堂 明香： choice[お弁当は…手作り,朝コンビニで買った,購買のパン] (choice[お弁当は…手作り,朝コンビニで買った,購買のパン]) ＞ お弁当は…手作り
DL　：（えらい）

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、お弁当おいしい？」
熊埜御堂 亜聡：「（もぐもぐもぐ）…ん。」
熊埜御堂 明香：「もー、食べてる時はいつも「ん。」しか言わないんだから！」
熊埜御堂 明香：「せっかく早起きして作ったのに」
熊埜御堂 亜聡：「（もぐもぐ）……。……食べながら口開くなって、あの親父が」 教わった感
熊埜御堂 明香：「……もー」
熊埜御堂 明香：「パパの話持ち出されたら「そうだね」って返すしかなくなっちゃう」
熊埜御堂 亜聡：「だろ」
ドロシー　：『明香…。亜聡、おいしくなかったら多分はっきり「おいしくない」って言ってると思う』
熊埜御堂 明香：「…うん、わかってるよ。えへへ」
熊埜御堂 明香：「でも、ちゃんと口に出して言ってほしいなってワガママなの」(えへへ)
ドロシー　：『……そうだね、口にしないと伝わらない事もあるもんね…』
アリス　：「という訳で亜聡、ちゃんと「おいしい」って言いなさいよ？」（にまにま）
熊埜御堂 亜聡：「、……。」（……もぐもぐ）　（…じと）
熊埜御堂 亜聡：「……。これがうまい」 卵焼きの中に味付けそぼろが入ってるやつ
熊埜御堂 明香：「！　えへへへへへ」
ドロシー　：『えらい…』（ぱちぱち）
熊埜御堂 亜聡：「なんで俺が褒められるんだよ」
熊埜御堂 亜聡：「あー…、また今度もこれな」 入れてくれアピール

熊埜御堂 明香：「ふふ、うんいいよ！」
熊埜御堂 亜聡：「ん」 もぐもぐもぐ
熊埜御堂 明香：「……あ、待ってお兄ちゃん」 ほっぺに手伸ばし
熊埜御堂 明香：「ごはんつぶついてるよ～」
熊埜御堂 亜聡：「、ん？……」
熊埜御堂 亜聡：「おー」 いつものこと感
熊埜御堂 明香：「もー、子供じゃないんだから」
熊埜御堂 亜聡：「お前も口の端にたれついてんぞ」
熊埜御堂 明香：「えっ、うそ！？　どこどこ！？」(反対側を拭く)
熊埜御堂 亜聡：「馬鹿、こっちだって」 親指でぬぐい
熊埜御堂 明香：「わぷ、…えへへ」(照れ笑い)
熊埜御堂 亜聡：「子供なのはどっちだよ。…」 満足そうに食事タイム再開
熊埜御堂 明香：「じゃあ両方ってことで！」 (満足です…)
アリス　：「そうそう。どっちもまだ子どものままでいいじゃない」（にこにこ）
熊埜御堂 亜聡：「もう高１だけどな」
熊埜御堂 明香：「でもまだ 16 歳だよ」
熊埜御堂 亜聡：「もうあと数年で……まぁいいか。今は」
熊埜御堂 亜聡：「その頃には明香も一人暮らしの決心をするかもしれねぇしな。しねぇだろうけど」
熊埜御堂 明香：「ど、どっち！？」
熊埜御堂 明香：「……まぁ、しないかもだけど……」
熊埜御堂 亜聡：「な」
アリス　：「……まぁ、厳密には亜聡も今は「一人」暮らしではないのよね…」
熊埜御堂 亜聡：「ん？」
アリス　：「ドロシーがいるじゃない」
熊埜御堂 明香：「…あっ、そっか。ドロシーちゃんがいるもんね！」
熊埜御堂 亜聡：「あぁ。まぁそうだな、今は」
熊埜御堂 亜聡：「おかげで寝坊が減った」
熊埜御堂 明香：「もー、もっとちゃんと感謝しなよ」
ドロシー　：『ならよかった…』
ドロシー　：『明香もアリスと一緒なら、二人暮らしになるね…』
熊埜御堂 明香：「家を出ても、アリスちゃんがいたら寂しくないかも…あ、でもやっぱり」
熊埜御堂 明香：「わたし、あの家も大好きだから…一人暮らしは、しないかもだなぁ」えへへ
アリス　：「ふふっ、私もあの家好きよ！とっても明るくて賑やかだし」
熊埜御堂 亜聡：「賑やかすぎて落ち着かねー時もあるけどな」
熊埜御堂 明香：「パパが毎晩酒盛りしてるからねー」
熊埜御堂 亜聡：「まぁしばらくは変わんねーだろ、あの親父」
熊埜御堂 明香：「ずっと元気でいてくれたらいいなぁ」
アリス　：「あら、楽しいお父様じゃない。私も肉体があったなら一緒に酒盛りやりたい位だわ」
熊埜御堂 亜聡：「死ぬほど絡まれるけどいいのか？」
熊埜御堂 明香：「ふふ、でもパパはママ一筋だから…」

アリス　：「どこぞの先輩みたいに変態性がなければ別に構わないわよ」
熊埜御堂 明香：「へ、変態じゃないよ！」
アリス　：「でしょうね。貴女達見てればわかるから大丈夫よ」
熊埜御堂 亜聡：「、…そうか」
熊埜御堂 明香：「わかってくれててよかった！」
ドロシー　：『……機会があったら、私も２人のお父さんに会ってみたいな…』
熊埜御堂 明香：「あ、じゃあ落ち着いたらお兄ちゃん一旦家に帰ってきなよ！」
熊埜御堂 亜聡：「えー……」 実家帰るのめんどくさい
熊埜御堂 明香：「……いや？」(むぅ)
熊埜御堂 亜聡：「たまに帰るとクソ絡んでくるからな親父が…」
熊埜御堂 明香：「そう？」
熊埜御堂 亜聡：「……しゃーねぇな」
熊埜御堂 明香：「(ぱあっ)」
熊埜御堂 亜聡：「ドロシー、お前が望んだんだから覚悟しとけよ」
ドロシー　：『うん、楽しみにしてる…』（ふふっ…）
熊埜御堂 亜聡：「……はぁ。帰省準備するか」
熊埜御堂 明香：「ふふっ、楽しみにしてるね！」

DL　：…ではそろそろ昼休みも終わりに近づいています。やっておきたい事などございますでしょうか？
熊埜御堂 明香：ひとまずは大丈夫…ですかね
熊埜御堂 亜聡：こちらも大丈夫です！
DL　：了解です！では予鈴がなります。
キーンコーンカーンコーン……
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：…では待ちに待った放課後。
調査前にミス研に顔を出しますか？
熊埜御堂 明香：出します…！
熊埜御堂 亜聡：出しますね！
DL　：了解です！

八雲 芳一　：「やぁ諸君。体調は大丈夫か？特に明香」

DL　：今日も元気に八雲が挨拶してきます。

熊埜御堂 明香：「こんにちは、部長！　はい、もう大丈夫です！」
熊埜御堂 明香：「昨日は心配かけちゃってすみません…」

八雲 芳一　：「そうかそうか。なら良かった！」
熊埜御堂 亜聡：「部長は今日も元気そうすね」
八雲 芳一　：「ははは、体調を崩しては調査もままならんからな！」
熊埜御堂 明香：「今日はもう大丈夫ですから、しっかり動けますよ！」
八雲 芳一　：「まぁ、昨日の今日だから無理はするな」
熊埜御堂 明香：「はい！」
熊埜御堂 亜聡：「それで部長は、今日も花壇のとこで見張りするんすか？」
八雲 芳一　：「ああ、現状それしか打つ手がないからな…。……ところで諸君。織畑君から依頼を受けて今日で３日経つが……。調査の進捗はどうかな？」
熊埜御堂 明香：「……ええと…」
熊埜御堂 亜聡：「…ぼちぼちっすかね。たぶん今日か明日にでも、ケリがつくかな」
熊埜御堂 明香：「…そうですね、うん」
八雲 芳一　：「ほうほう、なら安心だな！張り紙に『どんな事件も３日で解決！』と書いてしまったからな！」
熊埜御堂 明香：「そっちを心配してたの！？」
八雲 芳一　：「だって３日で解決できないと詐欺になるだろう？」
熊埜御堂 亜聡：「勝手に書いたの部長だろうが」
熊埜御堂 亜聡：「っつーかその本人が調査してねーし」
熊埜御堂 明香：「多分わたし達に守る義務ない…」
八雲 芳一　：「？張り込みは調査の一環だろう？」
熊埜御堂 亜聡：「いやそっちじゃねーよ」
熊埜御堂 亜聡：「本気なのか天然なのか分かんねーなこの人…。あー、そういえば今日は織畑は来たっすか」
熊埜御堂 明香：「あっ、そうだ。鶴乃ちゃんにかに玉を持ってきてて…」
八雲 芳一　：「…いや、まだだが…、（ｺﾝｺﾝ…）……おっと、噂をすれば何とやら…」

DL　：部室のドアがノックされますね。そして…

織畑 鶴乃　：（ｶﾞﾗｯ）「……こ、こんにちは～！明香ちゃん、亜聡君、部長さん！」
熊埜御堂 明香：「こんにちは、鶴乃ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「おー来たか」
織畑 鶴乃　：「はいっ！今日もよろしくお願いします！」
熊埜御堂 明香：「うん、よろしくね！　あ、それと…はい！」(お弁当箱ぽん)
織畑 鶴乃　：「え、お弁当…？わ、私に…！？」
熊埜御堂 明香：「これ、昨日のカニ玉なんだ。…残り物でごめんね」
熊埜御堂 亜聡：「昨日お前食えなかったからな」
織畑 鶴乃　：「い、いえっ！……お弁当…、誰かに作ってもらったのなんていつぶりだろ…」
織畑 鶴乃　：「……ありがとうございます明香ちゃん！とっても嬉しいです…！！」
熊埜御堂 明香：「……えへへ、喜んでもらえてよかった」
熊埜御堂 亜聡：「……」 女子二人が喜んでて内心ほっこり
織畑 鶴乃　：「あ、せっかくなので…。早速頂いてもいいですか…？」
熊埜御堂 明香：「うん、もちろん！　食べて食べて！」

織畑 鶴乃　：「わーい、いただきます！（もぐもぐ…）……ん～！おいし～！！」
織畑 鶴乃　：「明香ちゃんお料理上手なんですね！すごいです！」（もぐもぐ）
熊埜御堂 明香：「お口に合ってよかった～！」
熊埜御堂 亜聡：「本当なら昨日食えたんだがな」
熊埜御堂 明香：「もう、そういう事言わないの！」
熊埜御堂 亜聡：「俺の部屋も今世紀で一番綺麗だったのに」
熊埜御堂 明香：「その前は今世紀で一番汚かったの忘れないでお兄ちゃん」
織畑　鶴乃　：「はっ…！そ、そう言えば昨日　家に戻る途中で記憶が飛んでいるんです…！ご、ごめんなさい…！」（もぐもぐ）
熊埜御堂 亜聡：「だろうな。別に気にしてねーよ」
熊埜御堂 明香：「う、ううん、いいの！　でも、うまくできたからどうしても鶴乃ちゃんに食べてほしくて…勝手に持ってきたのはこっちだから」
織畑 鶴乃　：「明香ちゃん……！」（じーん…）
織畑 鶴乃　：「……亜聡君も、ありがとうございます！あと…、心配かけちゃってごめんなさい…」
熊埜御堂 明香：「ううん、今日も元気で会えたから全然いいよ！」
熊埜御堂 亜聡：「ん」
八雲 芳一　：「……何があったかは知らんが、あの後も大変だったみたいだな…。ご苦労様…」
八雲 芳一　：「まぁ、解決に向けて頑張り給えよ諸君。私も花泥棒を捕まえる為に張り込んで来るとするさ」
熊埜御堂 亜聡：「す」
熊埜御堂 明香：「はーい」

DL　：では八雲は花壇へと向かいます。
お 2 人はどうなさいますか？
熊埜御堂 明香：…行きます？　オカ研…
熊埜御堂 亜聡：行ってみます…？
DL　：一応 確認ですが…、鶴乃は連れて行きますか？
熊埜御堂 明香：…今回は危ないかな
熊埜御堂 亜聡：そうですね…一旦置いていきましょうか…
DL　：OK です＜置いてく

熊埜御堂 亜聡：「お前は引き続きカニ玉食ってろ」
熊埜御堂 明香：「言い方！　ごめんね鶴乃ちゃん、すぐ帰ってくるから…！」
織畑　鶴乃　：「あ、はい！せっかく明香ちゃんが作ってくれたんですもんね！ゆっくり味わって食べます…！」（もぐもぐ）
熊埜御堂 明香：「…えへへ」(うれしい)
熊埜御堂 亜聡：「…」 顔に出さずほっこり

熊埜御堂 亜聡：…では行きましょう！
熊埜御堂 明香：行きましょう…！
DL　：はーい、では明香さんお手製のカニ玉に舌鼓を打つ鶴乃に手を振り、お 2 人はお隣のオカ研へと向かい

ます…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：…オカ研の部室は相変わらず扉に鍵がかかっており、あの張り紙も健在です

熊埜御堂 亜聡：「（コンコン、）うそ。」

DL　：ｶﾞﾗｯ

竹取 輝夜　：「……いらっしゃ～い！なんか用？」
熊埜御堂 亜聡：「めんどくせーな毎回。お邪魔っす」
熊埜御堂 明香：「こ、こんにちは…！」
竹取 輝夜　：「様式美だと思ってよ～！…さ、中に入って入って！」

DL　：輝夜は貴方達を中に招き入れます

熊埜御堂 明香：「お邪魔します…」 今日は全員いる…かな？
御伽 雀　：「……ん？…あ～！明香ちゃんと亜聡君じゃ～ん！今日も来たの？」
熊埜御堂 明香：「雀先輩っ、こんにちは！」
熊埜御堂 亜聡：「どもっす」
小波 絵本　：「……また来たのか…」（はぁ…）
熊埜御堂 亜聡：「まぁ、調査の流れで」
御伽 雀　：「こら絵本、そんな事言わない！……調査…、って昨日言ってたヤツ？記憶が無くなるとか…」
御伽 雀　：「…あれ、そう言えば今日は鶴乃ちゃんは一緒じゃないんだ？」
熊埜御堂 明香：「そんな感じで…昨日のファイル、また見せてもらってもいいですか？」
熊埜御堂 明香：「あっ、鶴乃ちゃんは今かに玉食べてます」
御伽 雀　：「いーなー、カニ玉～！…うん、ファイルも見ていーよー！」
熊埜御堂 亜聡：「（案外ウケいいんだな、カニ玉）」
熊埜御堂 明香：「ありがとうございます！　あ、じゃあ雀先輩にもちょっと聞きたいことあるんですけど…」と部屋の隅に連れていく感じで…
御伽 雀　：「ん～？なになに～？」（とことこ）素直について行く
熊埜御堂 明香：かわいい
熊埜御堂 亜聡：「……」 ではそんな女子２人を視線で見送りながら

DL　：（あ、じゃあ明香さんは情報タブで雀と会話してます？）
熊埜御堂 明香：(特に聞きたいことがあるわけではないのですが、DL がよろしければ…)
DL　：（いいですよ！では明香さんは情報タブへ移動お願いしたします！）
熊埜御堂 明香：(はーい！)

[明香・雀 side]

熊埜御堂 明香：「すみません雀先輩、連日お邪魔しちゃって…」

御伽 雀　：「んーん！最近は割とヒマしてたからへーきへーき！」

熊埜御堂 明香：「ヒマしてた？」

御伽 雀　：「だってずっと部室に鍵かけてどこにも行かないで…、なんでなのか聞いても 2 人とも教えてくんないし…」

熊埜御堂 明香：「…ずっとなんですか？」

御伽 雀　：「うん。いつからだっけな…、それは忘れたけど。」

熊埜御堂 明香：「じゃあ、放課後はいつもここに？」

御伽 雀　：「ん。だから正直ヒマだったんだ～」

熊埜御堂 明香：「そうだったんだ…じゃああの合言葉もそれ関連なんでしょうか」

御伽 雀　：「多分ね～。輝夜ちゃんに聞いても「ひみつ！」としか言わないんだけど」

熊埜御堂 明香：「そっかぁ。…こっそり出かけたりとかしないんですか？」(こそっ)

御伽 雀　：「した……っけなぁ…？なんでだろ…、思い出せないや…」（う～ん…？）

熊埜御堂 明香：「……小波先輩も、何か言ったりはしてくれないんですか？」

御伽 雀　：「……「お前の為だ」、としか、言ってくれない…」

御伽 雀　：「……もう、絵本も輝夜ちゃんも…、何考えてんのかわかんないよ…」（はぁ…）

熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 明香：「ちょっと、寂しいですよね。そういうの」

御伽 雀　：「そ～なんだよ～！なんか、1 人だけアウェイなの！！」

熊埜御堂 明香：「ふふっ、…わたしのお兄ちゃんもあんまり話さずに勝手に動いちゃうことあるんです」

熊埜御堂 明香：「だから、そういう時は…わたしも勝手に動いちゃうんですよ。もうお兄ちゃんなんかしーらないって」

熊埜御堂 明香：「言ってくれないなら、わたしも勝手にお兄ちゃんのために動くねって」

熊埜御堂 明香：「アウェイなら、仲間外れなら、その分動いて心配させちゃうんです。…ちょっとひどいかもだけど」

御伽 雀　：「そっかぁ…。……それもアリ、かな…？」（にこ～…）

熊埜御堂 明香：「アリですよ！　だって……」

熊埜御堂 明香：「お互いに大事に思いあってるんだから。ケンカしちゃうかもしれないけど、お別れにはきっとならないですよ」

御伽 雀　：「確かにそーかも！……つーか絵本とはしょっちゅうケンカしてるってゆーか、怒られてるんだけどね～！」（あはは）

熊埜御堂 明香：「あ～、小波先輩厳しそうですもんね…」

御伽 雀　：「まぁ、無茶ばっかしてる私のせいなんだけどね！」（あはは）

御伽 雀　：「いつだっけな…、「真夜中の学校でおまじない」やるっつったらめっちゃ怒られたな～」

熊埜御堂 明香：「真夜中の、…それは怒られてやめちゃったんですか？」

御伽 雀　：「……え～っと…、どうしたんだっけ…？覚えてないや…」（う～ん…）

熊埜御堂 明香：「うーん、印象に残ってないってことはやめちゃったのかもですね…」

御伽 雀　：「…そーかもしんない。ま、やったとしても覚えてないって事はそんな大した事も起こってないって事っしょ！」

御伽 雀　：「……あ！じゃ～今度はマジで真夜中の学校に泊まり込んで絵本 心配させてやろっかな～？」（にこ～）

熊埜御堂 明香：「ふふ、きっとすごーく心配しますね。……もしかして雀先輩って」

熊埜御堂 明香：「小波先輩の事……」

御伽 雀　：「……えっ？」

熊埜御堂 明香：「あっ、ご、ごめんなさい。違うんだったら失礼ですよね、ええと、」

御伽 雀　：「ちょ…、違うって…！そんなんじゃないから…！！」（かぁぁ…）耳まで真っ赤になる

熊埜御堂 明香：「……あっ」

熊埜御堂 明香：「……わぁ～……」(はわわ)

御伽 雀　：「ちょ…！だ、だからぁ…！！」（あわあわ）

熊埜御堂 明香：「だ、だいじょうぶです！　内緒にしますから…！」(はわわ)

御伽 雀　：「言わないでよっ！？絶対だからね！？ぜっっっっったい、だからね！？！？」

熊埜御堂 明香：「は、はい！　もちろんですっ」

熊埜御堂 明香：「……せんぱい、かわいい…」

御伽 雀　：「あ～～～～も～～～～！！」（ぷいっ）真っ赤になって顔をそむけます

熊埜御堂 明香：「ご、ごめんなさい、つい……ふふふっ」

御伽 雀　：「笑わないでよ～～～～！！明香ちゃんいじわる～～～～！！！！」（ぷんぷん）

熊埜御堂 明香：「はわわ、ご、ごめんなさい～～～～今度カニ玉持ってきますから～～～～」

御伽 雀　：「……ホントに？」（ぐすん…）

熊埜御堂 明香：「ほ、ほんとに！」

御伽 雀　：「……ギョーザも付けてくれたら許す…」（ぐすん…）

熊埜御堂 明香：「つ、つけます！　頑張って包みます！」

御伽 雀　：「わーい！楽しみ～！！」（ぴょんぴょん）飛び跳ねて喜ぶ

熊埜御堂 明香：「えへへ…あ、そうだ。お兄ちゃんに今日の買い物のこと伝えておかなきゃ…」とお兄ちゃんの方へ突撃したいです！

御伽 雀　：「あ、じゃあ私も～！ギョーザ～！」（とことこ）

DL　：では亜聡君と合流しますか？

熊埜御堂 明香：(あ、待たずに合流してしまった…すみません)(します…！)

DL　：いえいえ大丈夫ですよ！
　ではメインタブへ移動お願い致します！

一方その頃

[亜聡・絵本・輝夜 side]

熊埜御堂 亜聡：こちらは、女子２人を見送ったら、向き返って残った先輩２人をじっと見つつ

熊埜御堂 亜聡：「……で。聞きたいことがあるんすけど。先輩がた」

竹取 輝夜　：「…？聞きたい事…？」

小波 絵本　：「……なんだ？」

熊埜御堂 亜聡：「ん。……まずは、突拍子もないことから。小波先輩と雀先輩って、何かそれなりの関係だったりしますか？」
小波 絵本　：「……はぁ？」
熊埜御堂 亜聡：「…」 じっと見てる
小波 絵本　：「……ちょっと何を言っているのかわからない…」

熊埜御堂 亜聡： ＜心理＞とか振れます…？
DL　：いいですよ！判定どうぞ！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！

熊埜御堂 亜聡：2DM<=8〈心理〉(2DM<=8) ＞ [10, 4] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：草
DL　：エラー出てる…、BD 使います…？
熊埜御堂 亜聡：あっ通常成功にはできるんですね、ではお願いします！
DL　：はーい、では通常成功扱いで情報を出します

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：4 → 3

DL　： では小波は亜聡君の質問にかなり戸惑っています。雀に対して好意はあるのでしょうが、友達以上恋人未満といった所でしょう

熊埜御堂 亜聡：「……。……なんだ、違うのか」 ぼそっと
熊埜御堂 亜聡：「てっきり「だから」だと思ったんすけど」
小波 絵本　：「……さっきから何の話をしているんだ…？」
熊埜御堂 亜聡：「それはもちろん」
熊埜御堂 亜聡：「雀先輩のことす。……昨日、あの後。俺らはゲーム部の御伽先輩に会いに行った。」
小波 絵本　：「……」
熊埜御堂 亜聡：「で、聞いた。……半年前の事故のことを。」
熊埜御堂 亜聡：「先輩。…何か俺等に隠してるでしょ。ゲーム部のあの先輩が嘘をついてるようには思えなかった、それよりもアンタ達の態度の方が気にかかる」
熊埜御堂 亜聡：「雀先輩に何があったんですか。その上で、…どうしてここにいるんですか」
小波 絵本　：「……何が言いたい」
熊埜御堂 亜聡：「…もっとはっきり言えって？」
熊埜御堂 亜聡：「雀先輩は半年前に死んでる。その上で、なんで今、ここで、明香と楽しげに喋ってるのかって聞いてんですよ」
熊埜御堂 亜聡：「何か知ってるんでしょ。先輩は…いや、先輩たちは」
小波 絵本　：「……」
小波 絵本　：「…仮にお前が言っていることが真実だったとしよう。で、それがどうした？」
熊埜御堂 亜聡：「……はぁ？」

小波 絵本　：「雀はそこにいる。僕たちは雀を認識している。雀は自身の在り方に疑問を抱いていない。生者か死者かという違いは、肉体か霊体かという違いは、この奇跡の前では瑣末なことだ。」

熊埜御堂 亜聡：「……なら。ゲーム部の御伽先輩は、雀先輩のことを認識していない。在り方に疑問を抱く以前に、そもそもここにまだいることを知らない」

熊埜御堂 亜聡：「雀先輩が"いない"ことを正しく理解している人がいる。むしろ、アンタ達 2 人しかそのことを享受してねぇんじゃねぇのか。それは、些末なことですか」

小波 絵本　：「……お前の目には彼女の不自然な性質が不気味に映るか？だがそれも周囲の認識が変化すれば元通りになる。まもなく雀はこの部屋を出て、正常な世界へと帰還する。」

熊埜御堂 亜聡：「っ、……どういうことだ？」

小波 絵本　：「……部外者は知らなくていい。少し、喋り過ぎた…」 ふい、と顔をそむける

竹取 輝夜　：「……亜聡」

熊埜御堂 亜聡：「…なんすか」

竹取 輝夜　：「……これは私らの問題。亜聡は、首突っ込まなくていーの。」

熊埜御堂 亜聡：「……」

熊埜御堂 亜聡：「……あながちそうでもねーのが、厄介なんだろうが」

竹取 輝夜　：「……ふ～ん…？」

竹取 輝夜　：「……ああ、そーだ。一つ、良い事教えてあげる」

熊埜御堂 亜聡：「ん？」

竹取 輝夜　：「……雀はね、この部屋から出られないの。」

熊埜御堂 亜聡：「…出られない？」

竹取 輝夜　：「御伽先輩から雀の事故の事 聞いたんでしょ？今の 2、3 年生はみんなあの子が死んでる事を知ってる。だから出られないの」

熊埜御堂 亜聡：「……。見えないから？」

竹取 輝夜　：「周りの人間から見えないって事にあの子が気付いたら、自分の死を自覚するかもしれないでしょ？」

熊埜御堂 亜聡：「…？　死を自覚したら、どうなるんですか」

竹取 輝夜　：「……この世には居られない、って事でしょ」

熊埜御堂 亜聡：「…、そう…、……」

熊埜御堂 亜聡：「…そう、すか。……でも、「まもなく雀先輩はこの部屋を出」られる、んでしたっけ。」

熊埜御堂 亜聡：「死を自覚しなくていられる、……つまり、周りが雀先輩の死を認識していない、…忘れる？」

熊埜御堂 亜聡：「…そんな感じっすか？　先輩たちの隠し事。」

竹取 輝夜　：「……ふふっ。さ～、ど～だろ～ね～？」

熊埜御堂 亜聡：「……なんか。とんでもないこと企んでそうっすね。」 ジト目

熊埜御堂 亜聡：「その計画の一端、話してくれる気は？」

竹取 輝夜　：「……それはそっちの出方次第、かな～？」

竹取 輝夜　：「……亜聡の方こそ、私達に何か隠してる事ない…？」

熊埜御堂 亜聡：「…どうすかね。俺が何を隠してたら、輝夜先輩として都合がいいのか分からねぇんで」

熊埜御堂 亜聡：「何が隠し事になるのかも、よく」

竹取 輝夜　：「……ふ～ん？……じゃあ、もっぺん聞くよ」

竹取 輝夜　：「……明香の『CS』、何か変わった事はない？」

熊埜御堂 亜聡 ：「……。…先輩が期待してるものかどうかは、俺には分からない。だから、何をもって「変わったことか」を答える言葉を俺は持ってない」
熊埜御堂 亜聡 ：「が、俺達にとっては確実に何かが変わってる。…し、変わり続けてる。…まだ今も。」
熊埜御堂 亜聡 ：「そういうものを押し付けた自覚は、あるんでしょう」
竹取 輝夜　：「「押し付けた」…？何の事を言ってるのかな～…？」
熊埜御堂 亜聡 ：「はっ、…なんだ。そっちがまだその態度じゃ、期待した答えは「まだ」返せそうにないっすね」
竹取 輝夜　：「……ふ～ん、そう…」
竹取 輝夜　：「じゃあ、こっちも亜聡が望む答えは返せない、かな」
熊埜御堂 亜聡 ：「、…それじゃあ、」　真剣な顔で二の句を継ごうとする

熊埜御堂 明香 ：「お兄ちゃん！　あのね、今日ね……あれ？」
熊埜御堂 亜聡 ：「（、ぴた）……」　明香ちゃんと雀先輩が戻ってきたのを見て口を止める
熊埜御堂 明香 ：「…じ、邪魔だった？」
熊埜御堂 亜聡 ：「……。……いや？」
御伽 雀　：「カニ玉とギョーザ～！」（るんるん）
熊埜御堂 亜聡 ：「こっちの話はだいたい終わってた。……って、何の話してたんだよそっちは」
熊埜御堂 明香 ：「うぅ…雀先輩を泣かせちゃったので、カニ玉とギョーザで手を打ってもらいました…」
御伽 雀　：「明香ちゃんにカニ玉とギョーザ作ってもらうんだ～！」（るんるん）
熊埜御堂 亜聡 ：「いやクッソ笑顔じゃねーか」
御伽 雀　：「さっきまでは泣いてたモン！」
熊埜御堂 亜聡 ：「本当かよ…。」
熊埜御堂 明香 ：「だから材料買ってお兄ちゃん家の冷蔵庫に入れておこうかなって…」
小波 絵本　：（ぴく…）「……何を言われたんだ…？」（ジロリ…）雀に話しかけながら、視線は明香さんへ
熊埜御堂 明香 ：「ひゃえっ」ばばっと亜聡くんの後ろへ
熊埜御堂 亜聡 ：「人の妹睨むな。先輩のこといじめるわけねーでしょ」
御伽 雀　：「へ…？……あ…。え、絵本には関係ないでしょっ！」（かぁぁ…）
熊埜御堂 亜聡 ：「、…」ん？って顔
熊埜御堂 明香 ：「…かわいいかわいいって、いっぱい言っちゃった…」と亜聡くんにだけに
熊埜御堂 亜聡 ：「……、…あー」
御伽 雀　：「と、とにかく…！その件はカニ玉とギョーザで手打ちになったんだから…！もーいーの！！！！」（かぁぁ…）
熊埜御堂 亜聡 ：「だそうっすけど」
小波 絵本　：「……なら良いが…」（ふい…）
熊埜御堂 亜聡 ：「（なんでこれで「ちょっと何を言っているのかわからない」になるんだ）」
熊埜御堂 明香 ：「？」
熊埜御堂 亜聡 ：「まーいいや。明香、なんかやり残したことあるか」
熊埜御堂 明香 ：「あ、ううん。特には……」
熊埜御堂 亜聡 ：「ん。…それじゃ、そろそろお暇するか。聞きたいことは今は聞けねーみてぇだし」
熊埜御堂 明香 ：「え、あ、うん。……」(ちら)
小波 絵本　：「……もう来るなよ」

御伽 雀　：「絵本はまーたそーいう事言う！……ごめんね～2 人とも。また来て大丈夫だからね！ね！」（ぴょこぴょこ）
熊埜御堂 亜聡：「言ってること真逆じゃないっすか。それじゃ」
熊埜御堂 明香：「はい、カニ玉とギョーザ持ってきますね！」
御伽 雀　：「わーい！楽しみにしてるね～！」
竹取 輝夜　：「んじゃ、今日はお開きって事で！2 人とも、またね～！」

熊埜御堂 亜聡：退出で…！
熊埜御堂 明香：ばいばい…！
DL　：はーい、ではお 2 人は雀と輝夜の見送りでオカ研を後にします…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：…ではオカ研を出た訳ですが…、この後はどこに行きますか？
熊埜御堂 亜聡：とりあえず情報共有を…
熊埜御堂 明香：しますか…！　ミス研の帰り道で諸々共有！
DL　：OK です＜共有

熊埜御堂 亜聡：「妙に消耗した」　げっそりしつつ、かくかくしかじか漏れなく
熊埜御堂 明香：「た、大変だったね。こっちはね…」
熊埜御堂 亜聡：「……あー。やっぱりその辺の記憶は、曖昧だったか」
熊埜御堂 明香：「うん、それに出られないって…」
熊埜御堂 亜聡：「輝夜先輩も言ってたな、それ。……で、小波先輩は、「まもなく出られるようになる」って。」
熊埜御堂 亜聡：「何企んでんのか聞いたら、「CS で隠してること教えてくれたら」云々だと」
熊埜御堂 明香：「……アリスちゃん達のこと？」
熊埜御堂 亜聡：「だろうな。それに、昨夜のアリスとドロシーの話を合わせると」
熊埜御堂 亜聡：「輝夜先輩が狙ってんのは十中八九ドロシーで、それが明香の CS にいると思ってるから未だにいろいろ聞いてくるんだろ」
熊埜御堂 明香：「はわ……じゃあやっぱり、先輩達の狙いはドロシーちゃんなんだ…」
熊埜御堂 明香：「アリスちゃんにしたみたいに、ドロシーちゃんの力を奪おうと……」
熊埜御堂 亜聡：「そういうことなんだろうな。…奪った結果何がしたいのかまでは、はっきりは聞けてはないが。断片的な情報は、さっきも言った通りだ」
熊埜御堂 明香：「そっか……」
熊埜御堂 亜聡：「あと分かったことは、…直接か間接かはともかく、小波先輩はやっぱり関わってる。というか動機がそっち寄りだ、あいつ雀先輩のことつなぎ留めたいんだろ」
熊埜御堂 亜聡：「むしろ輝夜先輩がよく分からん。人の色恋応援マシーンなのかもしれねぇ」
熊埜御堂 明香：「ひとのいろこいおうえんましーん」
熊埜御堂 亜聡：「明香の CS 気にしまくってるのは輝夜先輩だしな」

熊埜御堂 明香：「…どうしてわたし達だったのかな…」
熊埜御堂 亜聡：「…さぁな」
熊埜御堂 明香：「…でも、よくわかんないけど…輝夜先輩は、「わかってて」協力してるんだよね…」
熊埜御堂 明香：「……小波先輩が持ち掛けた、のかな」
熊埜御堂 亜聡：「……可能性はあるな」
熊埜御堂 明香：「……逆は、どうかな」
熊埜御堂 亜聡：「…逆？」
熊埜御堂 明香：「輝夜先輩が、小波先輩に……って」
熊埜御堂 亜聡：「……。……その構図、なら…」
熊埜御堂 亜聡：「想像できるパターンは、「つけこんだ」…ってとこか」
熊埜御堂 明香：「かもしれない、って…輝夜先輩の立ち位置がわからないなら」
熊埜御堂 明香：「その立ち位置を、「最初」に持ってきたら……何となく当てはまるような気がするというか…」
熊埜御堂 亜聡：「……なるほどな。一番しっくりきた。」
熊埜御堂 亜聡：「確かに、明香の言う通りだった方がうまくはまる。気がする。発端が輝夜先輩で、何か目的があって話を持ちかけた」
熊埜御堂 明香：「その話は、小波先輩にとって…自分の望みを叶えられるものだったから、乗っかった」
熊埜御堂 明香：「輝夜先輩はそれに応えて、積極的に自分と小波先輩の目的の為に動き回って……って、なるのかな」
熊埜御堂 亜聡：「そうかもな。それで協力関係ができあがった……ってとこか」
熊埜御堂 亜聡：「…だとしたら、輝夜先輩にとっての小波先輩の役割はなんだ？　今の話だけだと、輝夜先輩にとってのうまみがよく分からない」
熊埜御堂 亜聡：「見えてないだけで、小波先輩が何か輝夜先輩の手伝いをしているのか」
熊埜御堂 明香：「……あのね、…あの」
熊埜御堂 明香：「……隠れ蓑、だったら…どうしよう」
熊埜御堂 亜聡：「隠れ蓑」
熊埜御堂 明香：「だって、どうしたって…この構図だと、小波先輩の目的に目がいっちゃう」
熊埜御堂 明香：「…輝夜先輩の目的は、何も分からないまま…隠したまま、動けるんじゃって」
熊埜御堂 亜聡：「つまり陽動か。……！」
熊埜御堂 亜聡：「目的を隠したまま動けること自体がメリットか」
熊埜御堂 明香：「……かな、って」
熊埜御堂 亜聡：「筋は通る。俺が輝夜先輩でも、そういう考え方は無しじゃない。隠したいほどの目的が何か、までは分からねーが」
熊埜御堂 亜聡：「メイのおかげで、かなりすっきり思考がまとまった」
熊埜御堂 明香：「う、ううん！　ならよかった、…けど」
熊埜御堂 明香：「……小波先輩は、ただ雀先輩にいなくなってほしくないだけ、なんだよね」
熊埜御堂 亜聡：「……だろうな」
熊埜御堂 明香：「……分かっちゃうの。わたしも、何度も考えたことあるから」
熊埜御堂 亜聡：「、…メイ？」
熊埜御堂 明香：「……"熊埜御堂"になる前のこと、もしも、ああならなかったらって――」
熊埜御堂 亜聡：「……」

熊埜御堂 亜聡 ：「…それでも。ああいうことが起きて、今、"熊埜御堂"として、こうしてここにいること。それだけが、真実だ」
熊埜御堂 亜聡：「明香。……今、お前、幸せか？」
熊埜御堂 明香：「、……」
熊埜御堂 明香：「うん」
熊埜御堂 亜聡：「本当だな？」
熊埜御堂 明香：「本当だよ」
熊埜御堂 明香：「だってわたし、いっぱい愛して愛されて、生きてる」
熊埜御堂 亜聡：「そうか。……もしそう思うんなら、それは」
熊埜御堂 亜聡：「それは、今のお前がつかみ取ったからそこにある幸せだ」
熊埜御堂 亜聡 ：「「もしも」を考えるのは悪くない、が、その上で今を生きてるお前が、俺にとっては…一番大事だ。」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん……」
熊埜御堂 明香：「……ありがとう、…ごめんね。わたし、ちょっとだけ忘れちゃってた」
熊埜御堂 亜聡：「…」 …頭ぽん
熊埜御堂 亜聡：「幸せに、生きててくれ。明香。…そうであれば、俺も…それなりに幸せだ」
熊埜御堂 明香：「……もー、それなりじゃ駄目だよお兄ちゃん」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんも、幸せに生きてね。それが、わたしにとっても幸せだから」
熊埜御堂 亜聡：「…ん」
熊埜御堂 明香：「ふふ、…じゃあ部室もどろっか。鶴乃ちゃん待ちくたびれちゃう」
熊埜御堂 亜聡：「だな。…さすがにカニ玉食い終わったかな」

DL ：では２行動目はミス研に向かう、でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 明香：はーい！
熊埜御堂 亜聡：OK です！
DL ：ではミス研に戻ってきた所から再開としましょう。

織畑 鶴乃 ：「……あっ、明香ちゃん、亜聡君！おかえりなさい！」
熊埜御堂 明香：「ただいま、鶴乃ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「食い終わったか？カニ玉」
織畑 鶴乃 ：「はい！美味しかったです！明香ちゃん、ありがとうございます！」
熊埜御堂 明香 ：「えへへ、喜んでもらえてよかった。…今度はギョーザも作ることになっちゃったから、また持ってくるね」
織畑 鶴乃 ：「わーいギョーザ楽しみです！…あっ、お弁当箱はまた洗ってお返ししますね！」
熊埜御堂 明香：「えっ、そんないいのに～」
熊埜御堂 亜聡：「律儀だな。俺だったら洗わねー」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんは身内なんだから洗おうね！」
熊埜御堂 亜聡：「身内差別だ」
熊埜御堂 明香：「もー！」
織畑 鶴乃 ：「え、えっと……。洗った方がいいと思います…」

熊埜御堂 亜聡：「織畑にまでマジの忠告された」

熊埜御堂 明香：「ほらぁ！」 ぺちぺち

熊埜御堂 亜聡：「めんどくせー…。はいはい、叩くな叩くな。餃子焼くとき場所貸してやるからそれでいいだろ」

熊埜御堂 明香：「(ぷぅ)」

熊埜御堂 亜聡：「……」（ほっぺたを両側から押す）

熊埜御堂 明香：「(ぷしゅー)…お兄ちゃん！」

熊埜御堂 亜聡：「ぶっ、」

熊埜御堂 亜聡：「くっくく……！　今のいいな、もう一回膨らませて織畑にもやってもらえよ」

織畑 鶴乃　：「わぁ、今日もなかよしですね！」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」 ぺちぺち

熊埜御堂 亜聡：「あーはいはい。悪かった悪かった」

熊埜御堂 明香：「本当にそう思ってる？　…もー」(ぷくぷく)

熊埜御堂 亜聡：「……っつーか。こうして喋ってても思うんだけどよ。織畑、なんで友達いねーんだ？」

織畑 鶴乃　：「えっ…」

熊埜御堂 亜聡：「喋るし、笑うし、態度が悪いわけでもねーし。なんなら影も薄くない。普通じゃねぇか」

熊埜御堂 明香：「…お兄ちゃん…」

織畑 鶴乃　：「え、えっと…、…多分、なんですけど…」

織畑 鶴乃　：「……私、明香ちゃんと亜聡君と一緒の時は普通に喋れるし、笑えるけど…。他の人の前だといまいち自信が持てなくて…、それでおどおどしちゃうのが原因じゃないか、って…」

熊埜御堂 亜聡：「織畑から見ると、俺等の前と他の奴の前じゃあ何か違うのか？」

織畑 鶴乃　：「う～ん……。何と言いますか…。明香ちゃんと亜聡君は、私がおどおどしてたりしてもイラついたりしないし、そんな事しないって信じられる気がして…」

熊埜御堂 明香：「……えっと、それって」

熊埜御堂 明香：「友達、って思ってくれてるんだよね。きっと」

織畑 鶴乃　：「……！！」

熊埜御堂 明香：「わたし達のこと、いっぱい、信じてくれてるんだ鶴乃ちゃん。……えへへ」

熊埜御堂 明香：「そう言うのって、改めて聞くと照れちゃうけど嬉しいね」

織畑 鶴乃　：「……そう、ですね…。そういう風に信じられるのが、きっと友達なんですよね…！」

熊埜御堂 亜聡：「……まぁ、そーいうことでいいんじゃねーか。」 ２人が嬉しそうだから内心ちょっと照れくさい

熊埜御堂 明香：「えへへー」

織畑 鶴乃　：「えへへ！」

熊埜御堂 亜聡：「……」

熊埜御堂 亜聡：「……っつーか織畑 真面目なんだよ。今の話聞いても、もし俺だったら「なにイラついてんだ○すぞ」ぐらい内心思ってっからな」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」

織畑 鶴乃　：「ふぁ！？！？」

熊埜御堂 亜聡：「やられる前にやれ」

熊埜御堂 明香：「そういう事は、あの、いきなり言われるとびっくりする！」

熊埜御堂 明香：「ママに「言い過ぎですよ」って言われちゃうよ！　……何でかパパは笑い飛ばしそうだけど…」

熊埜御堂 亜聡：「性格の差だな」

織畑 鶴乃　：「あ、あの！ぼ、暴力は、よくない、と思います！」
熊埜御堂 亜聡：「いい奴かよ。やっぱ織畑は明香寄りだな」
熊埜御堂 明香：「む、むぅ…」
熊埜御堂 亜聡：「そういうとこがお前ら似てる」
熊埜御堂 明香：「…えへへ、仲良しに見える？」
熊埜御堂 亜聡：「見えるもなにも、仲良しなんだろ」
織畑 鶴乃　：「……えへへ、だったら嬉しいです！」
織畑 鶴乃　：「……明香ちゃん、私と亜聡君はなかよし、で合ってると思いますか…？」
熊埜御堂 明香：「ふふ、心配しなくても」
熊埜御堂 明香：「ちゃんと仲良しに見えるよ！　…お兄ちゃん、さっきのみたいな言い方ばっかりだから誤解されがちなんだけど」
熊埜御堂 明香：「鶴乃ちゃんは、お兄ちゃんが意外と面倒見がいいこともう知ってるでしょ？」
織畑 鶴乃　：「はい！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、だってお兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「黙って聞いてりゃ言いたい放題か」
熊埜御堂 亜聡：「俺をなんだと思ってんだ。だいたいだな。…どうでもいい相手だったら会話すらしねーよ」
織畑 鶴乃　：「……！亜聡君……！」
熊埜御堂 亜聡：「目ぇキラキラさせんな。こっち見んな」
織畑 鶴乃　：「えっ、あっ、ご、ごめんなさい…」（あわあわ）
熊埜御堂 亜聡：「真面目か」
熊埜御堂 亜聡：「……くそ、調子狂うな…」 いい子すぎて
熊埜御堂 明香：「もー、お兄ちゃんたら」
熊埜御堂 明香：「ちゃんと友達だと思ってるよ、ってたまには声に出して言ってみてもいいんだよ？」
熊埜御堂 亜聡：「……」　めちゃくちゃ居たたまれなさそうな顔
熊埜御堂 亜聡：「…あー……。……だから、…そうだって、言って、…んだろ」
織畑 鶴乃　：「亜聡君…！嬉しいです…！」
熊埜御堂 明香：「よかったね、鶴乃ちゃん！」
織畑 鶴乃　：「はい！」
熊埜御堂 亜聡：「くそっ……二人で仲良く駄弁ってりゃいいだろ！」 居たたまれなさにパーカーのフードを被る
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんも入ってきていいんだよ、友達なんだから！」
熊埜御堂 亜聡：「…気が向いたらな！」
織畑 鶴乃　：「気が向いたら喋ってくれると嬉しいです！」
熊埜御堂 明香：「もー、じゃあ気が向くの待ってるからね！」
熊埜御堂 亜聡：「気が向くまで勝手に喋っとけ！……」 フード被ったままで背中向けるくるり
熊埜御堂 明香：「もー、……どうする鶴乃ちゃん？」
織畑 鶴乃　：「あ、えっと…、じゃ、じゃあ２人でお喋りしてませんか！？」（あわあわ）
熊埜御堂 明香：「あっ、じゃあお兄ちゃんには聞かせないようにおしゃべりしよ！」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「ふふふ、内容が聞きたければお兄ちゃんも会話に入るのだー」
織畑 鶴乃　：「女子会ですね！私、これも初めてです！」（きゃっきゃっ）

熊埜御堂 亜聡：「……」　……＜聞き耳＞振っていいですか？？？
DL　：ｗｗｗｗｗいいですよｗｗ
熊埜御堂 明香：「じゃあこっちに……」(こしょこしょ)

熊埜御堂 亜聡：1DM<=5〈聞き耳〉(1DM<=5) ＞ [1] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 亜聡：草
熊埜御堂 明香：ｗｗｗｗｗ
DL　：どんだけ聞きたいんだよ！ｗ
DL　：では亜聡君、BD1 つどうぞ！ｗ
熊埜御堂 亜聡：こんなとこで BD もらった…ｗｗｗ　ありがとうございます！！

熊埜御堂 明香：「あのね、お兄ちゃんは今でこそあんなだけど…幼稚園から小学生の頃はずっと、わたしと手つないで学校行ってたんだよ！」
熊埜御堂 亜聡：「！？(ごふっ)」
織畑 鶴乃　：「わぁ、なかよしでいいですね！」
熊埜御堂 明香：「でしょ！　えへへ、わたしが風邪で学校おやすみになった時も、お姉ちゃんに説得されるまで玄関でずっと待っててくれたりしたんだ」
熊埜御堂 亜聡：「……」(……ぷるぷる)
織畑 鶴乃　：「亜聡君、昔から優しいのは変わってないんですね！」
熊埜御堂 明香：「うん！　…でも、次は逆でお兄ちゃんが風邪でお休みになった時、わたしが待たずに学校行ったら、帰ったときにすごく拗ねてて…」
熊埜御堂 明香：「おやつのプリンあげるまで、ずっとむすっとしてて大変だったなぁ…」
織畑 鶴乃　：「ふふっ、それだけ明香ちゃんの事が大好きなんですね！」
熊埜御堂 亜聡：「っだからあれは違うって前言っただろ！！」 がばっ
熊埜御堂 明香：「えへへ、そうなんだ…ってわぁ！」
熊埜御堂 明香：「…もー、お兄ちゃん。もしかして盗み聞きしてた？」
熊埜御堂 亜聡：「ぐっ、……聞こえるような声で喋ってんのが悪ぃんだろ」
熊埜御堂 亜聡：「っつーか何度も言うが、あれは、別にお前が気にせず学校行ったのがどうこうっつー話じゃなくてだな」
熊埜御堂 明香：「…なら、どういう事だったの？」(こてん)
熊埜御堂 亜聡：「っだから……それは……。……」
熊埜御堂 明香：「…それは…？」
熊埜御堂 亜聡：「……風邪引く前の日、明日は学校帰りに一緒に駄菓子屋行くって話してた、だろ」
熊埜御堂 亜聡：「前日お前あんなに大喜びしてたのに、いざ行けねーってことになって、……お前がふてくされて泣いてんじゃねーかと思って、無理やり玄関まで行ったら」
熊埜御堂 亜聡：「そん時お前、ぐずってるどころかもう学校に出かけてていなかった」
熊埜御堂 明香：「……もう」
熊埜御堂 明香：「ちゃんと風邪が治ってから一緒に行ったでしょ？」
熊埜御堂 亜聡：「その日行けなかったからヘコんでんじゃねーかと思ってたんだよ」

熊埜御堂 亜聡：「全然けろっとしてたけど」
熊埜御堂 明香：「…だって」
熊埜御堂 明香：「その時にはもう、お兄ちゃんといつだって一緒にいけるって分かってたもん」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……くそ、ただ俺が墓穴掘っただけじゃねーか」
熊埜御堂 明香：「ふふっ、ざんねんでした～」
織畑 鶴乃　：「いいなぁ…、私も、そんな家族がほしかったです…」（ぽつり）
熊埜御堂 明香：「……あっ、じゃあ鶴乃ちゃん！」
熊埜御堂 明香：「今日の放課後、駄菓子屋かコンビニで買い食いしようよ！」
織畑 鶴乃　：「……！はい、喜んで行きます…！」
熊埜御堂 亜聡：「…別に買い食いに家族である必要もねーしな」
熊埜御堂 明香：「うん、こういう事するのに早いも遅いもないしね！」
織畑 鶴乃　：「……！えへへ、そうですよね！」
熊埜御堂 明香：「鶴乃ちゃん、駄菓子何が好き？　わたしはさくらんぼ餅！」
熊埜御堂 亜聡：「俺はココアシガレット」
織畑 鶴乃　：「えっと…、あのちっちゃいヨーグルトが好きです！」
熊埜御堂 明香：「あれも美味しいよね！」
熊埜御堂 亜聡：「あれ美味いよな」
織畑 鶴乃　：「ハモってます！ふふっ！」
熊埜御堂 明香：「あっ、…えへへ、ちょっとはずかしい」
熊埜御堂 亜聡：「うまいやつの名前あげた織畑も同罪」
織畑 鶴乃　：「ふふっ…、なんですかそれ…！」（くすくす）

DL　：では気付けば時刻はもうすぐ 19 時…。最終下校時刻が近づいています

熊埜御堂 亜聡：「、……ん。もうンな時間か」 教室の時計を見上げつつ
熊埜御堂 明香：「わ、結構話し込んじゃったね」
織畑 鶴乃　：「わわっ…、毎度毎度いつまでも居座っててすみません…！」
熊埜御堂 明香：「ううん、いいのいいの。だってもう入部決定みたいなもんだし！」
熊埜御堂 亜聡：「何言ってんだよ。お前もミス研だろ」
織畑 鶴乃　：「……！はいっ…！…あ、入部届は週明けに部長さんがもらってきてくれるって言ってました…！」
熊埜御堂 亜聡：「おー。じゃあ来週からだな、正式に部員になるのは」
熊埜御堂 明香：「えへへ、楽しみだね！　……」
織畑 鶴乃　：「はいっ！正式に入部したらよろしくお願いします！」（ぺこり）
熊埜御堂 亜聡：「……おー」
熊埜御堂 明香：「…うん！」
熊埜御堂 亜聡：「……それじゃあ、帰るか」
織畑 鶴乃　：「はい…！」

DL　：では下校しますか？

熊埜御堂 明香：…します…！
熊埜御堂 亜聡：します…！
DL　：はーい！……

DL　：……それでは３人で、薄暗くなってきた廊下を並んで歩く。残っている生徒も大分まばらになってきたようだ

DL　：――廊下を歩いていると、視界が一瞬、テレビノイズのように歪む。
DL　：砂嵐はすぐに収まった。
暗い、赤い、黒い、あの異界だ。
DL　：動けない。
それは恐怖による足の震えだけが原因ではなかった。
DL　：囲まれていた。生徒のような何かは徒党を組んで手を繋ぎ、輪を作っていた。
DL　：ぐるぐると、ゆっくり、ゆっくり揺れ動く。
不思議と表情は見えない。暗いからだろうか。

？？？？？？：「うしろのしょうめん」

DL　：声ではない何かが、聴覚を無視して響いている。
そう聞こえるような錯覚が、響いている。

？？？？？？：「うしろのしょうめん」

DL　：違和感がある。
こちらに向けて発した音ではないような。
まるで対岸に向けて話しているような。

？？？？？？：「うしろのしょうめん」

DL　：気づく。全てに気づく。
そうだ、顔なんて見えるわけないじゃないか。

？？？？？？：「「「「「だーれだ？」」」」」

DL　：首が１８０度回転し、そう言った。

［情報］共鳴判定（強度5／上昇1D3）
∞共鳴感情：［恐怖（情念）］

熊埜御堂 明香：うわーん情念ありますぅ
DL　：例の如く明香さんは+1 ですね…
熊埜御堂 亜聡：…通常ダイスでいきます！

熊埜御堂 明香：(5+1)DM<=5 共鳴判定（ルーツ属性一致）（6DM<=5）＞ [9, 9, 7, 8, 8, 9] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!
熊埜御堂 亜聡：5DM<=5〈∞共鳴〉(5DM<=5) ＞ [8, 8, 4, 1, 9] ＞ 3 ＞ 成功数 3 トリプル!

熊埜御堂 明香：ふぁっ
熊埜御堂 亜聡：わぁ
DL　：！？
熊埜御堂 亜聡：明香ちゃん…！！

熊埜御堂 亜聡：1d3 (1D3) ＞ 2
system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：5 → 7

熊埜御堂 亜聡：ぴぃ
DL　：で、では亜聡君はトリプル以上なので１ｄ６で変調ダイスもお願いします！
熊埜御堂 亜聡：はーい…

熊埜御堂 亜聡：1d6 (1D6) ＞ 5

［情報］ 5.霊感獲得
《怪異》の存在に近づいたことで、本来見えないものが見えたり、気づけなかったものに気づけるようになった。
シナリオ中、〈★霊感〉レベル+1。

熊埜御堂 亜聡：「っ……、……こいつらに……害はない……大丈夫……大丈夫……」 …ぐっ
熊埜御堂 明香：「っ、お兄ちゃん…」(ぎゅ、と手を握る)

DL　：ではその直後、視界はいつもの廊下に戻る

熊埜御堂 亜聡：「っ！……」 …明香ちゃんを気遣えないぐらいに手を強く握り返す
熊埜御堂 明香：「っ、…だいじょうぶ」
熊埜御堂 明香：「だいじょうぶだよ」
熊埜御堂 亜聡：「……」　さすがに握った手が隠せないぐらい震えてるかもしれない
織畑 鶴乃　：「……」（呆然）
熊埜御堂 明香：「、つ、鶴乃ちゃんも！　だいじょうぶ？」
織畑 鶴乃　：「……っ、だ、だいじょうぶ…です…」（カタカタ…）
熊埜御堂 明香：鶴乃ちゃんとも手をぎゅっ！

織畑 鶴乃　：「め、明香ちゃん…っ、あ、ありがとうございます…」
熊埜御堂 亜聡：「……、……」 …すぅ、…はぁ…
熊埜御堂 亜聡：「……大丈夫、だ。…ありがとな、メイ」
熊埜御堂 明香：「……うん」
織畑 鶴乃　：「（すぅ…、はぁ…） ……私も、もう大丈夫です。ありがとうございます」
熊埜御堂 明香：「うん、…あの、でも」
熊埜御堂 明香：「わたしも怖かったから、もうちょっとだけ」(ぎゅ)
熊埜御堂 亜聡：「……。……このまま、帰るか。」 3 人で手をつないだまま
熊埜御堂 明香：「ふふ、目立っちゃうね。…それでもいっか」
熊埜御堂 亜聡：「……今日は、それでもいい」
織畑 鶴乃　：「……はい。目立っちゃってもいいです。このままで、いたいです…！」

熊埜御堂 亜聡：両手握ってくれてる明香ちゃんを真ん中にして、3 人で広がって下校しましょう…！
DL　：はーい！
熊埜御堂 明香：コンビニ入るときもそのままで…
DL　：では既にルーティンワークとなった寄り道。今日はコンビニに GO！

熊埜御堂 亜聡：「…」 ウィーン。3 人で自動ドアをくぐる

熊埜御堂 明香：店員さんも目が点に

熊埜御堂 明香：「食べたい駄菓子あるといいねー」
織畑 鶴乃　：「はい！なくても楽しいからそれでいいです！」

熊埜御堂 亜聡：choice[さくらんぼ餅,ヨーグル,ココアシガレット] (choice[さくらんぼ餅,ヨーグル,ココアシガレット]) ＞ ヨーグル

熊埜御堂 亜聡：「結局織畑のせいでヨーグルの口になっちまったじゃねーか」
熊埜御堂 明香：「じゃあヨーグル探そう！」
織畑 鶴乃　：「はーい、探しましょう！」

DL　：あ、じゃあ判定します？
熊埜御堂 明香：したいです！
熊埜御堂 亜聡：したいです！あ、せっかくなのでさっきもらって反映し忘れていた BD も使います！
DL　：では＜調査＞ ＜洞察＞ ＜直感＞のいずれかでどうぞ！BD 使用も OK です！
熊埜御堂 明香：では洞察で！
熊埜御堂 亜聡：洞察で！

熊埜御堂 明香：1DM<=6〈洞察〉(1DM<=6) ＞ [3] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
熊埜御堂 亜聡：3DM<=8〈洞察〉+BD (3DM<=8) ＞ [1, 1, 2] ＞ 5 ＞ 成功数 5 ミラクル!

熊埜御堂 亜聡：すごいな？
熊埜御堂 明香：ウワーッ！！
DL　：！？！？
DL　：で、では亜聡君 BD1 つ追加してくださいませ…！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：3 → 4

DL　：じゃあそうですね…、大量のプレミアム版ヨーグルがセールでお買い得になっていた事にしましょう。店員が大量に誤発注してしまったようです

熊埜御堂 明香：「山積みだ」
熊埜御堂 亜聡：「たまに SNS で見る誤発注だな」
熊埜御堂 亜聡：「クソ安くなってる。ラッキー」
熊埜御堂 明香：「ただでさえ駄菓子はお安いのに…」
織畑 鶴乃　：「うわぁ…。えげつない量ですね…」
熊埜御堂 亜聡：「小さい時は、こーいうの山盛り食うのが夢だったりしたんだけどな。……お前ら、いくつ食うんだ」

熊埜御堂 明香：1d6 (1D6) ＞ 6

熊埜御堂 明香：「えっ、……6 個くらい…？」
熊埜御堂 亜聡：「結構いく」

織畑 鶴乃　：1d6　(1D6) ＞ 6

織畑 鶴乃　：「私も 6 個くらい、でしょうか…？」
熊埜御堂 明香：「だって、こんなに山積みされてたら 6 個くらいいいかなって…」
熊埜御堂 亜聡：「お前ら……」
熊埜御堂 明香：「い、一気には食べないもん！」
織畑 鶴乃　：「確かに…。捌けた方がお店の為にはなりますよね…」

熊埜御堂 亜聡：1d6 (1D6) ＞ 3

熊埜御堂 亜聡：「……俺は半分ぐらいでいいや」 6+6+3 個のヨーグルを持ってレジへ
織畑 鶴乃　：「えっ、あっ、ありがとうございます…！」
熊埜御堂 明香：「まぁ、お兄ちゃんはまだ部屋にお菓子いっぱいあったもんね」
熊埜御堂 亜聡：「足りなくなったら一人で買いに来るしな。…ほらよ」 6 個ずつ
熊埜御堂 明香：「えへへ、ありがとうお兄ちゃん！」
織畑 鶴乃　：「ふふ、いつもありがとうございます亜聡君！」

熊埜御堂 亜聡：「はいはい」
熊埜御堂 明香：「ふふ、…あ、どうせなら公園とかにでも寄って一個食べちゃう？」
熊埜御堂 亜聡：「あー。そうするか？織畑も、まだ時間いいんだろ？」
織畑 鶴乃　：「はい！行きたいです！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、やったー。じゃあ行こ行こ！」

熊埜御堂 明香：という事で公園かどっか、三人で並べて食べられるとこ…
熊埜御堂 亜聡：ベンチに並んで座りたいですね…！
DL　：はーい、では公園でもぐもぐタイム

熊埜御堂 明香：「(もぐもぐ)…んー、久しぶりに食べるとやっぱりおいしー！」
織畑 鶴乃　：「（もぐもぐ）…ん～！プレミアム版って初めて食べたんですけど、濃厚でおいしいです！」
熊埜御堂 亜聡：「(もぐもぐ) ……。……本当に、久々に食ったな。こんな味だったな確かに」
熊埜御堂 亜聡：「お前らが一番うまそうに食うよな」

DL　：あ、そうだ…亜聡君
熊埜御堂 亜聡：お、はーい？
DL　： 先程のミラクルの特典として、＜自我＞または＜根性＞に成功したら共鳴レベル-1 するのはいかがでしょうか？
熊埜御堂 亜聡：！！　チャレンジしたいです！
DL　：はーい、では判定どうぞ！
熊埜御堂 亜聡：根性でいきます…！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=6〈根性〉(1DM<=6) ＞ [8] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：うわーん！！！！！
熊埜御堂 明香：ああっ
DL　：おおん…
熊埜御堂 亜聡：あ、BD 使えばよかったな…後の祭り…
DL　：じゃあそうですね…、BD2 個消費で再挑戦はいかがでしょうか？2DM で振っていいですよ
熊埜御堂 亜聡：ほ、本当ですか…！？　とてもありがたい……！！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます、是非チャレンジさせていただきます！
熊埜御堂 明香：が、がんばれ…！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：4 → 2

熊埜御堂 亜聡：2DM<=6〈根性〉(2DM<=6) ＞ [4, 9] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡：やったー！！！
熊埜御堂 明香：わーーー！

DL　：おめでとうございます！
DL　：では亜聡君、共鳴レベル－１して下さいませ！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます…ありがとうございます…

system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：7 → 6

熊埜御堂 亜聡：「……ヨーグルうっっっま」 癒され
熊埜御堂 明香：「そ、そんなに…！？」
熊埜御堂 亜聡：「お前ら送り届けたらもう一回買いに行くか悩むレベル」
織畑 鶴乃　：「よかった…。亜聡君が元気になってくれてよかったです！」
熊埜御堂 明香：「そ、そんなに……うん、でもそうだね」
熊埜御堂 明香：「元気になってくれて、ほっとした」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「…悪かったな。もう大丈夫だ、俺は」
織畑 鶴乃　：「はい…！」
熊埜御堂 明香：「…うん」
熊埜御堂 亜聡：「……よし。そろそろ帰るか」
織畑 鶴乃　：「……はい…」
熊埜御堂 明香：「…あ、でもやっぱり心配だから」
熊埜御堂 明香：「もう一晩、お泊りしてもいい？」
熊埜御堂 亜聡：「むしろ来ないつもりなのかと思ってた」
熊埜御堂 明香：「…行くよ、行くもん」(むぅ)
熊埜御堂 亜聡：「ん」 ぽんぽん
織畑 鶴乃　：「ふふっ」（くすくす）
熊埜御堂 明香：「…鶴乃ちゃんも来てくれたらなぁ～」
織畑 鶴乃　：「……！」
熊埜御堂 明香：「…無理には言わないけど」
織畑 鶴乃　：「いえっ！行きたい、です…！」
熊埜御堂 明香：「…だって、お兄ちゃん！」(にこにこ)
熊埜御堂 亜聡：「……別にいーんじゃねぇか。本当は昨日来るつもりだったんだろ」 ぷい
織畑 鶴乃　：「……はい！ありがとうございます！」
熊埜御堂 亜聡：「じゃあまた、飯の買い出しだな」
熊埜御堂 明香：「今日は何にしよっか、鶴乃ちゃん何食べたい？」
織畑 鶴乃　：「えっと……、じゃあ…チャーハンが、食べたいです…！」
熊埜御堂 明香：「ふふっ、いいね！　じゃあ今日はチャーハンね！」
熊埜御堂 亜聡：「おー」 まんざらでもない顔
熊埜御堂 明香：「あ、じゃあ鶴乃ちゃんもこのまま一緒にお買い物してからお兄ちゃん家に行こうよ！」
織畑 鶴乃　：「はい！」
熊埜御堂 明香：「確かわたしのパジャマの予備もあったはずだし…どうかな？」
熊埜御堂 亜聡：「俺のＴシャツもあるぞ」

熊埜御堂 明香：「それ、ヨレヨレだったりしない～？」
熊埜御堂 亜聡：「洗濯はしてある」
織畑 鶴乃　：「えっ…、そ、そんな…自分の取りに帰りますよ…！」（あわあわ）
熊埜御堂 明香：「いいのいいの、どうせ買ってからずっと使ってないやつだし…それともお下がりは嫌かな…」
織畑 鶴乃　：「い、いえっ！そんな事ないですっ！」（ぶんぶん）
織畑 鶴乃　：「……じゃあ、お言葉に甘えてお借りします…！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、よかったぁ！」
熊埜御堂 亜聡：「俺のＴシャツか明香のパジャマかは部屋に着くまでに決めとけよ」
織畑 鶴乃　：「え、ええ～！？」

熊埜御堂 明香：じゃあお買い物してお兄ちゃん家に向かいますか…！
熊埜御堂 亜聡：ごーごー！
DL　：はーい、では鶴乃と一緒にお買い物して亜聡君の家に向かいます…

DL　：という事で…亜聡君
DL　：生存判定の時間です
熊埜御堂 亜聡：ハーイ
熊埜御堂 亜聡：大丈夫…俺はさっきミラクルを出した男…いざ！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊生存〉(1DM<=3) ＞ [7] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：はい
熊埜御堂 明香：ｗｗｗｗｗ
DL　：ハイ

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、十分だけ待っててあげるね…」
織畑 鶴乃　：「？」
熊埜御堂 亜聡：「……明香、手伝う気は？」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、自業自得って言葉知ってる？」
熊埜御堂 亜聡：「15 分待ってろ」 さっと一人だけ部屋へ滑り込む
熊埜御堂 明香：「さらっと 5 分延長しないで！」 もー！

DL　：ではまた何か技能で判定して片付けます？
熊埜御堂 亜聡：前回は危機察知だったなぁ…。今日は織畑ちゃんもいるし、明香ちゃんに恥をかかせないためにも根性で…！
DL　：はーい、どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=6〈根性〉(1DM<=6) ＞ [6] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡：あぶなー！！
熊埜御堂 明香：ｗｗｗｗｗ
熊埜御堂 明香：根性で片づけたな…
DL　：せふせふ
熊埜御堂 亜聡：9 分 58 秒とかで何とか最後の靴下を洗濯機にどん！

熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃーん、時間だよー？」
熊埜御堂 亜聡：「ぜー…ぜー…、……おー…入っていいぞ」
熊埜御堂 明香：「はーい、おじゃましまーす」
織畑 鶴乃　：「はーい、お邪魔します！……亜聡君、なんだか疲れてませんか…？」
熊埜御堂 亜聡：「気のせいだ……」 はー、と息をつきながらソファにどっかり
熊埜御堂 明香：「ふふ、お疲れ様。じゃあご飯作っちゃうね！」
織畑 鶴乃　：「あ、私も何かお手伝いします！」
熊埜御堂 明香：「ありがとう、じゃあ一緒に作ろっか」
織畑 鶴乃　：「はい！」

熊埜御堂 明香：じゃあ鶴乃ちゃんと一緒にチャーハン作るよ！
DL　：はーい、明香さんも何か技能判定します？
熊埜御堂 明香：では社交術で、鶴乃ちゃんと見事なコンビネーション作業をしようと試みたいです！
DL　：OK です！では判定どうぞ！

熊埜御堂 明香：2DM<=7〈社交術〉(2DM<=7) ＞ [6, 7] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

DL　：ひゅー！
熊埜御堂 亜聡：さすいも！！！
熊埜御堂 明香：いえー！
DL　：では明香さん、BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 明香：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 明香] BD：2 → 3

熊埜御堂 亜聡：「……」 …お料理してる２人の後ろ姿をこっそりスマホカメラで撮りたいです
DL　：OK です！せっかくなので判定します？
熊埜御堂 亜聡：お。何判定になりますかね…！
熊埜御堂 亜聡：隠れて撮るなら、隠匿…？
DL　：隠匿でもいいですよ！
熊埜御堂 亜聡：何か指定があればそちらで…隠匿で大丈夫そうなら、振ります！
DL　：こじつけで OK です！って事で判定どうぞ！

熊埜御堂 亜聡：2DM<=5〈隠匿〉(2DM<=5) ＞ [1, 8] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

DL　：？？？？？
熊埜御堂 亜聡：シノビの如く
DL　：では亜聡君も BD1 つどうぞ！
熊埜御堂 亜聡：わーい！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：2 → 3

熊埜御堂 亜聡：「…（…スッ）」ぴろりん♪
熊埜御堂 明香：「…？　お兄ちゃん？」
熊埜御堂 亜聡：「ん？」 もう CS に切り替えてドロシーちゃんと遊んでる
熊埜御堂 明香：「…ううん、なんでもなーい」 ？？？
ドロシー　：『……うん。なんでもない…』（ふふっ…）
熊埜御堂 亜聡：「な」
熊埜御堂 明香：「ん～…？　…あ、鶴乃ちゃん。こっちはもういいからテーブル拭いてお皿出しておいてくれると嬉しいな！」
織畑 鶴乃　：「はーい！」（とことこ）
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんも、そろそろご飯になるから席ついておいてね～」
熊埜御堂 亜聡：「あ？ おー」 いそいそ席へ
熊埜御堂 明香：「ふふ、今日すごいよ。とっても美味しそうに出来たの！」
熊埜御堂 明香：「きっと鶴乃ちゃんが手伝ってくれたお陰だね！」
織畑 鶴乃　：「いえいえ、明香ちゃんの教え方が上手だったからですよ！」
熊埜御堂 明香：「えへへ、そっかな～？」
熊埜御堂 亜聡：「おー、本当だ。具だくさんだな今日のチャーハン」
織畑 鶴乃　：「えへへ、2 人で作ったからたくさん食材を切れましたよね！」
熊埜御堂 明香：「うん、その分たくさんになっちゃったけど…」
熊埜御堂 亜聡：「ま、3 人いれば食いきれるだろ」
織畑 鶴乃　：「たくさん食べて下さいね亜聡君！」
熊埜御堂 明香：「じゃあみんな揃って…いただきます！」
熊埜御堂 亜聡：「いただきます」
織畑 鶴乃　：「いただきます！」
熊埜御堂 亜聡：「(ぱくっ)……」 ……もぐもぐもぐもぐ
熊埜御堂 明香：「…ん～、美味しい！」
織畑 鶴乃　：「（もぐもぐ）……う～ん、おいしいです～！」
熊埜御堂 亜聡：「（もぐもぐもぐもぐ）」
熊埜御堂 明香：「やっぱりいつもより上手に出来てるよ！　これは鶴乃ちゃんの力だね！」
織畑 鶴乃　：「そ、そうなんでしょうか…？そう言ってもらえると、お手伝いさせてもらえてよかったです…！」
熊埜御堂 明香：「うん、それに一緒に料理するのすっごく楽しかったね～」
織畑 鶴乃　：「はい…！私、授業以外で誰かと一緒にお料理したのも初めてなので…、とっても楽しかったです！」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんも疲れてなければ参加できたのにな～」
熊埜御堂 亜聡：「（もぐもぐもぐ）……。……お前ら２人で十分だっただろ。量も味も」
熊埜御堂 明香：「楽しかったからお兄ちゃんにも参加してほしかったの！」
熊埜御堂 亜聡：「別にいい」
熊埜御堂 明香：「もう」
織畑 鶴乃　：「…でも亜聡君がたくさん食べてくれててよかったです！がんばった甲斐があります！」
熊埜御堂 亜聡：「……あ？」 もう半分以上減ったチャーハン皿
熊埜御堂 明香：「ふふ、いつもより食べるペースが早いもんね」
熊埜御堂 亜聡：「……うるせー」
織畑 鶴乃　：「……あ、あの…亜聡君…。お、おいしかったですか…？無理して食べてたり、してないですよね…？」（あわあわ）
熊埜御堂 亜聡：「(ぐ、)……」 いつもの(答えるのが)苦手な質問
熊埜御堂 明香：「……」 (にこー)
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……う、……うまくなかったら、こんなに食ってねぇよ」
織畑 鶴乃　：「……！！よ、よかったぁ～～～～！！」
熊埜御堂 明香：「ふふっ、よく言えましたお兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「うるせーうるせー。言わなくても察しろ馬鹿」
熊埜御堂 亜聡：「全部察しろ」
熊埜御堂 明香：「すごい無茶言う」
織畑 鶴乃　：「うぐぅ…！私には難しいですぅ…」
熊埜御堂 明香：「そう言う時はストレートに聞いても大丈夫だよ」
熊埜御堂 亜聡：「…聞かれても、答えは気が向いたらだからな」
熊埜御堂 明香：「ふふっ」
織畑 鶴乃　：「…はい！気が向いたらでいいです！」
熊埜御堂 亜聡：「はいはい。……ご馳走様でした」 早めに全部食べ終わって、皿を持って席を立つついでにスマホで写真送信
熊埜御堂 亜聡：「メイ、織畑にも送っとけ」
熊埜御堂 明香：「はーい、ごちそうさまでした……ん？　…あっ」
熊埜御堂 明香：「もー、いつの間に撮ったの！？」
熊埜御堂 亜聡：「さっきに決まってんだろ」
熊埜御堂 明香：「撮ったなら教えてよ～！　…もう」
熊埜御堂 明香：「見てほら鶴乃ちゃん！　さっきお兄ちゃんが勝手にね…！」 送信！
織畑 鶴乃　：（ﾆｬｲﾝ）「ん…？……あっ」
織畑 鶴乃　：「…すごいです！綺麗に撮れてます！」（きゃっきゃっ）
織畑 鶴乃　：「えへへ、待ち受けにしちゃおうっと…！亜聡君、ありがとうございます！」
熊埜御堂 亜聡：「ん」
熊埜御堂 明香：「…じゃあわたしも待ち受けにしちゃお。えへへ、お揃い」
織畑 鶴乃　：「……！えへへ、お揃い！嬉しいです！」
熊埜御堂 明香：「…お兄ちゃんもお揃いにする？」

熊埜御堂 亜聡：「明香だけならともかく、俺がお前ら２人の写真待ち受けにしてたらキモいだろ」
熊埜御堂 明香：「ふふっ、冗談だよー」
織畑 鶴乃　：「ふふっ、私は嬉しいですよ～？」
熊埜御堂 亜聡：「クラスメイトの男の待ち受けが自分の写真だっていうのはさすがにキモいと思え」
織畑 鶴乃　：「……？？？？」
熊埜御堂 明香：「…気持ち悪くはないけど、ちょっとびっくりはするかも」
熊埜御堂 亜聡：「お前らもうちょっと警戒心持て。……明香、お前もだぞ。お前もだからな。」
熊埜御堂 明香：「えー？」
熊埜御堂 亜聡：「駄目だこいつら駄目なところが似てやがる」
織畑 鶴乃　：「？？？？」
熊埜御堂 明香：「だ、駄目じゃないもん！　警戒できる部分は警戒するもん！」
織畑 鶴乃　：「えーっと…。よくわからないけど、気を付けます！」
熊埜御堂 亜聡：「世界一信用できねーな……まぁいいか」
熊埜御堂 明香：「む、むう…」
織畑 鶴乃　：「？はーい！」

DL　：ではそんな会話をしてる内に、夜も次第に深まっていきます…
DL　：…さて、場面は鶴乃と一緒に夕食を食べ終えた所から再開としましょう
DL　：お２人ともこの後は如何なさいますか？
熊埜御堂 亜聡：とりあえず亜聡はお客さん用布団を押し入れから引きずり出してはいますね…。寝る前に何かしようかどうか
熊埜御堂 明香：あ、じゃあその背中に

熊埜御堂 明香：「あ、…ちょっといいかな、お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「ん？」くるっ
熊埜御堂 明香：「…あのね」
熊埜御堂 明香：「……今夜、鶴乃ちゃんを連れて行くのは、…駄目かな」
熊埜御堂 亜聡：「……あー」
熊埜御堂 亜聡：「……ドロシー。」スマホ画面を指でこつん
ドロシー　：『…なぁに？』
熊埜御堂 亜聡：「お前の話を聞きに、幽世の目を起動するとき。…織畑 鶴乃をその場に居合わせさせたら、どうなる？」
ドロシー　：『……その場合は、彼女にも亜聡達と同じものが見えるようになる。…つまり、私の本当の姿を見る事になる』
ドロシー　：『ただ…、織畑鶴乃も当事者だから…。彼女にも、話を聞く権利があると、私は思ってる…』
熊埜御堂 亜聡：「そうか。…お前自身は拒否しねーってことだな？」
ドロシー　：『……うん。最終的な判断は亜聡達に任せる。』
熊埜御堂 亜聡：「ん。わかった。……」
熊埜御堂 亜聡：「……だとよ。確かに、もとはと言えばあいつ自身が知りたがってたことだったからな」
熊埜御堂 明香：「…うん」

熊埜御堂 明香：「それに、…やっぱり、始まりは鶴乃ちゃんだから」
熊埜御堂 明香：「置いて行きたくないな…って。…お兄ちゃんがいいなら、鶴乃ちゃんにも相談したい」
熊埜御堂 亜聡：「……わかった。」
熊埜御堂 亜聡：「正直、俺は……織畑は連れていけない、行くべきじゃないと思ってた。この先ドロシー自身に会って、話の真相が聞けるとして、あいつは十中八九取り乱すと思ってた」
熊埜御堂 亜聡：「根拠は雁鳥と会ったときの反応だ。……だがまぁ、」
熊埜御堂 亜聡：「お前がいるから、大丈夫か」
熊埜御堂 明香：「！　じゃあ…」
熊埜御堂 亜聡：「説明はちゃんとするぞ。言いづらかったらフォローはするから」
熊埜御堂 明香：「うん！　ありがとう、お兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「…ん。」

DL　：では話し終えたタイミングで鶴乃が洗面所から出てきた事にしましょう。（お風呂に入ってたって事で）

織畑 鶴乃　：「いいお湯でした…。亜聡君、お風呂ありがとうございます！」
熊埜御堂 亜聡：「おー」

DL　：choice[明香ちゃんのパジャマ,亜聡君のＴシャツ] (choice[明香ちゃんのパジャマ,亜聡君のＴシャツ]) ＞ 亜聡君のＴシャツ

織畑 鶴乃　：「あ、あとＴシャツもありがとうございます！」
熊埜御堂 亜聡：「お前マジでそっちにしたのか」
熊埜御堂 亜聡：「いやいいけど」
織畑 鶴乃　：「これめっちゃ伸びるしラクでいいですね！」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんそういうのしか持ってないから…ねぇ、鶴乃ちゃん。ちょっといいかな…？」
織畑 鶴乃　：「？はーい、なんでしょう？」
熊埜御堂 明香：「うん、実はね…鶴乃ちゃんに頼まれたこと…鶴乃ちゃんの記憶について」
熊埜御堂 明香：「今夜、とても重要な事が分かるかもしれないの。…だから、ちょっと一緒に来てほしいところがあって…」
織畑 鶴乃　：「！？な、何かわかったんですか…！？」
熊埜御堂 明香：「うん、正確には「わかるかもしれない」事がわかる、かな…」
織畑 鶴乃　：「わ、わかりましたっ…！行きます！どこにでも、付いて行きますっ…！」
熊埜御堂 明香：「わわ、…うん、ありがとう」
熊埜御堂 明香：「えへへ、ごめんね。お風呂入ったばっかりだったのに、また連れ出しちゃって」
織畑 鶴乃　：「いえいえ！私がお願いした事なんですからお気になさらず…！」
織畑 鶴乃　：「…それに、夜中に友達とお出かけするなんて初めてなのでワクワクします！」
熊埜御堂 明香：「……ふふっ」
熊埜御堂 明香：「なんか、ちょっとだけ悪いことしてるみたいでドキドキするよね」
織畑 鶴乃　：「はい！」
熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 亜聡：「……まぁ、なんだ」
熊埜御堂 亜聡：「はしゃいであんまり明香から離れるなよ」
織畑 鶴乃　：「はーい！」
熊埜御堂 明香：「もー、お兄ちゃんたら。子供じゃないんだから大丈夫だよ！」
熊埜御堂 亜聡：「ふーん…？」（疑いの目）
熊埜御堂 明香：「もー！」
織畑 鶴乃　：「あ！じゃあはぐれないように手を繋ぎましょう！それならきっと大丈夫ですよ！」
熊埜御堂 亜聡：「おー。そうしとけ」
織畑 鶴乃　：「あ、もちろん明香ちゃんが良いならですけど…」
熊埜御堂 明香：「ううん、嬉しいよ！　じゃあしっかり繋いでおこうね！」(ぎゅっ)
織畑 鶴乃　：「わー！嬉しいです！」（ぎゅっ）
熊埜御堂 明香：「えへへ」
熊埜御堂 亜聡：「（ほっこり）（…ぽちぽち）」（２人がかわいいのを見つつ、CS でドロシーちゃんと会話）

［秘匿（亜聡＆ドロシー）］
熊埜御堂 亜聡：「（織畑が）クッソわくわくした顔してて複雑。」
ドロシー　：『…でも、「これからお化け見る事になるかも」なんて言ったら怖がるかもしれないし…』
熊埜御堂 亜聡：「そりゃそうだな。……」（俺なら言ってたから明香に任せて正解だったな、って顔）
熊埜御堂 亜聡：「……んで、ドロシー。例の幽世の目の起動って、この部屋でやっていいのか？どっか行くべきか」
ドロシー　：『場所はどこでも構わない。……あ、でも念の為 人気のない場所に移動してからの方がいいかも…』
熊埜御堂 亜聡：「人気のない場所か…。わかった」
ドロシー　：『……もし思いつかないのなら、こういうのはやっぱり始まりの場所がふさわしいと思う』
熊埜御堂 亜聡：「…始まりの場所？」
ドロシー　：『……すべての始まり…。御伽雀が死んだ場所…』
熊埜御堂 亜聡：「雀先輩が死んだ場所。……理科室だった、か？」
ドロシー　：『（こくり）』
熊埜御堂 亜聡：「夜の学校か。……まぁ、忍び込めなくはねーだろうけど」
熊埜御堂 亜聡：「……あいついねぇよな」（カゴノトリ）
ドロシー　：『多分、私の本体が出てきたら向こうも驚いて引っ込むと思う』（出てきません）
熊埜御堂 亜聡：「マジか。すげーなお前」

熊埜御堂 亜聡：「……行き先も決まったぞ。夜の学校。理科室。そこにする。」
熊埜御堂 明香：「…学校？」

熊埜御堂 亜聡：「あぁ。あいつの言う”罪”の、そしてあの人たちの企みの、『始まりの場所』。」
熊埜御堂 明香：「……」

［秘匿（明香＆アリス）］
熊埜御堂 明香：「…アリスちゃんなら、起動させるならどこがいいと思う？」
アリス　：「そうねぇ…。ここは起動させる本人…、ドロシーの意見に従うのが一番じゃないかしらね」

熊埜御堂 明香：「わかった、行こう」
熊埜御堂 亜聡：「ん。…行くか」

DL　：では鶴乃を連れて学校の理科室へ向かう、でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 明香：いきます…！
熊埜御堂 亜聡：いき…ます！
DL　：OK です！
DL　：……
DL　：……
DL　：…

▼幽世の目　――４日目夜

DL　：……では明香さんと亜聡君は鶴乃と共に夜の理科室へ忍び込む事が出来ました。
DL　：時刻は深夜。
当然ですが校内には誰もいません。

熊埜御堂 明香：「…はわわ……」
熊埜御堂 亜聡：「セキュリティガバかよ」
織畑 鶴乃　：「……何だか夜の理科室って、ちょっと怖いですね…」（ぎゅっ）　（明香さんの手をしっかり握る）
熊埜御堂 明香：「うん、すごく雰囲気ある…」(ぎゅう)
熊埜御堂 亜聡：「……。…そういや、理科室だか理科準備室だかに七不思議とか無かったっけか」
熊埜御堂 明香：「……なんで今言うのぉおおお……」
熊埜御堂 亜聡：「わざと」
熊埜御堂 明香：「ばかぁ」
織畑 鶴乃　：「あ！人体模型が動いちゃったりするんですよね？……」
熊埜御堂 明香：「動かないよぉ！」
織畑 鶴乃　：「……想像したら怖いですぅぅぅ～～～～！」
熊埜御堂 亜聡：「自分で言ったくせにこいつ」
熊埜御堂 明香：「動かないもん！　…動かないもん！」
織畑 鶴乃　：「そ、そうですよね！動かない、動かない…！！」
熊埜御堂 亜聡：「お前ら本題の前に半泣きになってんじゃねーよ。……ったく、さっさとやるか」

熊埜御堂 亜聡：「ドロシー、もうここでいいな？」
ドロシー　：『うん。いつでもいいよ…』（こくり）
熊埜御堂 亜聡：「ん。……じゃあやるぞ、メイ、織畑。」
熊埜御堂 明香：「…うん、わかった」
熊埜御堂 亜聡：「……」　…すぅ、

熊埜御堂 亜聡：「ワスレモノ　ワスレモノ　かなしいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　つらいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　いたいを　あげます
ワスレモノ　ワスレモノ　わたしを　あげます」

熊埜御堂 亜聡：ということで、おまじないを実行しますね！
DL　：了解です！
DL　：では、亜聡君が呪文を唱えると…

DL　：――あなた達の視界は赤く黒く塗り替えられる。
DL　：目の前の場所は変わっていないはずなのに、その光景はまるで 違うように思える。
DL　：視界が脈打つように歪み、その度に頭に痛みが走る。

少しずつそれが大きくなっていくように思える。

熊埜御堂 亜聡：「っ、……」
熊埜御堂 明香：「、お兄ちゃん…！」

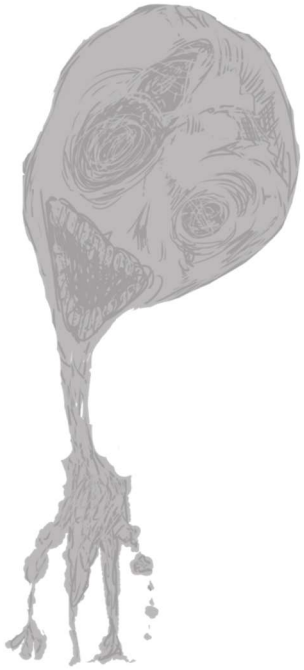
DL　：……では亜聡君、ここで憑依判定をお願い致します
熊埜御堂 亜聡：了解です…情念は…無い…！

熊埜御堂 亜聡：6DM<=5〈∞共鳴〉(6DM<=5) ＞ [9, 1, 8, 7, 3, 6] ＞ 3 ＞ 成功数 3 トリプル!

熊埜御堂 亜聡：よく１出るな君！！！
DL　：では亜聡君がどうなるかはもう少しお待ちください…
熊埜御堂 亜聡：ハァイ…
DL　：あ、あと共鳴レベルを 1 上昇させて下さいませ…
熊埜御堂 亜聡：はぁい…！

system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：6 → 7

？？？？？？：「■■■■■■」



DL　：背筋が凍り付く。
DL　：どこかから聞くに堪えない、悍ましい声がしたからだ。
異形の存在：そちらに目をやると、廊下に黒い塊が詰まっていた。
異形の存在：すぐにそれが巨大な何かだということに気づくだろう。
眼窩のような空洞が真っすぐにこちらを見ているように感じたからだ。

熊埜御堂 亜聡：「、……――――！」

DL　：ではここで、お二人とも共鳴判定です
熊埜御堂 明香：うぉお傷はない！
DL　：亜聡君もルーツじゃないからセーフですね…
熊埜御堂 亜聡：裏の属性は一致してる…けどルーツ属性ではない…！
熊埜御堂 亜聡：よかったー！ん！？よかった！？よかった！！！

熊埜御堂 亜聡：7DM<=5〈∞共鳴〉(7DM<=5) ＞ [5,2,7,6,8,4,4]＞ 4 ＞ 成功数 4 ミラクル!
熊埜御堂 明香：5DM<=5〈∞共鳴〉(5DM<=5) ＞ [5, 8, 1, 8, 4] ＞ 4 ＞ 成功数 4 ミラクル!

DL　：おぅわ
熊埜御堂 明香：仲良死ミラクルやめろ
熊埜御堂 亜聡：逆に声だして笑った

DL　：エー…、ではお二人とも共鳴レベル+1 と、1d6 で変調ダイスをどうぞ…！

system：[熊埜御堂 明香] 共鳴：5 → 6
system：[熊埜御堂 亜聡] 共鳴：7 → 8

熊埜御堂 明香：1d6 (1D6) ＞ 4

[情報] 4 .偏執狂(パラノイア)
極度に肥大化した不安や妄想に囚われ、現実の認知が難しくなる。
【👂五感】を使用する技能は成功数-1 される。

熊埜御堂 亜聡：1d6 (1D6) ＞ 3

[情報] 3. 共振(エンパシー)
《怪異》との親和性が高まり、影響を受けやすくなった。
対象の《怪異》の共鳴感情をひとつ追加で獲得。

異形の存在：「■■■■■■」
ドロシー　：『……驚かせてすまない…』
熊埜御堂 亜聡：「、……！！……ドロシー」
熊埜御堂 明香：「え、…え…？」

DL　：ドロシーが黒い塊の意思を代弁するかのように語る

異形の存在：「■■■■■■」
ドロシー　：『初めまして、私が「ワスレモノ」です』

熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「…お前の、本体か。ドロシー。」
熊埜御堂 明香：「…ほんたい……」
ドロシー　：『……』（こくり…）
熊埜御堂 亜聡：「そうか…。……そうか」
熊埜御堂 亜聡：「やっと、会えたな」
織畑 鶴乃　：「……」（真っ青）

異形の存在：「■■■■■■」
ドロシー　：『怖がらせてしまって本当に申し訳ない。でも、呼び出してくれてありがとう』
熊埜御堂 明香：「…な、なんて…？」
熊埜御堂 亜聡：「呼び出してくれてありがとう、だとさ。怖がらせる気は、ないんだと」

熊埜御堂 明香：「…そっか」
ワスレモノ：「■■■■■■」
ドロシー　：『早速ですまないが、時間がない。見せたい物がある。ついて来てほしい。』
熊埜御堂 亜聡：「見せたいもの？……ついて行けばいいんだな。」
熊埜御堂 明香：「ど、どこに行くの…？」
ワスレモノ：「■■■■■■」
ドロシー　：『学校の裏山。急ぐから、はぐれないように』

DL　：黒い塊が蠢く。
DL　：それは這うように巨体を引きずり、廊下の先に消えていった。

熊埜御堂 亜聡：「裏山…。……時間がないってのは…そういや 30 分だったな。俺が"もつ"時間は」
熊埜御堂 亜聡：「行くぞ。メイ、織畑。」
熊埜御堂 明香：「あ、わ、わかった…！　…だいじょうぶ、鶴乃ちゃん？」
織畑 鶴乃　：「…は、はい…！ちょっとびっくりしましたけど…大丈夫です…！」
熊埜御堂 明香：「…そっか…じゃあ、行こう！」(ぎゅっ)
熊埜御堂 亜聡：「はぐれるなよ」

DL　：ではワスレモノを追いかけますか？
熊埜御堂 明香：追いかけます…！
熊埜御堂 亜聡：追いかけます…！
DL　：はーい！ではその前に亜聡君の憑依判定の結果ですが…
DL　：成功数トリプルに対し、亜聡君の精神は 5 なので憑依されずに済みますね
熊埜御堂 亜聡：ほわっ…
DL　：なのでこれと言って異変は起こりません。先ほどの変調を覗いては、ですが
熊埜御堂 亜聡：了解です…！精神 5 でよかった…！
DL　：ではお 2 人は鶴乃と一緒に黒い塊…、ワスレモノを追いかけ夜の裏山へと向かいます…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：黒の集合体は外に出ると、巨大な頭を持ち上げ、それを不気味に傾け大きく揺らしながら移動していく。
DL　：向かう先は学校の裏山。
裏山といっても、低い山なので丘と表現したほうが正しいかもしれない。
DL　：それは麓に到着すると、整備された山道ではなく、草木が生い茂る道なき道を進んでいく。

DL　：…ではここで、お二人とも＜＊運動＞判定をお願い致します
熊埜御堂 明香：oh
熊埜御堂 亜聡：汚部屋が綺麗になる確率と同じだ…！！

熊埜御堂 明香：…なんか、代替とか…いや、どういう判定か分かんないから…
DL　：（BD 使用も OK ですので…）
熊埜御堂 亜聡：体を動かす系で代用できそうなものがないな…　では BD 使用します！
熊埜御堂 明香：使います…！
DL　：ではどうぞ！

system：[熊埜御堂 明香] BD：3 → 2
system：[熊埜御堂 亜聡] BD：3 → 2

熊埜御堂 亜聡：2DM<=3〈＊運動〉+BD (2DM<=3) ＞ [8, 1] ＞ 2 ＞ 成功数 2 ダブル!

熊埜御堂 亜聡：やたー！

熊埜御堂 明香：2DM<=2〈＊運動〉(2DM<=2) ＞ [10, 10] ＞ -2 ＞ 成功数-2 ファンブル!

熊埜御堂 明香：ふぁっ！？
熊埜御堂 亜聡：ええええええええ
DL　：おわっ
熊埜御堂 明香：せっかくお兄ちゃんがダブル出したのに！
DL　：…BD2 個使えば通常失敗に出来ますが、いかがします…？
熊埜御堂 明香：……使います…！
DL　：はーい、では 2 個消費お願い致します…！

system：[熊埜御堂 明香] BD：2 → 0

DL　：そして亜聡君は BD1 つどうぞ
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！

system：[熊埜御堂 亜聡] BD：2 → 3

DL　：では明香さんは木の根に躓き転びそうになりましたが、すんでの所で鶴乃が腕を引いたので転ばずに済みましたね

熊埜御堂 明香：「……わっ！？」すてっ
織畑 鶴乃　：「あっ、明香ちゃん危ないっ…！」（ぐいっ…）
熊埜御堂 亜聡：「っ、！　…おい、大丈夫か」先行して歩いていたところを、声に驚いて振り向く
熊埜御堂 明香：「と、とと……ふぅ」
熊埜御堂 明香：「…あっ、うん。だいじょうぶ！　鶴乃ちゃんが引っ張ってくれたから…ありがとう、鶴乃ちゃん」
織畑 鶴乃　：「いえいえ！明香ちゃんにケガがなくて良かったです！」
熊埜御堂 亜聡：「…（…ほっ）、…早く歩きすぎたか」

熊埜御堂 明香：「ううん、大丈夫。それよりも急がなきゃ、でしょ？」
熊埜御堂 亜聡：「それは…、…。……そうだな。」

DL　：ワスレモノからは少し距離が開いていますが、亜聡君からはばっちりワスレモノが見えているので迷わずに追いかけられます

熊埜御堂 亜聡：「…ん」 手。
熊埜御堂 明香：「…え、」
熊埜御堂 亜聡：「気づいたらいなくなってた、っつーのが一番厄介だからな。…最初からこうしとけばよかったんだ」
熊埜御堂 亜聡：「別に今は人目も無いし、……それに、大事な時に手ぇつないでねーとロクなことにならねーって知ってるから。」
織畑 鶴乃　：「ふふっ、じゃあこれでもう何も怖くないですね！」
熊埜御堂 明香：「う、…うぅ～」
熊埜御堂 明香：「……うん」(ぎゅう)
熊埜御堂 亜聡：「……よし」 ぎゅ、
熊埜御堂 亜聡：「織畑。今度明香が転びそうになったら、両側の俺らが両手をあげてこいつを宙吊りにするぞ」
織畑 鶴乃　：「はい！」
熊埜御堂 明香：「やめてよー！」

DL　：では今度は 3 人で手を繋ぎ、ワスレモノも追いかけ道なき道を進んで行きます…
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：すると、ひらけた場所に出た。
DL　：そこはまるで花畑だった。
DL　：しかし、それは自然に生えていたものではない。
何者かが花を摘んで円形に敷き詰めたのだろう。
DL　：その花畑の中央に横たわる人影がある。

熊埜御堂 亜聡：「……誰かいるな」

DL　：……近づいて見てみますか？
熊埜御堂 亜聡：近づきます…？
熊埜御堂 明香：近づいて…みます！
熊埜御堂 亜聡：いきましょう…！
DL　：了解です！では…

DL　：――近づいてみると、それは織畑鶴乃だった。

DL　：しかし、すぐにそれが死体だとわかるだろう。
不思議と傷もなく、腐臭もないが、生の息吹がまるで感じられなかった。

熊埜御堂 明香：「…あ、…鶴乃、ちゃん…？」
熊埜御堂 亜聡：「……織畑」
織畑 鶴乃　：「……え…？……これ……、私……？」
熊埜御堂 明香：「え、…あ、……なんで、」

DL　：気づくと、花畑の向こう側で先程の怪異が膝を抱えるようにして、そこにいた。

ワスレモノ：「■■■■■■」
熊埜御堂 亜聡：「……ワスレモノ」

DL　：声がする。
先程のぞっとするような感覚は薄れ、悲しそうに呻いているように感じた。

ドロシー　：『……彼女は驚いて、慌てて逃げる途中で…車に轢かれて死んでしまった。強い哀しみを内包していたこの子は…私を引き寄せてしまった。』

DL　：ふと、携帯を見るとドロシーがそう言っていた。
まるで、目の前の怪異の意思を代弁するように。

ドロシー　：『それが悲しくて、死体をここに隠して、織畑鶴乃の魂から死の記憶を喰った。人々が彼女の死を確信しなければ、 人々の中から消えることなく、彼女はそこに在り続けるから。』
ドロシー　：『御伽雀のときもそう。私を呼び寄せた彼女も驚いて、躓いて…机に頭を打ち付けて死んでしまった。』
ドロシー　：『私はどうすればいいのかわからなくて、彼女の魂から死の記憶を喰って、魂をオカルト研究部に持っていった。御伽雀はあの場所を愛していたから…。』
ドロシー　：『織畑鶴乃と御伽雀の記憶を喰らったのは私。でも、怪異を…幽世の世界を垣間見る人間が増えたのは私のせい じゃない。多分それは― 』

竹取 輝夜　：「見つけたっ…！」
熊埜御堂 明香：「っ、！？」
熊埜御堂 亜聡：「……、…！？」

DL　：突然、後ろから声がかかる。
DL　：そこに立っていたのは竹取輝夜と小波絵本だった。

小波 絵本　：「こいつが…怪異ワスレモノか。」
熊埜御堂 亜聡：「っ、…竹取先輩、小波先輩、なんで」

DL　：絵本は一瞬怯むが、すぐに腰に手をやり、そこにあった得物を引き抜いた。
小波 絵本　：真剣、それは本物の刀だった。
いや、違う。刀身が揺らめいている。まるで実体がないように。

小波 絵本　：「オトギバラシ、本物か試させてもらう。」

DL　：絵本は小さくそう呟いた。

竹取 輝夜　：「下がって！絵本部長と私がこいつを抑えるから！みんなはこの怪異を封印する方法を探して！」

DL　：輝夜はそう言って君たちの前に出る。

熊埜御堂 明香：「え、…え？」
熊埜御堂 亜聡：「なっ、」
熊埜御堂 亜聡：「……どういうことすか。どうして２人がここに、…それに、なんであいつを」
竹取 輝夜　：「いいから早く！下がってって！」
熊埜御堂 亜聡：「っ、！」

DL　：輝夜はなおもお二人に下がるように言います。
さて、いかがなさいますか？

熊埜御堂 亜聡 ：「『いいから』じゃないッスよ、何も良くねぇ。そいつを傷つける前に話を聞かせてください」 では亜聡は、小波先輩とワスレモノの間に割って入りますね
熊埜御堂 亜聡 ：「昼間は聞かせてもらえなかったが、やっぱりアンタ等はドロシーを、ワスレモノを狙ってたんでしょう」
熊埜御堂 亜聡 ：「…こいつは俺らを意図して傷つけるようなものじゃない。それを知ってるから、ただ黙ってはこの状況を見過ごせない」

DL　：では亜聡君の言葉を聞いて、小波絵本は刀を構えたまま言う。

小波 絵本　：「僕は御伽雀を現世の世界に取り戻したい。肉体はなくとも、死を認識されていない彼女はそこに在るんだ。生きていなくとも、そこに居るんだよ。」
小波 絵本　：「だからワスレモノの力を取り込んで、雀が死んでいることを知ってる人間から、その記憶を奪いつくす。そうすれば、彼女は生きていると同義となる。」
小波 絵本　：「僕があの時、彼女のそばにいてやらなかったから…こうなったんだ。だから僕は…彼女を救う。」
熊埜御堂 亜聡 ：「それは、アンタが持ってるその武器みてーなもんでこいつを抑えないといけないようなことなのか。こいつは、…こいつは、こいつの意思で雀先輩の魂の記憶を食ってる」
熊埜御堂 亜聡 ：「それに、…それにだ。アンタがこいつの力を取り込んだところで、雀先輩を救えるって本当に思ってるのか？」
小波 絵本　：「……そう信じていなければ、こんな所まで来ていない。」
熊埜御堂 亜聡 ：「雀先輩がそうしてほしいっつったのか」
小波 絵本　：「……雀はオカルト研究部を心から愛している。だから…このままずっと、僕達と一緒にあそこにいるのが彼女の幸せだ」
熊埜御堂 亜聡 ：「…綺麗事言ってんなよ…。…アンタ自身がそうであってほしいって思ってるだけだろうが」
熊埜御堂 亜聡 ：「結局は、アンタ自身のエゴだ。分かってるんだろ」
小波 絵本　：「……」

DL　：続けて竹取輝夜がこう話す。

竹取 輝夜　：「織畑鶴乃もそう。雁鳥咲から記憶を奪えば、あの子も肉体はなくとも現世に帰還する。」
熊埜御堂 亜聡 ：「、…！」
竹取 輝夜　：「織畑鶴乃も、御伽雀も、自分の死を認識してしまうと消えてしまう存在。だから、彼女たちは本能的に自分の死を知っているであろう人物との接触を避ける。でも、ワスレモノの能力を『ＣＳ』に取り込めば、それもなくなる。」
竹取 輝夜　：「人は時に本当に呆気なく、本人の意思とは関係なく突然死ぬ。そんな悲しい人たちの魂を、彼や彼女の死を悲しむ周りの人の心を、救うことができる。…そう思わない？」
熊埜御堂 明香 ：「、……」

熊埜御堂 明香：「……人は、」
熊埜御堂 明香：「人は、死にます」
熊埜御堂 亜聡：「…メイ」
熊埜御堂 明香：「……、それは」
熊埜御堂 明香：「それは、確かに…辛くて、悲しい。…ずっと引きずってしまうのも、…悲しんでしまうのも、当然」
織畑 鶴乃　：「っ…、……明香ちゃん…」
熊埜御堂 明香：「…割り切れないのも、…何度も、何度も「どうして」って問いかけてしまうのも、…苦しくて泣いてしまうのも、当然で」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 明香：「……でも、…死を忘れるのは」
熊埜御堂 明香：「その人が、生きたことを、忘れるのと同じだと思う」
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「……死を忘れたら、…誰がその人を弔うの？」
熊埜御堂 明香：「誰が、その人の思い出話を語り継ぐの？　…誰が、その人が生きて、死んだことを覚えていられるの」
熊埜御堂 明香：「……死を忘れるのは、生を忘れるのと同じなんだよ」
竹取 輝夜　：「……ふぅん？つまり明香は、死者を現世に帰還させる事には反対って事？」
熊埜御堂 明香：「……少なくとも、その境界線を誰も越えちゃいけない」
熊埜御堂 明香：「これは、そういう話なんだってわたしは思います。生きるものと、死ぬものは決定的に違いすぎるから」
熊埜御堂 明香：「……一緒には、いられない。…でも、想い合う事は出来る。…わたしはそう信じてる」

竹取 輝夜　：「……そう。でも…」

DL　：この願いは――、と輝夜は言い、黒く歪な塊の方を向く。

竹取 輝夜　：「…あなたも望んだことじゃなくて？」

DL　：輝夜はそう、その怪異に問いかけた。

ワスレモノ：「■■■■■■」

DL　：目の前の怪物はまた小さく呻いた。

ドロシー　：『……私の行いが…本当にヒトのためになるか、わからなくなった。いや、これは違う…誰かのためなんて言葉は全て偽善だ。』
ドロシー　：『私がワスレモノであるために、私がそうあるための養分として哀しみを喰らっていた。でも、いざ自分が哀しみを生み出す存在となって、思ったんだ…』
ドロシー　：『…私が哀しみを喰らうのは、哀しむヒトを見るのが辛かったからなんじゃないかって。だから私は、どうするべきかを君たちに託そうと思った。』

ドロシー　：『…そのために織畑鶴乃をけしかけた。彼女を利用した。死んでしまった魂を、冒涜した。それでも私は、君たちに…純粋なヒトに…現世と幽世の在り方を、未来を、託したかった。』
ドロシー　：『未来とはまだ至っていない未知だ、未知に 惹かれ行動するのは…いつだってヒトの役目だ。』

DL　：と、ドロシーが代弁する。

熊埜御堂 亜聡：「……そういう、ことか……」 はぁ…
熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃん…ワスレモノさん…」
熊埜御堂 亜聡：「そのために、俺らを選んだのか。お前は。」
ドロシー　：『……うん…』
熊埜御堂 亜聡：「そうか。……なら、俺らの役目は、そこにあるんだな」
ワスレモノ：「■■■■■■」
ドロシー　：『…重い役目を押し付けてしまってごめんなさい。でも、心から信頼できる君達だからこそ、私はその判断に従う覚悟が出来た』
ドロシー　：『…君達がどんな決断をしたとしても、私はそれを受け入れる。それを正しいと、信じる。』
熊埜御堂 亜聡：「いや、…いい。おかげでこっちも、覚悟ができた」

熊埜御堂 亜聡：「…明香。」
熊埜御堂 明香：「…お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「俺らは、雀先輩のことに関しては当事者じゃない。…当事者になったら、俺の場合は、話が変わることもあるかもしれない。だがそれでも、俺らはこの件に関してどうなったって第三者だ。」
熊埜御堂 亜聡：「だから『純粋なヒトとして、現世と幽世の在り方を託された』。そういうことなら、俺も自分の思ってることが言える。」
熊埜御堂 明香：「……うん」
熊埜御堂 亜聡：「輝夜先輩。小波先輩。…人は死ぬ。時に本当に呆気なく、本人の意思とは関係なく突然死ぬ。……でもな、それを受け入れないと、人間は『止まる』んだよ。」
小波 絵本　：「……」
熊埜御堂 亜聡：「そこからはもう、後にも先にも進めない。生ぬるい空気の中で、停滞したまま、緩やかに腐っていくしかない。残した方も、残された方もな。」
熊埜御堂 亜聡：「…それは結局のところ、小波先輩のためにも、雀先輩のためにもならねーんだよ。」
小波 絵本　：「……お前に何が分かる…」
熊埜御堂 亜聡：「分かるよ。自分のことなら」
熊埜御堂 亜聡：「俺は今、アンタらのために、俺らの話と重ねて話をしてるんだ」

熊埜御堂 亜聡：「……だから、従えない。アンタらが地獄に留まるのをただ見てるのは、胸糞悪いからな」
竹取 輝夜　：「……ふ～ん…。亜聡も明香と同じ意見って事でいいの？」
熊埜御堂 亜聡：「あぁ」
熊埜御堂 明香：「はい」

小波 絵本　：「…もう十分だろう。」

DL　：小波絵本は黒い怪異の前に躍り出た。
DL　：ではここから戦闘に突入となります。

DL　：【1 ラウンド目】
DL　：最初はワスレモノの手番です。

ワスレモノ：「■■■■■■」

DL　：呻き声を上げるだけで何もしません。
DL　：ワスレモノの手番はこれで終了です

DL　：続いて小波の手番
DL　：刀でワスレモノに斬りかかってきます

小波 絵本　：1DM<=7 ＜怪斬刀＞ (1DM<=7) ＞ [4] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!
小波 絵本　：1+1d6 ダメージ (1+1D6) ＞ 1+2[2] ＞ 3

熊埜御堂 亜聡：か、庇えますか！
DL　：OK です、では＜運動＞ ＜スピード＞ ＜危機察知＞のいずれかでどうぞ
熊埜御堂 亜聡：危機察知でいきます…！

熊埜御堂 亜聡：1DM<=5〈危機察知〉(1DM<=5) ＞ [5] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 明香：ひゅー！
熊埜御堂 亜聡：ぴったんこ！

DL　：では亜聡君は小波とワスレモノの間に割って入る。小波の刀は亜聡君の体に切り込んでくる、と思いきや…

小波 絵本　：「…無駄だ…」
熊埜御堂 亜聡：「！？」

DL　：…刀身は亜聡君の体をすり抜け、ワスレモノへと届いてしまう

ワスレモノ：「■■■■■■」

DL　：ワスレモノは痛そうな呻き声を上げる

熊埜御堂 亜聡：「っ、ドロシー！……なんだそれ、どういう原理だ刃物なんじゃねーのか」

小波 絵本　：「この刀は怪異のみを傷付ける。いくら庇っても無駄な事だ」
熊埜御堂 亜聡：「漫画でしか見ねーぞそんな設定！先に言っとけ！」
小波 絵本　：「誰が言うか」

DL　：では次、輝夜の番です

竹取 輝夜　：「何をしてるの？早く絵本部長を助けないと！」

DL　：明香さんに向かってそう言います

熊埜御堂 明香：「、何を言って……」
竹取 輝夜　：「……」

DL　：明香さんの様子を伺っているのか、このラウンドは何もしてきません。これで終了です

DL　：では次、亜聡君の手番です
熊埜御堂 亜聡：ど、どうしようか…。明香ちゃんと輝夜先輩の様子も気がかりだけど…

熊埜御堂 亜聡：「、…明香！　…そっちは任せていいか？」
熊埜御堂 明香：「っ、……うん！」
熊埜御堂 亜聡：「さすが俺の妹だ」 小波先輩にタックルなりなんなり、攻撃したいです！

DL　：了解です！
DL　：この場合は＜運動＞か＜ストレングス＞ ＜戦闘系技能＞ですかね…
熊埜御堂 亜聡： 出来れば押し倒すなり腕をつかむなり、少しでも行動を制限できるような動作が取りたい…。
＜運動＞でよろしければ、振ります！
熊埜御堂 亜聡：（あ、BD 使いたいです…！）
DL　：はーい、OK です！
熊埜御堂 亜聡：ありがとうございます！…では！

熊埜御堂 亜聡：2DM<=3〈＊運動〉(2DM<=3) ＞ [6, 2] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡：しゃー！
DL　：では小波は回避判定しますね

小波 絵本　：1DM<=7　(1DM<=7) ＞ [8] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

DL　：では亜聡君は小波を突き飛ばす事に成功します

熊埜御堂 亜聡：「っ、それ以上変なことすんな！」 どんっ！

小波 絵本　：「……っ！」どんっ
熊埜御堂 亜聡：「守りたいのは、俺も同じなんだよ！」
小波 絵本　：「くっ…、邪魔をするな…！」

DL　：（一応ですが…、小波にダメージを喰らわせたいという意図はございましたでしょうか？）（あれば１ｄ３でダメージ算出をお願いします）
熊埜御堂 亜聡：あ、では一応振っておきます…恨みはこもってるので
DL　：ｗｗｗｗどうぞ！ｗ

熊埜御堂 亜聡：1d3 ダメージ (1D3) ＞ 1

熊埜御堂 亜聡：弱い
DL　：では小波は１ダメ+転倒で次のラウンドでは起き上がるだけになります

DL　：では最後、明香さんの手番です
熊埜御堂 明香：はい…！
熊埜御堂 明香：では、ラビットホールを起動して…輝夜先輩に向けます！
DL　：了解です！

DL　：では明香さんはラビットホールを起動させる。背景はまだ青いままだ

熊埜御堂 明香：「……」
では、画面に「オトギバラシ」と入力しますね…！

DL　：名前は「オトギバラシ」、対象は「輝夜」でよろしいでしょうか？
熊埜御堂 明香：お願いします…！
DL　：了解です！

DL　：では明香さんが「オトギバラシ」と入力し、スマホを輝夜に向けるとですね…
DL　：背景が赤くなり、OK ボタンが表示されます

熊埜御堂 明香：「っ、……やっぱり、」
熊埜御堂 明香：「やっぱり、先輩だったんですね……」
竹取 輝夜　：「……は？何を言って…」
熊埜御堂 明香：「……これが本当に正しいかなんてわからない」
熊埜御堂 明香：「でも、それでも、…考えた先にあったのが、お兄ちゃんと一緒に結論を出したこれなら」
熊埜御堂 明香：「わたし、なんにも怖くない……、オトギバラシさん」
熊埜御堂 明香：「もう、終わりにしましょう…！」 OK を押します…！

DL　：了解です！では明香さんが OK ボタンを押しますと…

兎穴：『タイヘンだ、タイヘンだ。』

DL　：ボタンを押すと、子供でも老人でも男でも女でもヒトでも機械でもない不可思議な声が携帯から聞こえてくる。

兎穴：『チコクするチコクするチコクするチコクするチコクするチコクするチコクするチコクする。』

DL　：壊れた機械のように、不気味にそう繰り返す。
DL　：すると、携帯から白く巨大な腕が勢いよく飛び出してきた。
DL　：獣のような腕は、真っすぐに竹取輝夜を、オトギビトを狩り怪異となったオトギバラシを、名を与えられ未知でなくなった怪異を掴んだ。
DL　：肺の空気が押し出されるように竹取輝夜は苦しそうな声を上げる。

竹取 輝夜　：「ラビット…！？　どうして…！」
アリス　：「――どうしても何も、」

DL　：そう言う輝夜に、アリスは続ける。

アリス　：「これは君が始めた物語だ。いや、ゲームと言い換えてもいい。圧倒的に有利な出来レース…のつもりだっただろう。でも、最初から躓いたね？」

アリス　：「ワスレモノを呼び出す手立てが私のところに揃っていれば、この計画はとっくに終わっている予定だった。でもそうはならなかった。こうして切り札を悪用され、窮地に立たされた今となってやっと気づいたかな？」

アリス　：「でも、もう遅い。だから、輝夜…いや、」
アリス　：「――オトギバラシ、君の負けだ。」

DL　：アリスは冷ややかにそう告げた。

竹取 輝夜　：「お前…まさか…！？」

DL　：輝夜は君たちに問いかける。

竹取 輝夜　：「『ＣＳ』は未練ある魂も！死を悲しむ人々の心も救うことができる！ワスレモノの力を得て、それは完成する！」
竹取 輝夜　：「織畑鶴乃も、御伽雀の魂は救済され、彼女たちの死をなかったことにできる！それなのにどうして？」

熊埜御堂 明香：「……」

熊埜御堂 明香：「…さっきも、言ったはずです。…人は死ぬんです」
熊埜御堂 明香：「それは悲しいことだけれど、苦しいことだけれど、……でも、やっぱり」
熊埜御堂 明香：「死を忘れることは、その人を忘れることなんです。例え、そこにいて、見えていたとしても」
熊埜御堂 明香：「……そんなの、ただの幸福な幻覚と変わらない。…生と死を、同じところに置いてはいけない。置いておけない」
熊埜御堂 明香：「……置いておけないから、わたし達は…いつか、哀しみを乗り越えて、その人の事を語り継ぐんです」

熊埜御堂 亜聡：「…死なねー人間なんているかよ。いたとして、そんなの人間じゃなくて怪物だ。そんなもんに、テメーの独りよがりで大事な奴を変えてやるなよ。」
熊埜御堂 亜聡：「魂の救済？そうじゃなく、繋囚だろ。本当にそいつのこと思うんなら、残された人間が前向けよ」
熊埜御堂 亜聡：「……世の中、そういう風にできてんだよ。…そうできるように、人間はできてる。」

アリス　：「――死者の魂は幽世に在るべきなんだ。現世と幽世の境界を、悪戯に乱してはいけない。」

DL　：アリスが小さくそう呟くと。

兎穴：『タイヘンだ、チコクする。』

DL　：携帯から短くそう聞こえた。
DL　：白い腕は竹取輝夜を掴んだまま、吸い込まれるように小さな端末の中に消えていった。

アリス　：「ようこそ、おとぎの国へ。」

DL　：そうアリスは皮肉たっぷりの挨拶をした。
DL　：――先ほどまで竹取輝夜がいた場所には折りたたまれた紙だけが残った。
DL　：それはあのスクラップブックの１ページ、《怪異：バラシ》の記事だ。
DL　：そして、同時に小波絵本が握っていた刀の刀身が消えていき、柄だけとなった。

御伽 雀　：「絵本…！」

DL　：そこに一人の少女が現れる。御伽雀だ。
DL　：急いで駆けあがってきたのか、肩で息をしている。

熊埜御堂 亜聡：「…っ」
小波 絵本　：「雀！？何故ここに！？」

DL　：小波絵本はそう言うと、雀のもとに駆け寄った。

御伽 雀　：「なんかもう、会えない気がして。」

DL　：雀の姿は景色に溶け込むように、次第に薄くなっていく。

小波 絵本　：「雀…。」

DL　：そう言った彼の頬を彼女は勢いよく叩いた。

御伽 雀　：「ばーか！目ェ覚めたか？こんなこと、私が望んでいるわけないだろ？あんたが変に責任感じてるのはお門違いなんだよ！ほんっとバカ！」
御伽 雀　：「……でも、ありがと。だけど私はあんたの足は引っ張りたくない。私のために、妙なことをしてほしくない。」
御伽 雀　：「だから、ここでお別れ。」

DL　：雀はそこにいる皆を一瞥して、最期にこう言った。

御伽 雀　：「じゃあね、みんな！愛してるよ！」
熊埜御堂 明香：「っ、雀せんぱ……！」
熊埜御堂 亜聡：「……。ありがとうございました、雀先輩」
小波 絵本　：「っ……！待て、雀…っ！」

DL　：小波絵本が伸ばした手は彼女に届くことはなく、空を掴む。
DL　：御伽雀の姿は、完全に見えなくなった。

小波 絵本　：「……っ…」

DL　：絵本は君たちに声をかけることなく、踵を返す。

熊埜御堂 亜聡：「小波先輩」
熊埜御堂 明香：「あ、……」
熊埜御堂 亜聡：「前向けよ。雀先輩も望んでたんだから」
熊埜御堂 亜聡：「あんたは大丈夫だ。…大丈夫だから。これからも生きて、雀先輩のこと、ちゃんと思い出してやってくれ」
小波 絵本　：「……」

DL　：一瞬だけ。
　小波がこちらを振り返ったような気がした。
DL　：無力な足取りで去り行く、彼の寂しげな背中を見送った。

熊埜御堂 明香：「……小波先輩…」
熊埜御堂 亜聡：「……」

織畑 鶴乃　：「――明香ちゃん…亜聡君…」

熊埜御堂 明香：「っ、鶴乃ちゃん…！」
熊埜御堂 亜聡：「…っ、…織畑」

DL　：鶴乃に声を掛けられ、彼女の方を見る。
DL　：……鶴乃の体は雀と同様に、次第に薄くなっていっている。

熊埜御堂 明香：「っ、……ごめん、ごめんねぇ……！」
熊埜御堂 明香：「こんな事になっちゃって、ごめん、ねぇ…！」
熊埜御堂 亜聡：「……織畑。……ごめん」
織畑 鶴乃　：「ち、違います…！2 人のせいじゃないです…！私は…、最初から死んでたんですから…」
織畑 鶴乃　：「明香ちゃんの言う通り…、本来いるべきところに戻る…。それだけの事なんです…！」
熊埜御堂 明香：「ちがう、ちがうの、…わたし、わたし、」
熊埜御堂 明香：「……もっと、もっと早く、会えてたら、よかった……もっと、鶴乃ちゃんのこと、知ってたら、」
熊埜御堂 明香：「…もっといっぱい、お話できたのに…鶴乃ちゃんはこんな子だよ、って……いっぱい、忘れないように、…わたし」
熊埜御堂 亜聡：「……」 視線を伏せる
織畑 鶴乃　：「っ…、明香ちゃん…」

熊埜御堂 明香：「う、…うぅ……あのね、あのね、」

熊埜御堂 明香：「……たのしかった。…鶴乃ちゃんと一緒に過ごせて、…ほんとうに、たのしかった」

熊埜御堂 明香：「わすれない、から、絶対に…ぜったいに、わすれないから…」

熊埜御堂 亜聡：「……また、会いに行くよ。……かに玉と、バナナと、ヨーグル持ってな。」

織畑 鶴乃　：「っ……、明香ちゃん…、亜聡君…っ！」

織畑 鶴乃　：「私もっ…！明香ちゃんと亜聡君と過ごしたこの４日間は、私の人生で一番 楽しい時間でした…！友達になってくれて、ありがとうございます…！私…、お別れしても２人の事ずっと…ずっと忘れないです…！」

熊埜御堂 亜聡：「あぁ…、…あぁ。」

熊埜御堂 明香：「うん、…うん……っ」

熊埜御堂 亜聡：「…友達だからな。」

熊埜御堂 明香：「…ずっと、ずっと友達だからね…！」

織畑 鶴乃　：「はい…！……明香ちゃん、亜聡君…。最後に一つだけ、約束して下さい…」

熊埜御堂 亜聡：「なんだ。…」

熊埜御堂 明香：「なぁに…？」

織畑 鶴乃　：「いつまでも、家族一緒に、仲良く生きていって下さいね…！そうしてくれると、私もとっても嬉しいですから…！間違っても、すぐに私と同じ所に来ちゃったらダメですからね！」

熊埜御堂 明香：「っ、……うん、…うん！　ぜったい、ぜったい約束する…」

熊埜御堂 亜聡：「……あぁ。大丈夫だ」

織畑 鶴乃　：「はい！２人ならきっと守ってくれるって、信じてますから！」

織畑 鶴乃　：「……それじゃあ…、少し寂しいですけど…。またいつか、会える日まで…さよなら！」

熊埜御堂 亜聡：「またな。……ありがとう、織畑」
熊埜御堂 明香：「…ばいばい、鶴乃ちゃん……ばいばい」

DL　：鶴乃が笑顔を浮かべ、貴方達に別れを告げる。
DL　：「さよなら」と言ったその直後、鶴乃の姿は完全に見えなくなった。

熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「……う、…うぅ」
熊埜御堂 亜聡：「…メイ」 明香ちゃんの傍まで行って、頭を自分の肩に引き寄せてぽんぽんします
熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃん…お兄ちゃん……」
熊埜御堂 明香：「……わたし、……ぐすっ」
熊埜御堂 亜聡：「また、会いに行こう」 ぽんぽん
熊埜御堂 明香：「っ、……うん、…うん」

ワスレモノ：「■■■■■■」

DL　：ワスレモノは君たちに語り掛けるように、小さく唸るような音を発している。

熊埜御堂 亜聡：「……」 スマホのドロシーちゃん見ますね
ドロシー　：『……私もこれでよかったと思います。』
ドロシー　：『アリスの言う通りです。現世と幽世は分け隔てられるべきです。生者と死者は、人間と怪異は、それぞれ別の舞台が用意されるべきです。』
ドロシー　：『共存できないとは言いません。少しの時間ですが、君たちと過ごした時間は楽しかった。』

DL　：ドロシーはワスレモノの言葉を文字にする。

熊埜御堂 明香：「…ドロシーちゃん…」
熊埜御堂 亜聡：「…あぁ。俺もなんだかんだ、楽しかったよ」
ドロシー　：『この世界には君たちにとってまだまだ知らないことで溢れている。君たちはこれからも未知に名前を与え、架空の怪異を生み出していくだろう。』
ドロシー　：『時にそれを恐れ、時にそれを楽しみ、そして物語を紡いでいく。そこに本物の怪異は必要ない。』

DL　：黒く不安的な巨躯は少しずつ闇に溶けるように消えていく。

ドロシー　：『さようなら、ヒトの子。悲しくて悲しくて一歩も前に進めないくらい辛いことがあったら、また会いましょう。』
熊埜御堂 亜聡：「っ、……ドロシー、」

DL　：そして、ワスレモノの姿は完全に見えなくなった。
幽世が揺らぎ、正常な視界に戻っていく。

熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃん…！」
熊埜御堂 亜聡：「……。……あぁ。また会える日まで。」

DL　：ヒトの魂を、記憶を、哀しみを取り込みすぎたせいで、ヒトよりも人らしくなった怪異。
人ならざる者とはいえ、あの優しい怪物にもう会えないと思うと少し寂しい気持ちになった。

ドロシー　：『あ、でもことパスは繋がってるからいつでもお話はできるよ。』

DL　：あっけらかんとドロシーはそう言った。

熊埜御堂 亜聡：「いや再会早ぇな」
熊埜御堂 亜聡：「心の涙返せ」
熊埜御堂 明香：「…で、でも一緒にいられるってことだから…」
ドロシー　：『…ふふっ…、まだまだたくさん、お喋りしようね』
熊埜御堂 亜聡：「……はぁぁ。…これからもよろしくな、ドロシー」
熊埜御堂 明香：「…ふふっ、よかったねお兄ちゃん」
アリス　：「そういう事で、これからもよろしくね！」
熊埜御堂 明香：「わ、アリスちゃんも一緒！？　本当！！」
アリス　：「勿論よ！ドロシーだけ残るなんてずるいじゃない！」
熊埜御堂 亜聡：「ずるいって何だよ」
熊埜御堂 明香：「ふふっ……」
アリス　：「……というか、ドロシーと違って私にはもう本体が無いんだからどこにも行きようがないわよ」
熊埜御堂 明香：「あ、オトギバラシは封印できたけど、アリスちゃんはそのままなんだ…？」
熊埜御堂 亜聡：「っつーか、どこに行ったことになってんだ？オトギビトも、オトギバラシも」
アリス　：「怪異とは言え、私はオトギバラシに殺されたんだもの。……さぁ？案外、オトギバラシもそのうちひょっこり『CS』に現れたりしてね…？」
熊埜御堂 明香：「え、…だ、誰かのスマホにってこと…？」
熊埜御堂 亜聡：「それは……なんつーか」
熊埜御堂 亜聡：「再会したら刺されそうだな、俺ら」
熊埜御堂 明香：「…でも向こうが悪い事してたんだもん…」
熊埜御堂 亜聡：「そん時はまた、アリスがどうにかしてくれ」
アリス　：「え～、ラビットホールもう使えないのに無茶振りするわね～？」
熊埜御堂 亜聡：「最後に散々煽り散らしてたのアリスだろーが」
アリス　：「まぁまぁ、難しいこと考えるのはもう止しましょうよ！もう遅いんだし、早く帰って寝なさい。明日も学校でしょう？」
熊埜御堂 明香：「う、うん…？」 誤魔化された気がする
熊埜御堂 亜聡：「……はぁ。帰るか。…帰るぞ」
熊埜御堂 明香：「……うん」
ドロシー　：『暗いから足元、気を付けてね…』

熊埜御堂 亜聡：「ん」
熊埜御堂 明香：「じゃあ、今日も泊めてね？　お兄ちゃん」
熊埜御堂 亜聡：「……しゃーねぇな」

DL　： では魔女達との会話で、沈んでいた心もいくらかマシになっただろう。貴方達はしっかりと手を繋いで山を下りていく――。
DL　：……
DL　：……
DL　：…

▼金曜日　―――エピローグ

DL　：――長かった夜が明け、朝が来る。
DL　：貴方達はいつものように起床し、いつものように登校する。
何も変わらない、いつも通りの日常。
DL　：……しかし今日は、学校中がやけに騒がしかった。

「ねぇ聞いた！？裏山で１年の子が死体で見つかったって！」
「聞いた聞いた！1B の子でしょ？先週の金曜から家に帰ってなかったんだって！」
「さっき聞いたんだけど、織畑鶴乃っていう子らしいよ！」

DL　：――学校中、織畑鶴乃の遺体が見つかったという話題で溢れ返っていた。
DL　：彼女の死は、こうして周知の事実となったのであった。

DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：――学校中が浮き足立った雰囲気のまま授業が終わり、放課後。
DL　：貴方達はいつものように、ミステリー研究部へ顔を出す。

八雲 芳一　：「……やぁ、諸君…。元気か…？」

DL　：明らかに元気のない語調で八雲が話しかけてくる。

熊埜御堂 明香：「…部長……」
熊埜御堂 亜聡：「元気に見えるか？……部長もなんか」
熊埜御堂 亜聡：「どうかしたんすか」
八雲 芳一　：「……諸君も聞いただろう…？織畑君が…亡くなった、と…」
熊埜御堂 明香：「……はい」
熊埜御堂 亜聡：「…あぁ」
八雲 芳一　：「……昨日まで元気そうだったのに…、まさか、こんな事になるなんて…」
熊埜御堂 亜聡：「……そうすね」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 明香：「……まだ、哀しくて…現実味がない、ですよね。……」
八雲 芳一　：「……そう、だな…。まだ…、受け入れるには時間がかかりそうだ…」
熊埜御堂 明香：「……でも、部長」
熊埜御堂 明香：「今はまだ、哀しいや寂しい…そう思うのは止められないけど、…でも、ずっと暗い顔してたら、きっと鶴乃ちゃんも気にしちゃいますよ」

熊埜御堂 明香 ：「だから、…ちょっと経ったら、…ちょっとだけ、前を向けるようになったら。…鶴乃ちゃんの事、どんな子だったかお話しましょう」
八雲 芳一　：「…明香……。ああ、そうだな…」
熊埜御堂 明香：「……そうしたら、きっと…鶴乃ちゃんも一緒に笑ってくれる気がするから」
八雲 芳一　：「……ははっ、だと良いな。織畑君が喜んでくれるのなら、いくらでも話をしようじゃないか」
熊埜御堂 明香：「っはい、…は、い……う、……うぅうう～…」
熊埜御堂 明香：「……鶴乃ちゃん……ぐすっ」
八雲 芳一　：「ああもう、言っている傍から…。…ほら、ハンカチだ。」
熊埜御堂 明香：「うう…ぶちょぉ～…！」
熊埜御堂 亜聡：「ずびずびじゃねーか。……」
八雲 芳一　：「ほらほら。後で駄菓子でも奢ってやるから泣き止めって」
熊埜御堂 明香：「う"～～……」

DL　：……さて、八雲とそんな会話をしていると…

アリス　：「……～♪」（ふんふん）

DL　：落ち込む貴方達とは対照的に、ご機嫌な鼻歌が明香さんのスマホから聞こえてくる。
鼻歌の主は、どうやらアリスのようだ。

熊埜御堂 明香：「……？　どうしたの、アリスちゃ…」(ずびっ)
アリス　：「ああ、明香！今ちょうど声を掛けようと思ってたのよ～！」
熊埜御堂 亜聡：「ご機嫌だな」
アリス　：「今やっと、新しい『妹』を造り終えた所なの！」
熊埜御堂 明香：「……『妹』？」(ぐすっ)
アリス　：「そういう訳で、紹介します！じゃ～ん！」

DL　：アリスが体をずらすと、後ろにもう一人 魔女が立っていた。

兎耳の魔女：「……」
熊埜御堂 亜聡：「……は？？？」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 明香：「？？？？？？？？」

DL　：大きな兎の耳に、十二単を思わせる着物を羽織っている。が、
DL　：……よく見ると着物の下に、この学校の制服によく似た服を着ている。
DL　：――この着崩し方に、この髪型…。そして顔の造り…。
DL　：……竹取 輝夜に瓜二つだと、貴方達は気付く。

熊埜御堂 明香：「…？　？？？？？？」
熊埜御堂 亜聡：「……いや、いやいや」
熊埜御堂 亜聡：「…輝夜先輩じゃねーか！」
アリス　：「新しい『妹』のカグヤちゃんでーす！」
熊埜御堂 明香：「え、え、？」
熊埜御堂 明香：「……カグヤ、ちゃん？」 恐る恐る声をかける
カグヤ　：「……うるさい」
カグヤ　：「うるさいうるさい！！誰が『妹』だ！！ふざけんな！！！！！！」
熊埜御堂 明香：「ひゃあっ！」
熊埜御堂 亜聡：「くっそキレてるじゃねーか」
熊埜御堂 亜聡：「いや確かに「何かあったら、そん時はアリスがどうにかしろ」とは言ったけど」
熊埜御堂 明香：「え、待って、待って、わたしの CS……えっ？」
アリス　：「あらあら、生まれたてなのにもう反抗期でちゅか～？しょうがない子でちゅねカグヤちゃんは～」（にによによ）
ドロシー　：『妹よ、落ち着きなさい…』
熊埜御堂 亜聡：「いやお前にとっても妹なのかよ」
カグヤ　：「おちょくんなよオトギビト！！！！ワスレモノも悪ノリすんな！！！！」
熊埜御堂 明香：「さんしまい…」
アリス　：「きょうだいは多い方が楽しいじゃない？ねぇ？」
熊埜御堂 明香：「う、うん…楽しいと思うけど…けど」
熊埜御堂 明香：「…えっ、いいの？」
熊埜御堂 亜聡：「…いいんじゃね？」
ドロシー　：『……あのまま消えられるより、この方がやり返せるから…別にいい…』
熊埜御堂 明香：「やり返す気なんだ…」
ドロシー　：『恨んではいないけど、怒っていないとは言ってない』
熊埜御堂 亜聡：「あー…」
熊埜御堂 亜聡：「いいじゃねーか。それなら、変態先輩のところに持って行くか」

熊埜御堂 明香：「洗礼ってやつだ…」

DL　：お、ではそんな会話をしてるとですね…

DL　：――コンコン。
部室の扉がノックされる。

熊埜御堂 明香：「？　はーい、今開けます！」 来客対応係！

DL　：――ガラッ。

御伽 住吉　：「……おう、今良いか？邪魔させてもらうぜ」
熊埜御堂 明香：「わぁ」
熊埜御堂 亜聡：「噂をすればなんとやら」
御伽 住吉　：「？」
熊埜御堂 明香：「あ、いえなんでも…えっと、何かご用ですか？」
八雲 芳一　：「どうした御伽？お前が部活中に外出するなんて珍しいな」
御伽 住吉　：「……あ～、今日はちょっと…。そこの双子に用があって…」
熊埜御堂 明香：「？」 お兄ちゃんと顔を見合わす
熊埜御堂 亜聡：「…？」 同じく
御伽 住吉　：「……お前らさ、部活の掛け持ちとかやるつもりない…？…つってもウチじゃなくて、こっちの方だけど」

DL　：言いながら住吉は机に紙を置く。

熊埜御堂 明香：「部活…のかけもち？」
熊埜御堂 亜聡：「…こっち？」 紙を覗き込みますね

DL　：紙は３枚あり、その全てに「【入部届】部活動名：オカルト研究部」と記載されている。
そして内１枚には、「御伽 住吉」の名前が記入されている。

御伽 住吉　：「……この間 お前らと話してからさ、俺なりに色々 考えたんだ…」
御伽 住吉　：「……今更 謝った所で、絵本や雀に言った事は取り消せないし、無かった事には出来ない。けど…」
御伽 住吉　：「……だったらせめて…アイツらの思い出の場所を守ってやる事が、今の俺に出来るせめてもの償いなんじゃねぇかな、って…」
熊埜御堂 亜聡：「……。……小波先輩は？」
御伽 住吉　：「（ふるふる）……まだ、部室に鍵かけて閉じこもってる。だから先に顧問の方に話通しておいた」
御伽 住吉　：「…けど、俺一人じゃ最低人数の『３人』には届かねぇ。だからお前らにも力を貸してほしい。頼む…！」

熊埜御堂 亜聡：「なるほど。…」

DL　：住吉は貴方達に向かって深々と頭を下げる。

熊埜御堂 明香：「あ、そ、そんな…頭上げてください、先輩…！」
熊埜御堂 明香：「……あの、実は…わたしのお姉ちゃんも、オカルト部だったんです」
熊埜御堂 明香：「優しくて、面倒見が良くて、ちょっとずるいけど自慢のお姉ちゃんで……だから、あの」
熊埜御堂 明香：「…お姉ちゃんの思い出もある場所がなくなるのは、わたしも嫌だから」
熊埜御堂 亜聡：「……。……明香がやるっつーなら、しゃーねぇな」
八雲 芳一　：「……御伽。」
御伽 住吉　：「…？な、何…？」
八雲 芳一　：「……入部届、追加でもう１枚持って来い」
御伽 住吉　：「……え…？…それって…」
八雲 芳一　：「……言っておくが、あくまでも籍を置くだけだ。ミス研の活動に支障が出ても困るからな」
御伽 住吉　：「みんな……！３人ともありがとうな…！」
熊埜御堂 明香：「部長…！」
熊埜御堂 亜聡：「そういうとこあるんすね部長」
八雲 芳一　：「まぁ、これ以上しんみりムードが続くのもごめんだからな」
熊埜御堂 明香：「部長やさしい」
熊埜御堂 亜聡：「意外」
アリス　：「言葉ではなく行動で誠意を示す、か…。ちょっとだけ見直したわ」
熊埜御堂 明香：「あっ、そんな事言うと…！」
ドロシー　：『みんな、掛け持ち頑張ってね…』
カグヤ　：「……つーか、人んちの部に何勝手に押しかけようとしてんのよ…」（ぶつぶつ）
アリス　：「貴女そもそも部員どころか生徒ですらないでしょ」
ドロシー　：『特大ブーメラン…』
熊埜御堂 亜聡：「そう考えると図々しいな」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、スマホの中がすごいにぎやか」
熊埜御堂 亜聡：「よかったな」（？）
熊埜御堂 明香：「うん！」(？)
御伽 住吉　：「アリスちゃん…！ドロシーちゃん…！ありがと…、……ん？」
熊埜御堂 明香：「あっ」
御伽 住吉　：「……今 何か？聞き覚えのない声がした気が…？」
熊埜御堂 亜聡：「明香、今だ。見せてやれ。」（けしかけ）
熊埜御堂 明香：「あ、えっと、…実は『CS』にもう一人…魔女？が…」
御伽 住吉　：「えっ”！？！？それホント！？！？どこどこ！？！？」
熊埜御堂 明香：「きゃーっ！！」
熊埜御堂 明香：スマホぽーい
御伽 住吉　：「……か、」
御伽 住吉　：「かんわいいいいいいいいいいいいい～～～！！！！！！！！」

カグヤ　：「（びくっ）」
熊埜御堂 亜聡：「ぶはっ」
熊埜御堂 亜聡：「くっくっ…！　…よしよし」 満足げ
御伽 住吉　：「和風の魔女なんて初めて見た！！どうやって進化させたんだ！？いや、そもそも２体目の魔女が出てくるだなんて聞いた事ないぞ！！出現条件は！？！？」（ﾊｧﾊｧ…）
熊埜御堂 明香：「はわわ…わ、わかんないですぅ…」
熊埜御堂 亜聡：「また解析してみたらいいんじゃないっすか？」 けしかけ
カグヤ　：「ちょ…、何なのよアンタ…！？ちょ…、近寄らないで！！キモイキモイ！！！！」
御伽 住吉　：「しゅごい…！！アリスちゃんやドロシーちゃんと同じように喋れるんだぁ～！！しゅごいよぉぉぉ～！！」（ﾊｧﾊｧ…）
熊埜御堂 明香：「怖いよぉ…」
熊埜御堂 明香：「と、とりあえずスマホ返してください…！」
カグヤ　：「ひぃぃぃ……！！聞いちゃいねぇ……！！」（ｶﾞﾀｶﾞﾀ）
アリス　：「名前はカグヤっていうのよ！よろしくね！」（によによ）（ぐいぐい）
カグヤ　：「ちょ…、押すな押すな！！変態に近付けようとすんなオトギビト！！！！」
熊埜御堂 亜聡：「（けらけら）…💡　……ちなみに一番好みなのは？」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん！」
御伽 住吉　：「アリスちゃんも捨てがたいけど、カグヤちゃんもかんわぃぃぃ～！！いいなぁ～！！この子欲しいなぁ～！！」（ﾊｧﾊｧ…）
熊埜御堂 亜聡：「よかったなアリス」 スケープゴートの素質はばっちりだ！
ドロシー　：『……亜聡もいいって言ってるし、解析の為に貰って行っちゃえば…？』
熊埜御堂 明香：「えっ、あっ、だ、だめだめ！　う、うちの子ーーー！」
熊埜御堂 亜聡：「ぶはっ」
御伽 住吉　：「えっ、じゃ、じゃあ新居（新しいスマホ）用意するから！そっちに移そう！それじゃダメ！？！？」
熊埜御堂 明香：「ほ、本人に承諾取ってから……」
カグヤ　：「そんなの嫌に決ま…っ」（むぐ）（アリスに口を押さえられる）
アリス　：「いいわよ！お姉ちゃんは大賛成！！」
熊埜御堂 明香：「ほ、本人……」
ドロシー　：『私も賛成…。明香のスマホの中にアリスと２人じゃ狭いだろうし…』
熊埜御堂 亜聡：「姉２人がそう言ってんならしかたねーよな」（適当）
熊埜御堂 明香：「え、あ、……行く…？」(こてん)
アリス　：「カグヤだって広いおうちに住みたいでしょ？ねぇ？そうよね？？？」（ギリギリ）（足を全力で踏みつける）
カグヤ　：「痛い痛い！！！！わ、わかった！！！！暴力振るう奴がいないだけマシな気がしてきた！！！！」
熊埜御堂 明香：「……」
熊埜御堂 明香：「…後悔しない…？」
カグヤ　：「ここに居続けてもロクな事ないしだったらちょっとでもマシな方行きたい！！！！」（早口）
熊埜御堂 明香：「どっちがマシなのかはわからないけど、まぁ本人がそう言うなら…」
御伽 住吉　：「一生 幸せにします！！！！！！」（ｷﾘｯ）
熊埜御堂 明香：「お、おめでとう…」(?)

熊埜御堂 亜聡：「よかったな」（？）
アリス　：「カグヤ…。短い間だったけど、お姉ちゃんとっても楽しかったわ…。お嫁に行っても元気でね…」（ｷﾗﾘﾝ…）（嘘泣き）
ドロシー　：『大丈夫…。カグヤはきっと、いいお嫁さんになれるよ…。お姉ちゃん、応援してるからね…』（ひらひら）（手を振ってる）
カグヤ　：「アンタらマジでふざけんなよ！！！！！！！！」

DL　：ではカグヤの新居が決まった（？）所でですね
DL　：――コンコン。
また部室の扉がノックされる。

熊埜御堂 亜聡：「…メイ」 来客お迎え係
熊埜御堂 明香：「はーい。開いてますよ、どうぞ！」

DL　：――ガラッ。

一般生徒：「あの～…、どんな事件も３日で解決してくれるって、ホントですか……？」

DL　：扉が開き、１人の生徒が入ってくる。

熊埜御堂 亜聡：「……は？」
熊埜御堂 明香：「…部長」
八雲 芳一　：「ああ、張り紙はまだそのままにしてるぞ？」（さらっと）
熊埜御堂 亜聡：「嘘だろ」
熊埜御堂 明香：「はわ…」
一般生徒：「昨日からウチのミーちゃん…、飼い猫が帰って来なくて…」
八雲 芳一　：「猫探しとはまた、探偵らしい依頼だな！よし、話を聞こうじゃないか！」
熊埜御堂 明香：「えっあ、っ、と、とりあえず席にどうぞ…！」
一般生徒：「あ、はい。お邪魔します…」
熊埜御堂 亜聡：「……めっ（っっっんどくせぇぇぇ……！！）」

八雲 芳一　：「……あ、そうだ。おい御伽、お前も手伝え」
御伽 住吉　：「え！？なんでだよ！？」
八雲 芳一　：「猫探しには人手が必要だからな。……それにこちらは、部活の掛け持ちも引き受けてやっただろう…？」
御伽 住吉　：「うっ……」
アリス　：「……カグヤは困ってる人を放っておけない、優しい人がタイプなんですって！」（によによ）
御伽 住吉　：「手伝わせて頂きます！！！！」（ｷﾘｯ）
熊埜御堂 亜聡：「鬼かよ」
熊埜御堂 明香：「アリスちゃん…」

アリス　：「まぁまぁ、この方が話が早く進んでいいじゃない！」（にこにこ）
ドロシー　：『嘘も方便、って言うもんね…』（うんうん…）
熊埜御堂 明香：「う、うーん…」
カグヤ　：「あーも―……。一刻も早くこいつらから離れたい…」（ぶつぶつ…）
熊埜御堂 亜聡：「…諦めろ」
熊埜御堂 明香：「部活一緒だから…」
カグヤ　：「うるさい！！！！絶望を煽る事を言うな！！！！」
熊埜御堂 亜聡：「事実だからな」
熊埜御堂 明香：「ごめんね…？」

八雲 芳一　：「……よし、聞き取りも終わったし早速 探しに行くか！善は急げだ！」
熊埜御堂 亜聡：「部長。３日以内に猫見つけるって普通に運じゃねーか？」
熊埜御堂 明香：「ペット探偵とかに頼んだ方がいいと思う…」
八雲 芳一　：「猫には縄張りという物がある。幸い、依頼人の自宅は学校から近いようだぞ」
熊埜御堂 亜聡：「っつーかそもそも今日金曜日だろ。土日もやるのか？部活」
八雲 芳一　：「ん？まぁそうなるな」（さらっと）
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 明香：「……お、お兄ちゃん…？」
熊埜御堂 亜聡：「……部長。御伽先輩。メイ。何としても今日中に見つけるぞ。今日中にだ」
熊埜御堂 亜聡：「なんだったら小波先輩連れてきてでも今日中に終わらす」
御伽 住吉　：「……そうだな…。八雲を黙らせるには、もうそれしか手がねぇ…」
熊埜御堂 明香：「お、お兄ちゃんがやる気に満ちてる…！！？」
熊埜御堂 明香：「すごいめずらしい！」
熊埜御堂 亜聡：「俺は土日は昼まで寝るって決めてるんだ」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんはお兄ちゃんだったな…」
御伽 住吉　：「俺だって土日はゲームやる予定があるんだよ！だから全力で頑張る！！」
熊埜御堂 亜聡：「頑張りましょう、先輩」
御伽 住吉　：「あ、もちろんカグヤちゃんの為であるからな！（ｷﾘｯ）…おう、頑張ろうぜ！」

ドロシー　：『……じゃあみんな、ケガには気を付けて。猫探し、頑張ってね…』（ひらひら）
アリス　：「いってらっしゃーい！」
熊埜御堂 亜聡：「おー、いってきます。……じゃあとりあえず小波先輩呼んでくるか…」ぶつぶつ
熊埜御堂 明香：「あ、わたしも一緒に行く！」
御伽 住吉　：「もういっその事、合鍵作るか？」
熊埜御堂 亜聡：「顧問にイケメンの写真見せたら借りれんだろ。もう全員で押しかけるぞ」
御伽 住吉　：「あ、じゃあ俺イケメンの写真探すわ。」
熊埜御堂 明香：「…仲良いね…？」
八雲 芳一　：「やる気を出してくれたようで何よりだ！」

DL　：――いつもと変わらない部室を、いつもよりも賑やかな面子で出て行く。

DL　：放課後はまだ、始まったばかり。
長いようで短い、日常の時間を噛み締める…。
DL　：……
DL　：……
DL　：…

DL　：――いつもの日常、いつもの通学路。
DL　：何気なく青い空を仰ぎ見て、足を止める。
私は本当に生きているのだろうか？
DL　：織畑鶴乃も御伽雀も、自分が生きていると信じて疑わなかった。
自身に向けられた認識が“ 私はいる”と肯定してくれていたのなら。
自分が“人でない何か ” に成り果てていたとしても、それに気づかないまま当たり前の生活をしていたんじゃないか。
DL　：ふと、そう思うことがあったかもしれない。
頭を振るい、頬を叩き、前を向く。
DL　：あの時、人の在り方を、あるべき姿を、正しいと信じた世界を、心に決めたのは君だ。君自身だ。
DL　：長く続く道に向けて、力強く、迷いのない一歩を踏み出した。
まだ見ぬ未知を、未来を求めて。
DL　：エンディングＢ―『人と怪異』
DL　：…
DL　：……
DL　：……

DL　：エモクロア TRPG「オトギバラシ」、シナリオクリアです。お疲れ様でした！
熊埜御堂 亜聡：お疲れ様でしたー！！！
熊埜御堂 明香：お疲れさまでしたーーーー！！！
熊埜御堂 亜聡：楽しかった……楽しかったです、途中でいろんな感情に振り回された素敵なお話だった…
熊埜御堂 明香：生きて帰れた…それはそれとしていっぱいかなしい……鶴乃ちゃ…
DL　：もう最後の方 DL も涙腺崩壊してました…。素敵な RP をたくさんして下さってありがとうございました…！
DL　：それではお二人とも共鳴レベルを 1 に戻して、残響の取得をお願い致します！

system：[熊埜御堂 明香] 残響：『忘れない』を取得
system：[熊埜御堂 亜聡] 残響：『前を向く』を取得

▼おまけ　―――双子の秘匿チャット　明香＆アリス編

・第２回　～明香＆アリス

1.アリスとの秘匿チャット初会話

アリス　：「こっそり私に話しかけたい時は、ここで話しかけるといいわよ」

熊埜御堂 明香：「わぁ、アリスちゃん！　うん、わかった…でもわたしなんでもお兄ちゃんに言っちゃうからなぁ」

熊埜御堂 明香：「もしも言わない方がいいよ、って事があったらこっそり教えてね？」

アリス　：「ええ、わかったわ」

熊埜御堂 明香：「ついお話に夢中になっちゃうと、ああやってお兄ちゃんが止めてくれるんだよね～」

アリス　：「へぇ～。兄妹できちんと役割分担が出来ているのね。良い事だわ」

熊埜御堂 明香：「アリスちゃんはきょうだいいる？」

アリス　：「そうねぇ…。「血が繋がってる」という意味なら、いないわね」

熊埜御堂 明香：「繋がってないって意味なら？」

アリス　：「そういう意味なら、『CS』の魔女たちは姉妹、って事になるのかもしれないわね」

熊埜御堂 明香：「じゃあ、ドロシーちゃんも姉妹なんだ！　えへへ、どっちがお姉ちゃんかな？」

アリス　：「さぁ？会った事も無いし、わからないわね」

（まだ直接的に魔女を会わせてはいないので…）

熊埜御堂 明香：「じゃあ、今度みんな揃ってお話しようね！」

アリス　：「ええ、そうしましょう」

・第３回　～明香＆アリス

1.アリスの好きなもの？

熊埜御堂 明香：「(そういえばアリスちゃんってご飯とかいらないのかな…？)」

アリス　：「ふふ、明香が美味しそうにご飯を食べてる姿を眺めているだけで十分よ」（にこっ）

（訳：いらないですね！）

熊埜御堂 明香：「ご飯食べてるところを見られるのは、ちょっと恥ずかしいな…えへへ」

アリス　：「あら、気を悪くしたのならごめんなさいね？私、ヒトを観察するは結構好きなものだから」

熊埜御堂 明香：「あっ、ううん。いやとかじゃないの。でもね、わたしたまにほっぺにご飯粒とかつけちゃう事あるから…」

熊埜御堂 明香：「いつもはお兄ちゃんが気づいて取ってくれるんだけど、それ見られたりしたら恥ずかしいなぁって…えへへ」

アリス　：「ふふっ、可愛いじゃない！」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「オトメゴコロとしては複雑なんだよー」

アリス　：「あら、もしかして好きな人とかいるの？」（わくわく）

熊埜御堂 明香：「いっぱいいるよ！　お兄ちゃんに、お姉ちゃんに、パパにママに…」

アリス　：「あらあら、気が多いわね～」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「あとアリスちゃんも！」

アリス　：「あらあら、嬉しいことを言ってくれるわね！」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「もっと好きになりたいから、アリスちゃんの事もいろいろ教えてね！」

アリス　：「ふふっ、じゃあもっとたくさんお喋りしないとね？」

2.変態先輩初邂逅！
熊埜御堂 明香：「…み、見せていいのかなぁ…？」
アリス　：「……背に腹は代えられないわ…」
熊埜御堂 明香：「い、いいの！？」
アリス　：「……誠に遺憾ではあるけど…、仕方ないわ…」
熊埜御堂 明香：「うぅ、アリスちゃん…！」
熊埜御堂 明香：「が、がんばれ…！」
熊埜御堂 明香：「アリスちゃんはわたしがまもる…！」
アリス　：「…明香…」（じーん…）

3.変態先輩から返ってきた
熊埜御堂 明香：「アリスちゃん、お疲れ様…」
アリス　：「ええ、本当に…。…まぁ、当初の目的は達成できたから良いけど」
熊埜御堂 明香：「目的？　…それってさっき秘密、って言ってたこと？」
アリス　：「ふふっ、それもまた後でね」
熊埜御堂 明香：「もう、アリスちゃん「後でね」ばっかり！」
アリス　：「あらあら、待たせちゃってごめんなさいね？でも、きっと楽しい事になるからもうちょっとだけ待っててね」（にこっ）

・第５回　～明香＆アリス
1.明香の信じるもの
熊埜御堂 明香：「前回は、色々と教えてくれてありがとうアリスちゃん。後でお兄ちゃんともこの事共有しようと思うんだけど…気を付けておいた方がいいこととかは、ないかな？」
アリス　：「そうね…（うーん……）。……明香は今、周りの人たちがみんな信用できる人だと思ってる？」
熊埜御堂 明香：「え？　うーん…個人的には、信用したいというか…疑いたくはないな、とは思ってるけど…信用できるか、って言われたら…」
熊埜御堂 明香：「……お兄ちゃん以上には、いない…かも？」
アリス　：「……なるほど。完全に信じているのは亜聡だけ、という事かしら？」
熊埜御堂 明香：「……う、うん」
アリス　：「…なら、そのままでいなさい。亜聡を一番に信用していいの」
熊埜御堂 明香：「…わ、わかった」
アリス　：「…逆に「みんな信じてるよ！」とか言わなくて安心したわ。貴女はそれでいいのよ」
熊埜御堂 明香：「さ、さすがにそこまで考えなしというか、無邪気じゃないよっ」

・第６回　～明香＆アリス
1.朝から騒がしすぎる水曜日のあらすじ

熊埜御堂 明香：「うん、よろしくね！　今日は朝から色々あったなぁ…」
アリス　：「どれも全くもってシナリオと関係ないのにね」（ﾒﾒﾀｧ）
熊埜御堂 明香：「でもこれくらいにぎやかな方が楽しいかなって」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんはめんどくせーって顔してそうだけど…」
アリス　：「あの一連の出来事を「賑やか」で済ませられる明香は凄いって、改めて思ったわ」
熊埜御堂 明香：「そ、そうかな～」(照れ…)
アリス　：「……前向きなのって、とっても素晴らしい事よね！」（やけくそ）

2.輝夜先輩の伝誦の真意
熊埜御堂 明香：「ふえぇ、バグかなぁ」
アリス　：「……バグ、なのかしらね…？」
熊埜御堂 明香：「…アリスちゃん、何か知ってる？」
アリス　：「……彼女が言う事が本当なのか、疑わしいって事よ」
熊埜御堂 明香：「う、……」
熊埜御堂 明香：「……CS、勧めてきたの先輩、なんだよね」
アリス　：「……偉いわよ明香。怖いでしょうに、それを悟られないように振舞うなんて」
熊埜御堂 明香：「…わたしだけだったらともかく、今はお兄ちゃんとか鶴乃ちゃんもいるから…」
熊埜御堂 明香：「……アリスちゃんが言ってた「CS を利用しようとしてる人」って、この文章がうっかりじゃなかった場合…もしかして先輩も当てはまる…のかな」
アリス　：「さぁ…、私からは何とも言えないわね…」
熊埜御堂 明香：「うー…だよねぇ」

3.なんで妖怪辞典読んでるのお兄ちゃん
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんが頼りないよぉ…」
アリス　：「……あとでもらったバナナの皮でもぶつけてやりなさいな」（※おそらく最初は「バナバ」と書いていた）
熊埜御堂 明香：「バナバ」
アリス　：「……亜聡が頼りないせいで私まで噛んだじゃないのよもう…」（完全なるとばっちり）
熊埜御堂 明香：ｗｗｗｗｗ

・第７回　～明香＆アリス
1.御伽 雀の伝誦
熊埜御堂 明香：「……アリスちゃーん！」 何で自分ばっかり
アリス　：「ま、まぁ…。御伽 雀の方は半年前の内容だし、今もやろうとしてるとは限らないんじゃないかしらね…？」
熊埜御堂 明香：「うっ、うっ、わたしの伝誦にばっかり怖い内容が増えていくよう…」

2.双子の以心伝心
（**熊埜御堂 亜聡：**「なんかうまそうッスね」）
（**小波 絵本　：**「……いや、どの辺が……？」）

熊埜御堂 明香：「多分お兄ちゃんの事だからすじこを連想したとかだよきっと」
アリス　：「何でそうなるの」

（**熊埜御堂 亜聡：**「『すねこ』が『すじこ』っぽいなと思ったら、急にちらし寿司感感じて」）

熊埜御堂 明香：「ほら！」(ふんす)
アリス　：「ええ……」（困惑）

3.御伽兄妹の喧嘩の原因
熊埜御堂 明香：「……恋……」
アリス　：「人間らしい、と言える感情よね」
熊埜御堂 明香：「ううん…わたしはまだ全然よくわからないけど…」
熊埜御堂 明香：「でもきっと、置き換えるとわたしに直接お兄ちゃんを悪く言われたって感じだもんね…」
アリス　：「まぁ、好きな人の事を悪く言われたら普通 良い気分にはならないわよね」

・第８回　～明香＆アリス
1.兄が兄たる理由は妹にあり
アリス　：「なんだかんだ言って、亜聡はちゃんと兄らしい事してるわよね」
熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんはずっとお兄ちゃんだよ。昔からずっとそうだもん」
アリス　：「正直、最初は「この子（亜聡君）大丈夫か…？」と思ってたけど…。結構 頼りになるお兄ちゃんね。明香が信頼してるのも納得したわ」
熊埜御堂 明香：「えへへへへ～」(お兄ちゃんが褒められてとってもうれしい)
アリス　：「まぁ、それも全部 明香が亜聡を全面的に信頼してる姿勢を見せてくれたおかげなんだけどね」
アリス　：「あと、すっごくいじり甲斐…、いえ、絡み甲斐があるわね」（にこにこ）
熊埜御堂 明香：「ううん、見せたつもりはないんだけど……わたしはずっとお兄ちゃんにあんな感じだし、お兄ちゃんもそうだし…」
アリス　：「……ねぇ、明香。人間にとって一番難しいのは、「信じる」って事じゃないかと私は思うの。それが出来る貴女は、とても素晴らしい子よ。それを忘れないでね」
熊埜御堂 明香：「…うん、ありがとう」

・第９回　～明香＆アリス
1.兄は部屋を片付けました。
アリス　：「亜聡君が汚部屋で明香の作ったカニ玉もぐもぐし始めたら怒りでラビットホール起動させてたわ」
熊埜御堂 明香：「一回しか使えないのに！」
熊埜御堂 明香：「…その場合の怪異ってお兄ちゃんになるの…？」
アリス　：「怪異・汚部屋カニ玉男…で、良いわよね？」（にっこり）
熊埜御堂 明香：「ならなくてよかった:…！」

2.恥のない人生なんて

熊埜御堂 明香：「…いっぱい恥ずかしいところ見せちゃった気がする、今日…」

アリス　：「あら、人間らしいってそういう事じゃない！私はいいと思うわよ」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「え、えへへ…そうかなぁ…」

アリス　：「そうそう！恥のない人生なんて味気ないわよ。……例えば今日の亜聡からの無茶振りとかめちゃくちゃ焦った上にスルーで悲しかったわぁ…」

熊埜御堂 明香：「お、お兄ちゃんがごめんね…」

アリス　：「ああ、大丈夫よ！その分 いじり倒すつもりでいるから！」（にこにこ）

3.お泊り会の翌日

熊埜御堂 明香：「えへへ、こういう事が出来るならちょくちょく泊まっちゃおうかなぁ」

アリス　：「いいんじゃない？…部屋が片付くからドロシーも助かってるみたいだし」

熊埜御堂 明香：「ずっと部屋が汚いのは、心にも体にも悪いからね…」

アリス　：「しかもドロシーの場合、亜聡が散らかしたら自分で片付けられないしそのまま生活するしかない…。可哀想…」

熊埜御堂 明香：「…やっぱりちょくちょく泊まりに来よう！」

・第１０回　～明香＆アリス

1.雀との恋バナ

熊埜御堂 明香：「…恋って楽しいのかなぁ」

アリス　：「それは人それぞれ、かしらね。…御伽雀はとても楽しそうだったわね」

熊埜御堂 明香：「ふふっ、かわいかったねー」

熊埜御堂 明香：「……あっ」

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃんも好きな人とか、いるのかな…！」

アリス　：「ふふっ、確かに。……どうかしらね…？亜聡にそもそも恋愛感情があるかどうか…」

熊埜御堂 明香：「さ、さすがにあるでしょ！　……ないかも……」

アリス　：「何に置いてもまず「めんどくせー」が最初に来るものね…」

2.ほのぼの回にしては怪異多すぎ問題　～かわいいは正義

熊埜御堂 明香：「かわいいからいいんだよ～！」

アリス　：「可愛くて良かった～！」（にこにこ）

熊埜御堂 明香：「ちなみにどうしてそんな恰好になったの？」

アリス　：「顔は元々こんな感じだったわよ。衣裳は…、この方がお伽話のヒロインっぽいかなと思って」

熊埜御堂 明香：「自分で選んだんだ～！」きゃっきゃ

熊埜御堂 明香：「もっとおしゃれとかできるようになったら楽しいかも…アリスちゃんとわたしで双子コーデとか…」

熊埜御堂 明香：「ドロシーちゃんも巻き込んで三つ子コーデとか！」

アリス　：「あ～、着せ替え機能かぁ…。そういうのあったら楽しそうで良いわね～！」

熊埜御堂 明香：「……御伽先輩に相談したら一瞬で実装してくれそう…」

アリス　：「うっ…、そ、それはちょっと…」
熊埜御堂 明香：「…わたしも頑張って勉強しようかなぁ」

・第１１回　～明香＆アリス
1.女子会での昔話
熊埜御堂 明香：「昔のお兄ちゃんは結構べったりだったんだよ～。…まぁ、色々と大変な時期だったからだけど…」
アリス　：「へぇ…。そういう話もっと聞きたいわね～。とってもおもしろ…、いえ、癒されるわ！」（にまにま）
熊埜御堂 明香：「ふふ、じゃあ今度アリスちゃんと…ドロシーちゃんにも聞かせてあげるね！」
アリス　：「ふふっ、じゃあ今度は私達と３人で女子会しましょう！」（にこにこ）
熊埜御堂 明香：「うん、楽しみ！」
アリス　：（そして言葉巧みに亜聡君の恥ずかしいエピソードを聞き出すのであった…）
熊埜御堂 明香：(明香すぐに誘導されちゃいそうだから…)(止めてあげてくれドロシーちゃん)

2.女子勢はヨーグル６個買い
熊埜御堂 明香：「い、いつもはそんなに食べないもん！　本当だからね！」
アリス　：「ふふっ、たくさん食べたっていいじゃないの？」（にこにこ）
熊埜御堂 明香：「女の子はフクザツなの！」
アリス　：「ふふ、そうなのよね～。複雑で、楽しいのよね！」（にこにこ）

・第１２回　～明香＆アリス
1.クライマックスを前に…
アリス　：「今日の秘匿タブよ。今日もよろしくね。…いよいよクライマックスね…」
熊埜御堂 明香：「う、うん…緊張してきた…」
アリス　：「まぁ、そんなに気負う事ないわよ。いつも通りの明香でいなさい。ね？」
熊埜御堂 明香：「…うん、ありがとうアリスちゃん」
熊埜御堂 明香：「でも緊張するものは緊張するよ～～～～！」
アリス　：「ほらほら、深呼吸深呼吸～」
熊埜御堂 明香：「すぅー…はぁー……すぅー…はぁー…」
熊埜御堂 明香：「……がんばる！」
アリス　：「ふふ、その意気よ！」（にこにこ）
熊埜御堂 明香：「…そういえば鶴乃ちゃんは置いて行くことになっちゃうのかな…」
アリス　：「気になるなら連れて行くのは？彼女も無関係じゃないんだし、ドロシーも嫌とは言わないでしょう」
熊埜御堂 明香：「な、なるほど…とりあえず、二人にも相談してみないとだね」

2.握る手のあたたかさ
熊埜御堂 明香：「手をつなぐとほっこりするよね」
アリス　：「ふふっ、人の体温って安心するものね」（にこにこ）
熊埜御堂 明香：「うん、鶴乃ちゃんの手、あったかくて……」

熊埜御堂 明香：「…あったかいのになぁ」
アリス　：「……そうね…」

3.決断の後、最終戦闘直前
アリス　：「あ、そうだ…。次回 戦闘から再開だし、聞きたい事あったら今の内に聞いてくれて構わないわよ」
熊埜御堂 明香：「あ、えっと…じゃあラビットホールは宣言だけで使える感じ？」
熊埜御堂 明香：(ラビットホール起動します！だけで出来るか…判定は大丈夫かな？というか…)
アリス　：「そうね。自分の手番で宣言すれば入力ボックスが表示されて、文字入力ができるようになるわよ」
アリス　：「判定は必要ないわね。なんて入力するかを伝えてもらえればそれでいいわ」
熊埜御堂 明香：「…わかった！」
アリス　：「あと注意点だけど…、「名前」と「対象」が一致していないと起動・封印は出来ないからね」
熊埜御堂 明香：「…う、うん。…多分、大丈夫…だとは思うんだけど…」

・第１３回　～明香＆アリス
1.エンディング後…
熊埜御堂 明香：「いろいろあったけど、大事な思い出だから…やっぱり忘れたくないし、忘れないよ」
アリス　：「いいんじゃない？楽しかった事も、悲しかった事も抱えて生きていくのが人間なんだもの」
熊埜御堂 明香：「…何となく、アリスちゃんにそんな誤魔化された記憶あまりないような…？」
アリス　：「だって誤魔化しても明香は疑わなさそうだもの。ラビットホールの改造の時に焦らすので満足したわ～」（くすくす）
熊埜御堂 明香：「も、もう～…」
アリス　：「でも貴女のそういう素直な所が面白い出来事を引き起こしてるのよね。だから見ていて飽きないわ！ふふっ！」
熊埜御堂 明香：「……えへへ、ありがとう」
アリス　：「あ、そうそう…。これだけは言っておかないとね」
アリス　：「改めまして、これからもよろしくね。明香」
熊埜御堂 明香：「……うん！　よろしくね、アリスちゃん！」

▼おまけ　―――双子の秘匿チャット　亜聡＆ドロシー編

・第２回　～亜聡＆ドロシー

1.ドロシーとの秘匿チャット初会話

ドロシー　：『こっそり私に話しかけたい時は、ここで話しかけるといいよ』

熊埜御堂 亜聡：「ん？…おー、わかった」

ドロシー　：『ん。（こくり…）』

熊埜御堂 亜聡 ：「…そういえば。お前から、俺等のいる場所の視覚情報とかは見えてんのか？誰かと話してたら、それは聞こえるんだろうが。」

ドロシー　：『話し声なら聞こえる。けど、さすがに直接見せてもらえないとモノとかは見えない』

熊埜御堂 亜聡：「直接見せたら、見えるんだな。了解。」

ドロシー　：『うん。お願い』

2.妹はできたやつ

熊埜御堂 亜聡：「……」（照れてる妹を見つつ）

ドロシー　：『…妹さん、有能…』

熊埜御堂 亜聡：「おー。まぁ…、ああいうのはあいつの得意分野だろ」

熊埜御堂 亜聡：「俺と違って、できた奴だからな」

ドロシー　：『……そんな事、ないんじゃない…かな…』（目を逸らして）

熊埜御堂 亜聡：「そんなことあるんだよ。今朝見ただろ」（朝寝坊）

ドロシー　：『……明日から頑張れば…』

熊埜御堂 亜聡：「お前が声だせば、もしかしたら起きるかもな」

ドロシー　：『……無理なの分かってて言ってない…？』

熊埜御堂 亜聡：「進化して声出るようにはなんねーのか。そりゃ残念」

3.雁鳥 咲の話を聞いて…

熊埜御堂 亜聡：「しかし、怪物ときたか」

ドロシー　：『……やっぱり亜聡も、怪物は怖い…？』

熊埜御堂 亜聡：「……さぁ。見たことねーから分かんねーな」

熊埜御堂 亜聡：「ホラー映画とかのアレなら、どっちかっつーと冷めるタイプだからな」

ドロシー　：『…そうだね…。見た事ない物は、わからない。当たり前の事だよね』

熊埜御堂 亜聡：「おう」

熊埜御堂 亜聡：「本当にいんなら、その内お目にかかるかもな。そん時用に、反応はとっておくよ」

ドロシー　：『……うん。』（くすっ…）

熊埜御堂 亜聡：「何笑ってんだよ」

ドロシー　：『…なんていうのかな…。亜聡がどんな顔するのか、ちょっとだけ楽しみかもしれない』

熊埜御堂 亜聡：「はぁ？どういう趣味だよ」

熊埜御堂 亜聡：「ビビり散らかして泣くぐらいのオーバーリアクション期待されてるのか俺」

ドロシー　：『……それはそれで見たい、かも…』

熊埜御堂 亜聡：「やめろやめろ。期待はずれになるだけだぞ。リアクション芸は明香に頼め」

・第３回　～亜聡＆ドロシー

1.変態先輩初邂逅！

熊埜御堂 亜聡：「……」（引）

ドロシー　：『うわぁ……』（引）

熊埜御堂 亜聡：「っつーわけだ。知りたいこと調べてくれるらしいぞ」

ドロシー　：『……わ、わかった…。頑張ってみる…』

熊埜御堂 亜聡：「ん。…。いい子。」 画面の額らへんをすいっと指で撫でる

ドロシー　：『わわっ…』

熊埜御堂 亜聡：「嫌なことされたらすぐ言えよ」（お兄ちゃんモード）

ドロシー　：『……うん。ありがと…』（ふふっ）

2.変態先輩から返ってきた

熊埜御堂 亜聡：「あー…なんだ…。…本当にお疲れ。」

ドロシー　：『……ありがと…』（げっそり）

熊埜御堂 亜聡：「……。なんか、欲しいもんとかあるか？いや、渡せねーか…してほしいこととか」

ドロシー　：『……じゃあ、頭撫でて…』

熊埜御堂 亜聡：「それでいいのか。……ん」（なでなで）

ドロシー　：『……（ふぅ…）』（目を閉じて気持ち良さげに撫でられる）

熊埜御堂 亜聡：「……。（……もう一人、妹が増えたみてーだな…）」そのまましばらく撫でてる

・第４回　～亜聡＆ドロシー

1.大人に信用されない亜聡の話

ドロシー　：『……慣れてるの？』（こてん）

熊埜御堂 亜聡：「まーな。昔から言うこと聞かねぇクソガキだったからな、そりゃ当たりも強くなんだろ」

ドロシー　：『……辛くないの？』

熊埜御堂 亜聡：「別に。どうでもいい相手にどんな態度されようが、気にするだけ時間の無駄」

熊埜御堂 亜聡：「それに明香が、俺の分まで愛されてるからトントンだ」

ドロシー　：『……トントンなのかはわからないけど、亜聡が傷付いて無いならそれで良い…』

熊埜御堂 亜聡：「……別に」

熊埜御堂 亜聡：「明香が愛されていれば。笑っていれば、それでいい。」

2.ドロシーの好きなもの？

熊埜御堂 亜聡：「…そういえば、お前は何か、好きなものとかねーのか？」（甘いものを幸せそうに食べる明香ちゃんを思い出してたらふと思いついた）

ドロシー　：『……好きなもの…？』（こてん）

熊埜御堂 亜聡：「ん。」

ドロシー　：『（うーん……）……あ、』

ドロシー　：『……亜聡に頭撫でらるのは、好きかもしれない…』
熊埜御堂 亜聡：「……。」（きょとん）
熊埜御堂 亜聡：「……は。…お前、この前からそればっかかよ。」（はは、）
ドロシー　：『うん。なんだか落ち着く』
熊埜御堂 亜聡 ：「そーかよ。……ま、確かに。これで何度も落ち着かせてきたし、お前だって、妙に気持ちよさそうな顔するなとは思ってたよ。」
ドロシー　：『今まで頭を誰かに撫でてもらった事なんてなかったから、こんなに心地いい物だとは知らなかった』
熊埜御堂 亜聡：「…お前に、温度まで伝わってるかは知らねーけど。人の手のあたたかいのって、落ち着くよな」
熊埜御堂 亜聡：「手を握るのも頭をなでるのも。そうやってしばらくしてると、安心した顔するんだ。あいつも」
ドロシー　：『……だから明香も、亜聡に手を繋いでほしいって言ってたんだね』
熊埜御堂 亜聡：「そこにいるってわかるんだろうな。例え目が見えなかったり、息が詰まってたりしても。」
熊埜御堂 亜聡：「……あいつが元気で笑ってるなら、何でもいい。俺は、何でもいいんだ」
熊埜御堂 亜聡：「……ま。そーいうことだ。お前にもその内、そういうのが分かる機能がついたらいいな」
ドロシー　：『…そうなったらいいな…』（ふふっ）
熊埜御堂 亜聡：「そうなったら、手も繋いでやるよ」
ドロシー　：『うん。楽しみにしてる』（ふふっ）

・第６回　～亜聡＆ドロシー
1.探索終了…
熊埜御堂 亜聡：「いろいろ考えてたら疲れた」
ドロシー　：『情報量、凄かったもんね…。お疲れ様…』
熊埜御堂 亜聡：「帰って即寝してぇ…。けど、寝られる気分でもねーだろうからまためんどくせー」
ドロシー　：『……明香に「癒される写真とか送って」って送っておこうかな…』
熊埜御堂 亜聡：「実際何が送られてくんのかは気になるが、どうせろくなもんじゃねーぞ」
ドロシー　：『……ドラミングおじさんの画像とか…？』
熊埜御堂 亜聡：「あれを『癒し』に振り分けるんなら俺は明香を親父のとこまで連れてく」
熊埜御堂 亜聡：「泣くまで座禅」
ドロシー　：『癒しの欠片もない……』
熊埜御堂 亜聡：「……ドロシーに選ばせたら何になるんだろうな？」> 癒し画像
ドロシー　：『……（う～ん…）……あ、』
熊埜御堂 亜聡：「ん？」
ドロシー　：『明香が先輩に貰ったバナナ、食べてる所を撮って送ってもらう、とか……？』
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「もらってやらなくもない」（？）
ドロシー　：『やった……』（ぐっ）　（小さくガッツポーズ）

・第７回　～亜聡＆ドロシー
1.御伽 雀の話を聞いて…

熊埜御堂 亜聡：「……喧嘩した翌日に妹に事故で死なれる、か……」
熊埜御堂 亜聡：「……」（亜聡が何も慰める言葉が出ない理由）
ドロシー　：『……』

・第８回　～亜聡＆ドロシー
1.セッション開始前の思い出話
熊埜御堂 亜聡：「暑いなマジ。かき氷食いたい」
ドロシー　：『食べ過ぎてお腹壊さないようにね…』
熊埜御堂 亜聡：「……昔は、夏になると家で親父がかき氷かいてくれてな。クソ暑い炎天下、真っ白いただのかき氷に、いちご、めろん、ブルーハワイのシロップを置いて、さぁ好きなのかけろって選ばせてくれる会が毎年あったんだよ」
ドロシー　：『……それ、欲張りな子は全部掛けしちゃうやつ…』
熊埜御堂 亜聡：「お。なんだ、俺の話か？」
熊埜御堂 亜聡：「ただ、全部かけてたのは別に欲張りっつーアレじゃなくてだな。……メイなんかは、毎回嬉しそうにシロップ選んで……最終的にはいちごに落ち着いて、幸せそうにもしたんだが」
熊埜御堂 亜聡：「最終的にはアレ、全部同じ味なんだよな。」
ドロシー　：『色が違うだけ、らしいよね…。見た目につられて味覚が変わっちゃう人間って、面白いよね…』
熊埜御堂 亜聡：「メイが赤いの食ってる横で俺が青いの食ってると、「一口ちょうだい」っつって、スプーンでさらっていくんだけどよ。その後嬉しそうに「青いのもおいしい！」って、……当たり前なんだよ同じ味だ」
熊埜御堂 亜聡：「でも口に出したら絶対ブチギレられるから黙ってた」
ドロシー　：『妹の夢を壊さない、優しいお兄ちゃんだね…』
熊埜御堂 亜聡：「夏の思い出ってやつだな。はい、小話おわり。」

・第９回　～亜聡＆ドロシー
1.アリスの正体、ドロシーの正体を聞いて
熊埜御堂 亜聡：「だいぶいろんなもんが腑に落ちてきた」
ドロシー　：『……うん』
熊埜御堂 亜聡：「答え合わせに近いのかもしんねーけど、…分かってみると、綺麗な線になるもんだな」
熊埜御堂 亜聡：「…最後まで、お前と一緒にいられるのかね。俺らは。」
ドロシー　：『……わからない。けど…』
ドロシー　：『…亜聡と明香が、どんな決断を下したとしても……。私はそれを受け入れる。だから、しっかり悩んで、答えを出してね…』
熊埜御堂 亜聡：「……」
熊埜御堂 亜聡：「わかった」
熊埜御堂 亜聡：「…正直、お前とアリスの話で、「今までの話」はおおかたすとんと腑に落ちた感じがする。が、「この先」が、予想がついてない。わからない。」
熊埜御堂 亜聡：「…それもやっぱ、「見てみねーとわからねぇ」、よな」
ドロシー　：『うん…。未来の事は、私にもアリスにも…、そしてきっと『CS』の制作者にも…誰にもわからない』

熊埜御堂 亜聡：「だな。……せめて、誰も後悔することがなければ、いい。…なんて、甘いか。」
ドロシー　：『そうかもしれない…。……せめて、悲しむ人が居ないままで終わって欲しい…』
熊埜御堂 亜聡：「……」

・第１０回　～亜聡＆ドロシー
1.セッション終了後のお疲れ亜聡
熊埜御堂 亜聡：「…今日はあんま余裕なくて、あんまり話しかけられなかったな」
ドロシー　：『（ふるふる）…あの状況なら仕方ないから…、気にしないで…』
熊埜御堂 亜聡：「悪いな。……明香には言えなくてもお前になら言えるが、実際本気で余裕がなかった」
熊埜御堂 亜聡：「小波先輩との会話も、輝夜先輩との会話も、その後も、ずっと余裕がなかった」
ドロシー　：『……少しでも下手な事を言えば、明香まで危なくなる…。だから…、明香を守ろうと必死だったんでしょ…？』
熊埜御堂 亜聡：「……。明香だけだと思ったか？あの状況であの返答してた俺を見て。」
熊埜御堂 亜聡：「お前もだぞ。ドロシー。…そうできたかは分からない、が、お前も守ろうとしてた」
ドロシー　：『……うん…。亜聡…』
ドロシー　：『……ありがとう。』
熊埜御堂 亜聡：「……実際守り切れてたか分からねぇから、感謝されても、あんまり実感わかねぇな。気持ちだけもらっとく。」
熊埜御堂 亜聡：「…輝夜先輩がお前狙いなら、…もうしばらく、お前のことは慎重に守る」
ドロシー　：『……うん。ありがとう…』（にこ…）

・第１１回　～亜聡＆ドロシー
1.セッション開始前にアイスを食べた話
熊埜御堂 亜聡：「最近クソ暑いな」
ドロシー　：『熱中症には気を付けてね…』
熊埜御堂 亜聡：「外に出たくねー。永遠にエアコンの効いた室内でアイス食ってたい」
ドロシー　：『お腹壊さない程度にしてね…』
熊埜御堂 亜聡：「おー。」（ドロシーちゃんに宣言した後に本当にアイスが食べたくなって、冷凍庫からサ○レを持ってきた）
熊埜御堂 亜聡：「……明香も食うかな、サクレ」 しゃりしゃり
ドロシー　：『ちゃんと明香の分も用意してる…。さすがお兄ちゃん…』
熊埜御堂 亜聡：「すぐ「ずるい」っつーからなあいつ。……なぁドロシー、CS 経由(?)でこれ（サクレ）、アリスに届けてくれねーか？」（？？？）
ドロシー　：『ごめん、それは無理…』（ふるふる）
熊埜御堂 亜聡：「ちっ」

・第１２回　～亜聡＆ドロシー

1.クライマックスを前に…

ドロシー　：『今日の秘匿タブ。今日もよろしく…。…いよいよクライマックス、だね…』

熊埜御堂 亜聡：「おう、今日もよろしくな。やっとお前の話を直接聞けそうだな」

ドロシー　：『うん…。…楽しい話じゃないのが申し訳ないけど…』

熊埜御堂 亜聡：「別に。お前が申し訳なく思う必要ねーよ」

熊埜御堂 亜聡：「お前がいてくれたおかげで、いろんなもんを見て知ってここまで来られたんだ。そんで、ここまで来たからには、最後まで付き合うよ」

ドロシー　：『うん…。私も…、亜聡がいてくれたおかげで、ヒトの事をたくさん知る事ができた。…人間って、いいね…』（にこ…）

熊埜御堂 亜聡：「ドロシー……」

熊埜御堂 亜聡：「……せっかくそう言ってくれたところでこういうのも何だが、呼び出された先が俺相手っつー意味も含めその感想でよかったのか？？」

熊埜御堂 亜聡：（汚部屋）（めんどくせー連呼）（汚部屋）

ドロシー　：『うん。亜聡が私のパートナーでよかった。……お部屋の事は、除いて、だけど…』（ふふっ…）

熊埜御堂 亜聡：「、ぐ。……」（不意打ちだった）（今まで人に言われ慣れてない社会１の男）

熊埜御堂 亜聡：「……そ、そーかよ。それなら良かった。そんなら部屋も許してくれってことで」（ぷい）

ドロシー　：『…ふふっ…。お部屋はダメ。ちゃんと片付けないとね』（くすくす…）

熊埜御堂 亜聡：「……考えといてやるよ」

ドロシー　：『ふふっ…、うん。』（くすくす…）

2.決断の後、最終戦闘直前

熊埜御堂 亜聡：「……よかったよ。俺はお前を守れそうだ、それこそ死ぬ気でな」

ドロシー　：『……本当に死ぬのはやめてね…？私…、亜聡まで無垢なる死者にはしたくない…』

熊埜御堂 亜聡：「そりゃ死にたくねーけどよ。……でも、」

熊埜御堂 亜聡：「お前らを守るために命が使えんなら、…それも悪くはねーなって思うところはある。明香は怒るだろうから、言えねーけどな」

ドロシー　：『……生きて帰ってね…。私、亜聡と明香にはちゃんと生きて家に帰って欲しい…』

熊埜御堂 亜聡：「ん。…わかってる」

熊埜御堂 亜聡：「お前を実家の親父にも会わせねーといけないしな」

ドロシー　：『うん…。約束、覚えててくれてありがとう…』（にこ…）

熊埜御堂 亜聡：「ん。だから、お前も生きて帰るんだぞ」

ドロシー　：『うん…』（にこ…）

・第１３回　～亜聡＆ドロシー

1.決断の後、最終戦闘直前

ドロシー　：『今日の秘匿タブ。いよいよ最終回だね…』

熊埜御堂 亜聡：「最後か。よろしくな、ドロシー」（よろしくお願いします！！）

ドロシー　：『うん。亜聡も今回は頑張り所だから、頑張ってね…』

熊埜御堂 亜聡：「そうなのか？…ただこの場面、俺は誰からも眼中に入れられてねーような気がするんだよな…

何かできるのかね」

熊埜御堂 亜聡：「しいて言えば自分がメンタル折れねーように祈っとくぐらいか」

熊埜御堂 亜聡：「……小波先輩を抑えるか、輝夜先輩を抑えるか…。輝夜先輩は、俺の妹がどうにかしてくれるだろうしな」

ドロシー　：『明香はある程度やる事が決まってるけど、亜聡は自由に動ける分選択肢も多いから…』

熊埜御堂 亜聡：「今のところ考えてるのは、真っ先に狙われてるであろうお前…っつーかワスレモノを守ることなんだが」

熊埜御堂 亜聡：（……エモクロアって庇う判定ありましたっけ…）

ドロシー　：（庇うのは出来るはず…）（確認しますのでお待ちください…）

熊埜御堂 亜聡：（ありがとうございます…すみません！）（ルルブ読んでても見つけられなかった…）

熊埜御堂 亜聡：「庇えるんなら、お前が狙われても明香が狙われても最悪盾になれっから」

ドロシー　：『…死なない程度にしといてね…』

熊埜御堂 亜聡：「おう。変にやり過ぎてもメイにブチ切れられるだろうし」

2.エンディング後…

熊埜御堂 亜聡：「お前もお疲れ様。ドロシー」

ドロシー　：『うん。亜聡もお疲れ様。無事に帰ってくれて、本当に良かった…』

熊埜御堂 亜聡：「お前も無事でよかったと思ってる。……いなくなる詐欺したのだけは解せなかったが」

熊埜御堂 亜聡：「ま、これからも話せるならそれでいいか」

ドロシー　：『ふふっ…、あの時は紛らわしい事言ってごめんね…』

熊埜御堂 亜聡：「わざとだっただろ、どうせ」（じとー）

ドロシー　：『ふふっ…、どうだろうね…？』（くすくす…）

熊埜御堂 亜聡：「はぐらかしてきやがって」（むすー）（拗ね）

熊埜御堂 亜聡：「……詫びに土日は昼まで起こすなよ」

ドロシー　：『お休みの日なら、仕方ないね…。明香に頼まれないか限り静かにしてるよ…』

▼おまけ　―――キャラメイク＆キャラ茶番＆PL 会議編

2022/4/22 ～どんなキャラクターにしようかな①

ごまゆきみ：（そう言えば、前々から言ってた「オトギバラシ」の方が大半準備終わったのでよろしければ 5 月中旬くらいを目安にお誘いしてもいいですか…？）（お時間があれば出構いませんので…！）
pokoya：(おお、是非！)
Lily：（おおお！？ま、待ってました～～～！）（是非とも！！）
Lily：（ひっそりと正座待機しておりました…）
ごまゆきみ：（やった！ありがとうございます！）
ごまゆきみ：（ささっとセッションページだけでも作って参ります…！）
Lily：（わーいありがとうございます！）
pokoya：(ありがとうございます…！)

pokoya：(あ、セッションページ作成ありがとうございます…！)(ネムカル探索者のコンバートは不可との事ですが、血縁だったり何某だったりは可能でしょうか？)
Lily：（セッションページ作成ありがとうございます！）（お受けいたしました！）
ごまゆきみ：（こちらこそご参加ありがとうございます！）
ごまゆきみ：（本人でなければ OK です。よってご兄弟などの設定は OK です！）
pokoya：(了解です、ありがとうございます！)(寿限無いとことかありかなぁと思って…)
ごまゆきみ：（いとこさんかぁ…！）（どんな子なのかな…）
Lily：（どんな子なんだろう…）
pokoya：(まぁ変わるかもしれないし…)
ごまゆきみ：（GW 終わってからのスタートで考えてますので、じっくり考えて下さいませ…！）
Lily：（はーい！）（自分もどんな子にしようかな…今までの誰かと血縁も楽しいし、なんなら(許可いただけるなら)pokoya さん側の PC とつながりがあっても楽しいし…）
pokoya：(……双子とか…？)
ごまゆきみ：（もちろん PC 同士がきょうだいという設定でも大丈夫です！）
Lily：（双子とか…異母兄弟とか…それこそ従姉妹とか…）（適当言うとりますが）
pokoya：(いとこだったら Lily さん側 PC が寿限無の血縁者とかに…)(でも滅茶苦茶楽しそう…)
ごまゆきみ：（あ、ちなみに個別パートの時は別々のお部屋にいる事になりますので）（さすがに高校生なら個室があるでしょうし）
Lily：（了解です！）（まぁ変わるかもしれないし…血縁云々ももちろん許可いただければの話なので）
pokoya：(自分は全然かまわないので…！)
Lily：（ありがとうございます！）（身内推奨でもないシナリオに身内同士で乗り込むの楽しそうだなって…）
pokoya：(わかる…)
pokoya：(すべて～の時に連れて行った蘭田くんとかもいいかなぁ、と思ったのですが★霊感非推奨らしいので…)
ごまゆきみ：（霊感が非推奨なのは、ぶっちゃけ取得しても技能 P の無駄遣いになりかねないからなんですよね…）

Lily：（推奨技能は、2PC がどちらも持っていた方が良さそうな感じですか？それとも 2 人の内どちらかがあればOK でしょうか？）
ごまゆきみ：（2 人の内どちらか、で大丈夫です！）
Lily：（ありがとうございます、了解です！）
pokoya：(ありがとうございます、了解致しました！)
pokoya：(…データ系キャラって感じだな…)
Lily：（おお、さっそく構想が…？）（わくわく）
ごまゆきみ：（おお…！）（わくわく）
pokoya：(まだ迷い中ですが…！)
Lily：（電脳や暗号と紐づきそうですね…）
pokoya：(とりあえず運勢だけ振っちゃお…)
ごまゆきみ：（電脳と暗号ってのがミステリー研究部っぽくていいですね！）
Lily：（あ、では我も我も～）＞運勢

pokoya：1d6
DiceBot：(1D6) → 1
Lily：1d6
DiceBot：(1D6) → 3

pokoya：ｱｯ
Lily：ｱｯ
ごまゆきみ：ｱｯ
ごまゆきみ：に、2 回まで振り直し OK にしましょう！！
pokoya：ありがとうございます…！

pokoya：1d6
DiceBot：(1D6) → 1

pokoya：oh
Lily：ええ…
pokoya：最後…

pokoya：1d6
DiceBot：(1D6) → 2

pokoya：上がりはしたけども！
ごまゆきみ：アンラッキーがここまで伝播してる…
Lily：もしかしてギャレットさんですか…？
pokoya：(ギャレットでは)ないです
Lily：（あ、自分も振り直します…）（こっそり）

Lily : 1d6
DiceBot : (1D6) → 3
Lily : 1d6
DiceBot : (1D6) → 3

Lily : ……うん！
pokoya : 草
ごまゆきみ : 綺麗な出目ですね…
Lily : スロットなら揃ってた
pokoya : やっぱ兄弟か何かしらの血縁じゃないか？
Lily : ｗｗｗｗ 運勢から血統を感じるのおもしろすぎますね…ｗｗやっぱりそうしていいですか？
pokoya : ｗｗｗ　いいですよ！
ごまゆきみ : ｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
Lily : ありがとうございます！ｗｗｗｗ
pokoya : だとすると寿限無との血縁関係はどうしようかな…
Lily : そちらはお任せしますとも…！（寿限無君の血縁だとしたら、きっと遠い従姉妹とかになる）
ごまゆきみ : （寿限無君は幸運つよつよでしたもんね…）

pokoya : choice[きょうだい(実),きょうだい(義理),いとこ,はとこ]
DiceBot : (choice[きょうだい(実),きょうだい(義理),いとこ,はとこ]) → きょうだい(実)

pokoya : (あ、でも兄弟だと年齢一緒になっちゃうな…)
Lily : （きょうだい！）（あ、でもそうですね…あちらも高１）
pokoya : (やっぱ義理にしよう、熊埜御堂家の養子…)
Lily : （養子…！？）
ごまゆきみ : （あ、寿限無君との年齢差についてはあまり気にしなくてもいいかもです）
pokoya : (おっと)
Lily : （おっと）
ごまゆきみ : （あまり詳しくは言えませんが…、ネムカルのシナリオが終わった後の世界なので…）
pokoya : (ふむむ…)
Lily : （ほほー…）
Lily : （…もし養子の子でしたら、複雑な家庭環境と推察するのでこちらは異母(父)兄弟とかにするかも…）
pokoya : (複雑な家庭環境で昔は微妙な仲だったのを引き取られてからあったかい家庭に触れて仲良くなった…？)
Lily : （いいですね…！）（もしくは、養子で引き取られる前は一切会うことすらできなかったけど、養子として引き取られてからは両親のしがらみがなくなって仲良くできるようになったとか）
Lily : （こっちは別居 ver ですね）
pokoya : (個人的には昔は微妙な仲だったの方が好きではある…)(別居 ver も捨てがたい…)
Lily : （では同居 ver にしましょうか！）（２人とも熊埜御堂になる）

Lily : （一緒に住むなら普通に双子でもいいかもですけどね）
ごまゆきみ : （いつの間にか複雑な家庭の事情が出来上がってる…！）
pokoya : (複雑な設定取っ払うなら両親が亡くなって旧友に引き取られて…とかでも良さそうですね)
Lily : （キャラの構想すら立ってないのに設定から埋めるスタイル） （シンプルでわかりやすいですね！）
pokoya : (設定が生えたらキャラも生えるから…)
ごまゆきみ : （あ、あとお 2 人に朗報（？）です）
ごまゆきみ : （オトギバラシももすいさんシナリオらしく、可愛い女の子がいっぱい出てきます）
Lily : （わーい！）
pokoya : (わぁい)
Lily : （でもネームレスカルトのかわいい女の子たち、だいたい発狂してるか死んでしまいましたけども…）
Lily : （小声）
pokoya : (それかデータ上の存在か…)
ごまゆきみ : （オトギバラシではどうなる事でしょうね…）
Lily : （怖い…） （前科（？）があるから展開が読めないな…楽しみ）
pokoya : (男にしようか女の子にしようかまた悩むな…)
ごまゆきみ : （あ、じゃあちょこっとだけミステリー研究部の情報もお伝えしましょうか？） （性別決めるのに役に立つかもなので…）
pokoya : (おお、よろしいのですか？　お願いします…！)
Lily : （お願いします！）
ごまゆきみ :【ミステリー研究部の前情報】
・部員は PC2 人を含め 3 人
・部長は男。ちょいウザい系
pokoya : (女の子でいこうかな)(決断)
Lily : （思ったより部員少ない！）
Lily : （どうしようかなー…悩み中ですが、こちらは男で行くかも）
pokoya : (男女の双子か…いいですね…)
ごまゆきみ : （男女の双子は楽しいですよね…！） （アリテレの双子も楽しかった…）
Lily : （性格全然違っても楽しいし、いいですよね…） （もちろん女女の双子も好きです（ドン））
ごまゆきみ : （かわいい女の子の双子で部長をいじっていいのよ…？）
Lily : （部長はーれむ） （悩む……！）
pokoya : (部長はーれむ…)
ごまゆきみ : （まあ部長シナリオ始まってもしばらく出てこないんですけどね…）
pokoya : (ｗｗｗｗｗ)
Lily : （部長なのに！？）
ごまゆきみ : （変人奇人の部類に入る人だからなぁ…）
Lily : （あ、行方不明とかじゃなくて自主的にいないやつだなこれ…） （察し）
pokoya : (三人しかいないんだぞ部活来いよ)
ごまゆきみ : （ｗｗｗｗｗｗ） （まぁ部長がいなくても部室はうるさいので…ｗｗｗ）
pokoya : (不法侵入者がいるな…)
Lily : （どういうことなの…）

Lily : （…完全に自分の趣味なんですけど、双子、もし Ok であればですがやっぱり別居させてもいいですか？）（こちらは一人暮らしとかにしたいなと）
pokoya : (いいですよ！)(ならこっちは養父養母義兄弟好き好きすぎて離れられなかったんだ…)
Lily : （いつも一緒の双子ちゃんも好きなんですけど、なんていうか、「普段は離れていても心は一緒」とか「似てる」みたいなのが好きで…）（という個人趣味）
ごまゆきみ : （藍蝶君か…？） ＜家族好き好き
pokoya : (ｗｗｗｗｗ)
Lily : （ｗｗｗｗ）
pokoya : (まぁ、知力魅力社会性を高めにしたので藍蝶よりは妹属性というか…)
pokoya : (あ、これオタサーの姫だな…？)(振った能力値を見ながら)
ごまゆきみ : ＞＞オタサーの姫＜＜
Lily : オタサーの姫
pokoya : (暗号と電脳と検索取って魅了も取ったら…そうだなって…)
ごまゆきみ : （……灰原哀…？）
Lily : 灰原哀はオタサーの姫だった…？
pokoya : ｗｗｗｗｗｗ
pokoya : https://emoklore.charasheet.jp/view/200362 とりあえず技能値やら感情やらだけ…
ごまゆきみ : （ありがとうございます！拝見させて頂きます…！）
Lily : （おお、後半高めだ！）
pokoya : (お兄ちゃんから処世術を習いました)
ごまゆきみ : （おお…、これはミス研部員らしい…！）
Lily : （大丈夫ですかお兄ちゃん無気力系男子になりつつありますが）（まだ構想中）
pokoya : (習ったのはもう一人のお兄ちゃん(お姉ちゃん)からだし…)(無気力系男子&甘えん坊女子の双子！！？？性癖です！！！)
Lily : （なるほど…）（ｗｗｗｗｗ）
Lily : https://emoklore.charasheet.jp/view/200364 まだ全然振れてませんが、素体だけ（変わるかもしれません）
ごまゆきみ : （おおっと）（拝見させて頂きます！）
pokoya : (おお、メンタル強い…)
Lily : （直感を高めるにはメンタルが必要で…）（社会性を捨ててるのはきっと態度のせい）
ごまゆきみ : （つよつよメンタルだ…）（そしてこちらも立派にミス研部員…）
pokoya : (だから妹の社会性が育ったんだな…)(フォロー)
ごまゆきみ : （フロイド先輩とかそうですもんね…） ＜直感高めるために社会性捨ててる
Lily : （ｗｗｗｗ）（制服くらいちゃんと着て！ってかわいい妹ちゃんに怒られたい）
pokoya : (一人暮らしの家まで朝迎えに行くんだ…)
Lily : （いい子か？？）（かわいい女の子に毎朝迎えに来られる男、さぞかし周りに妬まれるだろうなぁ…）
ごまゆきみ : （お兄ちゃんを叩き起こす役割はしてくれる人が多分他にも出てくるから…）
Lily : （えっ誰…）（他の女か？）
pokoya : (お兄ちゃん誰よその女！)
Lily : （知らねぇよ）

ごまゆきみ：（ｗｗｗｗｗｗｗｗｗ）（全てはシナリオが始まってからのお楽しみで…ｗ）
pokoya：(楽しみだ…)(妹の髪型をツインテにするかふわふわロングヘアにするかで悩みながら)
Lily：（楽しみ……）（妹ちゃんの引き立て役の社会性０兄貴やりたい～～～～～）
ごまゆきみ：（どんな双子ちゃんに仕上がるのか楽しみです…！）
Lily：（それはそれとして「兄ちゃんに任せとけ」ってどっかで言いたい～～～～～）（でもこの台詞言うと６章になっちゃう）
pokoya：(まさかの接続)(イデア氏に妹ちゃん見せたら「"姫"だ……」って一瞬で見抜きそう)
ごまゆきみ：（あ、お２人とも技能は特に問題ないのでキャラシを一旦受理させて頂きます！）
pokoya：(ありがとうございます！　変更等ありましたらまた連絡致します！)
Lily：（ありがとうございます！）（技能振り切れてないので、そちらも追記したらまたご連絡します！）
pokoya：(名前とかも一旦保留にしとこ…)(双子なら…合わせたいから…)
Lily：（自分も名前は一旦保留…）（漢字とか…もしくは読みとか…合わせたいですね…）
ごまゆきみ：（はーい！）（セッション開始まで変更受け付けますので、詳しい設定などたくさん練って下さいませ！）

2022/4/23 ～どんなキャラクターにしようかな②＋初 RP

pokoya：今はエモクロア PC の設定とかつらつら考えてました…
Lily：おお！もう一度キャラシ URL 開いちゃおう…
Lily：（あ、少し増えてる…！）（ブロッコリーきゃわ）
pokoya：(食べる森だと思ってるやつ…)
pokoya：(細かいところはすり合わせとかしつつ…とか思いつつ、大まかにこんな子で行く予定です…)
Lily：（社交に長けてて電脳・暗号もしっかり高くて頼りになるなぁ…了解です！）（自分もすり合わせつつ作ろうっと）
Lily：（技能も少しずつ変わってますね…！）（よし、こっちは社交が関わりそうな技能全カットでいいなこれ）
pokoya：(何か技能少ないな…?と思って色々いじってました)
Lily：（技能のレベルを３にすると一気にポイント持っていかれますからね…）
pokoya：(あんまり高すぎると高校生っぽさもなくなっちゃうし…)
Lily：（確かに…）（なので自分は昨日つらつらと書いていたイメージだけメモに、「社会不適合者」的なことを書いたりしてました）
pokoya：(読んでました…)(かなり妹好きにきゅんときた)
Lily：（表向きはちょっと邪険にしちゃうかもしれませんが…）（その実「俺の妹が可愛い？知ってる。」とか言うタイプ…のイメージ）
pokoya：(ひゅう…)(妹ちゃんはお兄ちゃんお兄ちゃん言うタイプだろうな…)
Lily：（えええかわいいよおおお…）（朝起こしに来てほしいよぉ…）
pokoya：(学校がどこ舞台なのか分からないけど、実家からお兄ちゃん家寄って一緒に学校行く感じ…)
pokoya：(天築外だったら、家族離れ出来なくてわざわざ遠方から電車乗って通ってそうだな…)
Lily：（なるほど…家族愛かわいい）（もしそうなら逆にお兄ちゃんは学校から徒歩５分とかの場所に住んでそう）

pokoya : (実家からじゃ遠いだろーがって言われたけど嫌々ってしたんだ…)
Lily : （かわいい…！！）（寿限無君にも可愛がられてたんだろうなぁ）
pokoya : (まぁその寿限無も反抗期で家出て一人暮らししてましたが…)
Lily : （養子に来た時期にもよるでしょうが、家出るときかなりしょぼ…ってしてそう）

Lily : （あ、そういえば名前とか何か考えました？）（あとは外見とか…）
pokoya : (名前はどうしよっかな～～～～と悩んでました…外見は…ツインテかふわふわロングヘアかどっちがいいかなぁって…)
pokoya : (今回はぴくるーさんに頼りたい気分)
Lily : （昨日も言っていましたが、何かしら名前に共通点もたせたいな…と思って）（外見は、髪色か目の色か、合わせられたら合わせようかな～と）
Lily : （男女の双子なので似てなくても全然…）
pokoya : (自分もそう思ってました…)
pokoya : http://naming.nobody.jp/category/tsui.html こういうのずっとみてた
Lily : （対になる系いいですね！）（もしくは逆に、全く同じ漢字使うのもありだし…読みを近づけるのもありだし…）
pokoya : http://naming.nobody.jp/category/set.html 一セット版もありましたね
Lily : （ほえーすごい…）（２人で一つの言葉に…）
pokoya : (聡・明とかめっちゃ良さそう…)
Lily : （かっこいいな…２人そろえば最強感ある）
pokoya : (…明香ちゃんかわいいな…)
Lily : （サイトの読みだと「はるか」ちゃんか…かわいい）
pokoya : (普通に「めいか」でもいけるっぽい)(……聡い兄と明るい妹、どうですか…？)
Lily : （読みは全然変えられる…個人的には「めいか」好きだし…）（それでいきましょうか！）
pokoya : (わーい！)
pokoya : (はるかだと某松風と被るんで「めいか」にしちゃおっかな…)
Lily : （めいかちゃんかわいい…！）（めーちゃんとかめいとかいろんなあだ名で呼ばれてそう）
pokoya : (なんとなく出来たイメージも貼り付けてみる)(…髪の毛ツインテの方がいいかなぁ、どうしようかなぁ)
Lily : （ふわふわかわいい～～～）
pokoya : (イメージが「オタサーの姫(無自覚)」で固まっちゃったからふわふわの方がイメージ的には合うんだよな個人的に…)
Lily : （ふわふわかわいいと思いますよ…！）（こっちもストレートよりはくせっ毛にしようっと）

pokoya : (…今更だけどこの双子、兄のルーツが「庇護」で妹のルーツが「不安」なの最高では…？)
pokoya : (寿限無父が二人とも引き取る！って決める前に別々の児童養護施設入れられた経験ありそうだし、何なら別のところから双子は無理だから片方だけ引き取るみたいな話浮かんだ事ありそう)(闇)
Lily : （闇～～～～そういうの好きです）（お兄ちゃん、ちやほやされるぐらい人気者な妹に少し邪険な態度も取るけど、その実誰よりも大事にしてる感じだったから…）
pokoya : (本来のご両親は…事故で…？)
Lily : choice[事故で,事件で,自殺で]

DiceBot：(choice[事故で,事件で,自殺で]) → 自殺で
Lily：（あっやべ）（闇引いた）
pokoya：(はわわ…)(…え、無理心中で子供だけ生き残った…？)(最悪)
Lily：（ひええ……！）（もとの家がやばい家）
Lily：（そりゃ新しい家族から離れたくなくなるよ…！）
pokoya：(寿限無父の友人…とかってわけじゃなさそうだな…)(個人的に相談受けてたとか…？)
Lily：（かもしれない…）（あとは、別々に預けられた児童養護施設の偉い人と友達だったかもしれない…とか）
pokoya：(闇が深い…)(そんな状態の双子と突然きょうだいになった寿限無)
Lily：（…寿限無君、技能に「精神分析」あったよね）（それで宥めて受け入れて、みたいな経緯もあったのかも）
pokoya：(寿限無の左右に引っ付いてる双子…)
Lily：（かわい…）（家出るときギャン泣きしちゃいそうめいかちゃん）
pokoya：(「なんでぇえええええええ」ってびゃーってなってそう)

妹　：「なんでぇえええええええ」
兄　：「兄貴困ってんだろ」
妹　：「だっでぇえええええええ」
寿限無：「ああもう、定期的に帰ってきますから。そんなに泣くと目ぇ腫れちゃいますよ」
兄：「兄貴もこう言ってる。不細工になっても知らねぇぞ」
妹：「いいもん…不細工になってもいいもん…お姉ちゃんに行ってほしくないだけだもん…」
兄：「あっそ。じゃあな兄貴。倒れんなよ」（塩）
寿限無：「そっちも体調崩したりしないように」
妹　：「うわぁあああああん」
兄　：…　（そして寿限無君が行ってしまった後、ぐすぐすしてる明香ちゃんにタオル巻いた保冷剤を乗っけるお兄ちゃん）
妹　：「普通に慰めてよぉお…」
兄　：「わざわざ冷凍庫から持ってきてやっただろ。…別に会えないわけじゃねぇじゃねーか」
妹　：「…会えなくなる可能性だってあるじゃん…」
兄　：「そんなの、常に一緒にいようがいまいが、同じだろ」
兄　：「…。そんなに兄貴が信じられねーか？」
妹　：「…違うけどぉ…」
兄　：「だろ。兄貴は、約束を破るような奴か？」
妹　：「…破らない…」
兄　：「知ってんじゃねぇか。だったらほっとけば顔出すだろ。…俺は嘘をつくような奴か？」
妹　：「…時々吐く…」
兄　：「そこはうまい具合に流されろよ」（保冷剤で頭ごんっ）
妹　：「あいたっ！　ひどい～～～～！」
兄　：「うるせーうるせー」
妹　：「う～～～～……ねぇねぇ、お姉ちゃん恋人とか作るかな？」

兄　：「はぁ？……さぁ、作りたきゃ作るんじゃねーの」
妹　：「どんな人だと思う？」
兄　：「いや知らな…、…はぁぁ」
兄　：「……どんな兄貴でも許せる、っつーか。そういうもんだと普通に受け入れるタイプとか、相性いいんじゃねーの」
妹　：「…そっかぁ。…その人にどんな欠点があっても、お姉ちゃんはそういうのがいいのかなぁ」
兄　：「兄貴が気にするレベルの欠点って相当だろ。そんなもんより、兄貴が寄ろうが離れようが、相手が離れようとしねぇぐらいの方が向きそうだ」
妹　：「……うううううう～～～～」
妹　：「……お兄ちゃんはしばらく彼女作らないで……」
兄　：「んな物好きいねーよ」
妹　：「いるかもじゃん！！！！！」)
兄　：「うわっ叫ぶな馬鹿。わかったわかった気が向いたらな」
妹　：「うううう～～～～」)(さびしいからまだ彼女とか作ってほしくない)
兄　：「想像でぐずるなよ…。……お前は予定あんのかよ」（恋人）
妹　：「え、ないよ？　だって私そんなに男の子にモテないし…」
兄　：「は？？？？？」（心からの声）
妹　：「え？」
兄　：「…いや、……いや。…別に俺相手にそういうのいらねーだろ。お前、よく男と喋ってんじゃねーか」（クラスメイト）
妹　：「もー、やだなー。あれはただの友達だよー。向こうも多分、私の事そんな風には見てないって！」
兄　：「いやおもっくそデレデレされてたじゃねーか。お前が重いもん運んでると大体誰かしらが奪っていってるだろーが。」
妹　：「きっとみんな先生に褒められたいんだよ！　それにああいうのって内申点に影響あるって誰かが言ってた！」
兄　：「どう考えても、上げたいのはお前の中の内申点だよ。……いや、マジか」
兄　：「……ちなみにその、お前がよく話す奴らの中で、気になるやつもいないってことか？」
妹　：「うん？　うーん、そうだなぁ……」
妹　：「…今のところは特に？　お姉ちゃんの方がよっぽどかっこいいかも、っていうか」
兄　：「はー。そーかよ。……」
兄　：「もしお前が気のない男に、２人で出かけるの誘われたりしたら即言えよ」
妹　：「？　…あっ、もしかして一緒にお出かけしたいの？　いいよ、その時はちゃんとお兄ちゃんにも声かけてあげる！」
兄　：「おーいいな。３人で行こうぜ」

pokoya : (過保護お兄ちゃん…！！)
Lily : （立派なブラコン兄じゃん）（普段学校もサボるような無気力兄が急にお出かけすると言い出す時点でかなり）

pokoya : (はっ、そしてお名前と顔が…)(亜聡くん！)

Lily : （しれっと…）（顔はまだ髪型変えるかもですが…！）
pokoya : (ひょあ…かっこいいお兄ちゃん…)
Lily : （クセっ毛＋切るのがめんどくさくて伸びた イメージ）（決してお洒落ヘアではない）
pokoya : (明香の方はちゃんとお洒落でしてそう)(真反対な双子いいな～)
Lily : （正反対いいですよね…）（でもふとしたときに表情が似てたりとかするんだ…）
pokoya : (目の色が水色なのいいな…)(明香も緑から変えちゃおうかな…)
Lily : （そうなんですよ、メーカーさんが緑が…なくて…！）（泣く泣く近そうな色に）
pokoya : (水色もかわいい…)
Lily : （ちょっと前髪だけ変更）（目は水色、紫、濃ピンクぐらいしか彩色高いのが無かった）
pokoya : (水色に変えてみた)(こっちもかわいいなこのメーカーさん…)
Lily : （水色瞳の明香ちゃんもかわいい！！？！）（お人形さんじゃんもう！！）
pokoya : (我ながらすごくかわいくできてしまった…)
Lily : （これは人気者だしモテモテですよ…）（めちゃモテしててほしい）
pokoya : (でもみんなおともだち判定なんだ…)(ずるいなこんちくしょう)
Lily : （お兄ちゃんからちょくちょく「お前マジか」って言われるけど、意味は分かってないんだ…）

2022/5/12 ～オトギバラシ準備会

pokoya : こっそりこんばんは～…
DL : おっと、こんばんは～！
pokoya : コマの準備でお邪魔しました…！　爽やかな色合いのお部屋だ…
DL : ネムカルとは対照的な色合いだな…と準備してて思いました…
pokoya : 確かに…
Lily : こんばんは～、お邪魔します！
DL : こんばんは～！
pokoya : こんばんは～
Lily : お部屋が完成されたとのことで拝見しに…　かわいいお部屋ですね…！
DL : ありがとうございます…！

～双子の立ち絵お披露目会
（熊埜御堂 明香の立ち絵お披露目）
DL：そして明香ちゃんかわいい…！
熊埜御堂 明香：双子の社交的な方
（熊埜御堂 亜聡の立ち絵お披露目）
DL：お兄ちゃんイケメン…
熊埜御堂 明香：お兄ちゃん！
熊埜御堂 亜聡：双子の自堕落な方
熊埜御堂 明香：でもなかよし
DL：なかよしが一番だよ…

熊埜御堂 亜聡：妹ちゃん大好きだから…ダウナーツンデレ…
熊埜御堂 明香：(なお仲良しすぎてどちらかがロストすると片方も自動的に危ういという噂)
DL：（がんばって生きて帰ってね…）
熊埜御堂 亜聡：（生きて帰るぞ…生きて帰らせるぞ…！）
熊埜御堂 明香：(一緒に帰ろう…！)

～お兄ちゃんの＜生存＞判定について
熊埜御堂 亜聡：（取り急ぎは、妹ちゃんがいなくてもちゃんと起きるかどうかが不安）
熊埜御堂 明香：(起こしにいくもん！)
熊埜御堂 亜聡：（来て…！！）
DL：（学校に来てくれなきゃシナリオが始まらないｗｗｗ）
熊埜御堂 亜聡：（セッション冒頭に、究極的に汚い部屋が写り込むかもしれない…）（？）
DL：（……汚部屋の画像探そうかな…）
熊埜御堂 亜聡：（ｗｗｗｗｗ）

熊埜御堂 明香：「お兄ちゃん、なんでお掃除しないの！」
熊埜御堂 亜聡：「めんどくせー」
熊埜御堂 明香：「もー！　そうやって先送りにするからこんなんなっちゃうんだよ！　今度のお休みはお掃除しに来るからね！」
熊埜御堂 亜聡：「は～？俺寝てるからな」
熊埜御堂 亜聡：「そもそもお前以外誰も来ねーんだからいいだろ」
熊埜御堂 明香：「よくないよっ！」
熊埜御堂 亜聡：「別にベッドから降りない生活だからなぁ…」

DL：（亜聡くんは…そうですね、ちょっと＜幸運＞振ってもらいましょうか）（成功したら運よく明香ちゃんが前日にお片付けしていてくれたという事で）
熊埜御堂 亜聡：（はーい！）（キレイ部屋なるか…！）

熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊幸運〉(1DM<=3) ＞ [3] ＞ 1 ＞ 成功数 1 成功!

熊埜御堂 亜聡：綺麗！！！
DL：お！では綺麗なお部屋で本編を迎えられますね！
熊埜御堂 明香：よかった…
熊埜御堂 亜聡：妹ちゃんありがて～～～～～～
DL：（1 日終わる毎に何かで判定してもらって、失敗したら汚部屋になる仕様にするのはいかがでしょうか？）
熊埜御堂 亜聡：（ｗｗｗｗｗ　一瞬で汚れる亜聡の部屋）（OK です！）
熊埜御堂 明香：(一種の才能)
DL：（ｗｗｗｗｗ）（じゃあ技能は…、＜＊生存＞にでもしておきます？）
熊埜御堂 亜聡：（＞＞生存＜＜）（OK ですｗｗｗｗ）
熊埜御堂 亜聡：1DM<=3〈＊生存〉(1DM<=3) ＞ [5] ＞ 0 ＞ 成功数 0 失敗!

熊埜御堂 亜聡：アッだめだこれ
熊埜御堂 明香：お兄ちゃん…

熊埜御堂 明香：「もう～、少しは自分で維持できるように頑張らないとだよお兄ちゃん！」
熊埜御堂 亜聡：「人間生活してりゃゴミは出るだろ……っとこら待て待てそのジャ○プまだ読んでねぇ捨てるな捨てるな」
熊埜御堂 明香：「読んでないならその上にコップ置いたままにしないで！」

熊埜御堂 亜聡：ねぇ大丈夫この兄貴？妹ちゃん住んでもらった方が良くない？
DL：（ちなみに本編で汚部屋化した場合 どうなるかはお楽しみに…）

～妹ちゃんの鈍感力について
熊埜御堂 亜聡：（なお双子、最近学校でよく一緒にいる男子の話になったとき、明香ちゃんに「お友達だよ？」と言われるたびに亜聡が「お前マジか」となります）
熊埜御堂 明香：(お友達だが…？)(そう言う意味で好かれているとはミリも思っていないが…？)(って顔をしています)
DL：（お兄ちゃん…シスコン…）

熊埜御堂 亜聡：「嘘だろこの前だって「遊びに誘いたいからって LINE 交換頼まれた」っつってたじゃねーか」
熊埜御堂 明香：「うん、だからクラスの子も誘ってグループ作ったよ！　最終的に十人くらいに増えちゃった」
熊埜御堂 亜聡：「……全員で行ったのか？　そん時そいつどんな顔してた？」
熊埜御堂 明香：「うーん？　…そういえばちょっぴり切なそうな顔してたような」
熊埜御堂 亜聡：「その後は誘われなかったのか」
熊埜御堂 明香：「ううん、次のお休みもカラオケ行こうって。だからこのグループのみんなも誘って…次は五人くらいで行く事に…」
熊埜御堂 亜聡：「お前鬼かよ」
熊埜御堂 明香：「？」

熊埜御堂 亜聡：（軽く引きながらも「いいぞもっとやれ」って思ってるし、その内めんどくささより面白さが勝つと「次は俺も誘えよ」とか言い出す）（なお下心丸出しだった場合はもっと早めに「俺も誘えよ」が発動する）
DL：（＞＞セコム発動＜＜）
熊埜御堂 亜聡：（全力妨害兄貴）
熊埜御堂 明香：(なお妹は気づかない)

2022/7/31 ～オトギバラシに頭を悩ませる PL ズ

Lily：オトギバラシログ、前回までめちゃくちゃ頭悩ませてましたね…
pokoya：ですね… …やっぱり輝夜先輩がオトギバラシなのか…？とか滅茶苦茶考えてました

Lily : アリスちゃんが「制作者の獲物はワスレモノ」と明言していて、明香ちゃん CS におまじないを送りつけようとした＋その後のことをガンガンに気にしてる輝夜先輩が、CS 側の黒幕…というのは、個人的には結論かなと思ってます… オトギビトのアリスちゃんを倒したのはなんだろう

pokoya : なんでしょうねぇ… 正直伏せられたカードまだまだあると思ってしまう…

Lily : ですよね…GM 様の様子的には現時点での情報はほぼ出きっていそうではあるんだけど、まだ分からないところがあるなぁ感…

pokoya : いざクライマックスにて…なのか

Lily : 絵本先輩の目的に関しても、オトギビトの性質は特に関係なさそう…？なんだよなぁ… だとしたら輝夜先輩側で何かあるのか、むしろ全然違う経緯なのか…うーん

pokoya : 輝夜先輩的にオトギビトだけで達成できる目的？かと思いきや、全然足りなくて…みたいな事はありそうか…？)

Lily : なるほど…時系列で…。ありそう…… 輝夜先輩がオトギバラシと仮定して、「輝夜先輩が何らかの目的でオトギビトを倒す（オトギバラシになった）→倒したはいいが、目的が達成できない状況が発生→ワスレモノの力も必要になる→呼び出すのに条件が複雑→絵本先輩＋オカルト部の力を借りる」…？）

pokoya : ありそう… 輝夜先輩、どれくらいの時間でシナリオ内本編に至ってるのかは気になるところですね…CS 出始めた頃くらいから？

Lily : そもそも CS がいつからあるのかって情報出てましたっけ… そもそもワスレモノ捕獲用ツールなのか、もとは全然違ったけど改造？されて利用されてるのか

pokoya : 少なくとも雀先輩が生存してた半年前にはあった事が確定してるくらい…？

Lily :

[メイン] アリス：「そうね…。制作者の様子を見て感じた推測ではあるのだけど…」

[メイン] アリス：「最初からゲームを作るつもりではなかったみたいよ？少なくとも、私を倒した段階では、ね」

Lily : って言ってるから、アリスちゃんを倒してから CS が作られたのは確実か…

pokoya : そこら辺の時系列、一回整理しておきたいですね… 次回やるか…

Lily : また推理モードの双子が見られる…？ あれ好きだった…

pokoya : 亜聡くんかっこよかったですね～～ 明香もがんばってて偉かったぞ…

Lily : 明香ちゃんの理解してるところと亜聡の理解してるところがうまいこと合わさって、一つの結論に導き出されたら…かっこいいじゃないですか……

pokoya : めちゃくちゃ見てえ… 明香、「こうだったらどうしよう」とか「もしこうだったらこうなるな」って感じの言い方が多くて、亜聡くんの「これがこうだとして、ならどうなる？」みたいな感じのと噛み合ってありがて～～ってなりますね…

Lily : なるほど、だから噛み合って見えるのか…！ ものの見方とか推理するときの角度が違って、それで噛み合う双子ほんと好～～～～～～

2022/8/30 ～シナリオクリア後

・オカルト部の扉を開け放つ双子

明香「にっ、入部しに、きました！」

小波「……は…？」

亜聡「入部届もほら。」（ぺらっ）（顧問受理済み）
小波「……おい待て。これは一体 何の真似だ…？」
明香「何の真似、って…入部しに来ただけですけど…」
亜聡「見たまんまっすね」
八雲「私もいるぞ？」
住吉「……あー、絵本…」（気まずそうに）
住吉「……俺が言い出しっぺ。文句なら全部俺に言ってくれ。わかったか？」
小波「は…？」
亜聡「結論を言うと…、オカルト部はこれで部員５人ってことす。」
明香「これなら、廃部にはなりませんよね？」
小波「……帰れ」
明香「もう入部しちゃったので！」
亜聡「今日からここが部室なんで」
八雲「と、いう訳だ。観念するんだな」
住吉「……あの、絵本…、……ごめんな…」
明香「…部員なので、毎日来ます、から」
小波「……もういい…。好きにしろ…」（はぁ…）
亜聡「ん、言質とった。聞いたなドロシー。」
ドロシー『（こくこく）』
アリス「ばっちり聞いたわよ！」
明香「よ、よかった…」
亜聡「じゃあ好きにするんで。もう鍵は開けといてくださいよ。合言葉も無しな」
小波「……もう、そんな事をする必要もない…」
亜聡「そうだな」
明香「……わたし達は、あの時の先輩とは相容れなかったけど」
明香「これからの先輩とは、分かり合っていきたいなって思うので…いろいろとお話、聞かせてもらえたら嬉しい…です」
小波「……」
住吉「も、もちろん今すぐじゃなくていいから！な？」
亜聡「気が向いたらでいいだろ。今日からはここに、メイか俺がいる日も増えるだろうから」
亜聡「ああでも、どっちかに話したら両方に伝わるからな。」
明香「お兄ちゃん！」
亜聡「だいたい事実だろーが」
小波「……やっぱり帰れ…」住吉「ちょ、亜聡！もうちょい優しくしてやって！！」
亜聡「めんどくせー先輩だな」（無礼）
明香「…お兄ちゃんに失礼な事言われたら教えてくださいね？」
小波「……そうさせてもらう…」
住吉「（ほっ…）」
亜聡「……」
明香「お兄ちゃん」

亜聡「……あーもう、わかったよ。気を付けりゃいいんだろ。」
亜聡「……たぶん」
明香「もー！」

Lily：（小波先輩から双子への会話が増えるのは良いことだけど、大体が明香ちゃんに対して亜聡の失礼言動に対するクレームになりそうだな…）
ごまゆきみ：（あり得そうで…ｗｗ）
pokoya：(亜聡くんの怒られが増える)
Lily：（失礼なことをした１，２日後ぐらいで、長電話でめっちゃ明香ちゃんに怒られてそう）

明香「聞いてるのお兄ちゃん！」
亜聡「へーへー」
明香「お兄ちゃん！」
亜聡「ちゃんと聞いてるって」ﾊﾞﾘｨｯ
明香「お菓子の袋開けた音した！」
亜聡「開けてない開けへはい」
明香「食べてるー！」

アリス「まーたやってるわ」（くすくす）
ドロシー『亜聡、食べながらしゃべると噎せるよ…』

choice[噎せる,噎せない]
DiceBot：(choice[噎せる,噎せない]) → 噎せる

亜聡「んあ？んなの大丈夫に決まってんらんぐえっほ！！！！」
明香「きゃっ！　…もー、食べながらしゃべるから！」
亜聡「げっほげっほげっほ！！げっほ…、…っぐ、ドロシー水…！」
ドロシー『あ…、だ、大丈夫…？』
アリス「あらあら、盛大に噎せたわね～」（くすくす）
明香「もー…大丈夫？」
亜聡「げっほげっほ……！！…っ…、…あー、ポテチで死ぬかと思った…」
明香「ばかな事言わないでよー、これに懲りたら電話中にお菓子食べちゃダメだよ！」
亜聡「あ゛ー……考えとく……」
明香「お兄ちゃん！」
明香「もう明日は泊まるからね！」(見張りの為)
ドロシー『片付けしとかないと…』
アリス「もう汚部屋になってるのね…」

・小波先輩のキャラシ作成　～小波先輩の社会は２～

ごまゆきみ：（一応 オカ研の部長やってるって事で、社会は２にしました）

Lily：（よかった…（？））

pokoya：(部長職で手に入れられる社会+1

Lily：（役職ボーナス）

ごまゆきみ：（＞＞役職ボーナス＜＜）

pokoya：(亜聡くんも部長になれば+1…？)

ごまゆきみ：（ｗｗｗｗｗｗ）

Lily：（亜聡が全力拒否する姿が目に浮かぶ）

八雲「拒否するとはどういう了見なんだ？」
亜聡「ぜっっっっったい嫌だ。っつーか明香に頼めよ適役だろ」
明香「わたしオカ研の方の部長やるから…」
亜聡「部長職も掛け持ちすりゃいいだろ」
明香「さすがに無理だよ！」
亜聡「ぐ……死ぬほど嫌だ…。…今だけ織畑戻ってきてくんねーかな…」
明香「鶴乃ちゃんに何押し付けようとしてるの！」
八雲「私だってできる事ならやる気のある部員に引き継ぎたいに決まっているだろう。だが！ウチの部員は残念ながらお前と明香しかいないんだよ！」
亜聡「存続危機じゃねーか既に」

pokoya：(小波先輩とじゃんけんして負けたんだろうな、部長…)(双子のどっちを部長にするか)

Lily：（ｗｗｗｗｗ）（じゃんけんで売られる双子の優秀な方と怠惰な方）

八雲「くっ…、負けた…！」
小波「…なら、双子のやる気がある方を部長に任命させてもらう」

亜聡「くっそめんどくせー…。つまり最初の仕事が部員集めじゃねーか…マジでめんどくせー……。……やるか……」（諦めの境地）
明香「っ、ほんと！？」(ぱあ)
亜聡「やりたくねーけどやるしかねーのは分かる……」
明香「お兄ちゃんも成長してるんだね…(しみじみ)、でもよかった！　部長会議の様子見に行ったことあるけど、知ってる人あんまりいなかったから…」
明香「運動部の部長さん達がたくさん話しかけてきて、ちょっと気おくれしちゃったし…」
亜聡「は？？？？？？」
アリス「あっ」
ドロシー『あっ…』
亜聡「おい次の部長会議いつだ」
明香「えっ、ちょうど一週間後くらいだったような…？」
亜聡「一週間後か。今日中に引き継ぎする申請通れば部長の任命は間に合うな。わかった。」（何が？？）

明香「ど、どうして急にやる気出してるの？？」

アリス「……まぁ、たまたまそんな気分になったんじゃないかしらね？うん！」（にこにこ）

ドロシー『……他の部長達、亜聡に気圧されそう…』

亜聡「うるせーうるせー」（さらさらさらと届書にサイン）

▼おまけ　―――双子の茶番（全部ごちゃまぜ）編

・熊埜御堂兄妹とイグニハイド寮

pokoya : (あと急に熊埜御堂兄妹の話になるんですけど)(亜聡くんとイデア氏仲悪いといいな～～～～という結論になりました)

Lily : （ｗｗｗｗｗ）（仲悪そうだな…ｗｗ）

Lily : （途中で煽り合い放棄して「ハイ論破ｗｗｗ」ってなってるところに「めんどくせー性格っすね」とか言ってくるタイプ）（最低）

イデア「うっわかわいくない…」
亜聡「俺の分の可愛げは腹の中に置いてきたんで」
イデア「そんなもの置いていかれて親御さんかわいそ」
亜聡「俺の後から出てきた奴が全部回収したみたいっすからお気になさらず」
イデア「結果人間関係のめんどくさいところ全部押し付けた感じ？」
亜聡「あれが楽しいんだそうだ。本人は」
イデア「周囲勘違いさせまくってそのうち刺されそう」
亜聡「あぁ……さすが。勘違いしそうなタイプは言うことが違うっすね」
イデア「は？　勘違いとかしたことないですが？」

～　ズゥ「してるだろ」
　エミール「寿限無ちゃんの目を見て「勘違いしてません」と誓えるのか？」
　ゲル「ここで悲しいお知らせなんだけど、勘違いしてる奴って自分の事「勘違いしてる」って言わないんだよな」
　オレノ「あと僕もさっき彼に似たようなこと言ったんだけど、「あー…俺も結構「マジかこいつ」って思ってっからな」って言われたよ」
　ゲル「嫌われてない？寮長」
　ズゥ「草。絶対寿限無ちゃんとの仲反対されるパターンじゃん」
　ゲル「身内はそこそこに攻略しておかないと後が大変でござるよ、ただでさえコミュ力死んでるんだから我々」
　エミール「…つまりそこで妹ちゃんが大活躍するフラグ…？」
　オレノ「妹ちゃんは妹ちゃんで、寿限無ちゃんのこと大好きらしいよ」
　エミール「実を言うと我、百合も守備範囲なのだ」
　ズゥ「急に何」
　ゲル「全然あり。というか全方向含め性別はあんま気にしない我」
　オレノ「急な爆弾発言何」
　エミール「やはり社交性高いヤンデレの常套手段は周囲を煽動する事による囲い込みであるな…」
　ゲル「え？その話に聞く社交性の高くて可愛くて愛され甘えん坊な寿限無氏の妹が実は腹の奥で病んでるタイプ？は？最高過ぎて吐きそう」
　エミール「そこにセラちゃんを入れて甘えん坊ヤンデレによる争奪戦をだな」
　ズゥ「その話長くなりそう？」
　ゲル「百合に間男はご法度とは言うけど、そこに無気力高知能弟混ぜるか悩むな……」

オレノ「長くなりそう」
エミール「なんなら別ルートで往年のヤンデレギャルゲの如きカップリングを作ることもアリだと思う」
エミール「すなわち、義姉×自分×実妹のヤンデレ修羅場…！」
ゲル「多くのヤンデレ愛好家に愛されるシチュですな……血のつながらない姉、血のつながった妹、どっちかを選べばどっちかにが刺される…」
ゲル「だが我は男側が病むのも大好き侍故、少し離れている間に友好関係が広がった義姉を呼び戻して捕まえて閉じ込めて双子のためだけの大好きな"お姉ちゃん"に戻ってもらうシチュもな…」
エミール「めちゃくちゃあり」
～

イデア「声がデケェんだよなぁ！！」
亜聡「ここの寮って頭おかしい奴しかいねーのか」
イデア「自分の世界に浸りやすいやつが多いって言ってくれます？」
亜聡「人のアニキと、人の見たことも無い妹使って勝手にあれこれ言われる俺の気持ち考えてくんねーかな」
明香「何が？」
イデア「…っ！？」（びくっ）
亜聡「うわ」
亜聡「…お前アニキんとこ行くっつってただろ、何こんなとこうろついてんだよ」
明香「だってお兄ちゃん全然戻ってこないんだもん！」
寿限無「しびれを切らして迎えに行くー、ってメイがね」（ひょこっ）
イデア「ヴァッッッッッッッ」（死）
亜聡「結局アニキも連れてきてんじゃねーか。……うわ」（ちらっ）（倒れた）
亜聡「……おいアニキ。俺が言うことじゃねーけど、相手は選べよ」
寿限無「？　何がですか」
亜聡「…何でもねー。めんどくさくなった」（げそっ）
明香「あっ、お兄ちゃんまた「めんどくさい」なんて言って！」
寿限無「サトはすぐそういう事言うんですから」
亜聡「そんなことより明香、そこで倒れてる奴、アニキが世話になってる……いや、世話してやってる奴らしいぞ。もう一人のロボットはどっか行った」
明香「えっ、そうなの！？　ていうかなんで倒れてるの放っておいてるの！？　ご、ごめんなさい大丈夫ですか！？」
寿限無「(……いつもの事だとは言えない)」
亜聡「さっきまでマシンガンみてーに喋ってたのにアニキが来た途端死んだ」
明香「どうして！？」
寿限無「すみません、俺も悪いんです。予告をしなかったから…」
明香「予告を！？」
亜聡「やっぱここの寮って絶対ぇ頭おかしい奴しかいねーんだよな……」

・拗ねてる亜聡と仲良し３兄弟
寿限無「仲いいですねー」 見てる兄
亜聡「見てねーで兄貴が明香にやってやればいいだろ」
寿限無「俺は別にいいんすけど、それサトはちゃんと見る側に徹することができます？」
亜聡「…？」 怪訝

～
明香「お姉ちゃん、あのね、それでね…」
寿限無「そんな事があったんすねぇ、明香は優しいですね」なでなで
明香「わ、…えへへ」ふにゃ
亜聡「…」じっ
明香「えへへ、なでなでされるの好きだなぁ」
寿限無「なるほどー、じゃあこっちは？」(手を広げる)
明香「(ぱっ)…もっとすきー！」(ぎゅー)

choice[じーっと見てる,割り込む,拗ねてどっか行く]
DiceBot：(choice[じーっと見てる,割り込む,拗ねてどっか行く]) → じーっと見てる

亜聡「…」 …じとー
明香「えへへ、今日いっぱい甘やかしてくれる…どうしたの？」
寿限無「たまにはいっぱい明香を構いたくなる時もあるんですよ」

choice[楽しそうだから良し,蚊帳の外でちょっと寂しい,既に拗ねてる]
DiceBot：(choice[楽しそうだから良し,蚊帳の外でちょっと寂しい,既に拗ねてる]) → 楽しそうだから良し

亜聡「…」…ふい　（家族大好きだな亜聡）
明香「……あっ」
寿限無「？」
明香「じゃあ、お兄ちゃんを構いたいときもある？」
亜聡「…あ？」 スマホ持ち出してた手を止め
寿限無「……ありますね！」
明香「(ぱっ)、じゃあそれ今じゃダメかな？」
寿限無「いいですよ！」
明香「(くるっ)お兄ちゃーん！」
亜聡「待て待て、呼ぶな呼ぶな」
明香「えー！」
寿限無「いいじゃないですか、ほらほらおいで～」
亜聡「…アニキまでいい笑顔してんじゃねーよ…。あーわかったわかった、５秒な」

明香「短すぎるよ！」
寿限無「ふふふ」

・イグニハイド寮に遊びに来た熊埜御堂兄妹
イデア「は？　僕だって大好きですが？」
ズゥ「対抗しないで」

異次元茶番時空の亜聡「しばくぞ」
イデア「しばいてみろ言いつけてやるからな！」
エミール「さすがにそれはカッコ悪いぞ」
亜聡「うるせーうるせー」
ゲル「ここってエレメンタリースクール？？」
オレノ「お互いの発想と語彙が稚児」

ひょこっ
明香「あっ、お兄ちゃんまたイデアさんとケンカして！」
亜聡「、げ。メイが先に来やがった……」
明香「お姉ちゃんならオルト君とセラちゃん迎えに行ってから来るって。もー、お兄ちゃんイデアさんにはお姉ちゃんがとってもお世話になってるって言ってたのにどうしてケンカするの？」
亜聡「どー見たって世話してやってる方だろ」
亜聡「むしろアニキが世話してやってんだからその弟妹も優遇してくれてもいーんすけど。」
イデア「拙者生意気系年下属性は全然ピンとこないんですわー」
亜聡「そういう優遇求めてねーわ。…はー、めんどくせぇ奴引っかけたなぁアニキ」

ひょこっ
寿限無「俺がどうかしました？」
イデア「っっっっっっっっっ！！！！！！！」
オルト「ただいま兄さん！」
セラ「ただいまー！」
亜聡「セラの家ではねーだろ。……うわ、アニキが来た途端胸の前で両手縮こまらせて固まってんじゃねーか」
亜聡「……。…なぁメイ。お前、アニキのこと好きだろ？」
明香「え？　うん、お姉ちゃんのこと大好きだよ！」
亜聡「だよな。…ほらセンパイ、さっきの会話冒頭の台詞、もう一回言ってみたらどうすか」
イデア「ヴぁっ！？　え、あ、あ、あ、」
寿限無「？　イデアさん？」
セラ「？」
オルト「兄さん、急激に発汗量が増えたけど大丈夫？」
イデア「へっ、あ、…ぼ、…ぼぼ、ぼく、、ぼ、」

イデア「無理！！！！！！！」

```
      ( ＼/ /__^      <./    ／ +       ／＼____
    +  ..ヽ/ /Д｀/⌒ヽ   / . ／ /       ／      //
。       / /＼／ ,^  i   ￣> ＼_/  ＊ ／_____//
         し' ＼_／     i   ／>          ＿＿＿＿
    +       i⌒ヽ   ./    ￣>____   + 。     .. ::
      /⌒ヽ i  i  ＼ (      ./   / ／＼   +  . ::
  ＊   ..i       /ヽ    ヽ  ∠___／  ￣  +   ＊.. ::
       ヽ ヽ 、 ＼__ノ  >     <>          ::
   。      ＼  )  ￣    ./V      ＊        。     . ::
_______   .ノ ./⌒)^  /    ..+_________________
   。   ／ し'.ヽ  (  .v       /＼_______________
      ／／      し'   / /＼  +￣::::::::::::::::::::::::::::::::::::::::::::::::::::
```

明香「きゃーーーーーー！！？」
寿限無「イデアさーーーーん！！！」
オレノ「寮長ーーーーー！？！？」
亜聡「そうはならねーだろ」
ゲル「いやー久々に見ましたなー初夏の風物詩」
ズゥ「誰かあとで学園側に報告しといてね」
エミール「ズゥ氏がやればいい」
明香「どうしてみんな冷静なの！？」
ゲル「割とよくあるからでござる」
亜聡「やっぱやべーだろこの学校」
明香「け、怪我しちゃうよ！？」
エミール「さては君ツッコミなれてないな」

・Y 談と熊埜御堂双子

pokoya ：(…オンボロ寮組じゃないけど、他の子だったら明香辺りが Y 談に全く反応が出来なさそうだな…)
Lily : （わかる…）（ふえええええって感じじゃなくて、本当に「？」ってなってそう）
pokoya : (やってるうちにお兄ちゃんが来て耳を塞いでくれるんだ…)
Lily : （背後から両手で耳ふさいで、そのままの形で連行（？）していく姿が目に浮かぶ…）

明香「？？？」
亜聡「気にすんな馬鹿。あとわかんねー会話に無理に混ざんなくてもいいんだぞ」
明香「えぇーっ、でもわたしに聞いてほしい話なんだって」
亜聡「どういう文脈でアレが「明香に聞いてほしい話」になんだよ」
明香「さぁ？」 (反応見たかっただけ)

亜聡「……。」　（後日から監視（寝たふりしながら）が強化されるらしい）
pokoya：（これ、のこのこと「お兄ちゃんこれってどういう意味？」って聞きに行く明香がいそう）
亜聡「……知らねー。」
明香「そっかぁ」
亜聡「知らねーけど、他の奴には聞くんじゃねーぞ」

・31 アイスクリームと熊埜御堂双子
Lily：（帰りにそれぞれ違うフレーバーの 31 アイスクリームとか買って食べてそうなカップル（双子））
pokoya：(確実にひとくち交換する…)

亜聡「お前も大納言あずき買えばよかっただろ」
明香「だって久しぶりにポッピングシャワー食べたくなっちゃって…」
亜聡「いつも途中でちょっと飽きた顔するくせにお前。」
明香「き、今日はスモールサイズにしたもん！」
亜聡「はいはい。ほら、一口食うなら食え」（すっ）　（大納言あずき）
明香「…えへへ、ありがと！　お兄ちゃんもこっち一口食べる？」
亜聡「ん」（すっとひと掬い）　（ぱくり）
明香「おいしい？」
亜聡「(もぐもぐ、ぱちぱち)……。……」（すっともうひと掬い）　（ぱくり）
明香「あっ、二口目！」
亜聡「あーあー。細けぇこと言うなよ」（すっともうひと掬い）
明香「もー！　じゃあお兄ちゃんもポッピングシャワー買えばよかったじゃん！」
亜聡「お前が買ったんだからいいだろ」もぐもぐ
明香「もー！」(いちゃいちゃ)

・蓮水探偵と熊埜御堂双子
pokoya：(色んなタイプの人と話してほしい双子…)
Lily：（見たい…）　（なんだったら歴代 NPC ズとも巻き込んで会話してくれてもいいのよ双子…）

choice[どこら辺と話す？天築組,久我原邸組,探偵組,瞠目組,NRC 行っておいで]
DiceBot：(choice[どこら辺と話す?天築組,久我原邸組,探偵組,瞠目組,NRC 行っておいで]) → 探偵組

pokoya：(なんか部長の思い付きで実際の探偵に会ってみよう見たいな企画？なのかな)
Lily：（ミス研だから？）　（…ミス研として参加した推理大会で探偵さんに出会う双子めちゃいいな…）

蓮水探偵「何で？」
明香「？」(きょとん)
亜聡「マジモンの探偵とか初めて見る」

蓮水探偵「見学とか許可出した覚えないんだけどなぁ」
亜聡「マジかよ、話通ってねーのかよ。おい部長。」

choice[本当に許可来てない,来てたけど探偵寝込んでたから周囲が勝手に通した]
DiceBot：(choice[本当に許可来てない,来てたけど探偵寝込んでたから周囲が勝手に通した]) → 来てたけど探偵寝込んでたから周囲が勝手に通した

亜聡「……今メッセで確認したすけど、依頼は通ってるらしいっす。受付は西園寺さんで、事務手続きは津野隈さんって名前の書類の画像が」
蓮水探偵「ちょっと津野隈君？」
（～　津野隈「（つーん）」）
戸ヶ崎「あ、じゃあ自分も今日は見学していっていいですー？」(ひょこ)
亜聡「、うわ」
蓮水探偵「続々と…」
明香「わ、あ、こんにち…は？」(？)(何らかの違和感)
戸ヶ崎「ふふっ、今日は見学可だって津野隈さんに聞いたので戸ヶ崎も見に来ちゃいましたー」(にこー)
亜聡「……」
蓮水探偵「…まぁいいけど。見学と言ったって何も面白いことないけどね」
明香「…あ、えっと、じゃあ色々とお話聞かせてほしいです！　今まであった事件のこととか！」
亜聡「メイ、ほどほどにしとけよ。たぶん細かい守秘義務とかいろいろあんだろ、知らねーけど。」
蓮水探偵「別にいいよ、ロクに覚えてない部分も多いけど」
亜聡「いいのかよ」
蓮水探偵「興味があるんだろう？」
亜聡「……まぁ。こいつも聞きたがってるし。」

choice[何話してくれる？回想録,追想録,閑話録,探偵零年,綴月館]
DiceBot：(choice[何話してくれる?回想録,追想録,閑話録,探偵零年,綴月館]) → 探偵零年

蓮水探偵「君達、「雨宿 露命」の名は知ってるかな？」

choice[亜聡は…知ってる,知らない]
DiceBot：(choice[亜聡は…知ってる,知らない]) → 知らない

亜聡「フィクションの小説ぐらいしか読んでないんで、俺はあんまり」

choice[明香は…知ってる,知らない]
DiceBot：(choice[明香は…知ってる,知らない]) → 知らない

明香「わたしも、あんまり…天築にはこっちの話あまりこないし」
蓮水探偵「話しがいがないなぁ」

蓮水探偵「まぁいいけどね。知らない方がインパクトのある話だ、彼は――」(と話し始める)

…
亜聡「……うっわ」（死んだ探偵、その娘、裏で跋扈する助手に、ラストの展開）
明香「……」(はわわ)
亜聡「…思ったよりえぐいっすね。現実の事件」
蓮水探偵「世に存在するほとんどの事件には人の心と業が絡んでいるものだからね、そんなものさ。と言っても、件の事件は特に…と言った感じだけれど」
亜聡「…人の心と業、ね」
明香「…あの、この事件って」
蓮水探偵「ん？」
明香「…誰かが、その探偵さんの話を聞いてあげてたら、起きなかったんでしょうか」
亜聡「…明香？」
明香「もしも、誰か聞いてあげて「あなたのせいじゃないよ」って言ってあげられてたら、」
蓮水探偵「そんな簡単な話なわけがないだろう？」
明香「っ、」
蓮水探偵「今の事件には、ある意味「探偵の業」が含まれている。どれだけ目を逸らすべき事でも、目を逸らせない、疑問を抱いたならば推理を「組み立てずにはいられない」。そういうものだ」
亜聡「……探偵って、何なんすかね」
蓮水探偵「……」(ふ)
蓮水探偵「主役さ」
蓮水探偵「全てを見ている、全てを組み立てられる、それがどんなにおぞましい事実でも絶対に「暴かずには終われない」。例えどんな状況でだって、舞台の最後では絶対に輝くもの」
蓮水探偵「――だから、どんなに耐えきれなくなったとしても、舞台から下りる事でしか終われない」
蓮水探偵「彼の探偵の場合は、それが「死」だった。そういう事だ」
亜聡「……」
亜聡「……自殺して、それで決着つけようとか。…無責任だろ。探偵だろうがなんだろうが、…父親だったんなら尚さら」
亜聡「…はぁ。なんでもない。やっぱろくでもなさそうっつー感想しかねーぞ、探偵業。」
戸ヶ崎「…あら？」
蓮水探偵「ふ、はは。何言ってるんだいそんなの当たり前だろう？」
亜聡「（…じと）」
蓮水探偵「まぁ、まともな探偵と話したいというなら僕の一番弟子もいるけどね。今日は仕事だけど」
明香「……あ、あの」
明香「…その、女の子…御幸ちゃん？　は…ええと、あの、…元気、ですか？」
蓮水探偵「……」
蓮水探偵「元気なんじゃない」(ぷい)
亜聡「急に雑じゃね？」
蓮水探偵「僕がどれだけ事件後にあの子に付き合わされたことか」
亜聡「そりゃ父親死んだらいろいろあるだろ。……」

蓮水探偵「……。君達も？」
明香「、え？」
亜聡「、…何がだ」
蓮水探偵「……先ほどの話、彼女は「誰か話を聞いてあげたら」と言った」
蓮水探偵「まるで、そうすれば「自殺を防げたかもしれない」とでも言いたげにだ。…そこから、似た悔恨を抱いたことがあるんじゃないかと考えた」
亜聡「っ、…」
蓮水探偵「次に君、「父親が死んだらいろいろある」と言ったね。…妙に実感のある言い方だったね、そこから「経験があるのでは」と考えた」
蓮水探偵「そうすれば後は簡単だ、この二つを組み合わせてしまえば君達に降りかかった事柄をある程度は察することができる」
亜聡「やめろ。それ以上口に出すな」
亜聡「……それが本当でもそうでなくても、絶対今言わなくていいだろ」
蓮水探偵「言ったはずだ、「暴かずにはいられない」と。僕とは、探偵とはそういう性質の生き物だ」
蓮水探偵「それに謎解きの場面には人がいないとね」
亜聡「……」 ちらっと明香ちゃんに視線を向ける
明香「……」(ぎゅう)
亜聡「……。話を聞きに来たのは俺らだろ。推理するのは勝手だが、聞き役がほしいならその役を俺らに…メイにやらすな」 ぐっ、と明香ちゃんの手を握る
蓮水探偵「過保護だな、まぁ分からなくもないけどね。……」
明香「……」
亜聡「……」(じっ、と睨みつける)(明香ちゃんの手をぎゅっ)
戸ヶ崎「…ふふ。はいはい、まーいいじゃないですかぁ。今のお２人の姿が、そのまま答えでしょう？　それにしても亜聡さんと明香さんは、とても仲が良いんですねー」
明香「、わ」(はわわ)
蓮水探偵「…今日は口出すのが妙に遅かったね」
戸ヶ崎「うふふ、今日は観測者兼傍観者の戸ヶ崎に戻ってみましたー。蓮水探偵のお話も推理も一段落したので、もういいかなーと？」
蓮水探偵「別に口挟んでも良かったけどね、君には許してる」
戸ヶ崎「あら。うふふっ！　戸ヶ崎の特権ですねー」(にっこにこ)
亜聡「……。……なぁ、メイ」
明香「…？　お兄ちゃん？」
亜聡「さっきから思ってたんだが、あの人(戸ヶ崎)。……なんつーか、謎の既視感ねぇか？いや、雰囲気とかじゃねーんだろうけど」
明香「あ、うん…実ははじめて会った時わたしもそう思って…」

choice[誰かに似てるなぁ…,…お姉ちゃんに似てるかも？]
DiceBot：(choice[誰かに似てるなぁ…,…お姉ちゃんに似てるかも?]) → 誰かに似てるなぁ…

明香「…誰かに、似てるのかなぁ…」

亜聡「似てる知り合いなんていたかな…。…（…じー）」
戸ヶ崎「(蓮水探偵と楽し気に会話中)…、…あら？なんだかお２人の熱烈な視線が。」
明香「…(はわっ)す、すみません…何だか、知ってる誰かに似てる気がして…」
蓮水探偵「……」
戸ヶ崎「あら、そうなんですー？ おかしいですねぇ、戸ヶ崎は唯一無二なんですけど」
亜聡「ぴんと来そうで来ねーな…」
明香「…なんだろう…」？？？
亜聡「……。…あー、もう分かんねーから探偵いるんだし推理してもらえばいいんじゃねーか」（適当）
蓮水探偵「何、急に」
亜聡「だってもやもやするだろ。「暴かずにはいられない」性質の生き物なんすよね探偵」
蓮水探偵「君達が戸ヶ崎君に抱く違和感か、……」
蓮水探偵「知り合いに似た性質を持ってる人間でもいるんじゃない」
亜聡「性質なぁ……」…じー
戸ヶ崎「（にこにこー）」

choice[……分からん,……あ]
DiceBot：(choice[……分からん,……あ]) → ……分からん

亜聡「……ぴんとこねー」

choice[なんだろ…,…あっ]
DiceBot：(choice[なんだろ…,…あっ]) → …あっ

明香「……あっ！」
明香「お姉ちゃんに似てる感じ！」
戸ヶ崎「お姉ちゃん？」(きょとん)
亜聡「は？……、……あー」
戸ヶ崎「あらら？」
戸ヶ崎「……あまり言われたことないんですけど、戸ヶ崎、長女っぽいです？」
蓮水探偵「振る舞いは末子」
戸ヶ崎「えー。蓮水さん長男だからちょうどいいじゃないですかぁ」(くすくす)
亜聡「いやそうじゃなく。……」
亜聡「…戸ヶ崎さん、性別どっちっすか」
戸ヶ崎「、あ。…戸ヶ崎ですよ？」(にっこー)
亜聡「うわうさんくせ」
明香「…えっと、…どちらに見られる事が、多い…ですか？」
戸ヶ崎「蓮水さん最初どっちだと思ってましたー？」
蓮水探偵「別に興味なかった」
戸ヶ崎「えー。だそうですよ？」
明香「…ん、んー」

亜聡「あー…」
戸ヶ崎「ふふっ、どっちだっていいじゃないですかぁ。戸ヶ崎は戸ヶ崎ですから」
亜聡「……あー。（今のは兄貴っぽい）」

・喧嘩する熊埜御堂双子
pokoya : (…カップル喧嘩、双子でも合いそうだな…)
Lily : （似合いそう…！）（寿限無君は双子の喧嘩よく見てそう…）
pokoya : (最終的には仲直りするからって静観してそう)
Lily : （亜聡が明香ちゃんを怒らせるパターンが一番多そうだな…）（亜聡は困ったら寿限無君やらパパやらに助け（助言）を求めに行きそう）

寿限無「ははっ」(相談された結果)
亜聡「なんだよその笑いは」
寿限無「仲いいなぁって」
亜聡「いや今は割と困ってるんだが。かれこれ丸一日口きいてねーんだぞ」
寿限無「はいはい、今度は何やったんですか」

Lily : 熊埜御堂明香がむくれている理由：
きのこよりたけのこが食べたかったから

今の熊埜御堂明香：
口をきいてくれない

解決法：
頭を撫でる

結果：
笑顔で許してくれました

亜聡「きのこたけのこ戦争もちかけた」
寿限無「軽い気持ちで投げたらガチ勢だったせいでこじれたパターンですか」
亜聡「まさかガチギレすると思わねーじゃねぇか」
寿限無「ははっ」
亜聡「アニキ！……っだから、本気で困ってるんだって…！」（お兄ちゃん相手だから吐露）
寿限無「…しょうがないですね、とっておきですよ？」
寿限無「たけのこの○持って、頭なでてあげてみてください」
亜聡「、……。……今さら火種持って行って、こじれたりしねーかな。」（小声）（ガチ相談ベース）
寿限無「大丈夫ですよ」
亜聡「……。アニキが言うなら……じゃあ」（めんどくさがりが嘘のように迅速にたけのこの○買ってくる）

寿限無「頑張ってくださーい」

亜聡「……おい、メイ。」
明香「……」ぷーい
亜聡「っメイ、…、……あーーーーーーー」
亜聡「(前に回りこむ)…メイ、ほら！」 つ たけのこの里
明香「っわ、……あ、これ」
亜聡「食いたがってただろ。だから…買ってきた。」
亜聡「……その、悪かった。お前があんなにこれが好きだと思わなくて。」 頭なで、なで
明香「っ、……う、ううん」
明香「わたしの方こそ、…意地張っちゃって、ごめんね？」（えへへ）
亜聡「お、…おう。もう、怒ってねーか？」
明香「ふふっ、お兄ちゃんすごい顔してる。…もう怒ってないよ」
亜聡「本当だな？」
明香「本当、本当。…ふふっ」
亜聡「そうか。……そうか。なら、いい。」はぁ（安堵）
亜聡「…俺の分も買ってるからこの後食うか？」
明香「わぁ！　じゃあ、一緒におやつにしよ！」
亜聡「（ほっ、）…おー」

pokoya：(寿限無に報告にいったら「ほらぁ」って顔しそう)
Lily：（寿限無君にもこっそりたけのこが献上されたらしい）

亜聡「マジで助かった」
寿限無「そんなに深刻に悩むことないのに」
亜聡「だって……いつものメイなら、「もー！」って言いながら俺の周りでわーわー騒いで怒るような奴なのに」
亜聡「…急に口きかなくされるのは、慣れねーっつーか」
寿限無「…寂しい？」
亜聡「……」
寿限無「……ははっ」
寿限無「サトはもっと素直になってもバチは当たらないと思うっすよ」
亜聡「……うるせーぞ、アニキ。これが俺の性格だ…」（ぶすっ）
寿限無「はいはい」

・シナリオクリア後 『CS』の今後
カグヤ「じゃあ私がスマホの外に出られるようなプラグイン開発してよ」
住吉「え！？リアルでカグヤちゃんと同棲できんの！？！？なら頑張る！！！！！！」（ﾊｧﾊｧ）
亜聡「頑張って何とかなるレベルかそれ？？」
明香「あ、じゃあ魔女に着せ替え機能つけてほしいです！」

亜聡「着せ替え機能」
住吉「あ、それいい！！コスプレめっちゃしてほしい！！！！」（ﾊｧﾊｧ）
亜聡「もとがコスプレみてーな恰好だろアリスとカグヤ」（ド失礼）
明香「ふ、普通におしゃれしてくれたらなって思っただけで…」
アリス「あら、可愛いでしょ？」（にこにこ）
ドロシー『かわいい、のかな…？よくわからないけど…』
カグヤ「この子が失礼な後輩だったのを忘れてた」
明香「その服もかわいいけど、制服とかお揃いにできたら楽しそうだなーって。あとこの間読んだ雑誌にあったワンピースとか…」
亜聡「制服」
明香「あっ、髪型も変えられたら楽しいかも！　ドロシーちゃんいつもツインテールだから下ろしてみたり、逆にアリスちゃんはポニーテールとかどうかな？」(きゃっきゃ)
アリス「あら、確かに学生服は良いかもね。自然とみんなお揃いになるんだし」
ドロシー『……確かに、それはちょっと興味あるかも…』
アリス「髪型交換も楽しそうね！確かにCSに入ってから髪型変えたりしてないし」
ドロシー『私はこの髪型以外した事ない…』

choice[亜聡は…見たい,別に,…つまり明香ちゃんもお洒落するってことだよな]
DiceBot：(choice[亜聡は…見たい,別に,…つまり明香ちゃんもお洒落するってことだよな]) → 亜聡は…見たい

亜聡「……あの変態先輩けしかければ１週間ぐらいでできそうだな。よし」（よし？）
明香「お兄ちゃん？」
亜聡「何でもない。ゲーム部行ってくる」
明香「？　うん。あ、じゃあわたし今日はオカ研の方に顔出してくるね」
亜聡「ん。あとで顔出す」
明香「うん、……あ」
亜聡「？」
明香「あ、ううん！　なんでもないよ！　また後でね！」(シナリオへの布石)
亜聡「…。…？？？」

▼シナリオ背景＆NPC紹介

【シナリオ背景】

魔術とオーパーツを持つ異世界からの来訪者、竹取輝夜。
彼女は共鳴者たちの世界に溶け込む手段を探していた。

偽りの記憶を植え付け、人間界に溶け込む《怪異： オトギビト》、怪異を狩ることで対象の力を奪う《怪異：バラシ》。
その２つの情報を得た竹取輝夜はオトギビトを狩り、能力を奪うことで《怪異：オトギバラシ》となった。
やがて怪異と一体化した彼女の思考は狂い、現世と幽世の境界を乱すことで生者と死者が、人と怪異が入り乱れる混沌とした世界の訪れを画策する。

混沌世界を創造する切り札として、異世界から持ち込んだオーパーツを改造した。
他者の魔力を取り込み、プレイヤーに影響を与えることができるゲーム。
それにオトギビトのもう一つの能力 “ 霊感を拡張する力 ”を授け、人々に霊感を付与するゲーム『CS』を開発。

試験的に『CS』を学内で流行させ、生徒たちに霊感を授与した。
しかし、その効果は不十分だった。
稀にお化けを見たと騒ぐ生徒が出る程度で、混沌とした世界の実現には程遠かった。

次の手を考える中、《怪異：ワスレモノ》を呼び出した御伽雀が事故死するという事件が起きた。
その際、《怪異：ワスレモノ》が御伽雀の死の記憶を喰らい、彼女は《怪異：無垢なる死者》となった。

肉眼に映らないはずの御伽雀は、『CS』の影響下にある小波絵本には見えていた。
無垢なる死者の特異性により、小波絵本以外には認識されなくなった御伽雀。
彼女を正常な世界に取り戻そうと小波絵本は奔走した。

《怪異：ワスレモノ》《怪異：無垢なる死者》の記事から、御伽雀を蘇生させるのではなく、人々の認識を操作することで彼女を現世に帰還させようと考えた。
《怪異：オトギビト》《怪異：バラシ》の記事から、竹取輝夜の正体に行きつき、竹取輝夜と小波絵本は協力関係 となった。

ワスレモノの力をコントロールし、御伽雀の死を知っている人間からその記憶を奪う。
御伽雀を世界に寄せるのではなく、世界を彼女に寄せる。

２人は計画を実現するために『CS』のプラグイン『ラビットホール』を開発した。
怪異をゲームに封印し、その能力を得る装置。
オーナーである竹取輝夜が、封印された怪異の能力を扱うことができるようになる代物だ。
バラシが複数種類の力を得るためには必要な措置だったと言える。

ワスレモノの脅威が計り知れない以上、封印は直接の接触を避けた上での実行が好ましい。
そう考えた竹取輝夜は隣のミステリー研究部にいる共鳴者の１人を被験者に選んだ。

まず、『ラビットホール』を実装したアカウントを与え、印を仕込んだ伝誦でワスレモノのパイプラインを確保。伝誦に内包した魔術で出血させ、印に血液が浸透するのを待つ。
翌日、伝誦でワスレモノのおまじないを送ることで共鳴者を召喚者とする算段だった。
しかし、この計画はオトギビトの残滓であるアリスによって妨害される。

死者の救済を謳うオカルト研究部、怪異の化身アリスとドロシー、そして共鳴者たちの所属するミステリー研究 部による異色の怪異譚が幕を開ける。

【竹取 輝夜】

正体は《怪異：オトギバラシ》。
オカルト研究部所属の２年生ということになっているが、肩書は全て偽りである。
人をからかうことが好きなギャル。言うことがだいたい全部適当で掴みどころがない。

元々はとある平行世界からやってきた魔術師。
竹取輝夜は異世界のオーパーツを携帯に入れて持ち込んだ。
そのオーパーツとは他者の魔力を取り込み、プレイヤーに影響を与えることができるゲームだ。
これを実動させるには 輝夜の魔力を流し続ける必要がある。

まず、竹取輝夜は地の利がある学校に忍び込み、A・S ファイルを発見した。
そこにあった《怪異：オトギビト》と《怪異：バラシ》に目を付け、自分の居場所を得るためにオトギビトを狩ることに決めた。
都合のよい記憶を植え付け、人のコミュニティに溶け込む性質は頼れる者のいない輝夜にとって魅力的だった。
魔術とオーパーツを駆使し、オトギビトを打倒、その力を奪い《怪異：オトギバラシ》となることに成功した。

しかし、彼女には一つ誤算があった。
オトギビトを取り込む、つまりその怪異の能力だけでなく性格をも吸収してしまうことで、竹取輝夜という人格 に悪影響を及ぼした。
その結果、現世と幽世の境界を乱し、生者と死者が入り混じる混沌の世界を作り上げようとする。

次に、オーパーツであるゲームにオトギビトの霊感を拡 張する力を分け与え、人々に霊感を付与・拡張する『CS』を開発した。
すでにこの世界に溶け込んでいた竹取輝夜 は『CS』を広め、生徒たちに霊感を与えることに成功するが、混沌とした世界には程遠かった。

その裏で御伽雀と《怪異：ワスレモノ》の事件が起こる。
小波絵本は《怪異：無垢なる死者》となった御伽雀をいかなる手段を用いてでも正常な世界に帰還させようとした。
狂ったように色々と調べ尽くした絵本は竹取輝夜が《怪異：オトギバラシ》であることに気づき、雀を救う手掛かりを求めた。

輝夜は絵本を始末しようとも考えたが、その執念を買い、彼と協力関係となった。
小波絵本がワスレモノの力を利用するために考案した『ラビットホール』を実装し、更なる力を得るとともに混沌 の

世界にまた一歩近づくよう動き出した。

竹取輝夜はワスレモノの力で死者から死の記憶を奪い、『CS』オトギビトの力で生者に霊感を与え、さらに両名の力で人々の記憶を操作することで、生と死の概念を曖昧にしようとしている。
行く行くは生者と怪異が同じステージで混在する世界となるだろう。
《怪異：オトギビト》と同化した竹取輝夜にとって、これらは全てゲームに過ぎない。
自分が圧倒的に有利な盤面で参加者たちを蹂躙するゲームだ。

ただ、ワスレモノの召喚にはリスクがあると踏んだ竹取輝夜は共鳴者を実験台にすることに決めた。
まず、『ラビットホール』を実装したアカウントを与え、伝誦でワスレモノのパイプを生成する。
次に、魔術で指を切り出血させ、印に血液が浸透するのを待つ。
翌日、伝誦でワスレモノのおまじないを送り、共鳴者を召喚者とする。ワスレモノが呼び出した者の脳を喰らうという記事が本当だった場合のリスクケアである。
その後、自動的に『ラビットホール』 が起動し、ワスレモノを『CS』に取り込むという算段だ。

しかし、この計画は最初の時点でアリスに妨害されることとなる。
イレギュラーが起きたことに気づいた輝夜は慎重に機会を窺うことにした。

竹取輝夜の目的は、『CS』に《怪異：ワスレモノ》を取り込み、世界を混沌に陥れることである。

【ワスレモノ】

万物の哀しみや辛い記憶を喰らう。
人の倍ほどの大きさを持つ、黒く歪な人型の怪異。
魂の記録や死の概念の一部をも喰らう。
死人の死の記憶を喰らい、幽世に向かうことなく現世に留まる存在、彷徨う魂《怪異：無垢なる死者》を作り出すことができる。

またワスレモノは別の存在と感覚を接続し、幽世を見せる力も持っている。
ここで言う幽世とは怪異が住まう世界。幽世と現世は虚数領域と実数領域のように表裏一体で接している。
受信機で例えると、人と怪異では使用する周波数が異なるため同じ空間でも別世界のように見えるといった具合だ。ただし、怪異からは現世の存在が見えているケースが多い。

ワスレモノは幽世のチャンネルを開き、人に幽世の世界を見せることもできるが普段は閉じている。
感覚接続による能動的な可視化、つまり人の前に姿を現すタイミングは哀しみを喰らう時、おまじないで呼び出された時、ワスレモノに何かしらの意図がある時に限られる。

ワスレモノは人を害するタイプの怪異ではない。
哀しい記憶を喰らう理由は哀しむ存在を見るのが辛いからである。
共鳴感情によりワスレモノの哀しみも増幅するためだろう。
しかし、ワスレモノ自体は無意識に哀しみを喰らっているため、その理由には確信が持てていない。

このシナリオではある２つの出来事をきっかけにワスレモノが行動を起こす。
それはワスレモノの姿を見て事故死した織畑鶴乃と御伽雀の事件だ。

死の記憶を喰らうことで２人は《怪異：無垢なる死者》となった。
霊感の強い者ならともかく、常人に無垢なる死者は見えない。
しかし、とある学園の生徒の一部にはその姿が見えていた。

御伽雀のケースのみなら偶然で済ませたが、織畑鶴乃の件で
ワスレモノはあの学園には秘密があると確信する。
霊感の強い者が発生しだした時期を考慮すると、学園でのみ
流行っている『CS』というアプリゲームが怪しい。
そう考えたワスレモノは織畑鶴乃が『CS』に疑いを持つように
記憶を喰らい、『CS』の謎に迫るようにけしかけた。

その結果、織畑鶴乃はミステリー研究部である共鳴者たちを
頼ることとなる。
同時に、とある『CS』アカウントにおまじないのパイプが通った
ことに気づく。
ワスレモノはそれを利用し、共鳴者の一人と連絡を取り、事件
解決をサポートすることにした。
魔女ドロシーとしてワスレモノは共鳴者の片腕となった。

この哀しい事件の解決に向けて働きかけることは、ワスレモノに
とって御伽雀と織畑鶴乃を死なせてしまった罪 の償いでもある。
しかし、そのために自分が死なせてしまった織畑鶴乃を死して尚利用していることに罪悪感を抱いている。
最終的に人から拒絶され、消滅を望まれたとしても、ワスレモノはそれを受け入れる覚悟がある。

ワスレモノ（ドロシー）の目的は「『CS』の謎を解き明かし、これ以上犠牲者が出ないよう事件を解決すること である。」

※この怪異を目視するためにはレベル３以上の〈★霊感〉が必要。
おまじないや幽世の目を利用すれば霊感がない者でも一時的に可視化することができる。

▼共鳴感情
哀しみ（情念）、罪悪感（傷）

【オトギビト】

人の目にも映る珍しい怪異。
人間を模した姿をしており、人間界に溶け込んでいる。
見た者に偽りの記憶を植え付け、矛盾や違和に対する感度も下げる。
まるで初めからそこにいたかのように振舞い、人々はその不自然に気づくことはない。言わば一種の催眠だ。

性格は悪逆無道。
人々が不安や恐怖に怯える様を観察し悦ぶ。
人の霊感をある程度拡張することができ、幽世の存在を見せることで人々を狂気へと誘う。
幽世の存在への感度を下げることもできるはずだが、恐怖が薄まるのでそれをすることはない。

このシナリオではオトギビトは美しい長髪の女性として存在していたが、すでに竹取輝夜によって退治されている。
竹取輝夜はオトギビトを狩ることでその力を奪い、《怪異：オトギバラシ》となった。

竹取輝夜は力を奪う際、“ 記憶を植え付け人間界に溶け込む力 ” を輝夜自身に、“ 霊感を拡張する力 ” を輝夜が所持していたオーパーツに分け与えた。
そのオーパーツが『CS』と元となるデータの入った携帯だった。

オトギビトの残滓は『CS』の中で眠り、返報の機会を窺っていた。
竹取輝夜は次にワスレモノを狩り、その力を『CS』に 取り込むことでさらなる能力の拡大を図っていた。
それを面白くないと思ったオトギビトの残滓は竹取輝夜の計略の妨害を開始する。

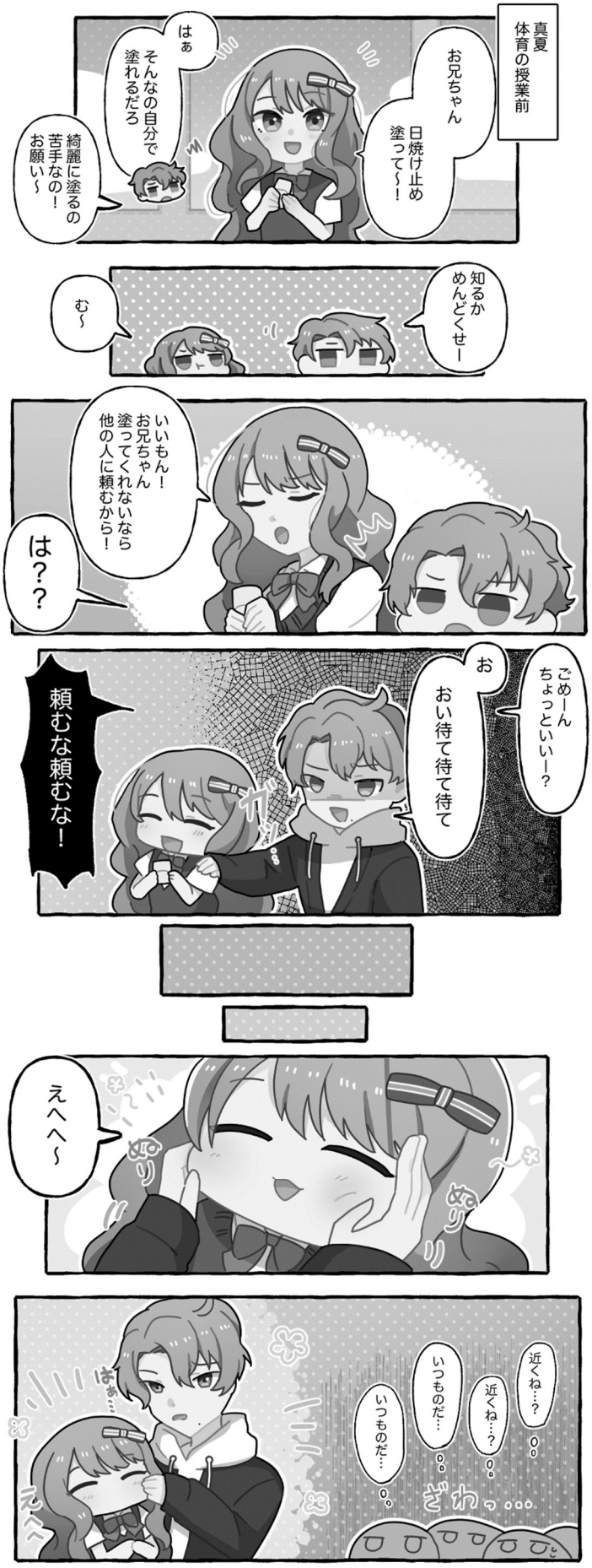
まず、『CS』にワスレモノを呼び出す手立てを狂わせた。
具体的には怪異を取り込むシステム『ラビットホール』を内蔵したアカウントにワスレモノの印を伝誦する予定をだ。
伝誦するはずだった物語を別の共鳴者に誘導し、おまじないによって呼び出されたワスレモノがすぐに『ラビットホール』に取り込まれないようにした。

その後、オトギビトの残滓は魔女アリスとして共鳴者の前に姿を現す。
オトギビトの残滓は竹取輝夜や共鳴者が運命に翻弄される様を特等席で見たいと考えている。
竹取輝夜の味方をすることはないが、共鳴者に全ての事情を話すこともない。
ただし、共鳴者が真実にたどり着いた場合、それを肯定するだろう。

また物語の途中で怪異を取り込む『ラビットホール』の改造を思いつく。
改造の内容はオトギバラシを対象にできないというセーフティの解除、入力ボックスを設置し起動方法を手動にするというもの。
オトギビトは人の未知に対する姿勢、暴けない未知に名前をつけるという性質を気に入っている。
故に『ラビットホール』起動方法に対象の名前を入力するという条件を課した。
嫌がらせに思えるが、オトギビトにとってこれは道理なのだ。

オトギビトの残滓（アリス）の目的は「竹取輝夜の筋書きを破綻させる方向で、この物語を楽しむことである。」

※この怪異の目視に霊感は必要ない。


真夏
体育の授業前
お兄ちゃん
日焼け止め
塗って〜！
はぁ
そんなの自分で
塗れるだろ
綺麗に塗るの
苦手なの！
お願い〜
知るか
めんどくせー
む〜
いいもん！
お兄ちゃん
塗ってくれないなら
他の人に頼むから！
は？？
ごめーん
ちょっといい？
お
おい待て待て待て
頼むな頼むな！
えへへ〜
ぬり
ぬり
近くね…？
近くね…？
いつものだ…
いつものだ…
ざわ…
はぁ…
えへへ